

後 追 遺 跡

2002年

日 田 市 教 育 委 員 会

巻頭図版 1



山田原台地全景（西から）



山田原台地全景（南東から）



2区 1～3号石棺発掘状況



2区 1号石棺・4号石棺発掘状況

序 文

山田原台地は日田盆地の中でも広大な面積を有し、夏はスイカ、冬は白菜の一大生産地となっております。そのような中でさらに生産性の高い農業を目指して、農道や水利施設の整備を行っています。

同時にこの山田原台地は市内でも有数の遺跡の密集地でもあります。このたびの発掘調査は農道整備に伴って行われました。遺跡からは弥生時代の集落跡や古墳時代の墓、奈良時代の建物などが発見され、地域における貴重な成果をあげることができました。

本書が地域の歴史を解明し、将来へ向けての一助となり、活用されれば幸いります。

最後になりましたが、地元の方々をはじめとして、調査にあたってご協力いただいた皆様に記して感謝申し上げます。

平成14年3月

日田市教育委員会

教育長 後 藤 元 晴

例　　言

1. 本書は大分県日田地方振興局より委託を受けて行った「県営畠地帯総合整備事業 山田原地区」に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 調査中には九州大学田中良之教授、金宰賢助手（当時）、舟橋京子氏に人骨の取り上げについて、別府大学本田光子教授に赤色顔料についての有益なご指導を得た。また大分県日田地方振興局耕地課、市農政課や地元の方々のご協力を得た。特に調査区周辺の地権者の方々には、発掘調査作業にあたってテントの設営場所や駐車場、廃土置き場など並々ならぬ便宜を図っていただいた。記して感謝申し上げます。
3. 本書に掲載している遺構写真は担当者のほか、雅企画有限会社 長谷川正美氏の委託によるものを、空中写真については有限会社スカイサーベーイの委託によるものを使用した。また遺物写真については、雅企画有限会社 長谷川正美氏の委託によるものを使用した。
4. 現場での遺構実測は担当者のほか、2区1・4号石棺墓出土人骨を九州大学田中良之教授、金宰賢助手（当時）、同大学院生舟橋京子氏が行い、その他については、雅企画有限会社 森山敬一郎氏、財津真弓氏、三浦陽子氏の委託による。また、遺物実測については担当者が行つたほか、一部を埋蔵文化財サポートシステムに委託した。遺構・遺物の製図については担当者のほか、雅企画有限会社 財津香奈子氏の委託によるものを使用した。
5. 本書に掲載した2区1号甕棺墓、1・4号石棺墓出土人骨については資料の保管から分析まで九州大学大学院比較社会文化学府基層構造講座で行い、その鑑定については同大学田中良之教授、同大学院生舟橋京子氏にお願いした。また、2区1号石棺墓赤色顔料については採取・分析・執筆を別府大学本田光子教授に委託した。
6. 遺跡からの出土遺物及び遺構・遺物実測図、写真については、2区1号甕棺墓出土人骨、1・4号石棺墓出土人骨が九州大学大学院比較社会文化学府基層構造講座に保管されている他は、すべて日田市埋蔵文化財センターに保管している。
7. 本書の執筆・編集は行時・渡邊の助言を得、若杉が行つた。

本文目次

巻頭図版

例 言

目 次

第1章 はじめに	1
1 調査に至る経過	1
2 調査の経過	1
3 調査組織	2
4 遺跡の立地と環境	4
第2章 調査の内容	9
1 1区	9
(1) 土 坑	9
(2) 土坑出土遺物	9
(3) 包含層一括出土遺物	9
2 2区	13
(1) 壺穴住居跡	13
(2) 壺穴遺構	22
(3) 土 坑	26
(4) 掘立柱建物跡	37
(5) 墓	38
(6) 柱穴および包含層一括出土遺物	42
3 3区	47
(1) 壺穴住居跡	47
(2) 壺穴遺構	58
(3) 土坑	60
(4) 溝状遺構	66
(5) 溝	67
(6) 墓	67
(7) 柱穴および包含層一括出土遺物	68
4 4区	71
(1) 土坑	71
(2) 包含層一括出土遺物	71
5 遺跡一括出土遺物	72
第3章 まとめ	73
1 集落について	73
2 墓について	74
3 中世溝について	76
付編	
後追遺跡他出土の赤色顔料について	86
後追遺跡出土人骨について	88

挿 図 目 次

- 第1図 県営畠地帯総合整備事業 山田原地区全体図(1/15000)
第2図 周辺遺跡分布図(1/25000)
第3図 後迫遺跡路線内位置図(1/2000)
第4図 1区遺構配置図(1/200)
第5図 1区土坑実測図(1/30)
第6図 1区土坑および包含層一括出土遺物(1/4)
第7図 2区遺構配置図(1/200)
第8図 2区1号竪穴住居跡実測図(1/60)
第9図 2区1号竪穴住居跡出土遺物実測図(1/4)
第10図 2区2号竪穴住居跡実測図(1/60)
第11図 2区2号竪穴住居跡出土遺物実測図(1/4)
第12図 2区3号竪穴住居跡実測図(1/60)
第13図 2区4号竪穴住居跡実測図(1/60)
第14図 2区3・4号竪穴住居跡出土遺物実測図(1/4)
第15図 2区5号竪穴住居跡実測図(1/60)
第16図 2区5号竪穴住居跡出土遺物実測図(1/4)
第17図 2区6号竪穴住居跡実測図(1/60)
第18図 2区6号竪穴住居跡出土遺物実測図(1)(1/4)
第19図 2区6号竪穴住居跡出土遺物実測図(2)(1/4)
第20図 2区下層遺構配置図(1/200)
第21図 2区7号竪穴住居跡実測図(1/60)
第22図 2区7号竪穴住居跡出土遺物実測図(1/4)
第23図 2区8号竪穴住居跡実測図(1/60)
第24図 2区7号竪穴住居跡出土遺物実測図(1/4)
第25図 2区9号竪穴住居跡実測図(1/60)および出土
遺物実測図(1/4)
第26図 2区竪穴遺構実測図(1)(1/60)
第27図 2区竪穴遺構実測図(2)(1/60)
第28図 2区竪穴遺構出土遺物実測図(1/2・1/3・1/4)
第29図 2区土坑実測図(1)(1/30)
第30図 2区土坑実測図(2)(1/30)
第31図 2区土坑実測図(3)(1/30)
第32図 2区土坑実測図(4)(1/30)
第33図 2区土坑出土遺物実測図(1)(1/2・1/3・1/4)
第34図 2区土坑出土遺物実測図(2)(1/2・1/3・1/4)
第35図 2区土坑出土遺物実測図(3)(1/2・1/3・1/4)
第36図 2区1・2号掘立柱建物跡実測図(1/60)
第37図 2区3号掘立柱建物跡実測図(1/60)
第38図 2区1号甕棺墓実測図(1/30)
第39図 2区1号甕棺実測図(1/8)
第40図 2区1号甕棺墓実測図(1/30)
第41図 2区2・3号石棺墓実測図(1/30)および3号石
棺墓出土遺物実測図(1/1)
第42図 2区4号石棺墓実測図(1/30)
第43図 2区1号土坑墓実測図(1/30)
第44図 2区甕棺墓・石棺墓・土坑墓配置図(1/80)
第45図 2区柱穴および包含層一括出土遺物(1/4)
第46図 3区遺構配置図(1/200)
第47図 3区1号竪穴住居跡実測図(1/60)
第48図 3区2号竪穴住居跡実測図(1/60)
第49図 3区1・2号竪穴住居跡出土遺物実測図(1/2・1/3・1/4)
第50図 3区3号竪穴住居跡実測図(1/60)
第51図 3区3号竪穴住居出土遺物実測図(1)(1/3)
第52図 3区3号竪穴住居出土遺物実測図(2)(1/3)
第53図 3区4号竪穴住居跡実測図(1/60)および出土
遺物実測図(1/4)
第54図 3区5号竪穴住居跡実測図(1/60)
第55図 3号5区竪穴住居出土遺物実測図(1/3)
第56図 3区6号竪穴住居跡実測図(1/60)および出土
遺物実測図(1/4)
第57図 3区7号竪穴住居跡実測図(1/60)
第58図 3区7号竪穴住居出土遺物実測図(1/3)
第59図 3区8号竪穴住居跡実測図(1/60)
第60図 3区8号竪穴住居出土遺物実測図(1/3)
第61図 3区9号竪穴住居跡実測図(1/60)
第62図 3区9号竪穴住居出土遺物実測図(1/3)
第63図 3区10号竪穴住居跡実測図(1/60)
第64図 3区9号竪穴住居出土遺物実測図(1)(1/3)
第65図 3区9号竪穴住居出土遺物実測図(2)(1/3)
第66図 3区11号竪穴住居跡実測図(1/60)
第67図 3区11号竪穴住居出土遺物実測図(1/3)
第68図 3区12号竪穴住居跡実測図(1/60)および出土
遺物実測図(1/4)
第69図 3区13号竪穴住居跡実測図(1/60)
第70図 3区13号竪穴住居出土遺物実測図(1/3)
第71図 3区14号竪穴住居跡実測図(1/60)
第72図 3区14号竪穴住居出土遺物実測図(1/3)
第73図 3区15号竪穴住居跡実測図(1/60)
第74図 3区竪穴遺構実測図(1/60)
第75図 3区竪穴遺構出土遺物実測図(1/4)
第76図 3区土坑実測図(1)(1/30)
第77図 3区土坑実測図(2)(1/30)
第78図 3区土坑実測図(3)(1/30)
第79図 3区土坑出土遺物実測図(1/2・1/4)
第80図 3区溝状遺構実測図(1/30)および出土遺物実測図(1/2・1/3)
第81図 3区1号溝実測図(平面図・土層断面図)(1/60)
および出土遺物実測図(1/2・1/3)
第82図 3区1号甕棺墓(1/30)甕棺(1/8)および1号土
坑墓実測図(1/30)
第83図 3区柱穴および包含層一括出土遺物(1)(1/4)
第84図 3区柱穴および包含層一括出土遺物(2)(1/4)
第85図 4区遺構配置図(1/200)
第86図 4区土坑実測図(1/30)
第87図 4区土坑および包含層一括出土遺物(1/4)
第88図 包含層一括出土遺物実測図(1/2)
第89図 遺跡時期別遺構変遷図(1/400)

表 目 次

第1表 出出土器観察表(1)	第7表 出土石器観察表(2)
第2表 出出土器観察表(2)	第8表 出土鉄器観察表
第3表 出出土器観察表(3)	第9表 出土青銅器観察表
第4表 出出土器観察表(4)	第10表 出土玉類観察表
第5表 出出土器観察表(5)	第11表 試料一覧・分析結果
第6表 出土石器観察表(1)	

図 版 目 次

巻頭(上)	(上) 山田原台地全景(南から)	図版8(左1)	2区6号土坑
図版1(下)	(下) 山田原台地全景(東から)	(右1)	2区19・20号土坑
巻頭(上)	2区 1~3号石棺墓発掘状況	(左2)	2区21号土坑
図版2(下)	2区 1号甕棺墓・4号石棺墓発掘 状況	(右2)	1号甕棺墓周辺土坑発掘状況
図版1(上)	遺跡全景(西から)	(左3)	2区22号土坑
(下)	遺跡全景(北から)	(右3)	2区24号土坑
図版2(上)	遺跡全景(南から)	図版9(左1)	2区25号土坑
(下)	遺跡全景(北から)	(右1)	2区26号土坑
図版3(上)	1・2区空中写真	(左2)	2区27号土坑
(下)	2区空中写真(南から)	(右2)	2区1・2号掘立柱建物
図版4(上)	2区空中写真	(左3)	2区3号掘立柱建物
(左下1)	1区1号土坑	(右3)	作業風景
(左下2)	2区1号竪穴住居跡	図版10(上)	2区1号甕棺墓
(右上1)	2区1号竪穴住居跡	(左下)	2区1号甕棺墓
(右下2)	2区3号竪穴住居跡	(左上1)	2区1号甕棺墓
図版5(左1)	2区4号竪穴住居跡	(右上1)	2区1号甕棺墓
(右1)	2区5号竪穴住居跡	(左下2)	2区1号甕棺墓
(左2)	2区6号竪穴住居跡	(右下2)	2区1号甕棺墓
(右2)	2区7号竪穴住居跡	図版11(上)	2区1~3号石棺墓空中写真
(左3)	2区7号竪穴住居跡南面土坑	(下)	2区1~3号石棺墓検出状況
(右3)	2区8号竪穴住居跡	図版12(上)	2区1号石棺墓検出状況
図版6(左1)	2区9号竪穴住居跡	(中)	2区1号石棺墓人骨出土状況
(右1)	2区1号竪穴遺構	(下)	2区1号石棺墓完掘状況
(左2)	2区4号竪穴遺構	図版13(上)	2区2号石棺墓検出状況
(右2)	2区5号竪穴遺構	(中)	2区2号石棺墓完掘状況
(左3)	2区6号竪穴遺構	(下)	2区1~3号石棺墓検出状況
(右3)	2区7号竪穴遺構	図版14(上)	2区3号石棺墓完掘状況
図版7(左1)	2区8号竪穴遺構	(中)	2区3号石棺墓管王出土状況
(右1)	2区9号竪穴遺構	(下)	2区1~3号石棺墓完掘状況
(左2)	2区11号竪穴遺構	図版15(上)	2区4号石棺墓完掘状況
(右2)	2区12号竪穴遺構・28号土坑	(中)	2区4号石棺墓人骨出土状況
(左3)	2区3号土坑	(下)	2区1号土坑墓完掘状況
(右3)	2区3号土坑	図版16(上)	2・3区空中写真
		(下)	3区空中写真

図版17 (左1) 3区4号竪穴住居跡	図版37	出土遺物14
(右1) 3区5号竪穴住居跡	図版38	出土遺物15
(左2) 2区5号竪穴住居跡遺物出土状況	図版39	出土遺物16
(右2) 3区6号竪穴住居跡	図版40	出土遺物17
(左3) 3区7号竪穴住居跡	図版41	出土遺物18
(右3) 3区8号竪穴住居跡	図版42	出土遺物19
図版18 (左1) 3区9号竪穴住居跡	図版43	出土遺物20
(右1) 3区10号竪穴住居跡	図版44	出土遺物21
(左2) 3区11号竪穴住居跡	図版45	出土遺物22
(右2) 3区12号竪穴住居跡	図版46	出土遺物23
(左3) 3区13号竪穴住居跡	図版47	出土遺物24
(右3) 3区3号竪穴遺構		
図版19 (左1) 3区5号竪穴遺構		
(右1) 3区3号土坑		
(左2) 3区6号土坑		
(右2) 3区12号土坑		
(左3) 3区13号土坑		
図版20 (左1) 3区1号溝状遺構		
(右1) 3区2号溝状遺構		
(左2) 3区3号溝状遺構		
(右2) 3区1号甕棺墓		
(左3) 3区1号土坑墓		
(右3) 3区北側発掘状況（南から）		
図版21 (上) 3区1号溝完掘状況		
(中) 3区1号溝西壁土層断面		
(左下) 3区1号溝完掘状況		
(右下) 3区1号溝遺物出土状況		
図版22 (上) 4区空中写真		
(下) 4区空中写真		
図版23 (左1) 4区1号土坑		
(左2) 4区3号土坑		
(右1) 4区2号土坑		
(右2) 4区4号土坑		
図版24 出土遺物1		
図版25 出土遺物2		
図版26 出土遺物3		
図版27 出土遺物4		
図版28 出土遺物5		
図版29 出土遺物6		
図版30 出土遺物7		
図版31 出土遺物8		
図版32 出土遺物9		
図版33 出土遺物10		
図版34 出土遺物11		
図版35 出土遺物12		
図版36 出土遺物13		

第1章 はじめに

1. 調査に至る経過

日田市山田原地区の県営畠地帯総合整備事業は平成9年度より実施されてきた。日田市内は標高100～150m前後の台地地形が発達し、その台地上で畠作農業を中心に行ってきたが、地形的な制約から経営耕地面積は狭く、兼業農家の割合が高い。現在、山田原台地は日田市内において、夏はスイカ、冬は白菜の一大生産地であるが、これは昭和30年代以降行われてきた基盤整備事業や構造改善事業によって農業の安定を図ってきたことによる。しかし、施設が事業実施後30年以上を経過したことにより、その老朽化が著しく、管理費の増大や深刻な水不足が解消するため、施設の再整備や農道のアスファルト舗装などを行う目的で事業が行われた。

この事業の中で大分県日田地方振興局耕地課から市教育委員会文化課に対して平成9年度より数回にわたって試掘調査の依頼文が提出された。

平成9年度 山田原遺跡 遺構なし^{註1)}

平成10年度 山田原遺跡 遺構なし^{註2)}

平成12年度 用松中村遺跡、朝日宮ノ原遺跡 遺構あり^{註3)}

上記のように順次試掘を行ってきた。しかし、後迫遺跡については平成3～5年度に九州横断自動車道建設に伴って、大分県教育委員会が調査した結果から隣接地である本調査区も相当数の遺構が存在すると予想されたため、試掘調査を行わずに発掘調査を行うことになり、その後、県耕地課の間で委託契約の締結を行い、発掘調査を実施するに至った。なお、後迫遺跡については発掘調査、整理作業、報告書作成と4ヵ年にわたる継続事業であるため、年度ごとに委託契約の締結を行っている。

註1) 土居和幸編『平成9年度 日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会 1999

註2) 若杉竜太編『平成10年度 日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会 2000

註3) 渡邊隆行編『平成12年度 日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会 2001

用松中村遺跡と朝日宮ノ原遺跡については試掘調査の結果、遺構が確認されたが、工法上遺構面を損なわないということから、大分県教育委員会の指導により発掘調査には至っていない。

註4) 友岡信彦編『後迫遺跡』九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書(18) 大分県教育委員会 2000

2. 調査の経過

発掘調査は普段、使用されている農道を掘下げるため、農閑期に行うことになった。遺跡周囲の畠ではスイカ・白菜を栽培し、ほぼ1年を通じて作付けを行っているため、白菜の取り入れ終了後の12月からスイカの作付けが始まる3月までの期間で調査を行い、廃土置き場として畠の上土を取り除いた部分を利用することとなった。しかし、農閑期においても肥料散布や土鋤きのため、農道が使用されることが頻繁にあり、畠への進入路の確保が必要であった。その上調査対象となっている区間は全長が約300mあるため、一度の表土剥ぎで調査を行うことは不可能であった。そのような事情から調査対象区間と直交する農道との交差点までを4区間（北から1区、2区・・・）に分けて、平成10、11年度の2ヵ年計画で調査を行うことになった。なお、調査終了後、工事開始まで期間がある区間については、真砂土による埋め戻しを行い、農作業用の道路を確保した。

1年目の調査は平成11年1月18日より開始した。まず、重機の搬出路の関係から2区より表土剥ぎを開始したが、隣接する畑の作業が行われることになったため、2区北端より約16mの地点で一旦、表土剥ぎを中止し、1区の表土剥ぎに移った。その後、2区の表土剥ぎを行った。1・2区とともに配水管の埋設やゴボウの耕作による搅乱を受けていた。しかし、遺構検出面までの深さは1区が浅く、ほとんど削平を受けていたのに対し、2区は深かったため、遺構の数は相当数に上ることが予想できた。遺構は弥生時代前期末から後期のものが中心であったが、2区の北端から南に約40mの地点で奈良時代の柱穴と思われる遺構を検出し、遺構面が2枚あることが確認できた。そこからさらに約15mの地点では箱式石棺墓が弥生時代の住居跡を掘り込む形で3基、やや離れた地点で1基見つかった。確認の結果、4基の石棺のうち、2基に人骨が残存しており、その取り上げに時間を使い、調査期間にも制限があったため、当該年度は2区全体の調査の続行を断念し、箱式石棺墓の人骨の取り上げ、2区の残りの調査区の遺構確認のみを行った後、真砂土で埋め戻して同年3月23日に調査を終了し、次年度の継続調査とした。

2年目の調査は平成11年12月6日より開始し、平成12年3月30日に調査を終了した。調査開始前に市文化課、県耕地課、地元地権者、土地改良組合との数回にわたる協議の結果、農作業のための進入路の確保や工事の関係上、北側から順次調査していく方法はとらずに変則的な調査を行うこととなった。まず、前年度継続の2区の調査して、その後、4区の西半分の調査、3区の北半分の調査を行い、2区の工事区間の終了後、2区の残り部分の調査という順序で行った。2区の残り区間については削平を受けており、遺構数は少なかったが、前年度調査した石棺のすぐ南側から甕棺墓が検出された。3区は遺構密度が高く、竪穴住居跡や甕棺墓など弥生時代前期末から後期の遺構が多数検出されたが、調査区南端で中世の溝が検出された。4区については、地形的にも下がっていることや配水管埋設のため、調査区の半分近くが搅乱を受けていた。この間、それぞれの調査区の調査終了後、順次真砂土による埋め戻しを行った。

3年目の調査は平成13年1月10日より開始し、3区南半分、4区西半分を順次行った。3区については前年度検出された中世の溝を考慮に入れながら調査を行ったが、当該期の遺構は検出されず、前年度までと同様弥生時代前期末から後期の遺構が検出された。また、3区の南側約 mの区間は大半が搅乱を受けていた。4区の東半分については同区西半分と同様に搅乱を受けており、遺構数は多くなかった。その後、真砂土による埋め戻しを行い、3月23日に全調査を終了した。

整理作業については1年目の調査終了後の平成11年5月6日から開始し、平成13年10月31日まで行った。

3. 調査組織

調査主体 日田市教育委員会

調査責任者 日田市教育長 加藤正俊（～平成12年11月14日）

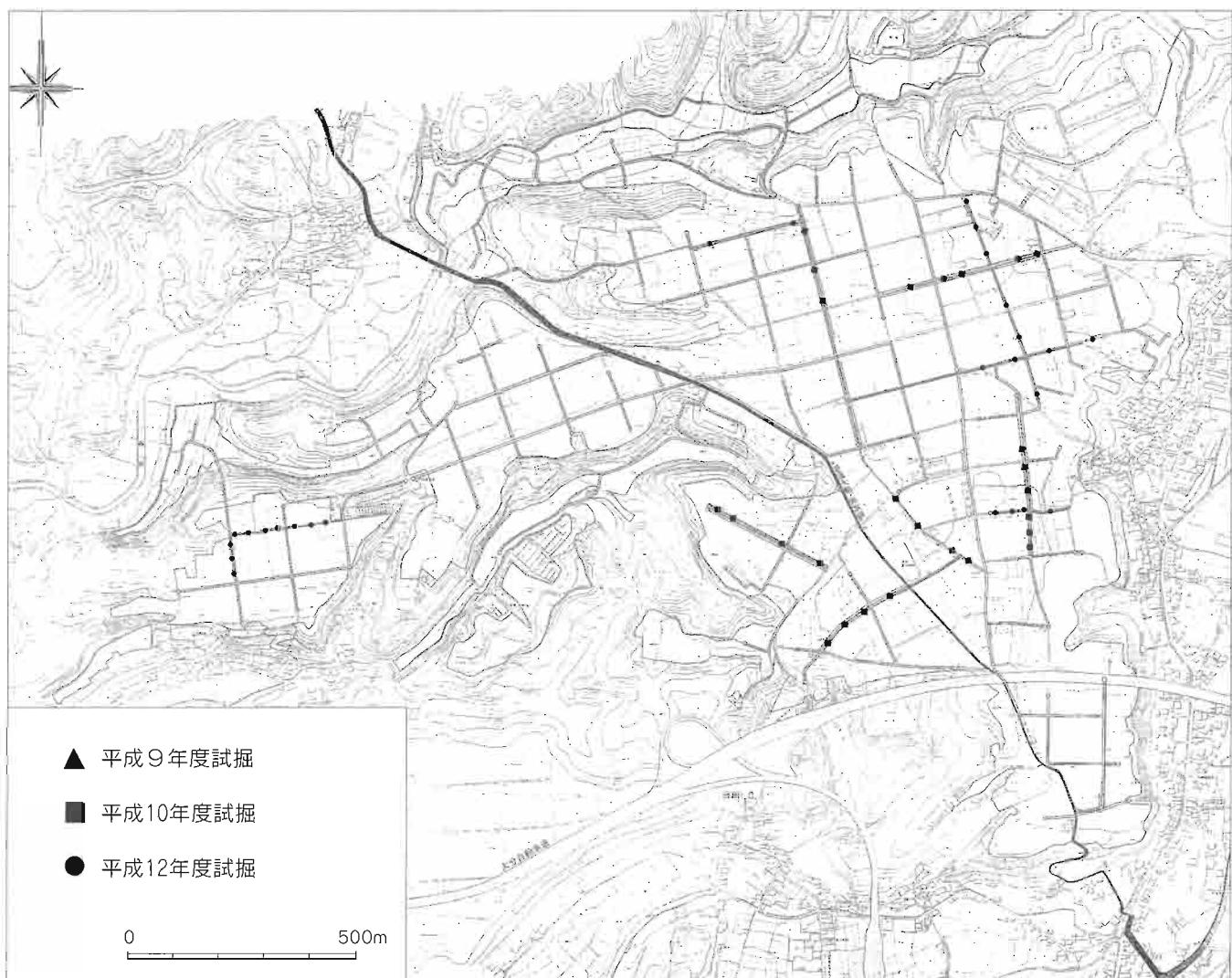
後藤元晴（平成12年11月15日～）

調査事務 日田市教育委員会文化課課長 原田俊隆

同課長補佐 長尾幸夫（～平成11年3月） 石井英信（平成11年4月～）

同主査 佐々木豊文（～平成13年3月） 島崎誠司（平成13年4月～）

同主任 園田恭一



第1図 県営畠地帯総合整備事業 山田原地区全体図 (1/15,000)

同臨時職員 美野寿美香（平成11年4月～平成12年3月）

江田香織（平成12年4月～平成13年3月）

原田恭子（平成13年4月～）

調査員 同主任 土居和幸（～平成12年3月） 行時志郎 吉田博嗣

同主事 若杉竜太（平成11年4月～、平成11年1月～3月は嘱託）

渡邊隆行（平成12年4月～）

同嘱託 森山敬一郎（～平成11年7月）

五十川雄也（平成11年8月～平成12年3月）

整理補助員 木龍明子（平成12年4月～平成13年3月）

発掘作業員 秋ヤエ子 秋吉タミエ 秋吉ミユキ 穴井早苗 諫元クニ子 一ノ宮嘉蔵 伊藤キヨ子 猪熊ヨネ 江藤勝義 江藤キミ子 梶原秋生 梶原サツ子 小下一 財津真弓 酒井富美子 酒井光敏 島田隆幸 清水忠造 庄内武子 園田光子 高村笑美子 田中伝江 田中昇 手嶋トシエ 中尾タマエ 中島カズ子 中島トミエ 三浦陽子 森山カメノ 行村シズエ 吉長利夫 吉長ハルエ

整理作業員 石田紀代子 石松裕美 伊藤一美 伊藤弘子 鍛冶屋節子 梶原ヒトエ 川原君子
酒井貴代美 坂本和代 佐藤みち子 高倉由佳 田中静香 中原琴枝 聖川暢子
平川優子 美野寿美香 安元百合 和田ケイ子

また、発掘調査・整理作業・報告書作成において以下の方々に指導を頂いた。(職名は当時)

小田富士雄(福岡大学教授) 田中良之(九州大学教授) 甲元眞之(熊本大学教授) 下村智(別府大学教授) 金宰賢(九州大学助手) 本田光子(別府大学助教授) 宮内克巳 坂本嘉弘 山路康弘(大分県文化課) 山田拓伸(大分県立歴史博物館)

4. 遺跡の立地と環境(第2図)

後迫遺跡が所在する日田市は大分県の西部に位置し、福岡県と県境を接する筑後川上流域にあり、大分県西部の政治・経済の中心となっている。日田地方は古代より豊後(下毛郡・宇佐郡を除く大分県)の領域内にあったが、古来より筑後川を介してその流域や北部九州とのつながりが強く、その影響を常に受け続けてきた。さらに江戸時代には幕府の直轄地である天領となり、独自の文化が生まれ、その気風と文化が現在まで生き続けている。

後迫遺跡は盆地北東部に広がる通称山田原台地の南東に位置する。盆地内には阿蘇火砕流の堆積により形成された通称「原(はる)」と呼ばれる標高100~150mの台地地形が発達している。中でも山田原台地は最大の台地である。その周辺には沖積地や小支谷を挟んで多くの台地が点在している。

以下、山田原台地を中心として、地形ごとに遺跡を概観していくが、近年、台地裾部の調査事例が増加しており、その成果も含めてみていく。

山田原台地

この台地上には後迫遺跡のほか、山田原遺跡・用松中村遺跡、草場遺跡、台地崖面には横穴墓などが見られる。平成3~5年度にかけて行われた大分県教育委員会による後迫遺跡の調査では、弥生時代中期前半から後期後半の竪穴住居跡や小児用甕棺墓、古墳時代初頭の箱式石棺墓6基などが調査され、箱式石棺墓のうち、1基から小型鐵製鏡が1面出土している。^{註1)} ^{註2)} ^{註3)}

後迫遺跡の北側に位置する用松中村遺跡では試掘調査の際に弥生時代の土坑や柱穴が確認されているが、台地南側に比べ、遺構密度は低くなっている。

後迫遺跡の南西に隣接する草場遺跡では土地開墾中に2基の箱式石棺が発見され、その周辺で箱式石棺の棺材のそばで方格規矩鏡の破片を採集している。また、大型成人用甕棺墓が存在することも確認されている。また、後迫遺跡の東側の崖面には5世紀後半から8世紀かけて断続的に営まれた羽野横穴墓群^{註4)}が存在する。

花月川中流域

山田原台地東側を流れる花月川中流域の沖積地にも遺跡が多く存在する。山田原台地の北西に位置する花月川右岸に広がる沖積地一帯は古代条里制下の日田条里に属する地域と考えられており、この一帯にある三和教田遺跡はこれまでに7度にわたって発掘調査、確認調査が行われている。E地点^{註5)}からは縄文時代後期から晩期にかけての流路が検出され、内部から木材や土器、石器が出土した。E地点に隣接するC地点でもE地点と繋がるとみられる流路が検出され、土器・石器のほか、

土偶が出土している。^{註6)}花月川右岸の沖積微高地上には後期中頃の環濠が見つかった三和教田遺跡B地点がある。^{註7)}環濠の存続時期は後期後半まで考えられ、その内側では竪穴住居跡8軒、掘立柱建物6件が検出されている。円面硯が出土しており、これもまた官衙関連施設の可能性を窺わせている。B地点より300mほど北東にある同遺跡A地点では弥生時代中期初めと同後期後半から終末の土坑群が調査されている。A地点の東側のG地点では水田遺構が調査され、溝の中からは弥生時代後期終末頃の甕が出土している。この溝に切られて流路が確認されていることから、それ以前の縄文時代の可能性が高く、C・E地点で検出された流路に繋がる可能性もある。G地点のすぐ西側にあるH地点ではG地点で検出された流路の続きは確認できなかつたが、中世と考えられる水田区画と柱穴が確認された。また、D地点からはナイフ形石器や二次加工剥片が出土している。^{註8)}

辻原台地

山田原台地の南西に位置する辻原台地では弥生時代後期後半～古墳時代前期前半の環濠集落や豪族居館など、縄文時代から近世にかけての遺構が発見された小迫辻原遺跡が存在する。^{註9)}

縄文時代の遺構は後期末頃の貯蔵穴とみられる土坑などが数基見つかっている。

弥生時代は前期後半～中期初頭、中期後半の竪穴住居跡、土坑、墓などが見つかっている。また、後期後半～古墳時代初頭にかけての環濠、方形区画の環濠をもつ豪族居館跡などが調査された。弥生時代後期後半の環濠集落から環濠を持つ居館が出現する過程が追うことができる貴重な成果が上がっている。

古代においては、8～9世紀の大型建物から「大領」の墨書き土器が出土している。古代、この地域は日田郡五郷の内の「亘理郷」に属したと考えられ、この建物群は「コ」の字形に並ぶ7棟の建物群で官衙に関連した施設の可能性が十分に考えられる。

中世の遺構は掘立柱建物跡、土坑、溝、墓、近世の掘立柱建物や溝などが調査されている。

この辻原台地と山田原台地の間の丘陵頂部に草場第二遺跡がある。調査では弥生時代後期～古墳時代初頭にかけての墓が200基以上発見された。弥生時代後期の墓には甕棺墓・壺棺墓・箱式土器棺墓があり、後半～終末に位置付けられる。古墳時代初頭の墓には土坑墓・方形周溝墓がある。また、小型倣製鏡の破片が出土している。^{註10)}

草場第二遺跡南側の台地裾部の本村遺跡では3次にわたって調査が行われ、弥生時代後期後半、古墳時代後期～古代、中世、近世の住居跡や墓、溝などが見つかっている。

吹上原台地

山田原台地の南西の吹上原台地には日田を代表する吹上遺跡が存在する。これまでに11次にわたって調査されてきているが、特に平成7年に行われた6次調査では大型成人用甕棺墓8基、木棺墓3基で構成される墓地群が発見された。中期後半に位置付けられるとみられる甕棺墓からは銅戈や銅剣、ゴホウラ・イモガイ製貝輪、管玉、勾玉などが副葬されており、日田地域の首長墓として注目された。この他にも10次調査では後期後半から終末の条溝が調査されている。

また、台地南側の崖面には約^{註11)}基に及ぶ北友田横穴墓群が展開している。

朝日ヶ丘（小迫原台地）

朝日ヶ丘遺跡のある台地は吹上原台地と谷を挟んで西側に位置する。朝日ヶ丘遺跡ではこれまで数度にわたる調査が行われており、縄文時代の落し穴や包含層などが調査されているが、吹上原台地に比べて遺構密度希薄である。ただ、台地北側の縁辺部には主体部に粘土櫛、木棺（割竹形？）

を採用した4世紀後半～5世紀前半に位置付けられる小迫古墳^{註17)}がある。主体部からは珠文鏡・勾玉・管玉・小玉が出土した。また、その西側には小迫横穴墓群^{註18)}がある。

この小迫古墳や小迫横穴墓群の北側の台地裾に尾部田遺跡があ。遺跡の南側に朝日宮ノ原遺跡や天満古墳群がある宮原台地を見渡せる位置にある。尾部田遺跡では縄文時代後期、弥生時代後期終末～古墳時代初頭にかけての堅穴住居跡、古墳時代～古代の堅穴住居跡、掘立柱建物が確認された。縄文時代の住居跡は葛原遺跡・手崎遺跡について市内3例目のものである。

宮原台地

山田原台地と谷を挟んで西側にある宮原台地にある朝日宮ノ原遺跡では中期後半から後期中頃の堅穴住居跡・土坑・小児用甕棺墓が調査されている。^{註19)}

この台地の南端、朝日の谷を一望できる場所には6世紀前半から後半にかけて築造された天満古墳群^{註20)}がある。主軸をほぼ東西にとる2基の古墳が前方部を合わせるように並んでいる。1号墳は後円部を天満社社殿建築の際に大きく削られている。現在、確認調査段階ではあるが、墳長は約33mをはかり、出土須恵器から6世紀中頃～後半の築造とみられる。2号墳は平成9年度に確認調査が実施され、多角形に巡る2重周溝内から須恵器の大型平底壺、石製表飾品などが出土している。^{註19)}

また、朝日宮ノ原遺跡では11世紀末～13世紀前半頃の木棺墓群が調査され、内部から青磁碗・合子・湖州鏡・和銚が副葬されていた。被葬者は女性とみられ、その胸付近から43個のガラス製数珠玉が見つかっている。

佐寺原台地

花月川を挟んで対岸にあるこの台地上の佐寺原遺跡では弥生時代前期末～後期中頃の堅穴住居跡・土坑・小児用甕棺墓が調査されている。^{註21)}

註1) 日田市教育委員会が平成9、10、12年度に試掘。

註2)『日田市史』

註3) 友岡信彦編『後迫遺跡』九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書(18)大分県教育委員会 2001

註4) 渋谷忠章他編『日田市羽野横穴墓群発掘調査概報』大分県教育委員会 1985

註5) 若杉竜太「三和教田遺跡E地点」『平成10年度(1998年度)日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会 2000

註6) 吉田博嗣編『三和教田遺跡C地点』大分県文化財調査報告書第98輯 大分県教育委員会 1998

註7) 土居和幸「三和教田遺跡B地点」『平成6年度(1994年度)日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会 1996

註8) 吉田博嗣編『三和教田遺跡G地点』日田市埋蔵文化財調査報告書第1集 日田市教育委員会 2001

註9) 若杉竜太「三和教田遺跡H地点」『平成12年度(2000年度)日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会 2001

註10) 土居和幸編『三和教田遺跡D地点』日田市埋蔵文化財調査報告書第24集 日田市教育委員会 2000

註11) 田中裕介編『小迫辻原遺跡I』九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書(10)大分県教育委員会 1999

土居和幸編『小迫辻原遺跡II』日田地区遺跡群発掘調査報告書1、日田市埋蔵文化財調査報告書第15集 日田市教育委員会 2000

註12) 高橋徹編『草場第二遺跡』九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書(1)大分県教育委員会 1989

註13) 行時志郎編『本村遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第19集 日田市教育委員会 2000

行時志郎「本村遺跡2次」『平成12年度(2000年度)日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会 2001

行時志郎「本村遺跡3次」『平成12年度(2000年度)日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会 2001

註14) 土居和幸・永田裕久『吹上遺跡－6次調査の概要－』日田市教育委員会 1995ほか

註15) 玉永光洋編『北友田横穴』大分県教育委員会 1993

註16) 五十川雄也他編『朝日ヶ丘遺跡3次』日田市埋蔵文化財調査報告書第18集 日田市教育委員会 2000

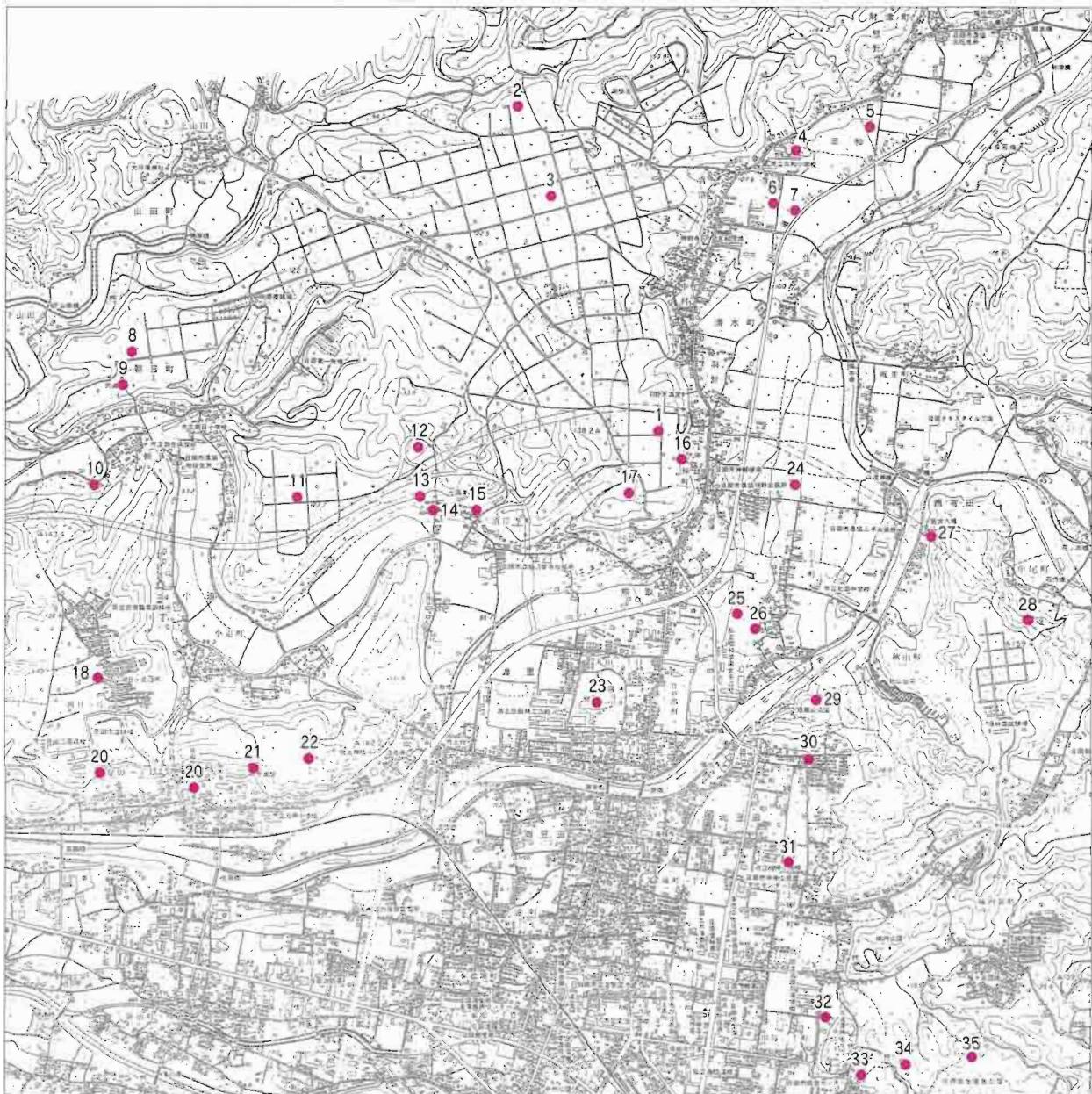
註17) 小柳和宏編『小迫墳墓群』九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書(3)大分県教育委員会 1995

註18) 行時志郎編『日田条里上手地区2次・高瀬条里永平寺地区・尾部田遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第34集 日田市教育委員会 2002

註19) 友岡信彦・土居和幸「日田市朝日宮ノ原遺跡の中世土壙墓」「おおいた考古』第2集 大分県考古学会 1990

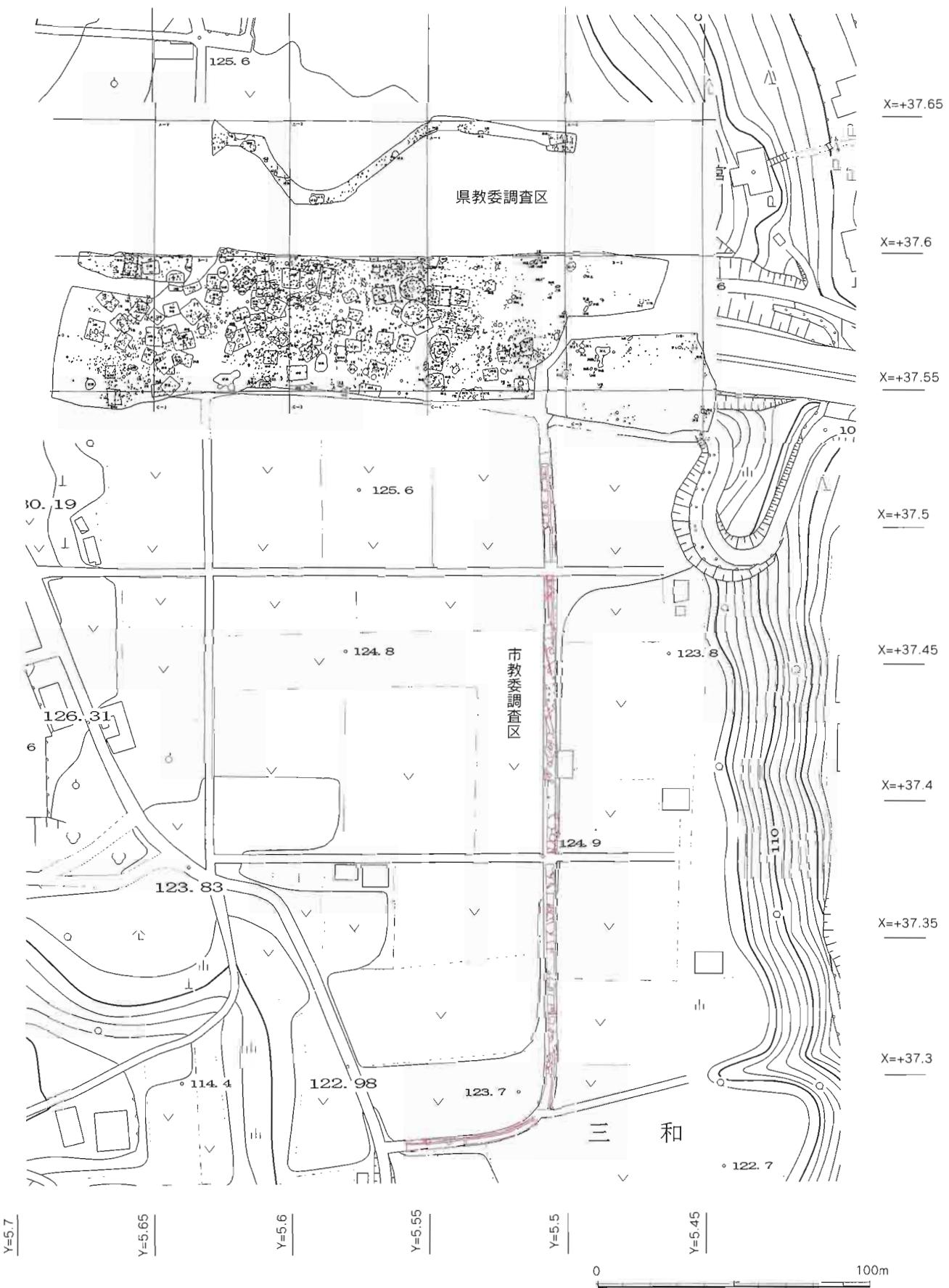
註20) 吉田博嗣「天満古墳群」『平成9年度(1997年度)日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会 1999

註21) 友岡信彦編『佐寺原遺跡』九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書(9)大分県教育委員会 1998



第2図 周辺主要遺跡分布図 (1/25,000)

- | | | |
|--------------|----------------|----------------|
| 1. 後迫遺跡 | 13. 本村遺跡2次 | 25. 日田条里上手地区1次 |
| 2. 谷ノ久保遺跡 | 14. 本村遺跡1次 | 26. 日田条里上手地区2次 |
| 3. 用松中村遺跡 | 15. 本村遺跡3次 | 27. 夕田古墳・横穴墓群 |
| 4. 三和教田遺跡B地点 | 16. 羽野横穴墓群 | 28. 佐寺原遺跡 |
| 5. 三和教田遺跡G地点 | 17. 草場遺跡 | 29. 大藏古城跡 |
| 6. 三和教田遺跡C地点 | 18. 朝日ヶ丘遺跡 | 30. 慈眼山瀬戸口遺跡 |
| 7. 三和教田遺跡E地点 | 19. 北友田横穴墓群 | 31. 上ノ馬場遺跡 |
| 8. 朝日宮ノ原遺跡 | 20. 今泉遺跡 | 32. 大波羅遺跡 |
| 9. 天満古墳群 | 21. 吹上横穴墓群 | 33. 薬師堂山古墳 |
| 10. 尾部田遺跡 | 22. 吹上遺跡 | 34. 丸尾神社古墳 |
| 11. 小迫辻原遺跡 | 23. 月隈横穴墓群 | 35. 赤迫遺跡 |
| 12. 草場第二遺跡 | 24. 日田条里上手地区5次 | |



第3図 後迫遺跡路線内位置図 (1/2,000)

第2章 調査の内容

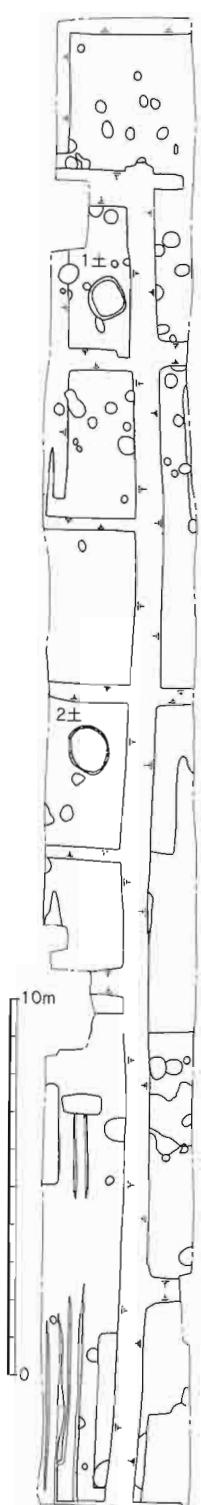
1. 1区

1区は調査区の最も北側に位置する、全長約39mの調査区である。1区は配水管の埋設時やゴボウの耕作などにより、大部分が削平され、遺構検出面までの検出面からの深さは浅かった。そのため、確実な遺構としては土坑2基を確認したにすぎなかつた。

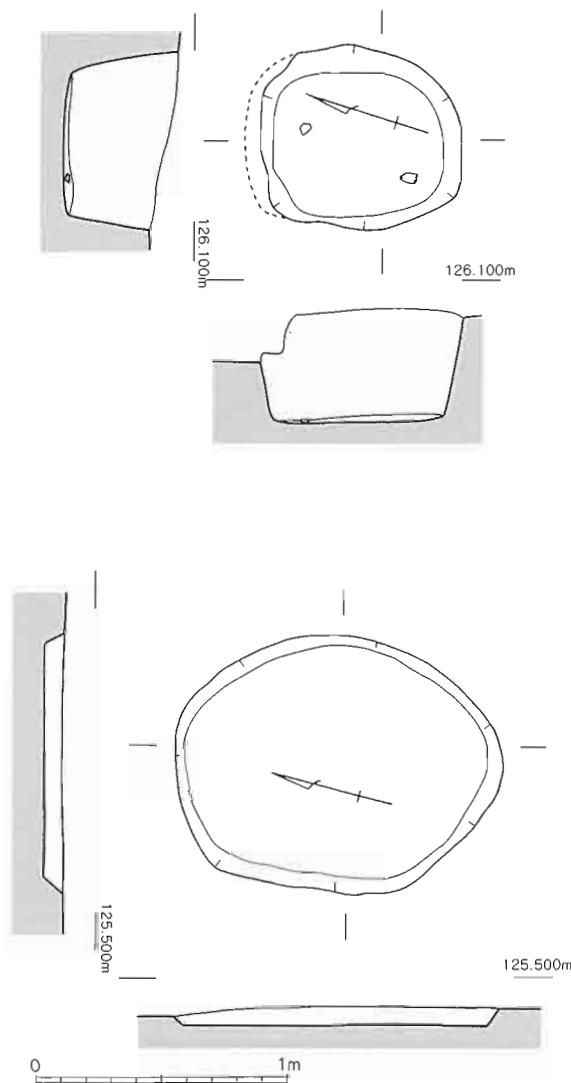
(1) 土坑

1号土坑（第5図 図版1）

調査区の北端より約7mの地点で検出された。円形を呈し、規模は長軸約84cm、短軸約75cm、検出面からの深さ45cmで、遺物は朱塗りの高壺や甕が出土している。



第4図 1区遺構配置図
(1/200)



第5図 1区土坑実測図 (1/30)

2号土坑（第5図）

1号土坑の南、約12mで検出された。円形を呈し、規模は長軸約129cm、短軸約105cm、検出面からの深さ10cmで、遺物は出土しなかつた。

(2) 土坑出土遺物（第6図

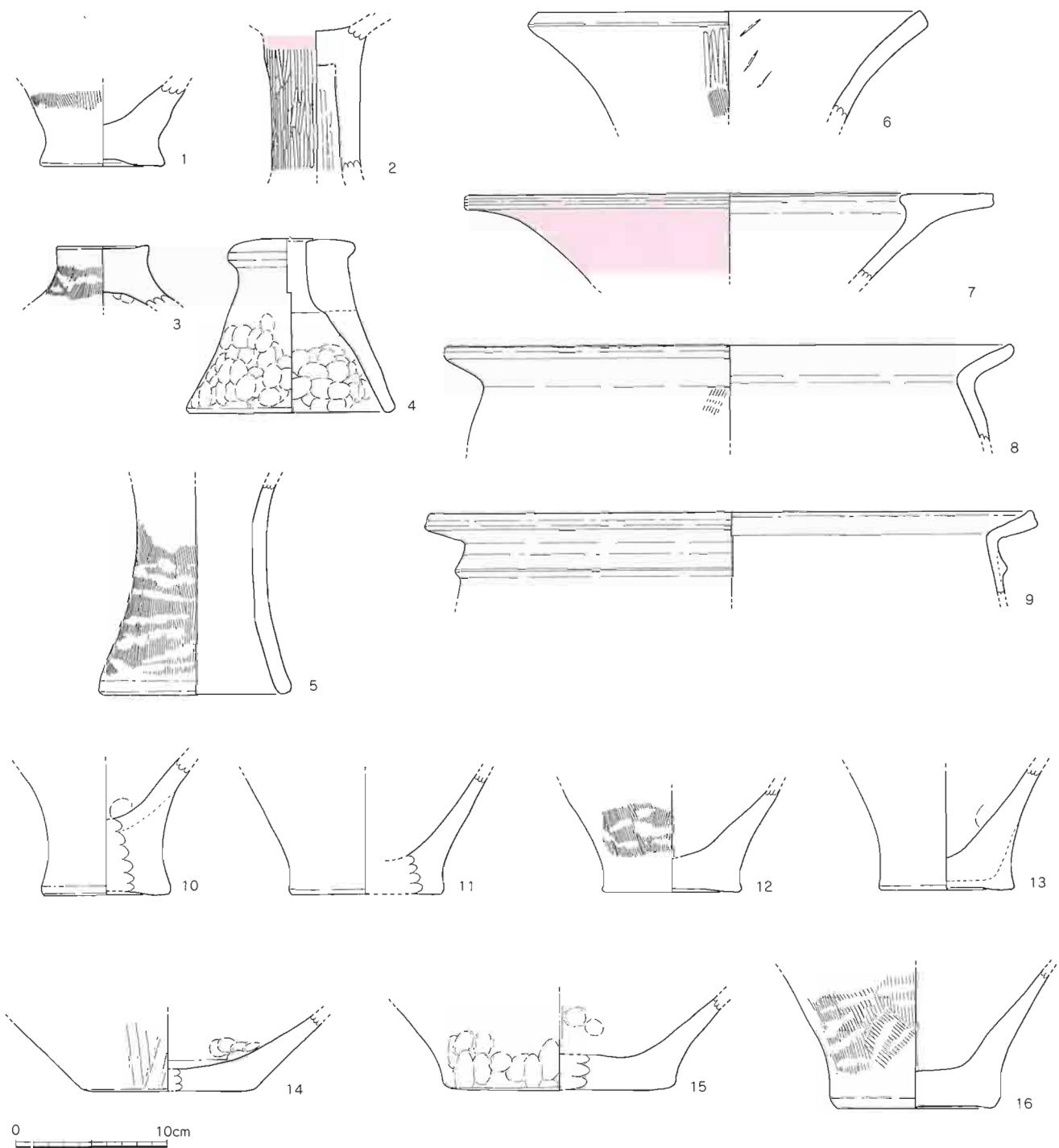
1・2 図版24)

1・2とも1号土坑出土である。1は甕の底部である。底面はやや上げ底気味で、外面には一部ハケが見られる。2は高壺の脚部である。外面には朱が塗布され、内外面ともタテ方向のミガキが施されている。

(3) 包含層一括出土遺物

(第6図5～16 図版24)

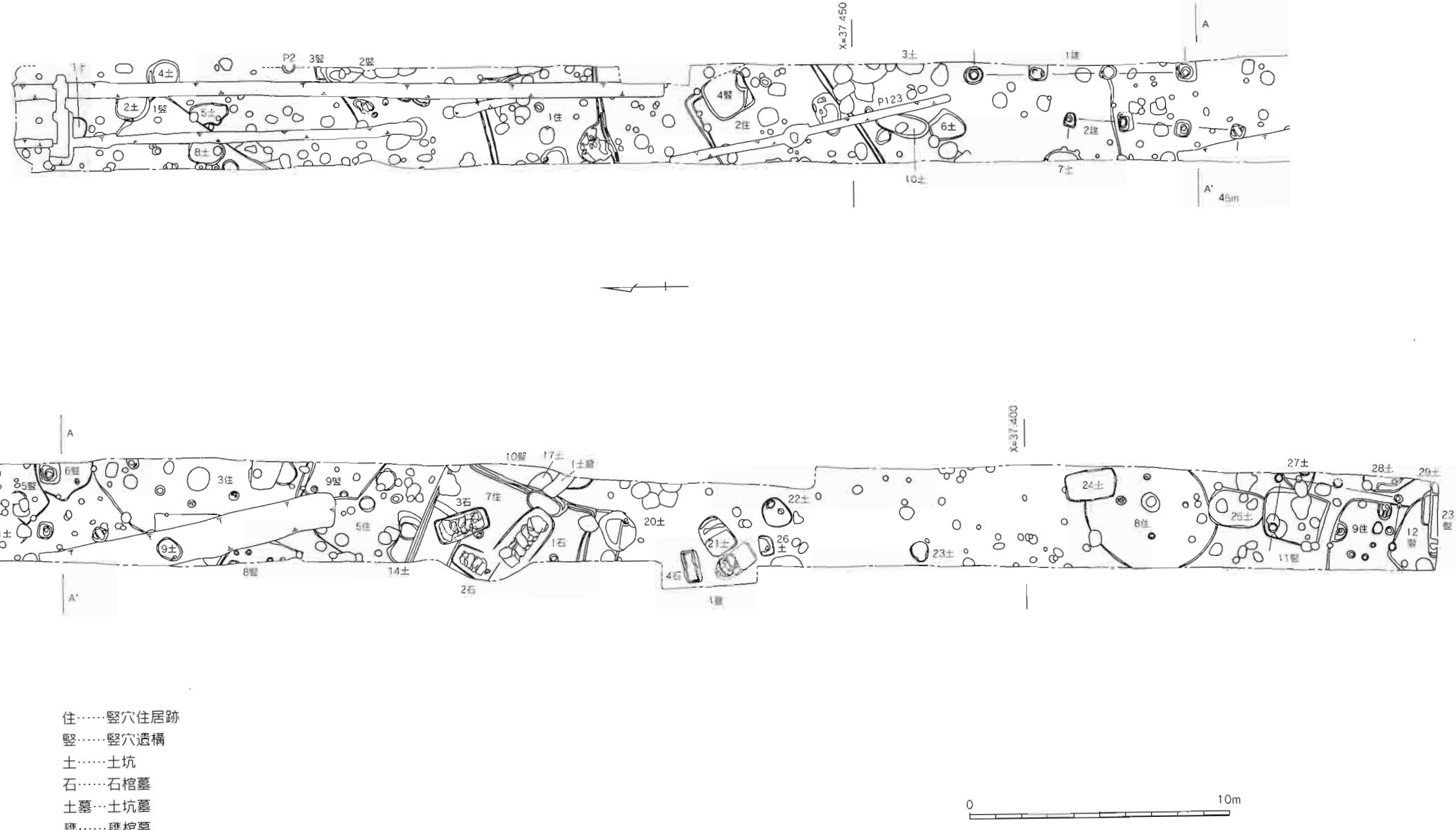
5は完形の支脚である。6は壺の口縁部である。口縁部外面の上部にタテ方向のミガキが見られる。脚部は内外面とも指押さえで調整され、内面には接合痕が明確に見てとれる。7は高



第6図 1区土坑及び包含層一括出土遺物 (1/4)

壺の口縁部で鋤先状を呈し、その端部は凹形にくぼむ。

8、9は甕の口縁部である。9は頸部の下に断面三角形の突帯が貼り付けられており、外面の一部に朱の残存が見られる。また、口縁端部はやや跳ね上げ気味である。10～16は甕の底部である。15は外面に多くの指頭圧痕がみられる。3は蓋である。内面に指押さえが見られる。5は器台である。外面にはタテ方向のハケ調整が施されている。



第7図 2区遺構配置図 (1/200)

2. 2区

2区は全長98mの調査区である。1区と同様に搅乱が激しいが、遺構検出面は深く、遺構の数は多かった。一部、遺構面が3層ある部分も見られた。4つの調査区のうち、遺構量、遺物量とも最も豊富である。

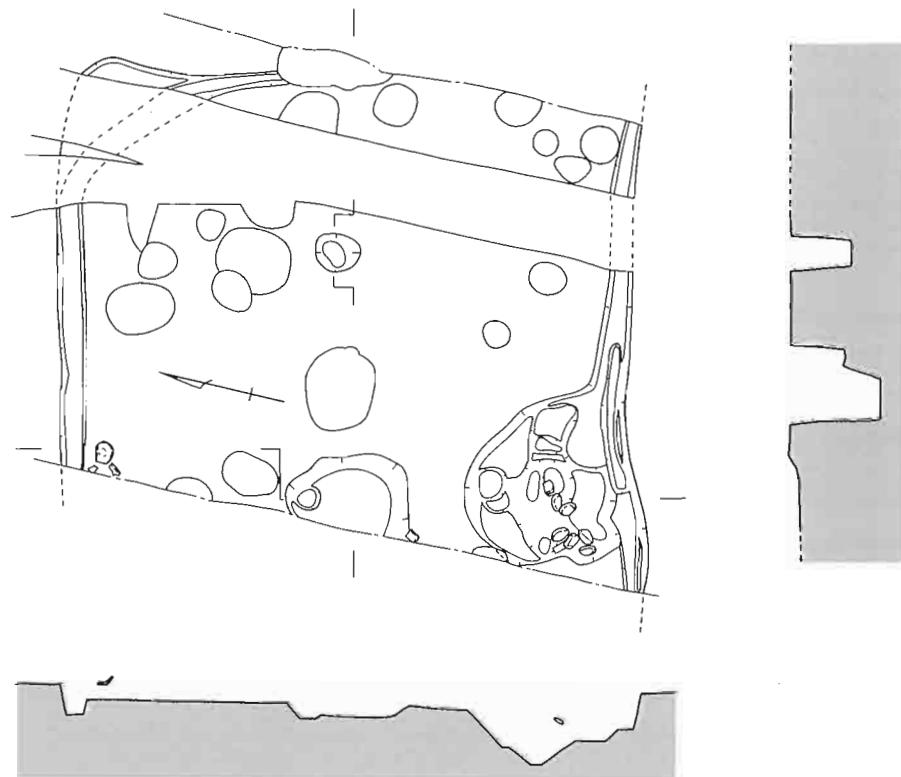
(1) 竪穴住居跡

1号竪穴住居跡 (第9図 図版4)

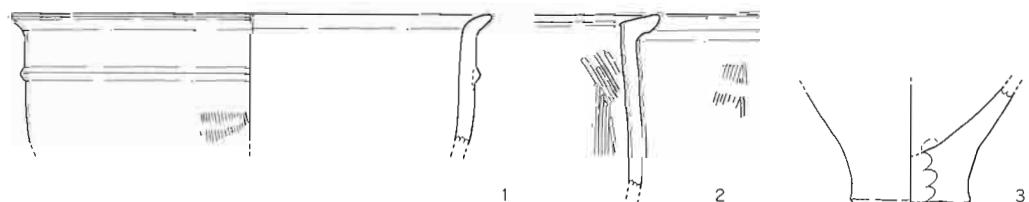
調査区北端から約20mの地点で検出された。西壁と北壁、南壁の一部は調査区外へ広がる。平面形は長方形を呈し、規模は長軸約3.7m以上、短軸約4.8m、検出面からの検出面からの深さ約20cmである。主柱穴は東西方向に2本と見られ、中央に炉をもつ。柱穴の床面からの深さは約48cmである。また、南面土坑、壁周溝が見られる。

1号竪穴住居跡出土遺物 (第9図 図版25)

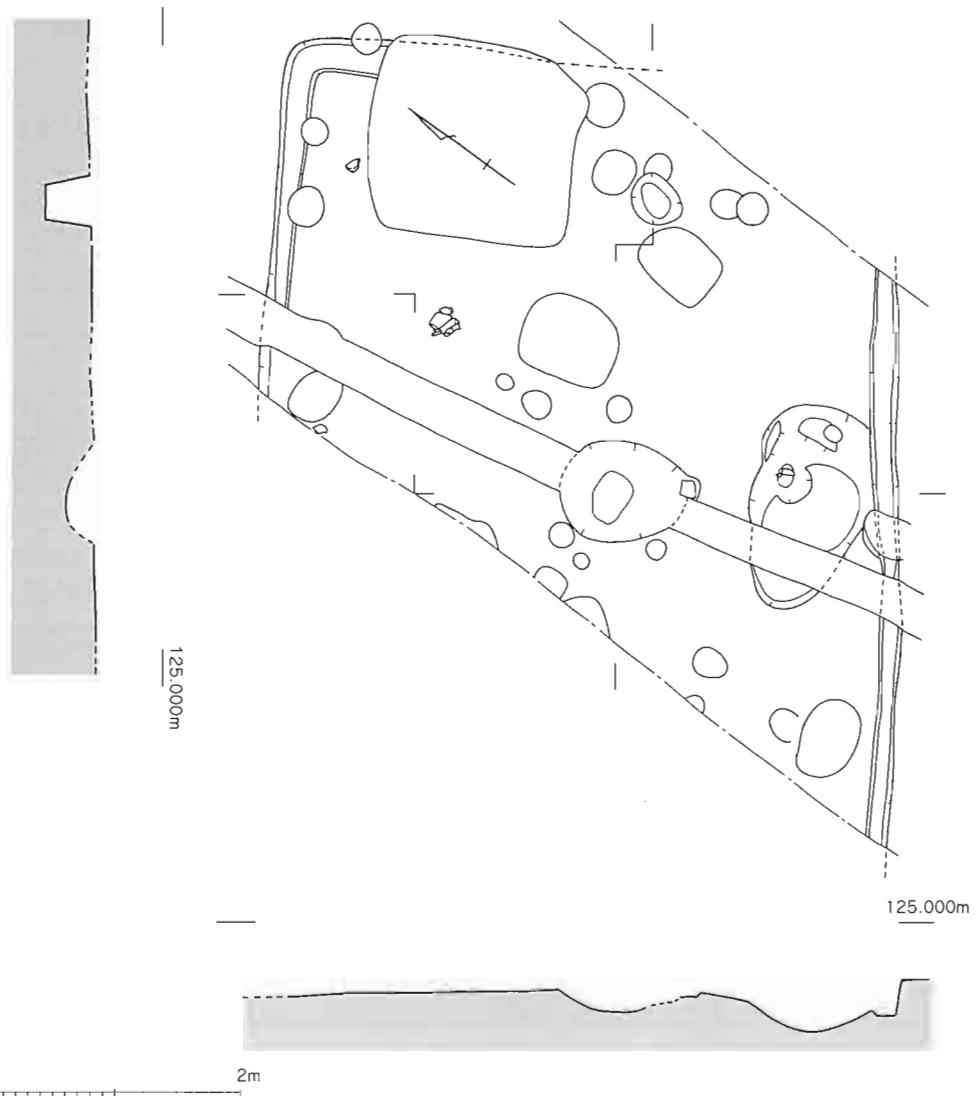
1は鉢の口縁部である。頸部下には断面三角形の突帯を貼り付ける。2は甕の口縁部から胴部にかけての破片である。ハケが内外面に施され、内面上部にはその後ミガキが施されている。3は甕の底部である。内面に一部に指押さえが見られる。



第8図 2区1号竪穴住居跡実測図 (1/60)



第9図 2区1号竪穴住居跡出土遺物実測図 (1/4)



第10図 2区2号竖穴住居跡実測図 (1/60)

2号竖穴住居跡 (第10図 図版4)

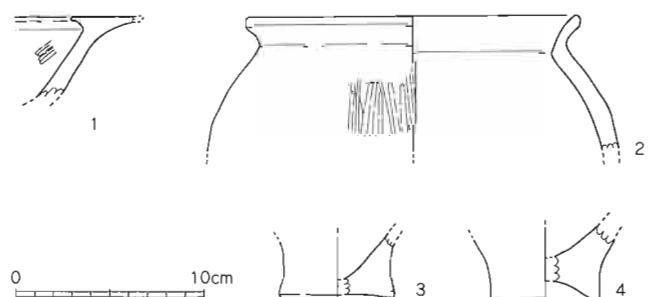
1号竖穴住居跡の南約6mで検出され、4号竖穴遺構に切られる。西壁と北壁、南壁の一部は調査区外へ広がる。平面形は長方形を呈し、規模は長軸約6m + α、短軸約5m、検出面からの深さ約40cmである。主柱穴は2本と見られ、中央に炉を持つ。柱穴の検出面からの深さは約60cmである。また、南面土坑、壁周溝が見られる。

2号竖穴住居跡出土遺物 (第11図 図版25)

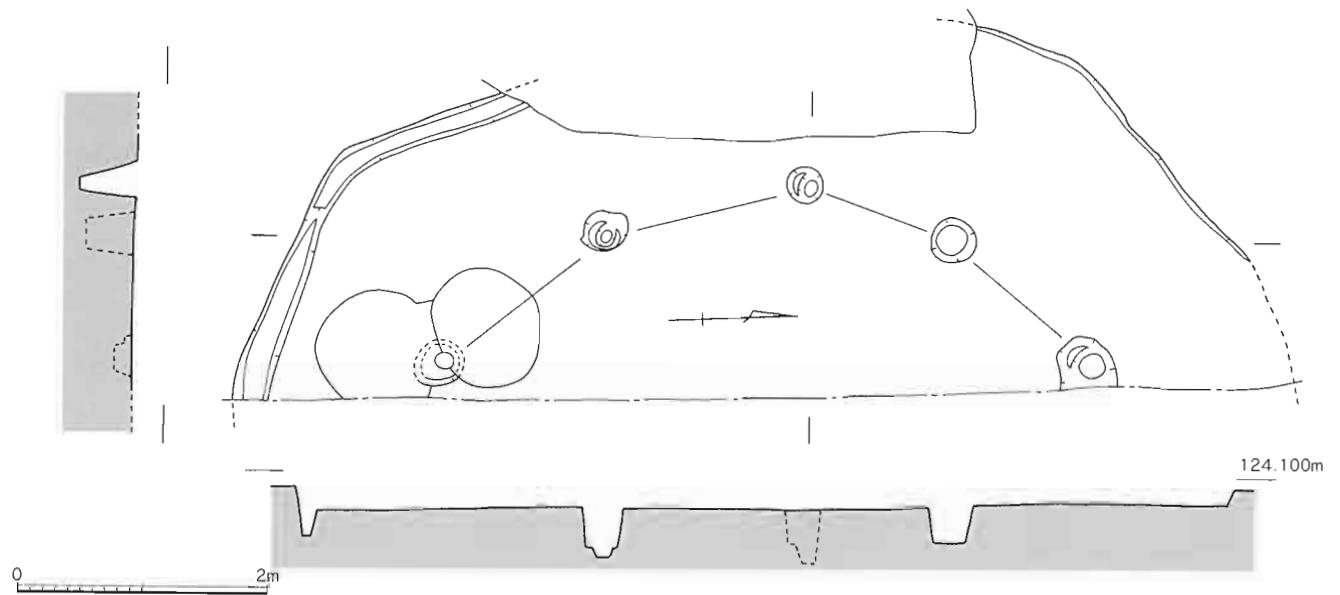
1は高壺の口縁部である。2は壺の口縁部から胴部にかけて残存している。外面にタテ方向のミガキが施される。内面にはミガキがわずかに残存し、口縁端部は鋤先状を呈する。3、4は甕の底部である。3に比して4は底面はより上げ底に仕上げられている。

3号竖穴住居跡 (第12図 図版25)

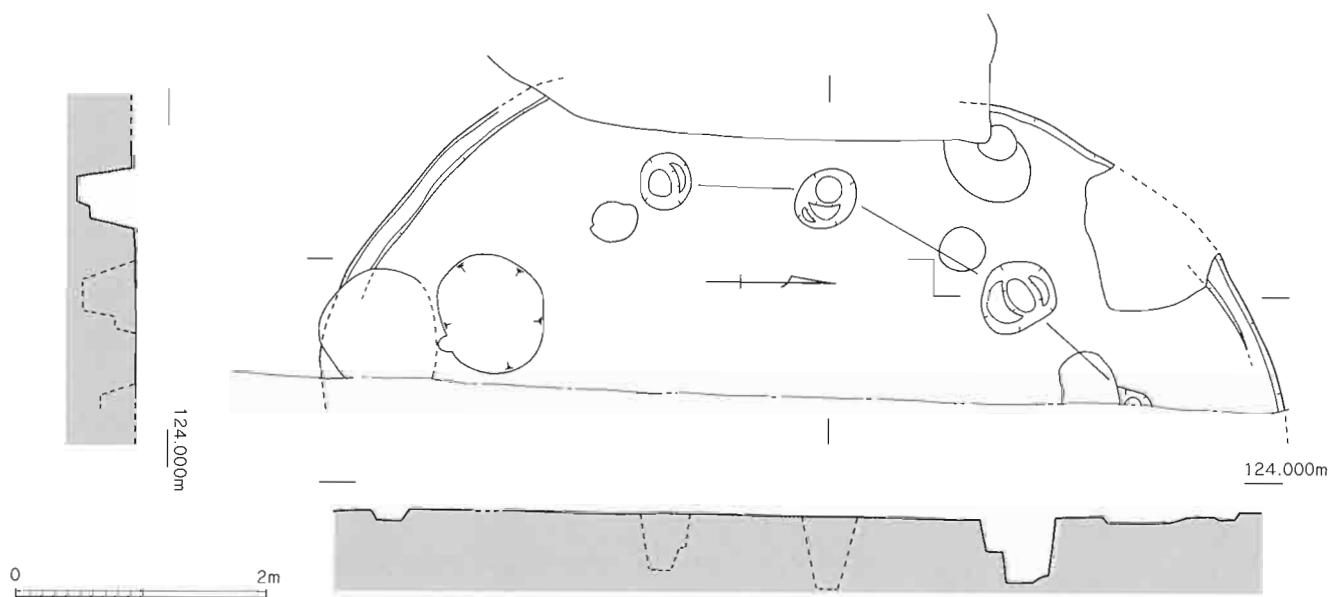
2号竖穴住居跡の南約12mで検出され、4号竖穴住居跡、1、2号掘立柱建物跡に切られる。円



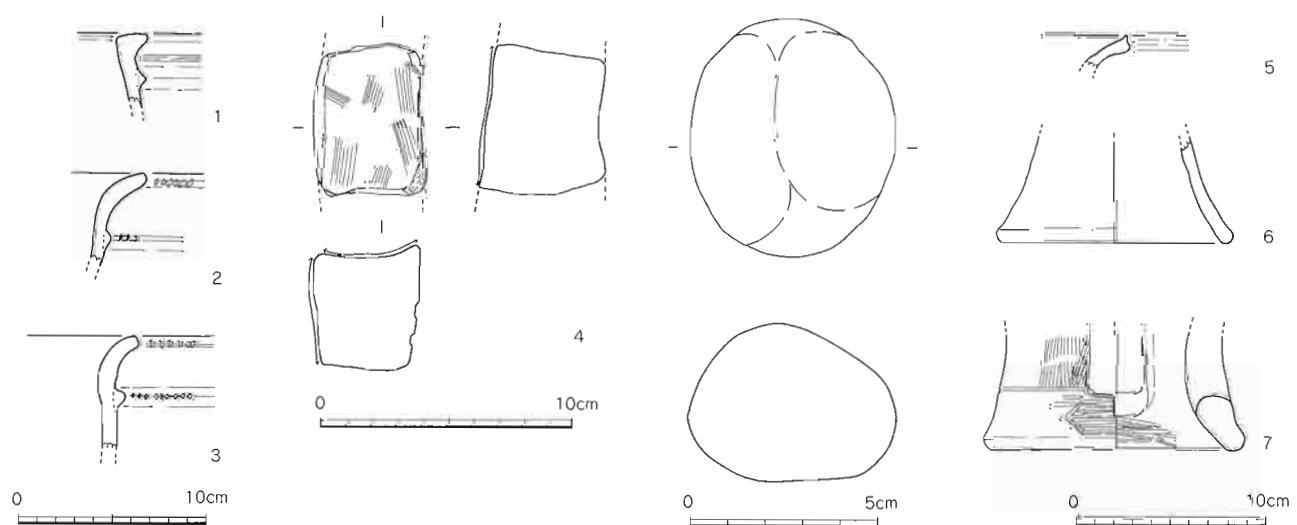
第11図 2区2号竖穴住居跡出土遺物実測図 (1/3)



第12図 2区3号竪穴住居跡実測図 (1/60)



第13図 2区4号竪穴住居跡実測図 (1/60)



第14図 2区3・4号竪穴住居跡出土遺物実測図 (1/4・1/2)

形住居で東壁は調査区外へ広がる。検出面での規模は最大約8.4mあり、検出面からの深さは約20cmである。柱穴は4本が確認されているが、8本柱になるか、10本柱になるかは不明である。柱穴の床面からの深さは約35~45cmである。炉、壁周溝は確認されなかった。

3号竪穴住居跡出土遺物（第14図1~4 図版25）

1~3は甕の口縁部である。1は口縁部下にに断面三角形の突帯を有する。2、3ともに口縁部下に断面三角形の突帯が貼り付けられ、口縁端部とともに刻目が施されている。4は砥石である。石材は砂岩で研磨面は3面である。5は投弾である。ほぼ完形である。

4号竪穴住居跡

(第13図 図版5)

3号竪穴住居跡とほぼ同位置にある、3号竪穴住居跡を切り、6・8号竪穴遺構、1・2号掘立柱建物跡に切られる。円形住居で東壁は調査区外へ広がる。検出面での規模は最大約7.6mあり、検出面からの深さは約20cmである。主柱穴は5本確認でき、その配置から10本柱になるとみられる。柱穴の床面からの深さは約48~60cmである。壁周溝が一部確認できたが、炉は確認できなかった。

4号竪穴住居跡出土遺物

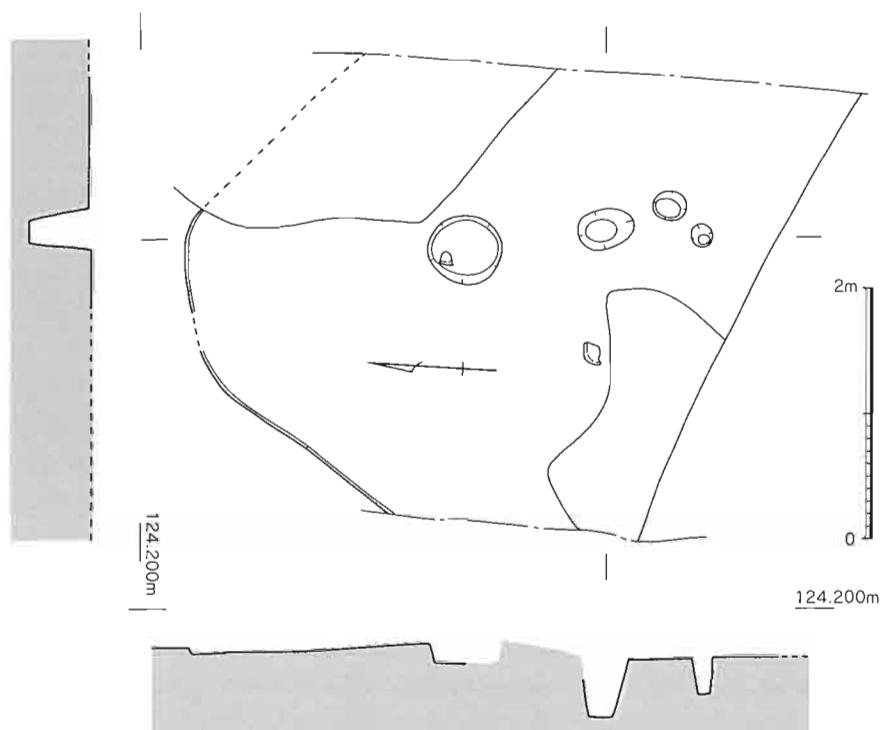
(第14図5~7 図版25)

1は甕の口縁部破片である。端部は跳ね上げており、先端は凹形にくぼむ。2、3は器台の脚部である。3は長方形の透かしが見られ、底部付近は内外面ともに横から斜め方向のミガキが施されている。

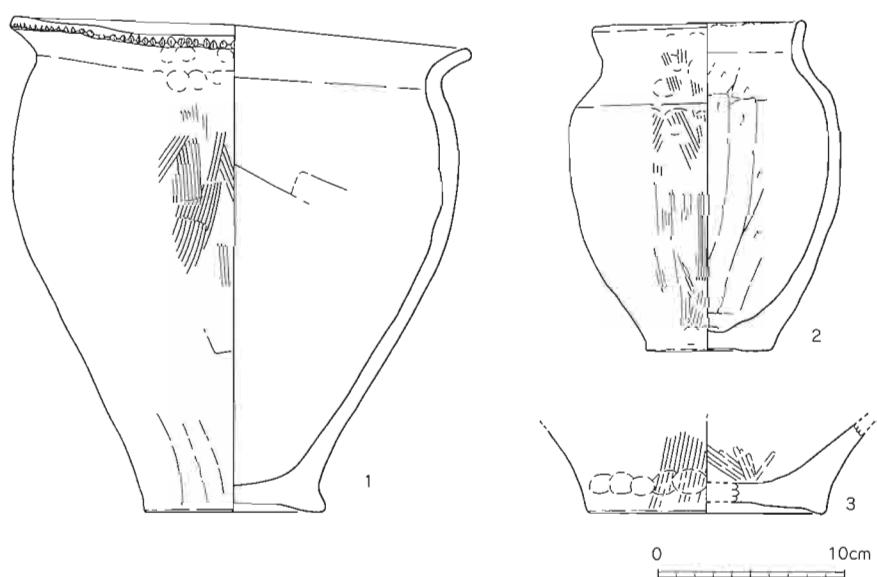
5号竪穴住居跡

(第15図 図版5)

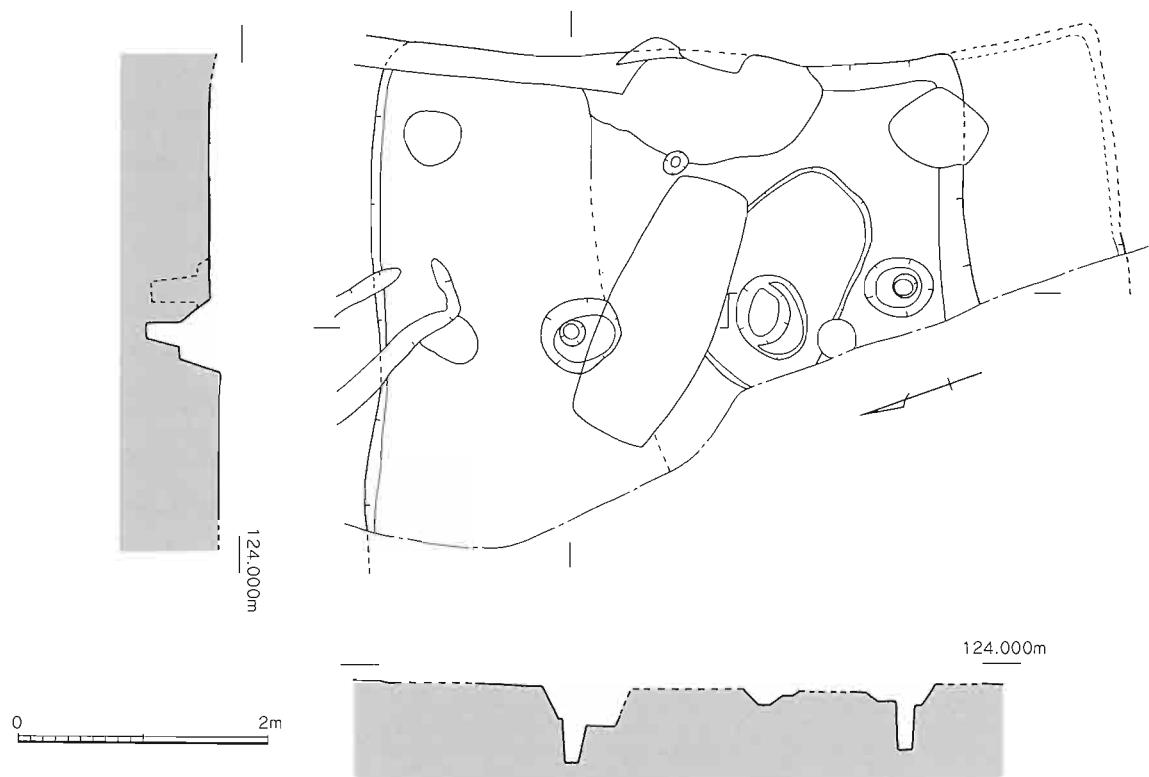
4号竪穴住居跡の南側で検出され、7号竪穴住居跡、9号竪穴遺構、15・17号土坑に切られる。西壁・北壁の一



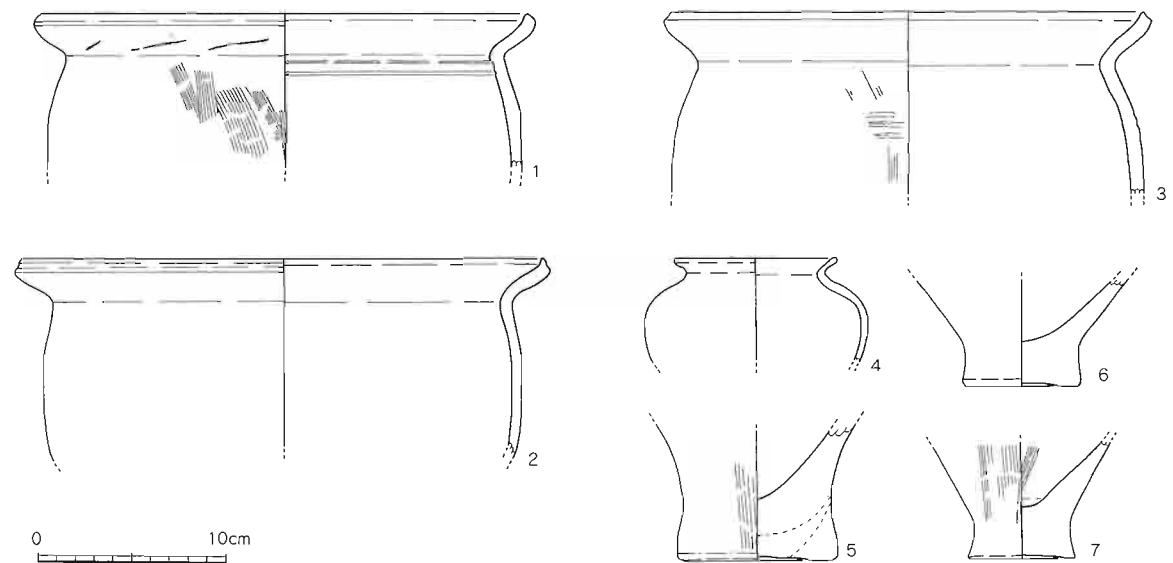
第15図 2区5号竪穴住居跡実測図 (1/30)



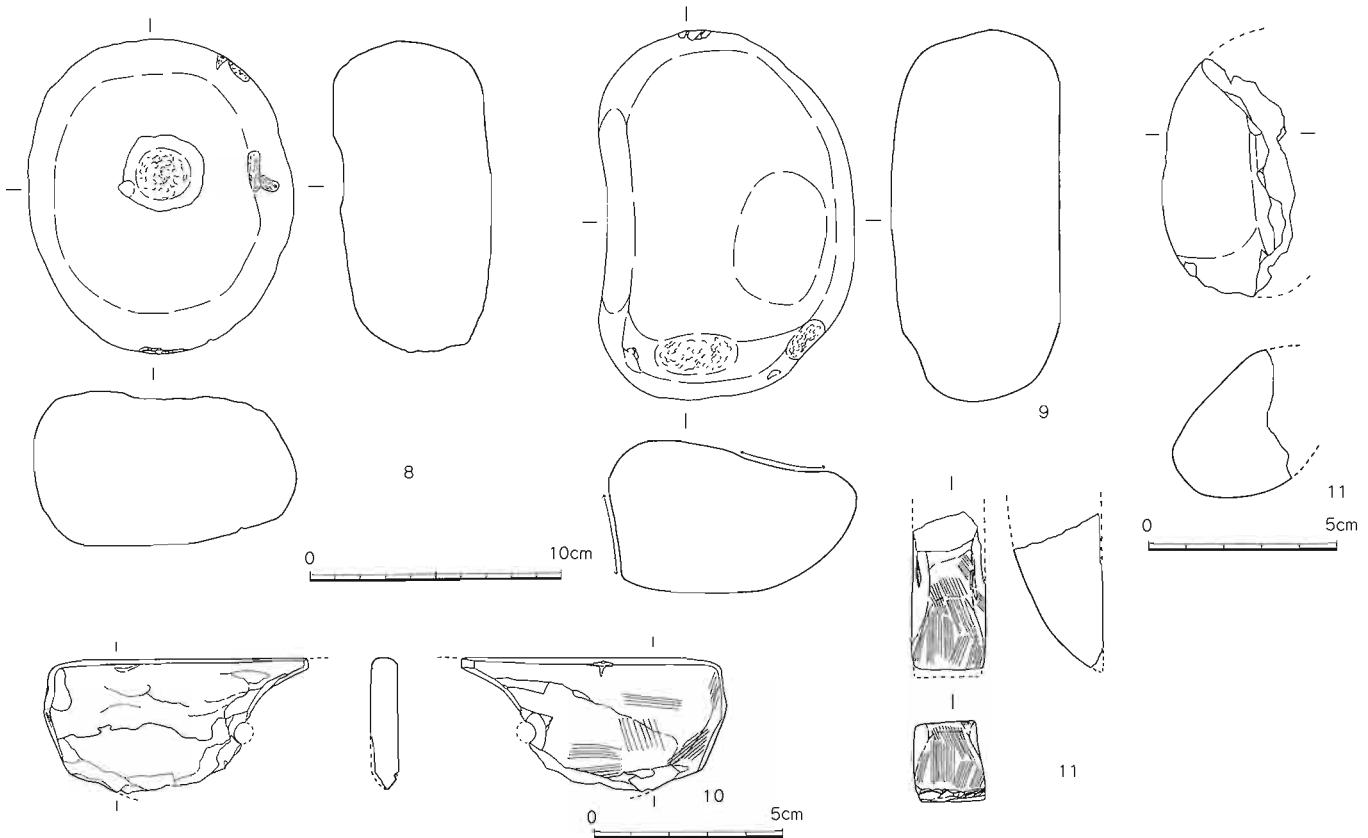
第16図 2区5号竪穴住居跡出土遺物実測図 (1/4)



第17図 2区6号竪穴住居跡実測図 (1/60)



第18図 2区6号竪穴住居跡出土遺物実測図(1) (1/4)



第19図 2区6号竪穴住居跡出土遺物実測図(2) (1/2・1/4)

部しか残存しておらず、その平面形は不定形気味な方形を呈すると思われる。柱穴が床面で検出されたは、主柱穴となるかは不明である。炉、壁周溝とともに確認できなかった。

5号竪穴住居跡出土遺物 (第16図 図版26)

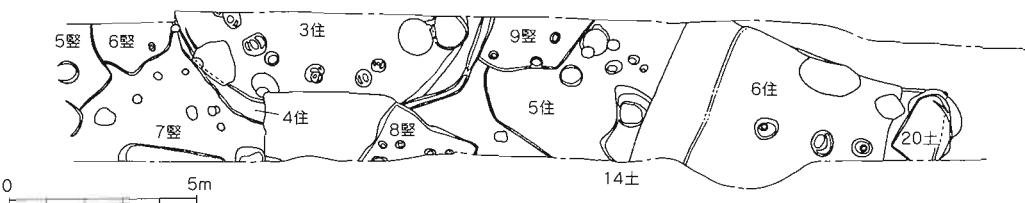
1は甕でほぼ完形である。口縁部はやや歪み、刻み目を施す。2は壺でこれもほぼ完形である。口縁部はわずかに外反気味に立ち上がる。内面にはタテ方向のケズリが見られる。3は甕の底部である。外面にはハケ調整の後、指押さえが施され、内底面付近にはミガキが見られる。

6号竪穴住居跡 (第17図 図版5)

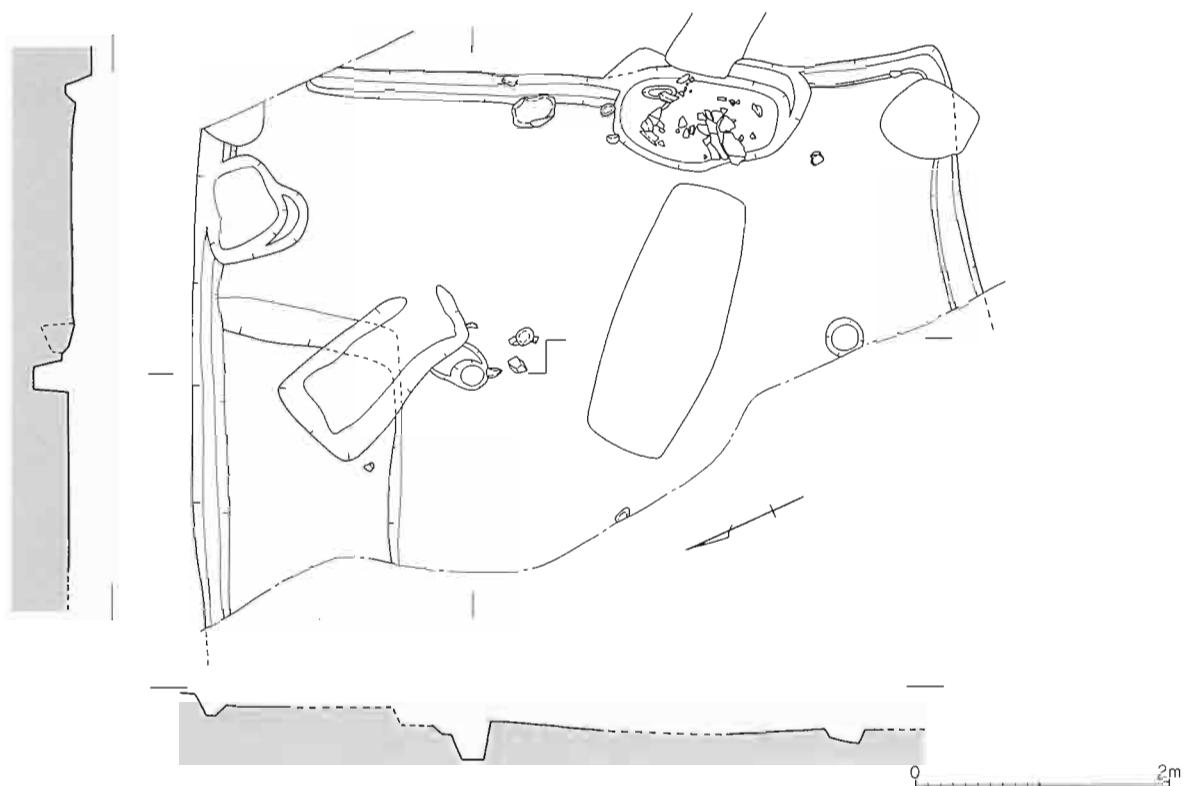
5号竪穴住居跡の南側で検出され、7号竪穴住居跡、10号竪穴遺構、16・20号土坑を切り、19号土坑1・2号石棺に切られる。西壁は調査区外へ広がり、平面形は方形を呈すると考えられる。規模は約6.5m×約3.9m+ α 、検出面からの深さ約10cmである。主柱穴は2本で中央に炉をもち、北壁・南壁側にベッドを持つ。柱穴の床面からの深さは約60cmである。

6号竪穴住居跡出土遺物実測図 (第18・19図 図版26)

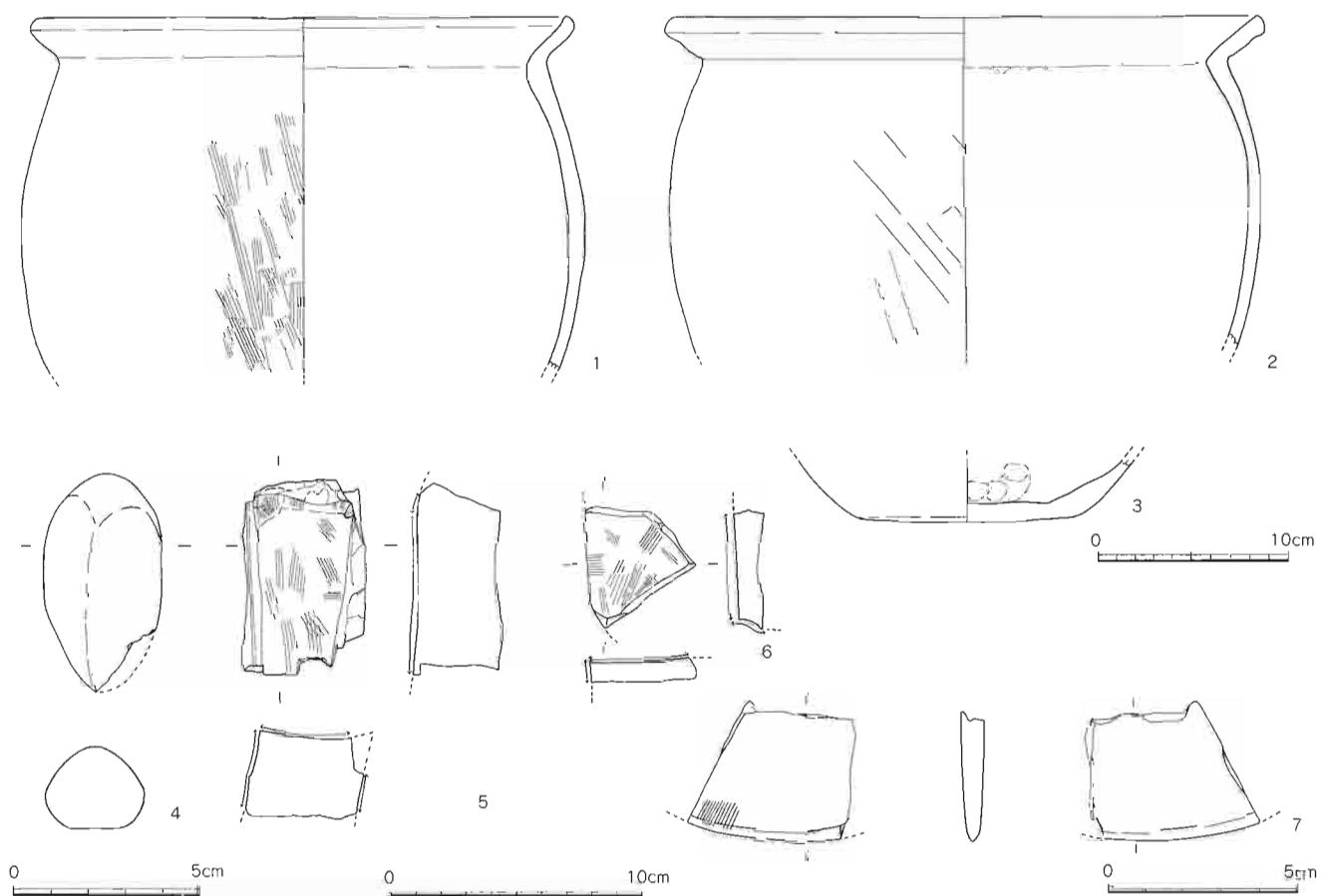
1～3は甕の口縁部から胴部片である。ともに口縁部は跳ね上げ口縁である。1は口縁端部を跳ね上げており、頸部内面の屈曲部下には浅い2条の沈線が見られる。2は胴部外面にハケが施されている。4は小型の壺である。内外面ともにナデで仕上げられ、ススが付着する。5～7は甕の底部である。7は内外面ともタテ方向のハケが施され、ススが付着する。



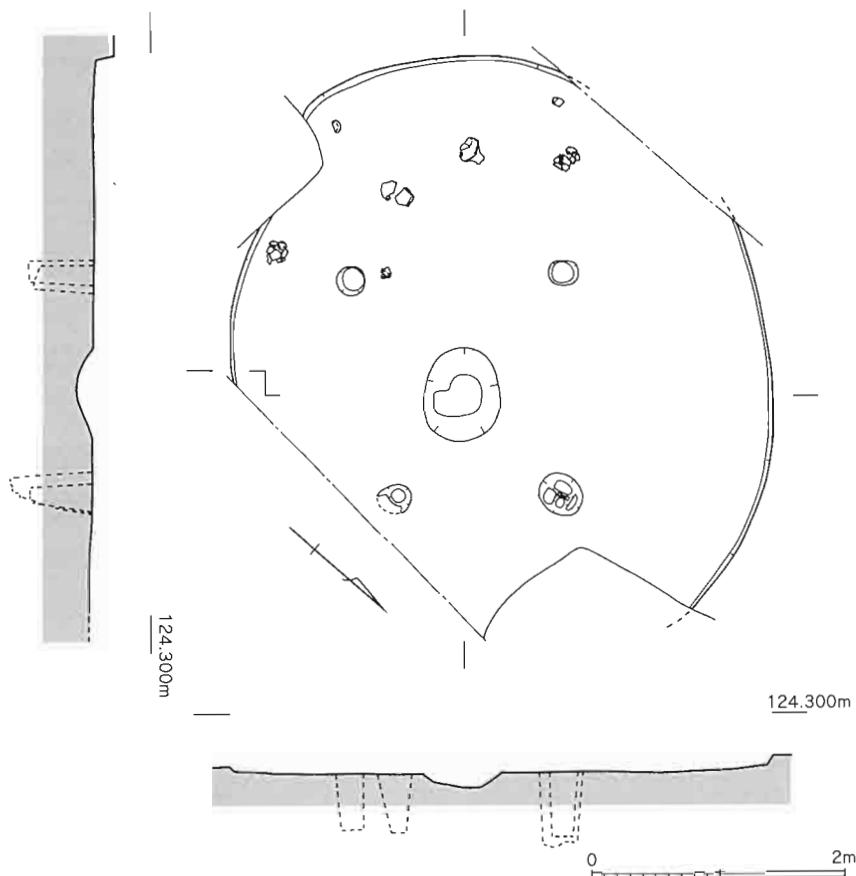
第20図 2区下層遺構配置図 (1/200)



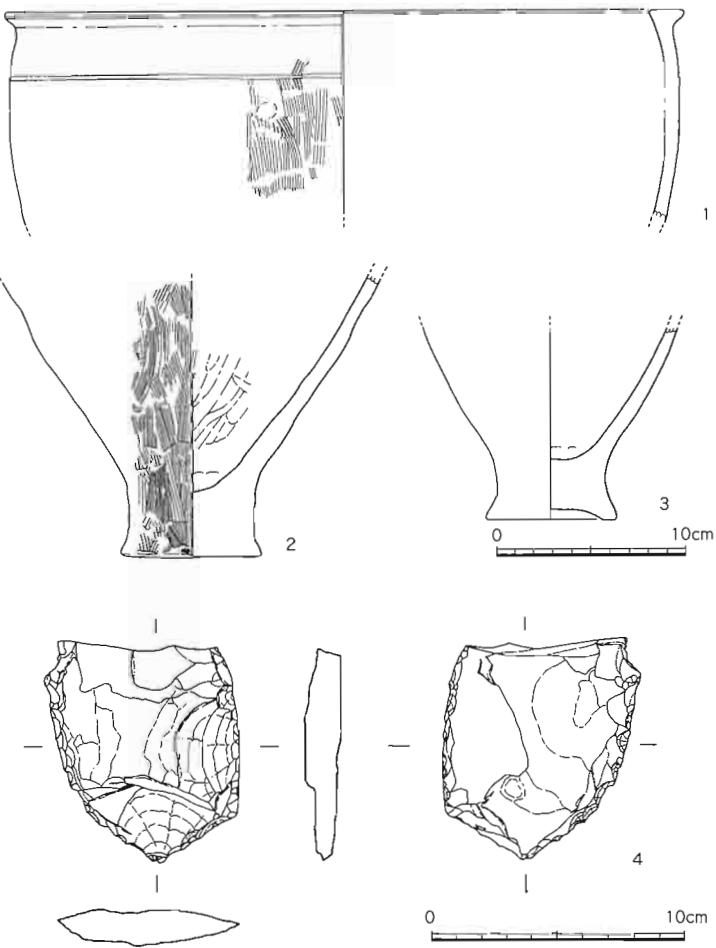
第21図 2区7号竪穴住居跡実測図 (1/60)



第22図 2区7号竪穴住居跡出土遺物実測図 (1/4・1/3・1/2)



第23図 2区8号竪穴住居跡実測図 (1/60)



第24図 2区8号竪穴住居跡出土遺物実測図 (1/3·1/4)

8、9ともにほぼ完形である。8は安山岩製の凹石である。9は硬質砂岩製の磨石である。10は石庖丁である、粘板岩製で片面に研磨跡が残る。南面土坑中より出土。11は粘板岩製の柱状片刃石斧である。12は花崗岩製の投弾である。約1/2を欠損する。

7号竪穴住居跡

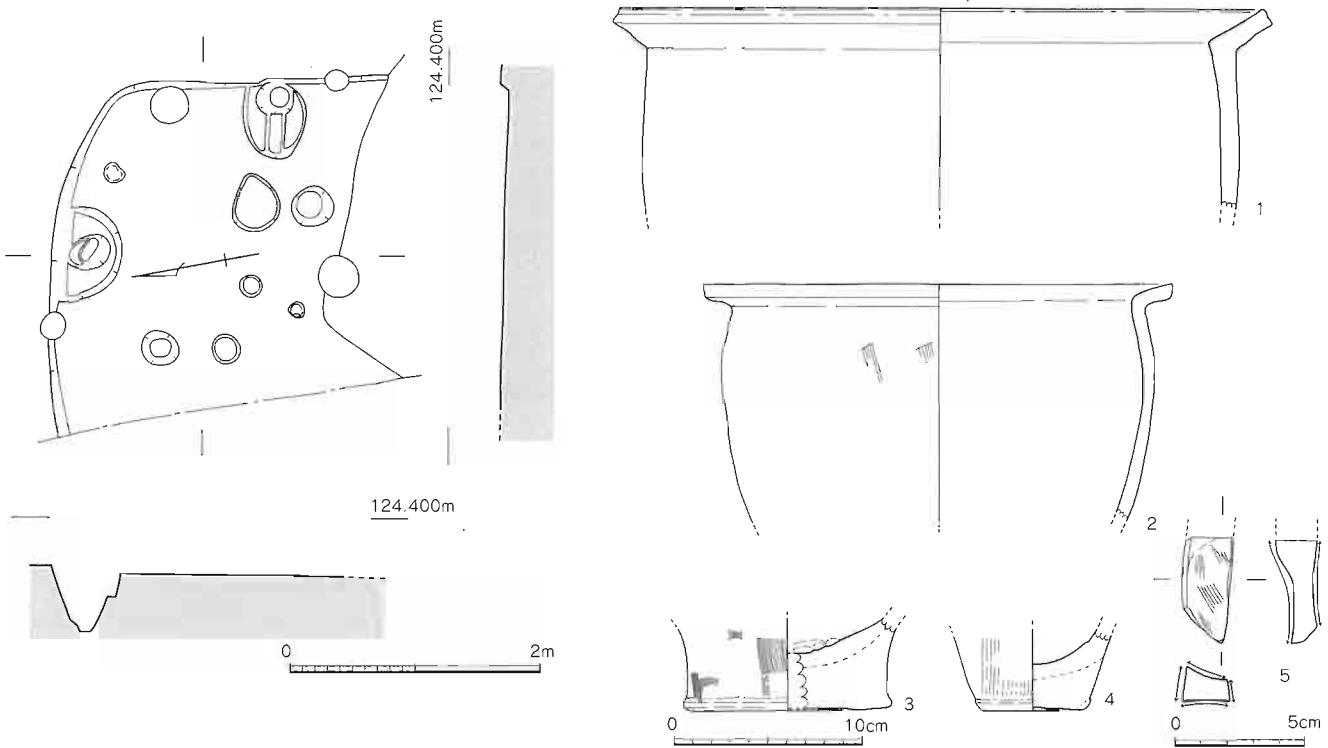
(第21図 図版6)

6号竪穴住居跡の下層で検出され、5号竪穴住居跡、15・16・18号土坑、10号竪穴遺構を切り、6号竪穴住居跡、1・2号石棺などに切られる。西壁は調査外へ広がる。平面形は方形を呈し、規模は約6.4m×約3.8m + α、検出面からの深さ約20cmである。主柱穴は炉を挟んで2本ある、検出面からの深さ約35cmである。北壁側にベッドをもつ。

7号竪穴住居跡出土遺物

(第22図 図版27)

1、2は甕である。ともに胴部下半まで残存しておいる。1は口縁端部をやや跳ね上げおり、また外面にややナナメ方向のハケが施される。2～4は甕の底部である。3は底面から上方へ穿孔しようとしたとみられるが、中途で終わっている。7は砂岩製の石庖丁の未製品である。刃を作り出した段階で破損したと考えられる。5、6は砥石で。5は砂岩製、6は頁岩製である。4は投弾で一部が欠損するのみである。



第25図 2区9号竪穴住居跡実測図 (1/60) 及び出土遺物実測図 (1/4・1/2)

8号竪穴住居跡 (第23図 図版5)

6、7号竪穴住居跡の南約25mで検出され、25・26号土坑に切られる。円形住居で北壁・東壁と西壁の一部が調査区外へ広がる。規模は径約4.3m、検出面からの深さは約10cmである。4本の主柱穴をもち、中央に炉が見られる。壁周溝は確認されなかった。

8号竪穴住居跡出土遺物 (第24図 図版27)

1は甕である。胴部上部に1条の沈線が見られ、タテ方向のハケ、一部に指押さえが見られる。2、3は甕の底部である。2は平底、3はやや上げ底気味である。2は外面に縦方向のハケ、内面にはミガキ、ナデが見られる。4は安山岩製の打製石斧である。刃部を作り出している段階での未製品か、破損品かは不明である。

9号竪穴住居跡 (第25図 図版6)

調査区南端より約3mで検出された。12号竪穴遺構に切られ、北壁・東壁が確認でき、平面形は方形を呈すると考えられる。規模は約2.5m×約2.7m、検出面からの深さ約15cmである。主柱穴、炉は確認できなかった。

9号竪穴住居跡出土遺物 (第25図 図版27・28)

1、2は甕である。1は器面が摩耗しており、調整は確認できない。2は外面に斜め方向のハケがわずかに残る。3、4は甕の底部である。ともにほぼ平底で外面に縦方向のハケが見られる。5は砂岩製の砥石である。研磨面は4面である。摩耗具合から使用頻度が高かったことが窺える。

(2) 壇穴遺構

ここで説明する壇穴遺構については、壇穴住居跡の可能性があるものの、主柱穴や炉、壁周溝が確認できなかったことから壇穴遺構としたものである。

1号壇穴遺構 (第26図 図版6)

調査区の北端から南約5mで検出された。5・8号土坑を切り、2号土坑に切られる。北壁・東壁の一部が確認でき、西壁・南壁は調査区外へ広がる。平面形は方形、もしくは長方形を呈すると考えられる。規模は確認面で約4.7m + α × 2.6m + α 、検出面からの深さ約15cmである。

2号壇穴遺構 (第26図)

1号壇穴遺構の南約8mで確認された。3号壇穴遺構を切る。北壁の一部だけが残存しており、平面形は方形、または正方形を呈すると考えられる。規模は確認面で約2.8m、検出面からの深さ約10cmである。

3号壇穴遺構 (第27図)

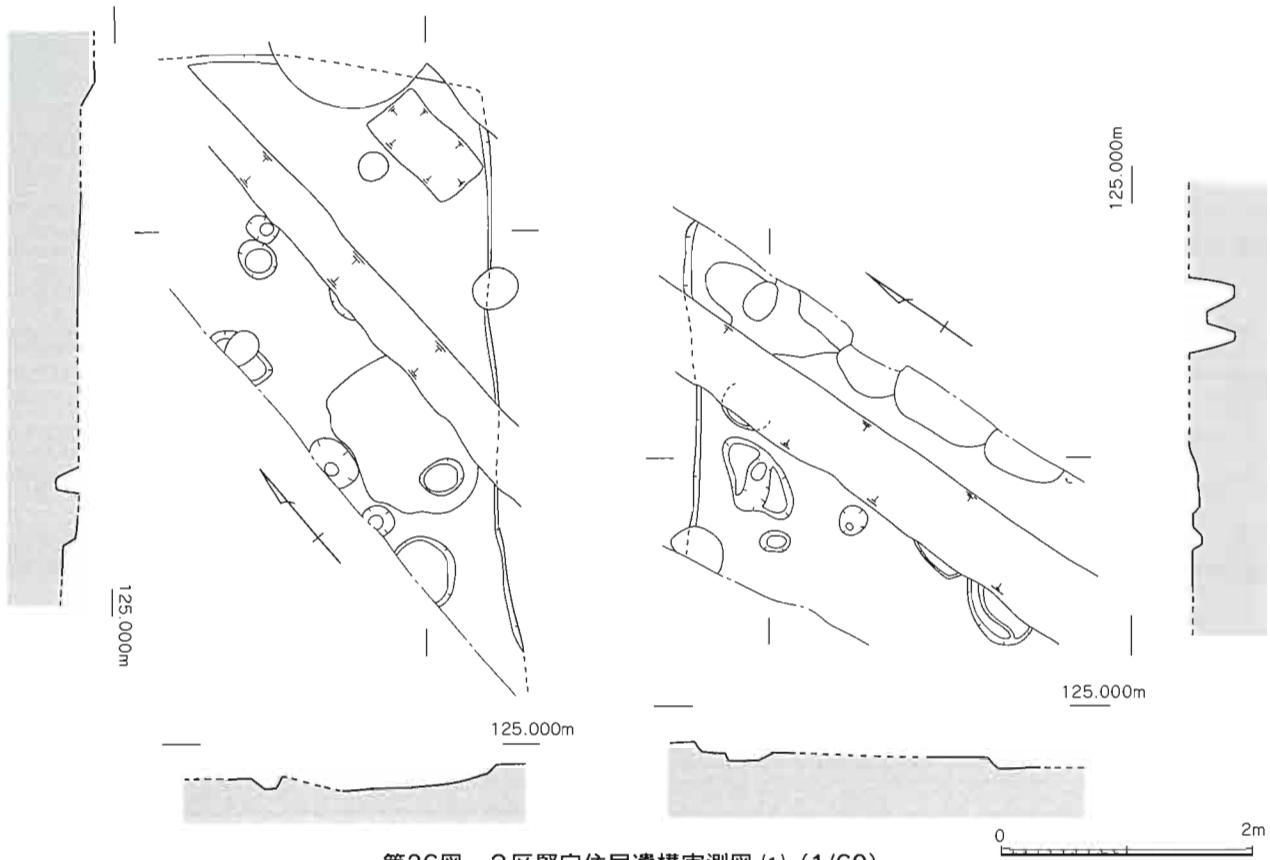
2号壇穴遺構の東側で確認され、2号壇穴遺構に切られる。北壁と西壁の一部がみられるのみで、平面形は方形、もしくは長方形を呈するとと思われる。規模は約0.4m + α × 約0.5m + α 、検出面からの深さ約10cmである。

4号壇穴遺構 (第27図 図版6)

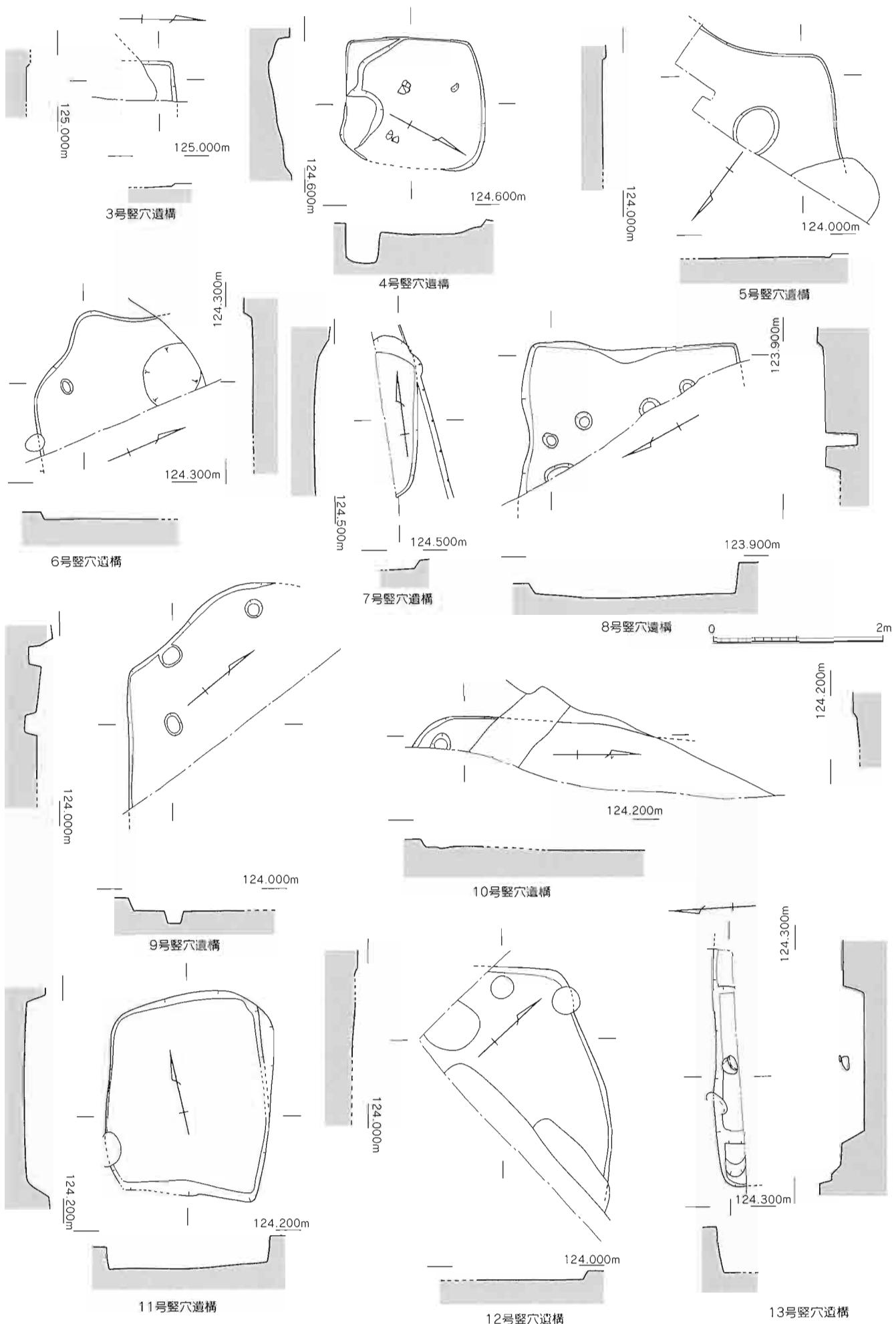
2号壇穴遺構の南約4.5mで検出され、2号壇穴住居跡を切る。東壁の一部が削平されている。平面形は方形を呈し、規模は約1.5m × 約1.6m、検出面からの深さ約20cmである。削平された東壁にカマドが付設されていた可能性もある。

5号壇穴遺構 (第27図 図版6)

4号壇穴遺構の南約13mで検出された。6号壇穴遺構を切り、11号土坑、1・2号掘立柱建物跡



第26図 2区壇穴住居遺構実測図(1) (1/60)



第27図 2区竪穴住居遺構実測図(2) (1/60)

に切られる。平面形はやや不定形気味の方形、もしくは長方形を呈するとみられ、規模は確認面で約 $1.6m + \alpha \times 約1.4m \times + \alpha$ 、検出面からの深さ約10cmである。

6号竪穴遺構（第27図 図版6）

5号竪穴遺構の南側で検出され、3・4号竪穴住居跡を切り、5号竪穴遺構、1号掘立柱建物跡に切られる。平面形は不定形で、規模は長軸約 $2.1m + \alpha \times$ 短軸約 $1.4m + \alpha$ 、検出面からの深さ約 cmである。

7号竪穴遺構（第27図 図版6）

6号竪穴遺構の西側約4mで検出された。東壁と北壁・南壁の一部が確認できた。平面形は方形、もしくは長方形を呈すると考えられ、規模は約 $1.9m \times 約0.6m + \alpha$ 、検出面からの深さ15cmである。

8号竪穴遺構（第27図 図版7）

7号竪穴遺構の南約5mで検出され、3、4号竪穴住居跡を切り、14号土坑に切られる。北壁と東壁が確認でき、西壁と南壁は調査区外へ広がる。平面形は方形、もしくは長方形を呈すると思われ、規模は約 $2.6m \times 約1.7m + \alpha$ 、検出面からの深さ約40cmである。

9号竪穴遺構（第27図 図版7）

3号竪穴住居跡の南側で検出され、5号竪穴住居跡、17号土坑を切り、3号竪穴住居跡に切られる。調査区内では南壁・東壁が確認された。平面形はやや不定形気味の長方形を呈すると思われ、規模は約 $1.6m \times 約1.7m + \alpha$ 、検出面からの深さ約15cmである。

10号竪穴遺構（第27図）

9号竪穴遺構の南側約6mで検出された。6、7号竪穴住居跡、18号土坑、1号土坑墓に切られる。西壁・南壁の一部が確認でき、東壁・北壁は調査区外へ展開する。平面形は方形もしくは長方形を呈すると考えられ、規模は約 $2.8m + \alpha \times 約0.7m \times + \alpha$ 、検出面からの深さ約10cmである。

11号竪穴遺構（第27図 図版7）

8号竪穴住居跡の南側で検出された。26・28号土坑を切る。平面形は長方形を呈し、規模は約 $2.5m \times 約1.9m$ 、検出面からの深さ約25cmである。

12号竪穴遺構（第27図 図版7）

調査区の南端から約3mで検出された。9号竪穴住居跡を切り、13号竪穴遺構、30号土坑に切られる。北壁・西壁の一部が確認できた。平面形は方形、もしくは長方形を呈すると見られ、規模は約 $2.8m + \alpha \times 約2m + \alpha m$ 、検出面からの深さ約10cmである。

13号竪穴遺構（第27図）

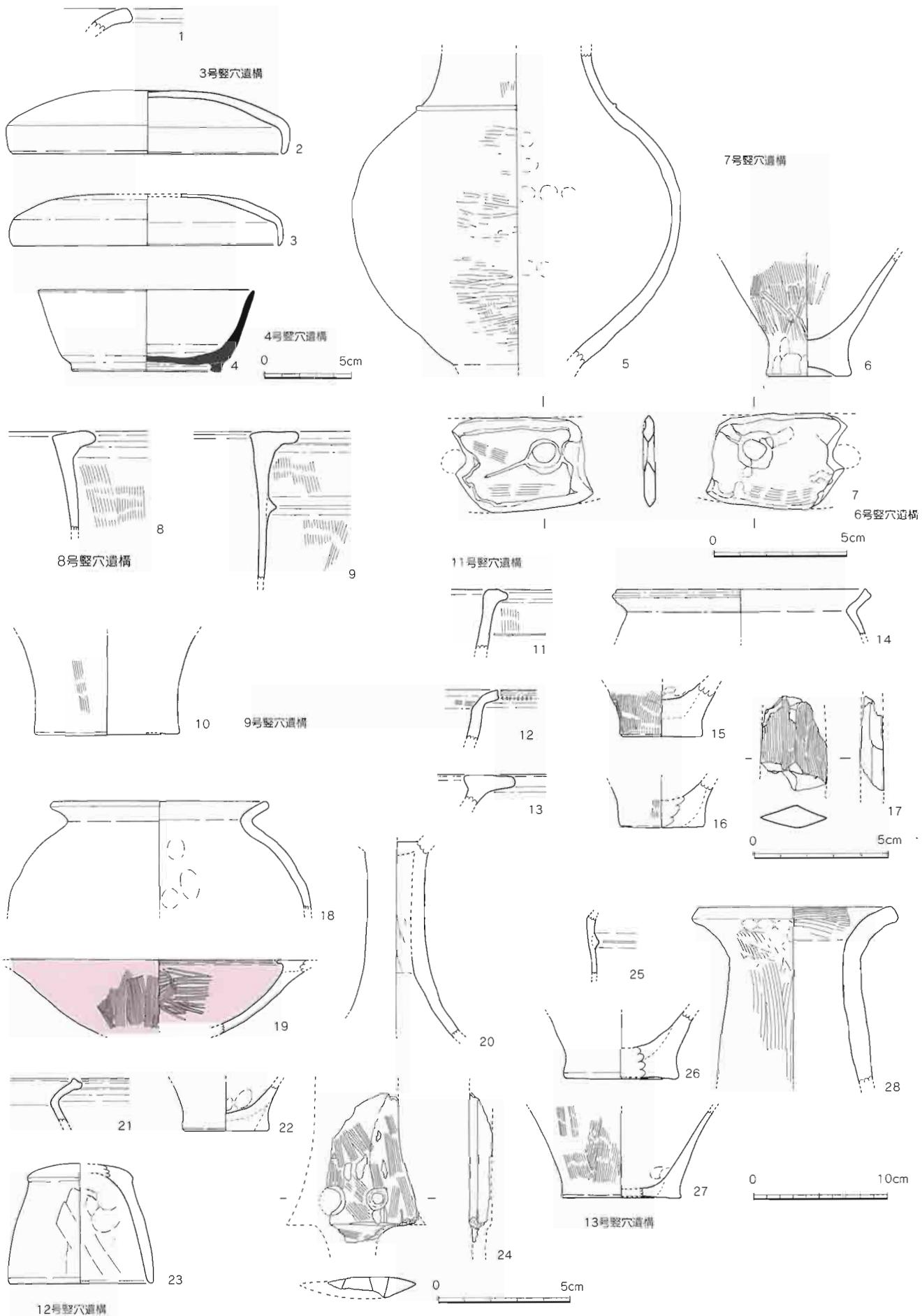
調査区南端で検出された。12号竪穴遺構、30号土坑を切る。北壁・西壁の一部が確認でき、調査区外へ広がる。平面形は長方形、もしくは方形を呈すると見られ、規模は約 $2.8m + \alpha \times 約0.3m + \alpha$ 、検出面からの深さ約60cmである。

竪穴遺構出土遺物（第28図 図版28～30）

1は3号竪穴遺構出土の甕の口縁部破片である。内外面にナデを施す。

2～4は4号竪穴遺構出土である。2、3は土師器の壺蓋である。ともにヘラケズリ、ナデで調整をしているが、摩耗が激しい。4は壺である。外面は回転ナデ、内面は回転ナデの後、内底面近くに不整方向のナデを施している。高台は貼付けでやや内傾している。

7は6号竪穴遺構出土の砂岩製の石庖丁で、破損品である。



第28図 2区竪穴住居遺構出土遺物実測図 (1/2・1/3・1/4)

5、6は7号竪穴遺構出土である。6は壺である。外面にはハケ、ミガキ、指押さえ、内面にはナデが施される。7は甕の底部である。外面は縦方向のハケ、ミガキが施され、底面近くには指押さえが見られる。内面は縦方向のミガキが施される。

8、9は8号竪穴遺構出土の甕の口縁部である。ともに「T」字状口縁で外面にはハケが見られる。9は口縁部下部に断面三角形の突帯を貼り付ける。

10は9号竪穴遺構出土は甕の底部である。平底で、内底面は剥離している。外面にはわずかにハケが見られる。

11～17は11号竪穴遺構出土である。11～14は甕口縁部で11は口縁部下に1条の沈線、12は口縁部に刻み目を施す。13は鋤先状口縁である。15、16は甕の底部である。15は外面ほぼ全面にわたってタテ方向のハケが見られる。17は片岩系の磨製石剣である。ほぼ全面に研磨痕が見られる。18～24は12号竪穴遺構出土である。18は壺である。内面に指押さえが施されている。19は高坏の坏部、20は高坏の脚部である。19は全面に朱が塗布されている。21は甕の口縁部、22は底部である。21は口縁部先端に沈線が見られる。23は支脚で一部にケズリが見られる。24は緑泥片岩製の石戈である。

25～28は13号竪穴遺構出土である。25は甕の胴部片で断面三角形の突帯を貼り付ける。26、27は甕の底部である。底面はいずれもやや上げ底氣味である。28は器台である。外面は縦方向のハケと指押さえ、内面は口縁部付近に横方向のハケを施す。

(3) 土坑

1号土坑（第29図）

調査区の北端より約2.5mの地点で検出された。機械によっておよそ半分が削平されている。平面形は円形になると考えられ、底面は平坦である。規模は長軸約0.55m、短軸約0.4m、検出面からの深さ約10cmである。

2号土坑（第29図）

1号土坑の南約2mで検出された。1号竪穴遺構を切る。平面形は円形になるとと考えられ、底面はやや舟底状を呈す。規模は長軸約1.3m、短軸約0.9m + α 、検出面からの深さ約25cmである。

3号土坑（第29図 図版7）

1号掘立柱建物跡の北約3mで検出された。東半分は調査区外へ広がる。平面形は橢円形になるとを考えられる。底面は平坦で上端に向かって壁面が斜めに立ち上がっている。規模は長軸約0.7m、短軸約0.4m + α 、検出面からの深さ約85cmである。その形態から貯蔵穴と考えられる。

4号土坑（第29図）

1号竪穴遺構の東側で検出された。平面形は橢円形を呈し、底面はほぼ平坦である。規模は長軸約1.2m、短軸約0.9m + α 、検出面からの深さ約40cmである。

5号土坑（第29図）

1号竪穴遺構の南側で検出され、1号竪穴遺構に切られる。平面形は不定形で、底面は中央に向かって傾斜している。規模は長軸約1.5m、短軸約0.8m + α 、検出面からの深さ約10cmである。

6号土坑（第29図 図版8）

2号竪穴住居跡の南約6mで検出され、7号土坑に切られる。平面形は不定形を呈し、底面は中

央に向かってわずかに傾斜している。規模は長軸約1.5m、短軸約 $0.4m + \alpha$ 、検出面からの深さ約25cmである。数基の土坑が切り合っている可能性も考えられる。

7号土坑（第29図）

6号土坑の南約4.5mで検出された。2号掘立柱建物跡に切られる。西半分は調査区外へ広がる。平面形は橢円形を呈するとみられ、底面はほぼ平坦である。北側に段落ちが見られる。規模は長軸約1.4m、短軸約1.2m、検出面からの深さ約35cmである。

8号土坑（第29図）

1号竪穴遺構内で検出され、1号竪穴遺構を切る。西側の一部が削平されている。平面形は橢円形を呈し、底面はやや凹凸が見られる。規模は長軸約1.4m、短軸約0.5m、検出面からの深さ約10cmである。

9号土坑（第30図）

3、4号竪穴住居跡の西側で検出され、3号竪穴住居跡を切る。平面形は橢円形を呈し、底面は南東側にむかって傾斜している。規模は長軸約0.95m、短軸約0.7m、検出面からの深さ約40cmである。

10号土坑（第30図）

2号竪穴住居跡の南側で検出された。平面形は橢円形を呈し、底面はほぼ平坦である西側には柱穴と思われる掘り込みがある。規模は長軸約1.5m、短軸約0.6m、検出面からの深さ約15cmである。

11号土坑（第30図）

5号竪穴遺構の西側で検出され、5号竪穴遺構を切り、2号掘立柱建物跡を切る。平面形は橢円形、もしくは橢円形を呈するとみられ、底面はほぼ平坦である。規模は長軸約0.7m、短軸約 $0.3 + \alpha$ m、検出面からの深さ約5cmである。

12号土坑（第30図）

3、4号竪穴住居跡内の南側で検出され、3、4号竪穴住居跡を切る。平面形は橢円形を呈し、底面はほぼ平坦である。規模は長軸約 $0.9m + \alpha$ 、短軸約0.9m、検出面からの深さ約30cmである。

13号土坑（第30図）

7号竪穴遺構の南側で検出され、西側は調査区外へ広がる。平面形は隅丸方形を呈するとみられ、底面は中央に向かってやや傾斜している。規模は長軸約0.7m、短軸約 $0.4m + \alpha$ 、検出面からの深さ約10mである。

14号土坑（第30図）

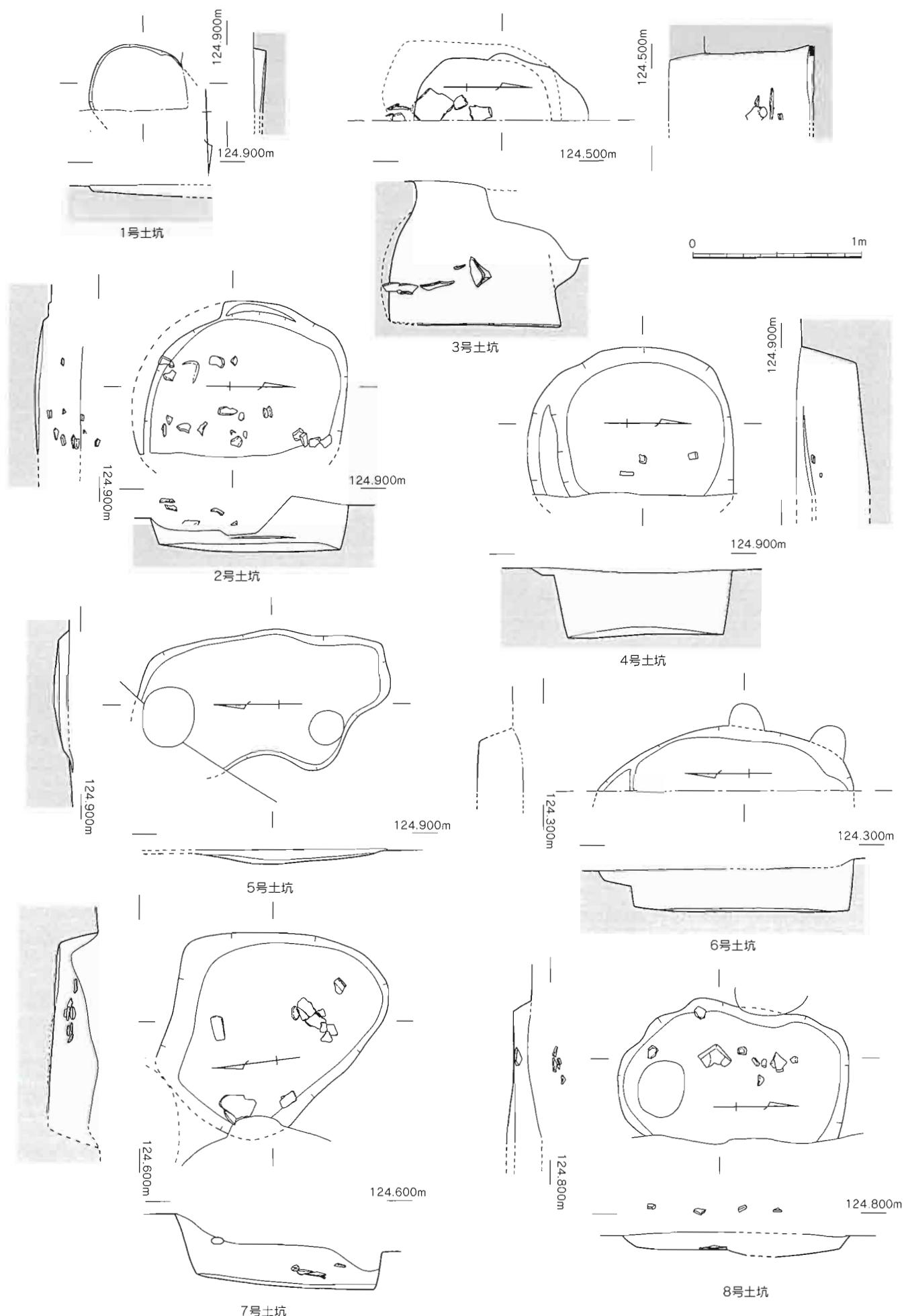
5号竪穴住居跡内南側で検出され、5号竪穴住居跡を切り、7号竪穴住居跡切られる。平面形は不定形を呈する。柱穴と思われる掘り込みが見られる。規模は長軸約2.1m、短軸約1m、検出面からの深さ約25cmである。

15号土坑（第30図）

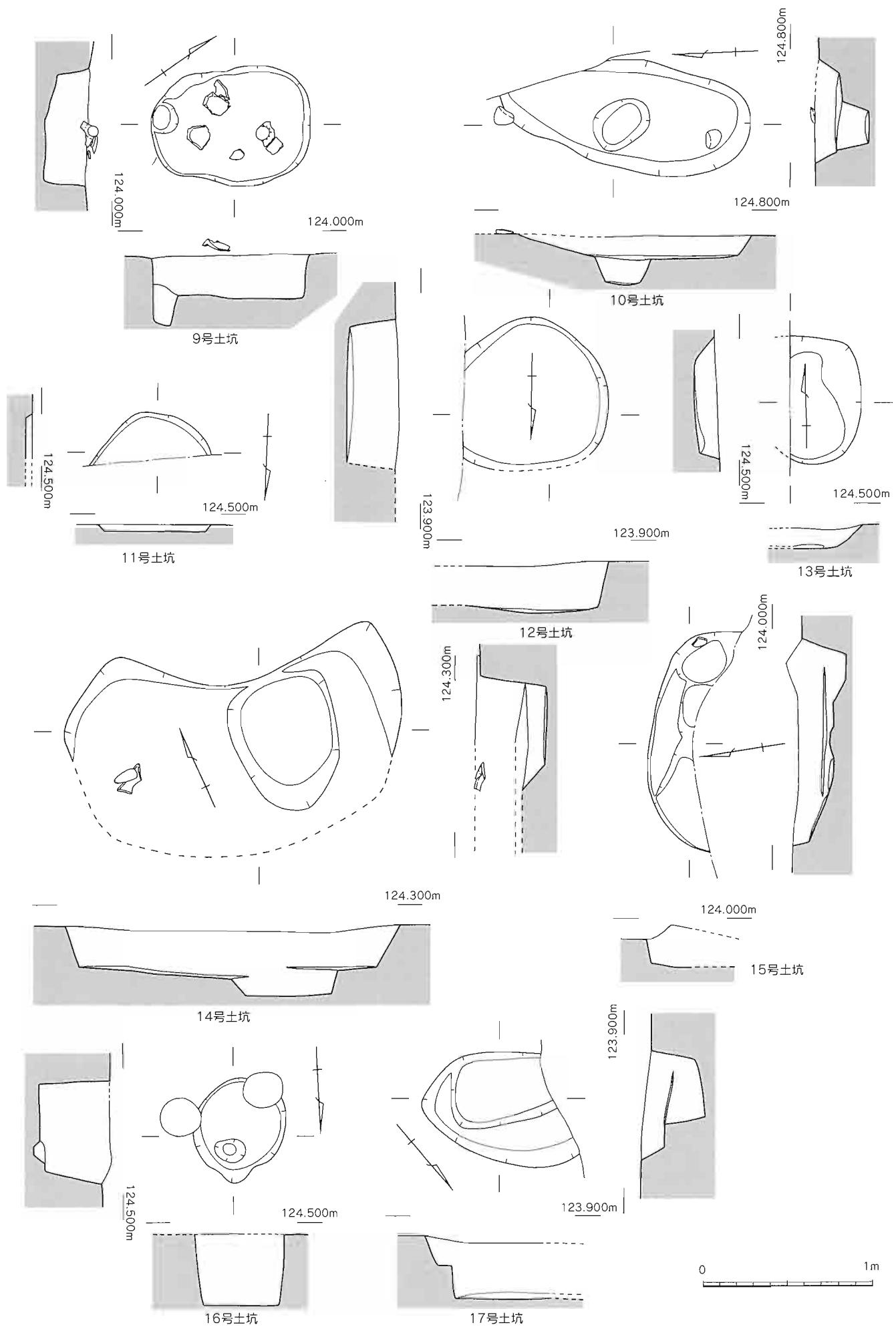
7号竪穴住居跡内の西側で検出され、7号竪穴住居跡を切り、6号竪穴住居跡に切られる。2西壁は調査区外へ広がるが、平面形は橢円形を呈するとと思われ、底面はかなりの凹凸が見られる。規模は長軸約1.3m、短軸約 $0.3m + \alpha$ 、検出面からの深さ約15cmである。

16号土坑（第30図）

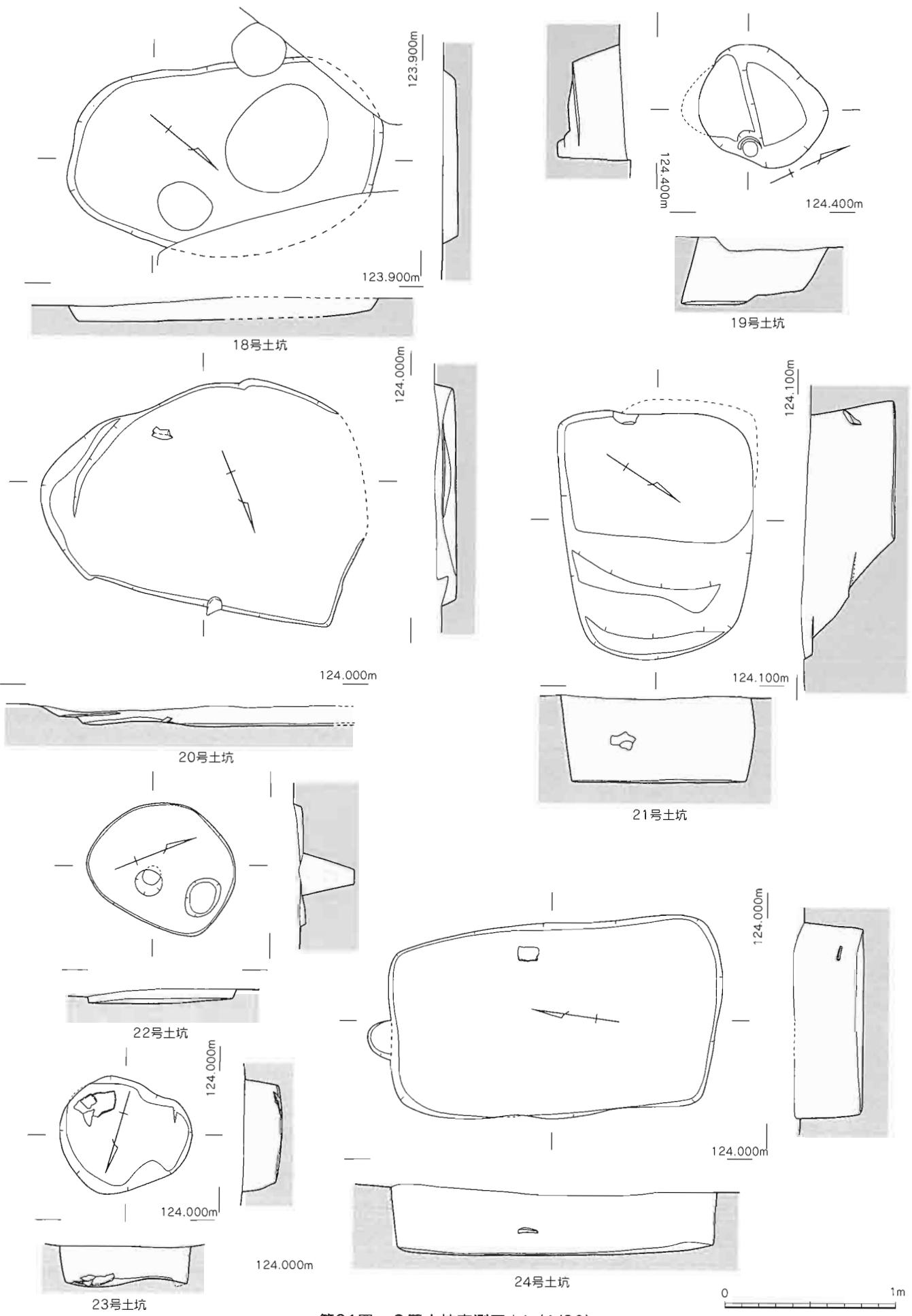
5号竪穴住居跡内の東側で検出された。5号竪穴住居跡、9号竪穴遺構に切られる。平面形は円形を呈し、底面は平坦である。規模は径約0.55m、検出面からの深さ約40cmである。



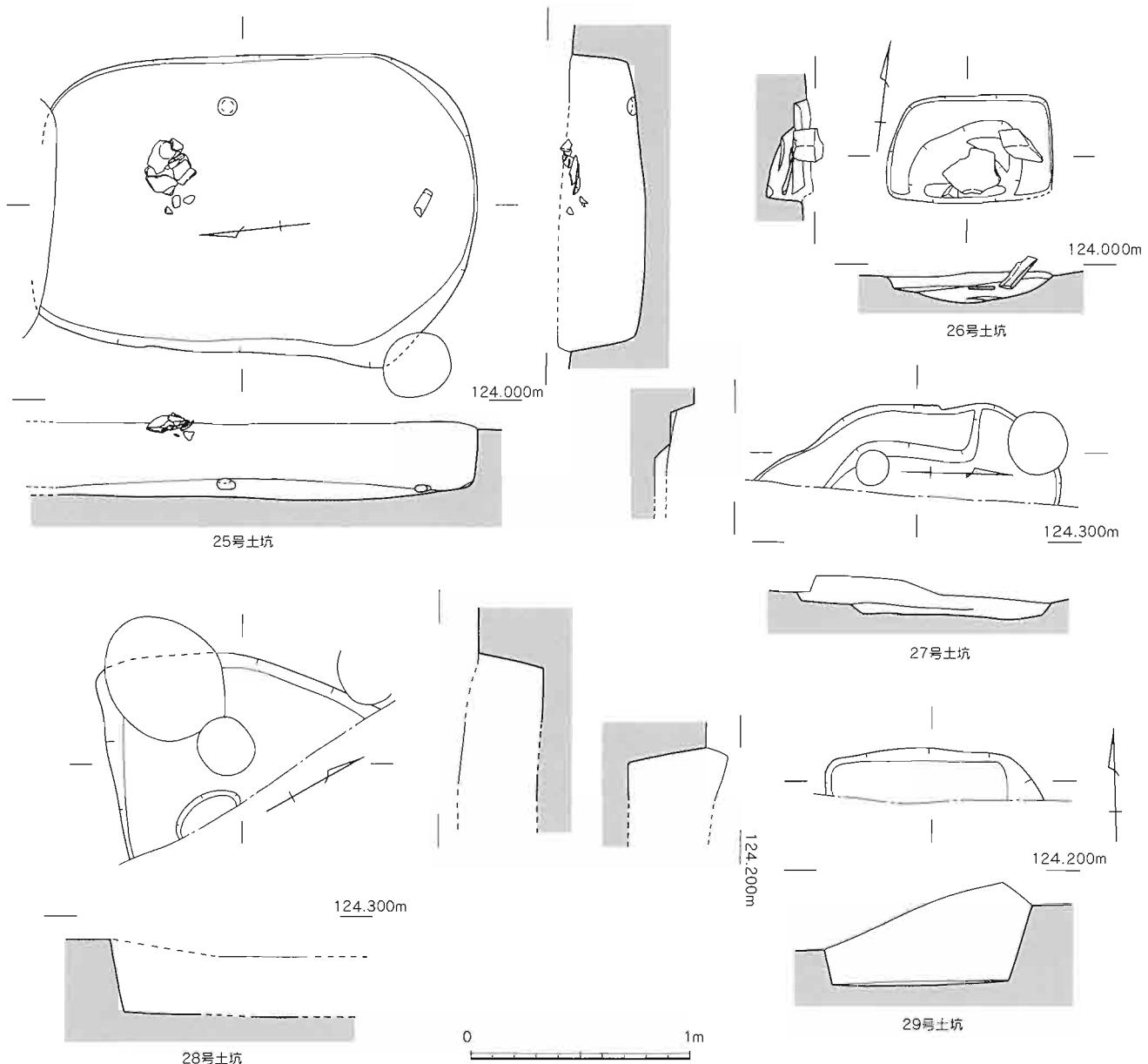
第29図 2区土坑実測図(1) (1/30)



第30図 2区土坑実測図(2) (1/30)



第31図 2区土坑実測図(3) (1/30)



第32図 2区土坑実測図(3) (1/30)

17号土坑（第30図）

6、7号竪穴住居跡の東側で検出された。10号竪穴遺構を切り、6、7号竪穴住居跡、1号土坑墓に切られる。平面形は橢円形を呈すると考えられ、平坦な底面には段落ちが見られる。規模は長軸約0.8m + α 、短軸約0.7m、検出面からの深さ約35cmである。

18号土坑（第31図）

6号竪穴住居跡内で検出された。6号竪穴住居跡を切り、2号石棺墓に切られる。平面形はやや胴張り気味の隅丸長方形を呈し、底面は平坦である、長軸約1.8m、短軸約1m、検出面からの深さ約10cmである。

19号土坑（第31図）

6号竪穴住居跡の南側で検出され、20号土坑を切り、7号竪穴住居跡に切られる。平面形は不定形を呈し、底面には段落ちが見られる。規模は長軸約0.7m、短軸約0.6m、検出面からの深さ約40cmである。

20号土坑（第31図 図版8）

6号竪穴住居跡の南側で検出され、7号竪穴住居跡、20号土坑に切られる。平面形は橢円形を呈し、底面はやや凹凸が見られる。規模は長軸約1.8m、短軸約1.3m、検出面からの深さ約10cmである。

21号土坑（第31図 図版8）

6、7号竪穴住居跡の南側約8mで検出された。1号甕棺墓を切る。平面形は隅丸方形を呈し、段落ちが見られ、その底面は平坦である。規模は長軸約1.4m、短軸1.1m、検出面からの深さ約50cmである。

22号土坑（第31図 図版8）

21号土坑の南約2.5mで検出された。平面形は橢円形を呈し、底面は平坦である。柱穴による掘り込みが見られる。規模は長軸約0.8m、短軸約0.7m、検出面からの深さ10cmである。

23号土坑（第31図 図版8）

22号土坑の南約6mで検出された。平面形はやや不定形な橢円形を呈し、底面は緩やかな舟底状を呈する。規模は長軸約0.8m、短軸約0.7m、検出面からの深さ約10cmである。

24号土坑（第31図）

8号竪穴住居跡の北側で検出され、8号竪穴住居跡を切る。平面形は隅丸の長方形を呈し、底面は中央に向かって緩やかに傾斜している。規模は長軸約1.9m、短軸約1.1m、検出面からの深さ約35cmである。

25号土坑（第32図 図版8）

8号竪穴住居跡の南側で検出された。8号竪穴住居跡を切り、11号竪穴遺構に切られる。平面形は長方形を呈し、底面は北側に向かってやや傾斜している。規模は長軸約 $2\text{ m} + \alpha$ 、短軸約1.4m、検出面からの深さ約35cmである。

26号土坑（第32図）

22号土坑の西側で検出された。平面形は方形を呈し、底面は段落ちが見られ、中央に向かって傾斜している。規模は長軸約0.7m、短軸約0.5m、検出面からの深さ約15cmである。

27号土坑（第32図 図版8）

11号竪穴遺構の東側で検出された。平面形はややいびつな方形を呈すると考えられ、底面は平坦である。数基の柱穴に切られている。規模は長軸約1.4m、短軸約 $0.4\text{ m} + \alpha$ 、検出面からの深さ約15cmである。

28号土坑（第32図）

調査区南端近くの9号竪穴住居跡の東側で検出され、東側は調査区外へ展開する。平面形は不定形を呈し、底面は段落ちが見られ、平坦である。規模は長軸約1.4m、短軸約 $0.8\text{ m} + \alpha$ 、検出面からの深さ約30cmである。

29号土坑（第32図 図版9）

調査区南端で検出された。12号竪穴遺構を切り、13号竪穴遺構に切られる。平面形は方形、または長方形を呈すると考えられ、底面は平坦である。規模は長軸約1m、短軸約 $0.3 + \alpha$ m、検出面からの深さ約30cmである。

土坑出土遺物（第33～35図 図版30～34）

1～5は2号土坑出土。1、2は甕の口縁部、3、4は甕の底部である。2は内面に斜め方向のハケの後、ミガキを施す。5は高壺脚部である。外面にはハケ、内面には指押さえが見られる。

6～9は3号土坑出土である。6は蓋、7～9は甕である。6は外面に縦方向のハケを施す。7は外面にやや粗いハケを施し、8、9は外面に細かいハケを施す。

10は4号土坑出土で甕の底部である。11は外面に底面近くまで細かい縦方向のハケを施し、内面にはわずかに指押さえが見られる。

11～16は6号土坑出土である。11、13は甕である。11は口縁部先端がやや肥厚している。13は外面に沈線が見られる。12は鉢である。外面、内面ともにハケ、指押さえが見られる。14は壺である。口縁部に刻み目が見られ、頸部付近に浅い段が見られる。15は甕の底部である。外面には指押さえ、内面にはミガキが見られる。16は片岩系の磨製石斧である。刃部側のおよそ半分が残存している。

17、18は7号土坑出土である。ともに甕の口縁部である。17は頸部より下部外面に縦方向のハケを施す。

19、20は9号土坑出土で、ともに甕の底部である。19は外面底面付近までハケを施している。また、指押さえもみつら得る。20は底部端より内傾し、明確な屈曲部をもっている。

21は10号土坑出土の甕の底部である。底面にハケによる調整が見られる。

22は11号土坑出土のは甕の底部で、やや上げ底気味である。

23～25は14号土坑出土である。23は甕の底部、26は壺の口縁部である。27は緑泥片岩製の磨製石斧で、一部に剥離が見られるものの、ほぼ完形である。

26は15号土坑出土で、甕の底部である。内底面近くに縦方向のミガキを施す。

27、28は16号土坑出土である。27は甕の口縁部片、28は甕の底部片である。27は口縁部下部に縦方向のハケを施す。

29は17号土坑出土では甕の底部である。摩耗が激しく、調整は不明である。

30～32は18号土坑出土の甕である。31は外面に縦方向のハケが施される。33は胴部に断面三角形の突帯が貼り付けられ、スヌが付着する。

33～38は19号土坑出土である。34、35は甕である。34は朱が一部残存する。36、37は甕の底部で、37の底面にはハケが見られる。38は蓋、39は壺の口縁部である。

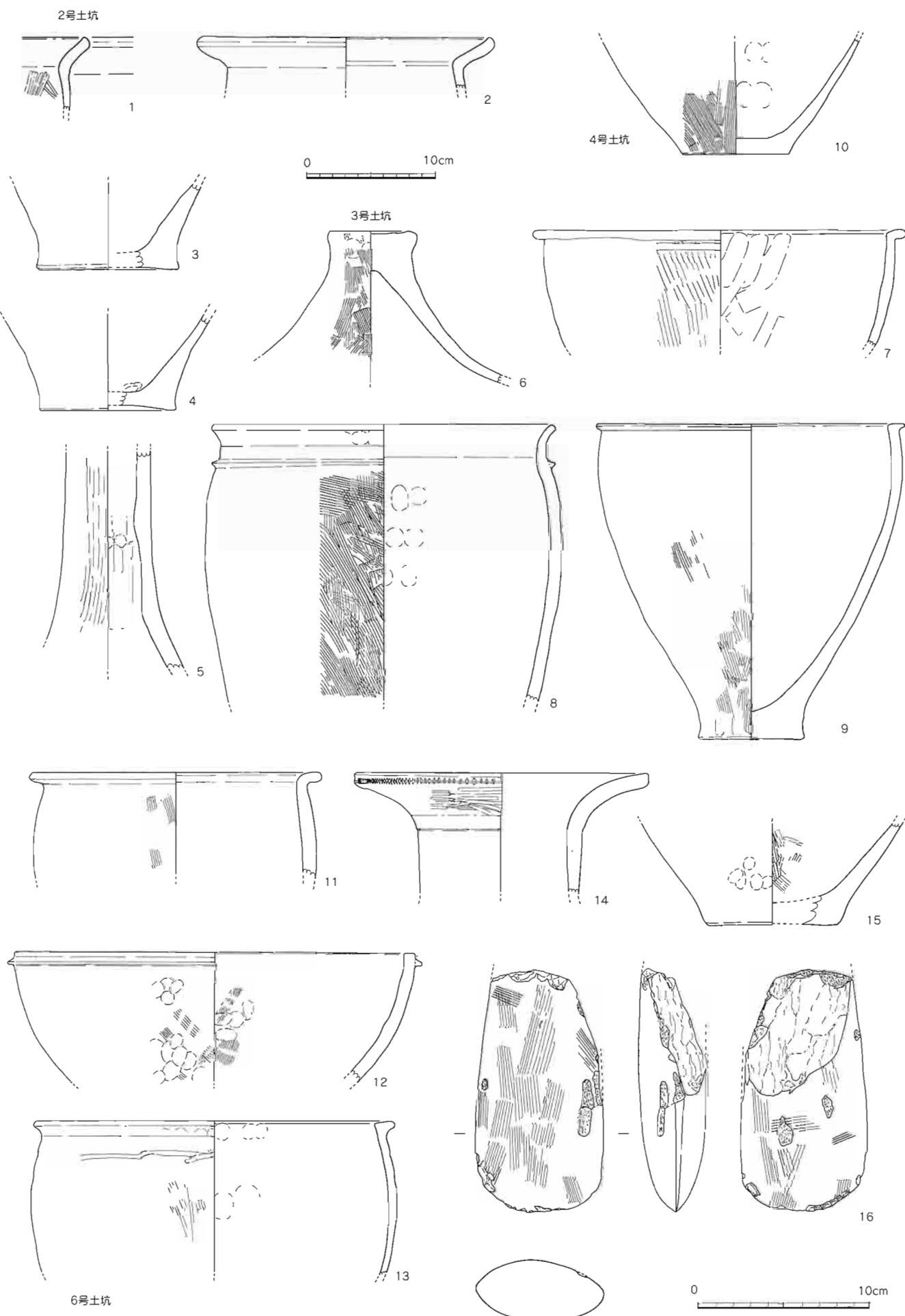
39、40は20号土坑出土で、ともに甕の口縁部である。39は口縁部下部に断面三角形の突帯を貼り付けている。

41～45は21号土坑出土である。41～43は甕、44は壺の胴部である。胴部最大径の部分に断面台形の突帯を貼り付ける。45は投弾である。

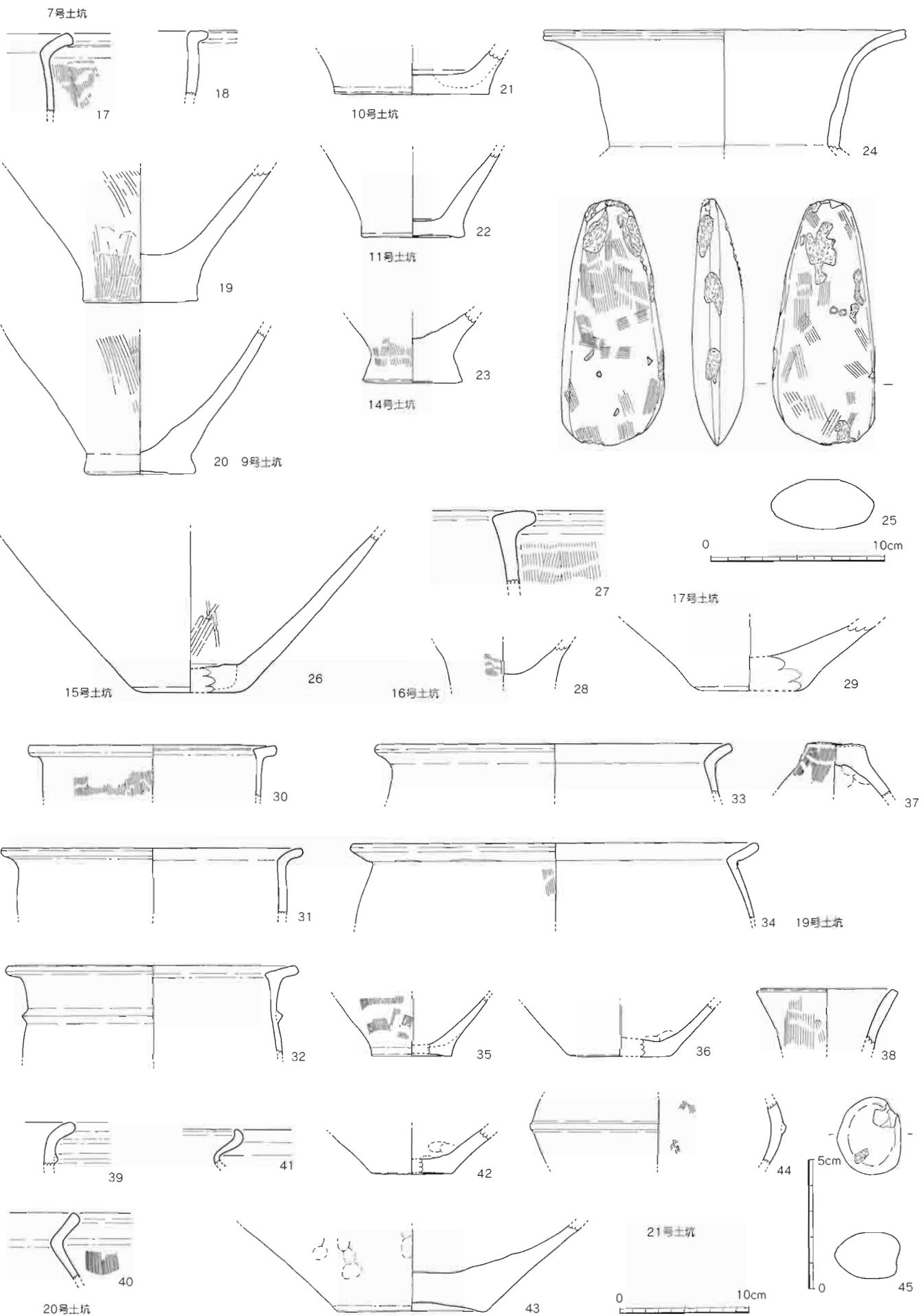
46～48は24号土坑出土でいずれも甕である、46は口縁部下部に突帯を貼り付けた痕跡が見られる。47も口縁部下部に断面三角形の突帯を貼り付ける。

49～53は25号土坑出土である。49は壺の口縁部で、頸部に断面三角形の突帯を貼り付ける。50、51は甕の底部である。底面にナデを施す。53は緑泥片岩製の磨製石斧である。刃部は欠損し、基部のみが残存する。

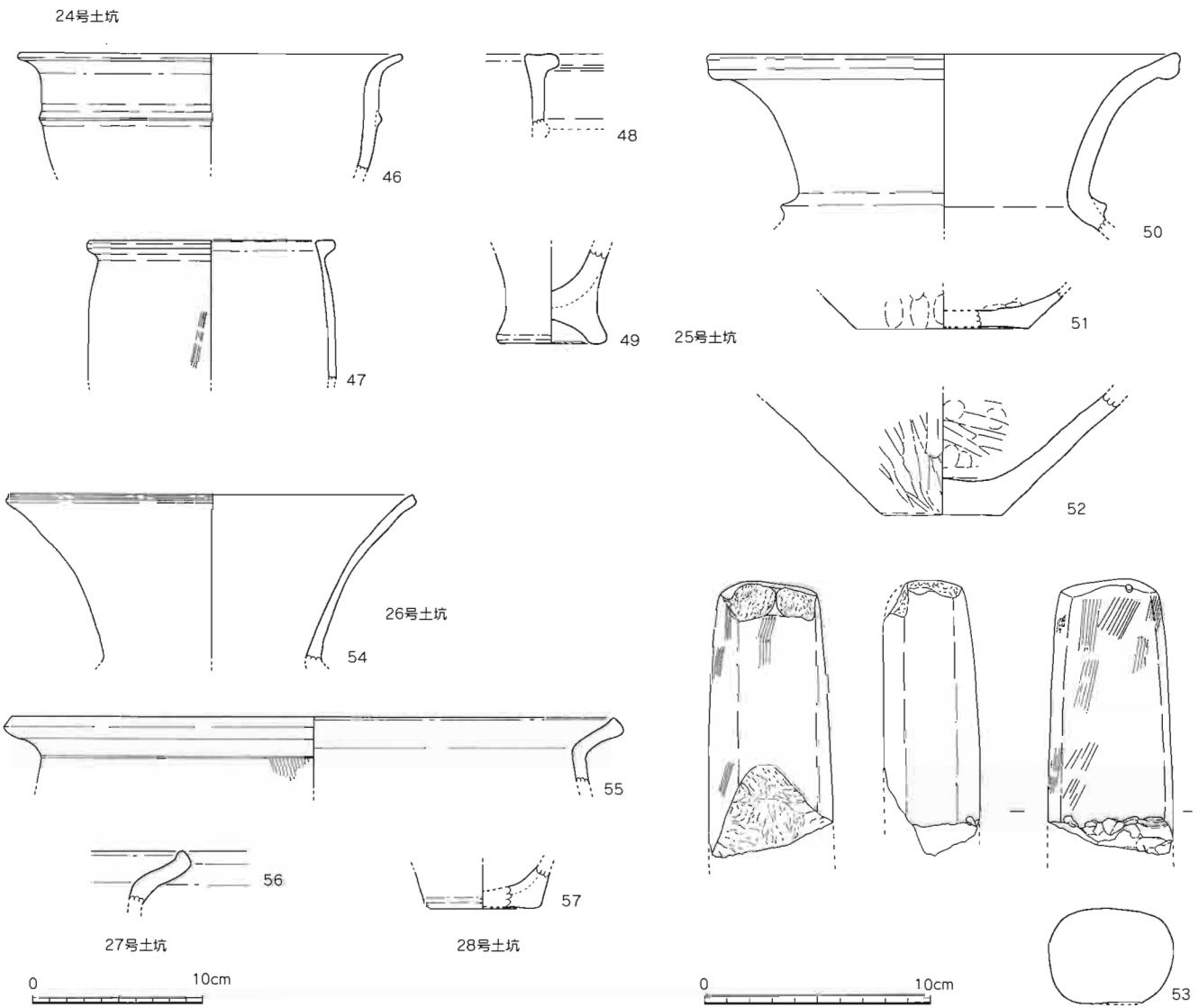
54は26号土坑出土の壺の口縁部である。口縁先端に沈線を施す。



第33図 2区土坑出土遺物実測図(1) (1/2・1/3)



第34図 2区土坑出土遺物実測図(2) (1/2・1/3)



第35図 2区土坑出土遺物実測図(3) (1/2・1/3)

55、56は27号土坑出土でともに甕である。56は頸部に沈線を施す。

57は28号土坑出土で甕の底部である。

(4) 掘立柱建物跡

1号掘立柱建物跡 (第36図 図版9)

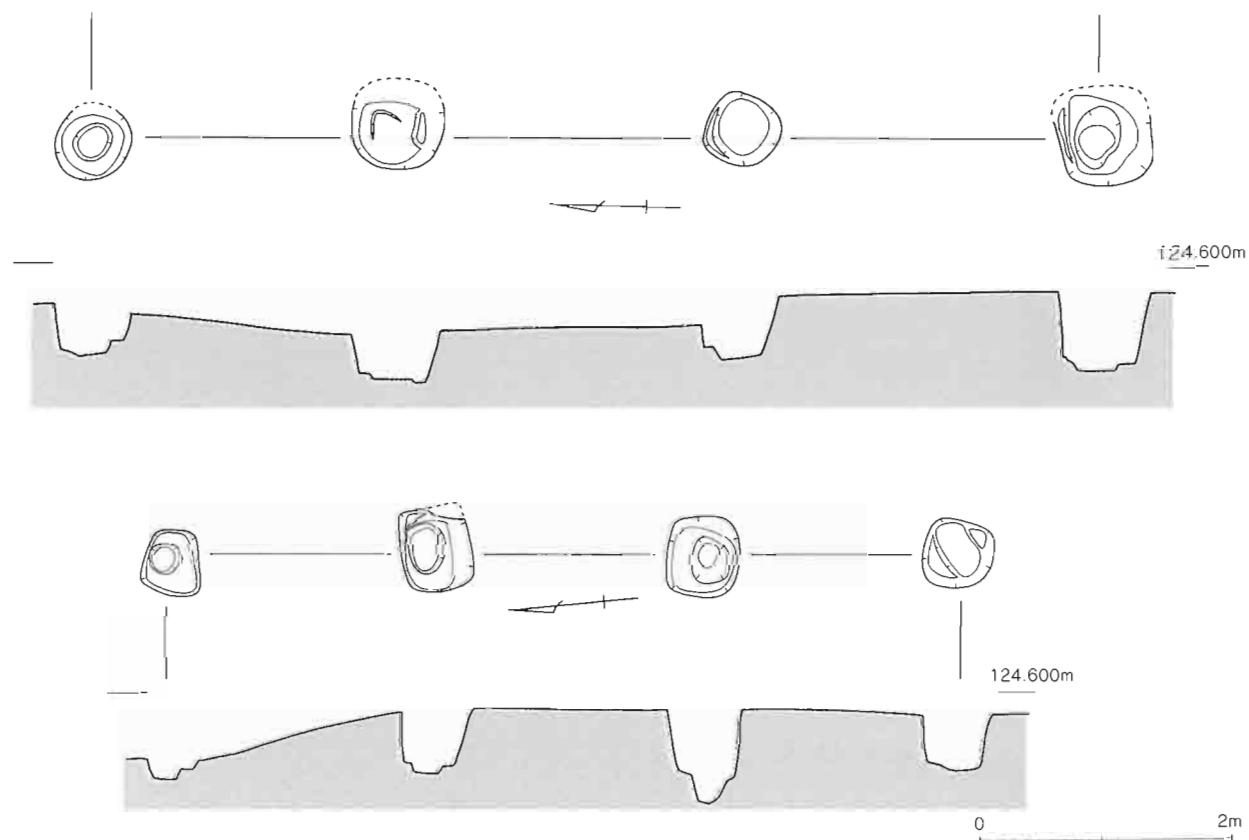
調査区北端より南約38mで検出された桁行3間の建物である。4号竪穴住居跡、5・6号竪穴遺構を切り、調査区外の東側へ展開すると考えられる。建物の軸方位はN-2°-Wである。柱間は心々距離で約2.4~2.8mである。柱穴の平面形は隅丸方形に近く、検出面からの検出面からの深さは約40~65cmである。

2号掘立柱建物跡 (第36図 図版9)

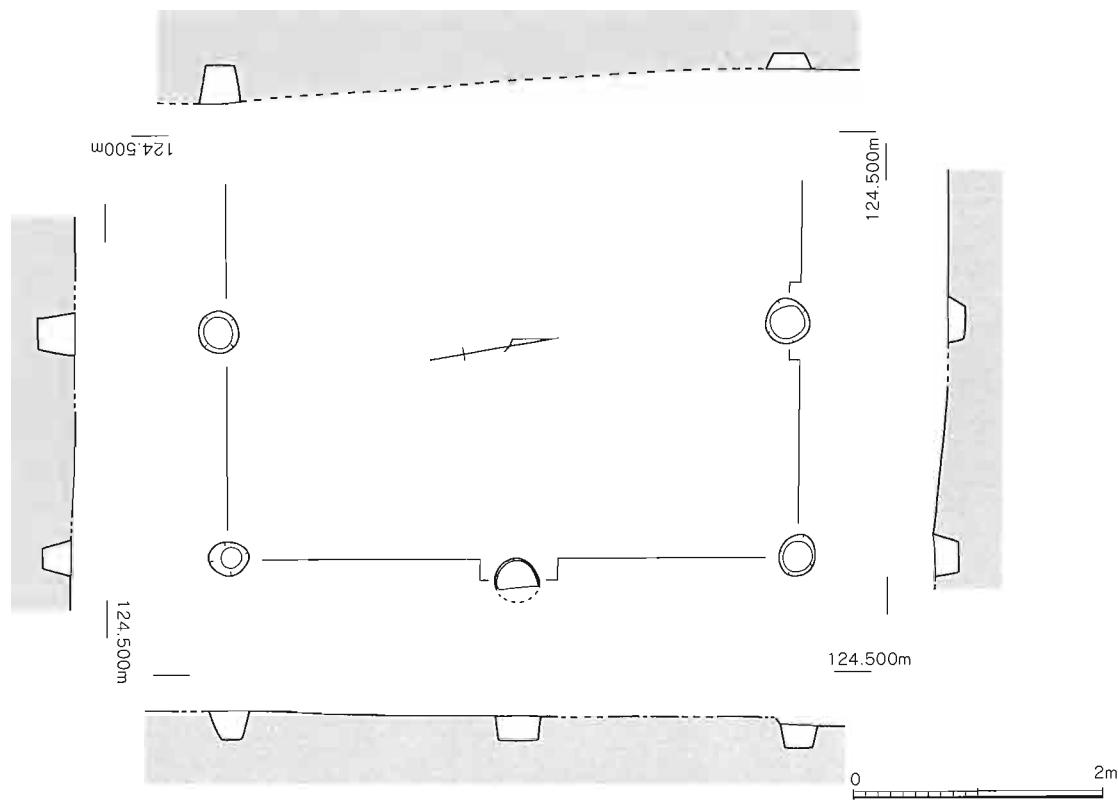
1号掘立柱建物跡の西側で検出された桁行3間の建物である。7号竪穴遺構、7・11号土坑を切り、調査区外の西側へ展開すると考えられる。建物の軸方位はN-5°-Eである。柱間は心々距離で約2~2.3mである。柱穴の平面形は隅丸方形に近く、検出面からの検出面からの深さは約15~75cmである。

3号掘立柱建物跡 (第37図 図版9)

調査区の南端で検出された2間×2間以上の建物である。9号竪穴住居跡、11・12号竪穴遺構を切る。建物の軸方位はN-10°-Eである。柱間は心々距離で約1.9m~約2.3mである。柱穴の平面形は円形に近く、検出面からの検出面からの深さは約15~30cmである。出土遺物はなかった。



第36図 2区1・2号掘立柱建物跡実測図 (1/60)



第37図 2区3号掘立柱建物跡実測図 (1/60)

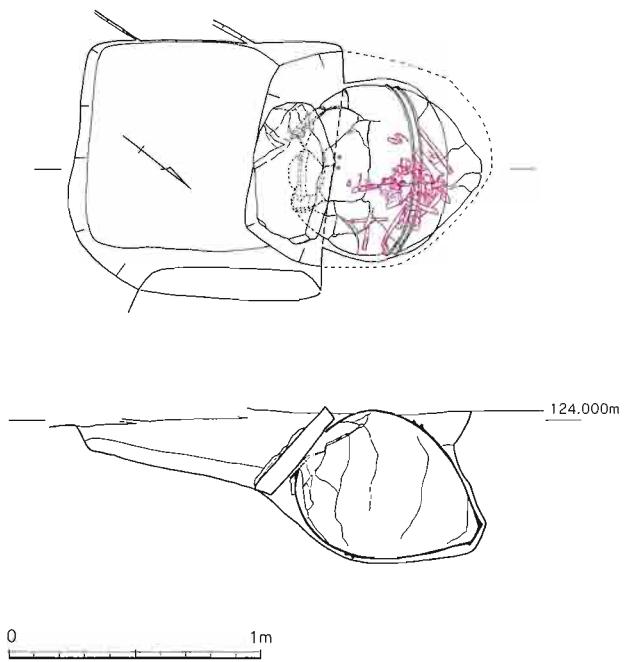
(5) 墓 (第38~44図)

1. 瓢棺墓

1号瓢棺墓

(第38・39図 図版10・34)

調査区の南端より約27mで検出された。4号石棺墓のすぐ南側にあり、22号土坑に切られる。墓坑の上部は削平されていたものの、瓢棺はほぼ完形であった。蓋に板石を用いる单棺の大型先人用瓢棺墓で、墓坑の平面形はほぼ正方形を呈している。その規模は長軸約1.1m、短軸約1m、検出面からの深さ約30cmである。埋置角度は約30度で南西側が高くなっていることから、南西頭位と考えられる。棺内からは遺物は出土しなかつたが、器壁にはりつくよう



第38図 2区1号瓢棺墓実測図 (1/30)

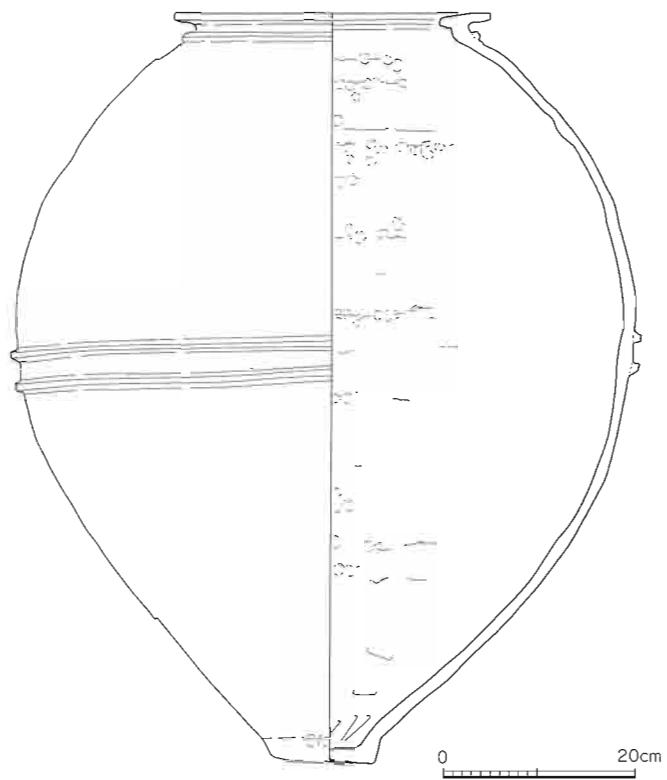
に風化した人骨が残存していた。

1号甕棺墓に使用された甕棺は口縁部の一部が欠損しているもののほぼ完形である。口縁部は内傾気味の鋤先状を呈し、底部はやや上げ底である。頸部に断面台形の突帯を1条、胴部に断面台形の突帯を2条貼り付ける。器高78.9cm、口径33.6cm、胴部最大径65cm、底径11cmを測る。外面・内面ともに指押さえ、ナデが施され、内底面付近はケズリが施される。

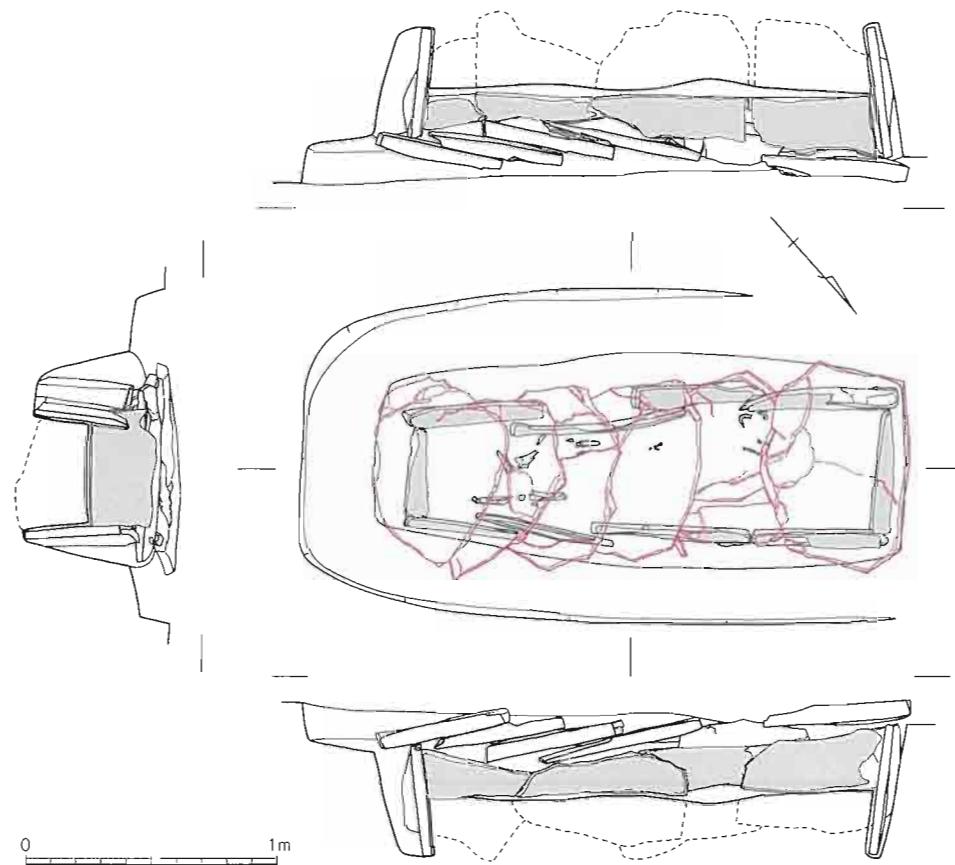
2. 石棺墓

1号石棺墓（第40図 図版11・12）

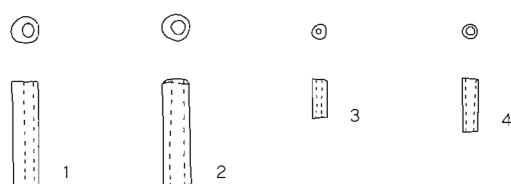
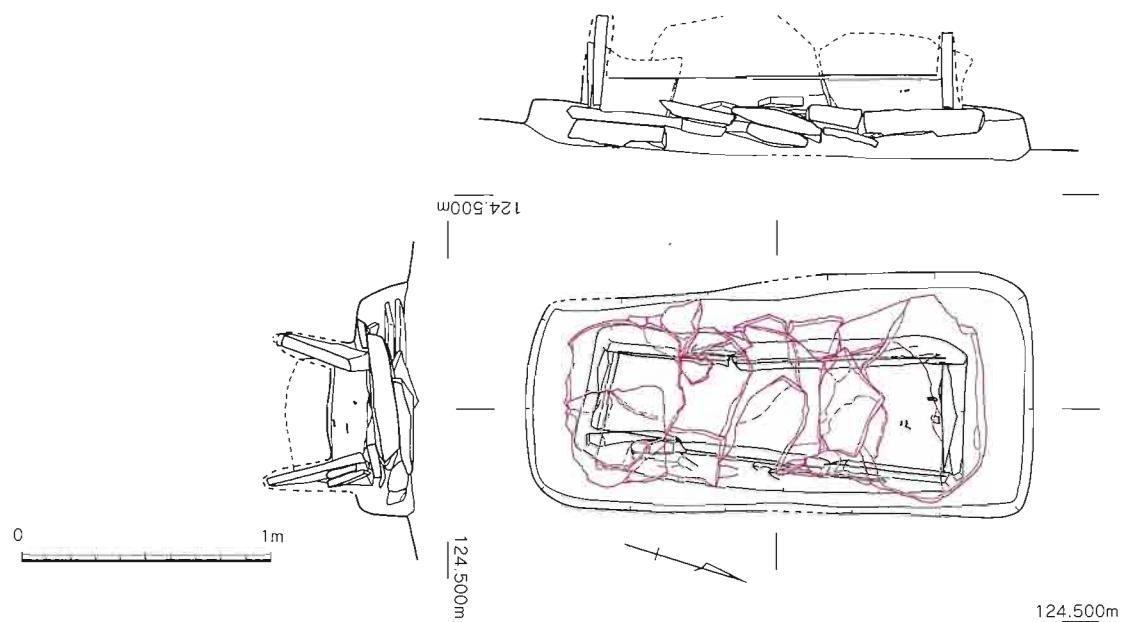
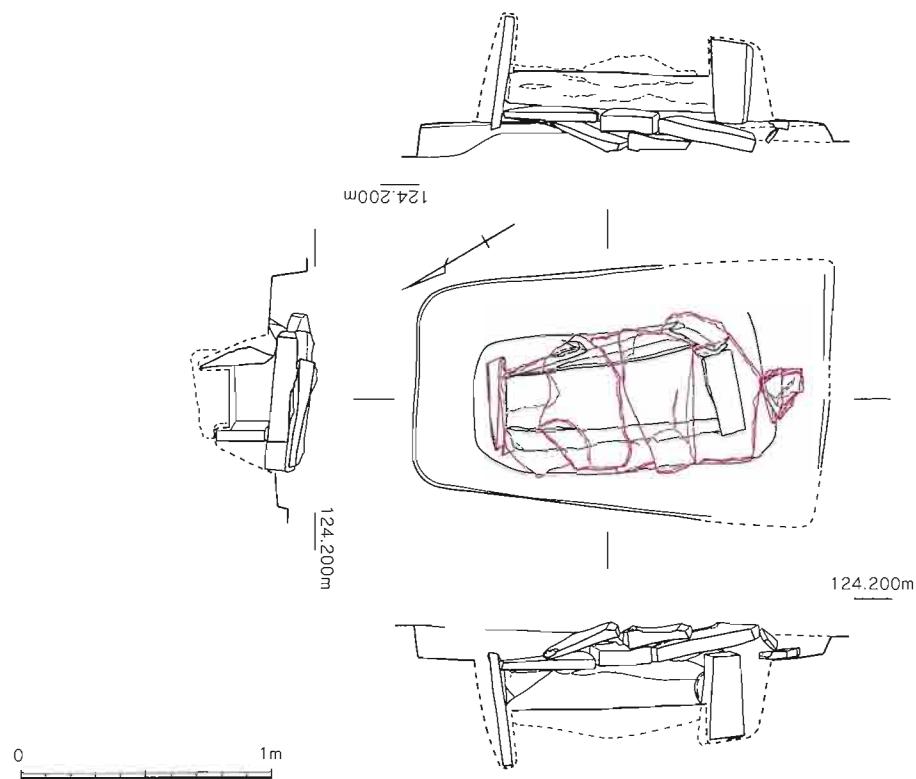
調査区の北端より南約54mで検出された。6号竪穴住居跡、19号土坑を切る。主軸をN-46°-Wにとる。墓坑は隅丸長方形を呈し、2段掘りである。1段目の掘り方は長軸約2.4m+α、短軸約1.3m、検出面からの深さ約12cmである。蓋石は凝灰岩6枚を組み合わせ、



第39図 2区1号甕棺墓実測図 (1/8)



第40図 2区1号石棺実測図 (1/30)

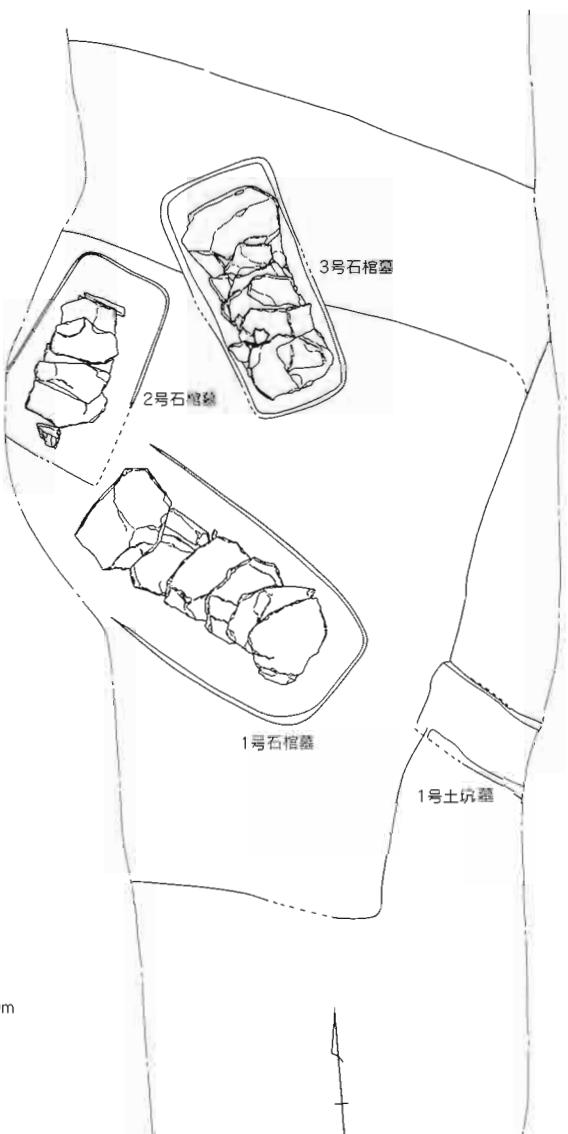


第41図 2・3号石棺実測図および3号石棺出土遺物実測図 (1/30・1/1)

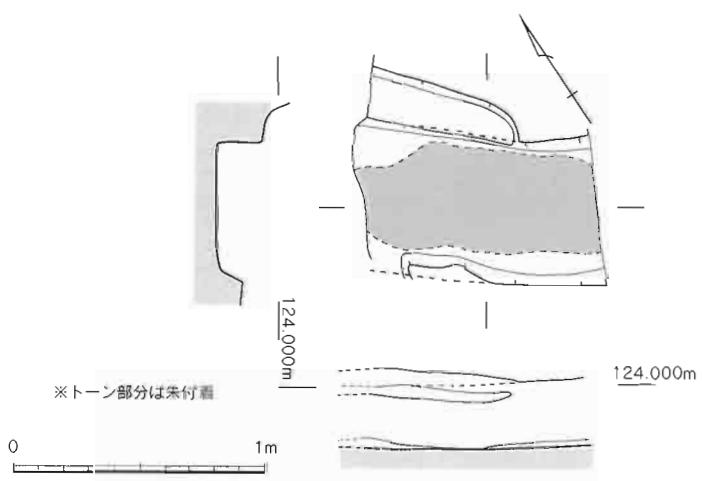
内面には朱が付着する。棺身は安山岩製の板石を10枚用い、内法は長さ約180cm、幅約34~48cm、検出面からの深さ約30cmであり、北西側の幅が広かったことから北西頭位と考えられる。石棺内部には人骨が残存していた。

2号石棺墓（第41図 図版11・13）

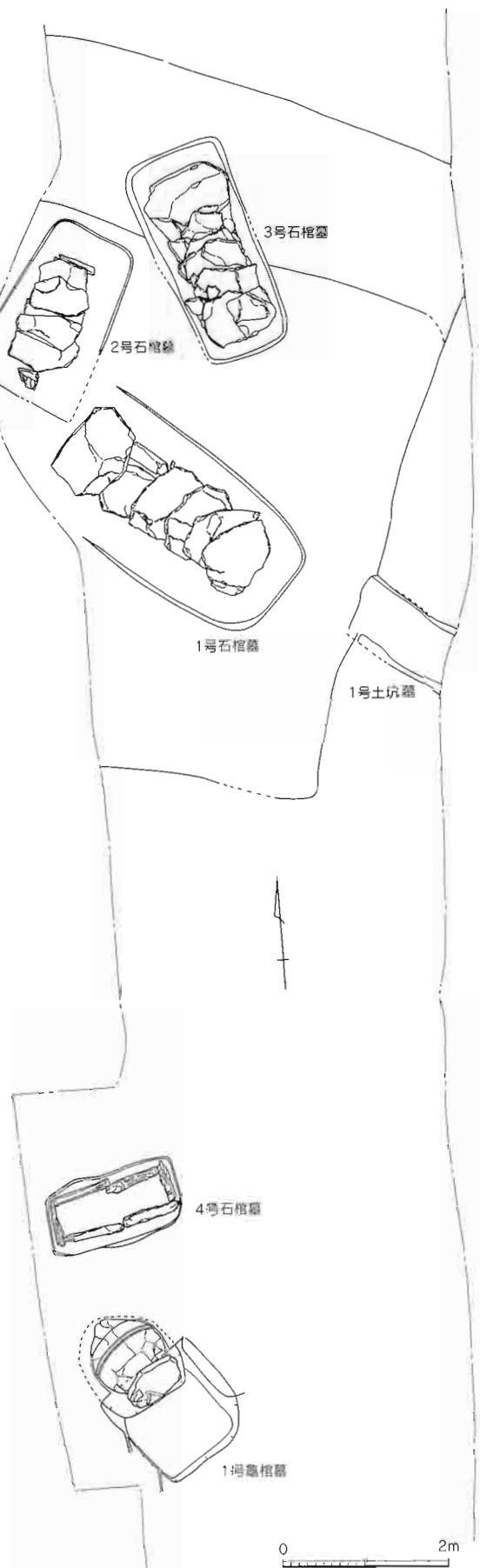
1号石棺墓の北側で検出された。6・7号竪穴住居跡を切る。主軸をN-33°-Wとする。墓坑は隅丸長方形を呈し、2段掘りである。1段目の掘り方は長軸約1.7m、短軸約0.8~1.1m、検出面からの



第42図 2区4号石館実測図 (1/30)



第43図 2区1号土坑墓実測図 (1/30)



第44図 2区竪棺墓・石棺墓・土坑墓配置図 (1/80)

深さ約12cmである。蓋石は凝灰岩4枚を組み合わせ、内面には朱が付着する。棺身は安山岩製の板石を6枚用い、内法は長さ約80cm、幅約20~30cm、検出面からの深さ約cmであり、南西側の幅が広いことから南西頭位と考えられる。石棺内部には人骨が残存していた。朱の塗布

3号石棺墓（第41図 図版11・14）

1号石棺墓の北約1.5mで検出された。6号竪穴住居跡、19号土坑を切る。主軸をN-18°-Wにとる。墓坑は隅丸長方形を呈し、2段掘りである。1段目の掘り方は長軸約2m、短軸約0.9m、検出面からの深さ約10cmである。蓋石は凝灰岩8枚を組み合わせ、内面には大部分に朱が付着する。棺身は安山岩製の板石を7枚用い、内法は長さ約140cm、幅約20~45cm、検出面からの深さ約25cmで北側の幅が広く、また、管玉が4点が出土した位置から北頭位と考えられる。石棺内部には人骨が残存していた。

3号石棺墓出土遺物（第41図 図版34）

1~4はいずれも碧玉製の管玉である。1・2がやや赤味がかった灰褐色、3は明青灰色、4は暗灰色を呈する。大きさは1・2が長さ14mm強で、3・4が7mm前後と2種類見られる。

4号石棺墓（第42図 図版15）

1号石棺墓の南約7mで検出された。6号竪穴住居跡、19号土坑を切る。主軸をN-76°-Eにとる。墓坑は隅丸長方形を呈し、2段掘りである。1段目の掘り方は長軸約120cm、短軸約60cm、検出面からの深さ約70cmである。棺身は凝灰岩一枚を組み合わせ、内面には朱が付着する。棺身は安山岩製の板石を6枚用い、内法は長さ約100cm、幅約30~35cm、検出面からの深さ約70cmであり、西側の幅が広いことから西頭位と考えられる。石棺内部には人骨が残存していた。また、板石には朱が大部分にわたり残存していた。

3. 土坑墓

1号土坑墓（第41図 図版15）

1号石棺墓の東側で確認された。6・7号竪穴住居跡、10号竪穴遺構、18号土坑を切る。主軸をN-56°-Eにとる。検出面での掘り方の規模は、長軸約90cm+α、短軸約60cm、検出面からの深さ約30cmである。墓坑内部には朱が塗布されていた。

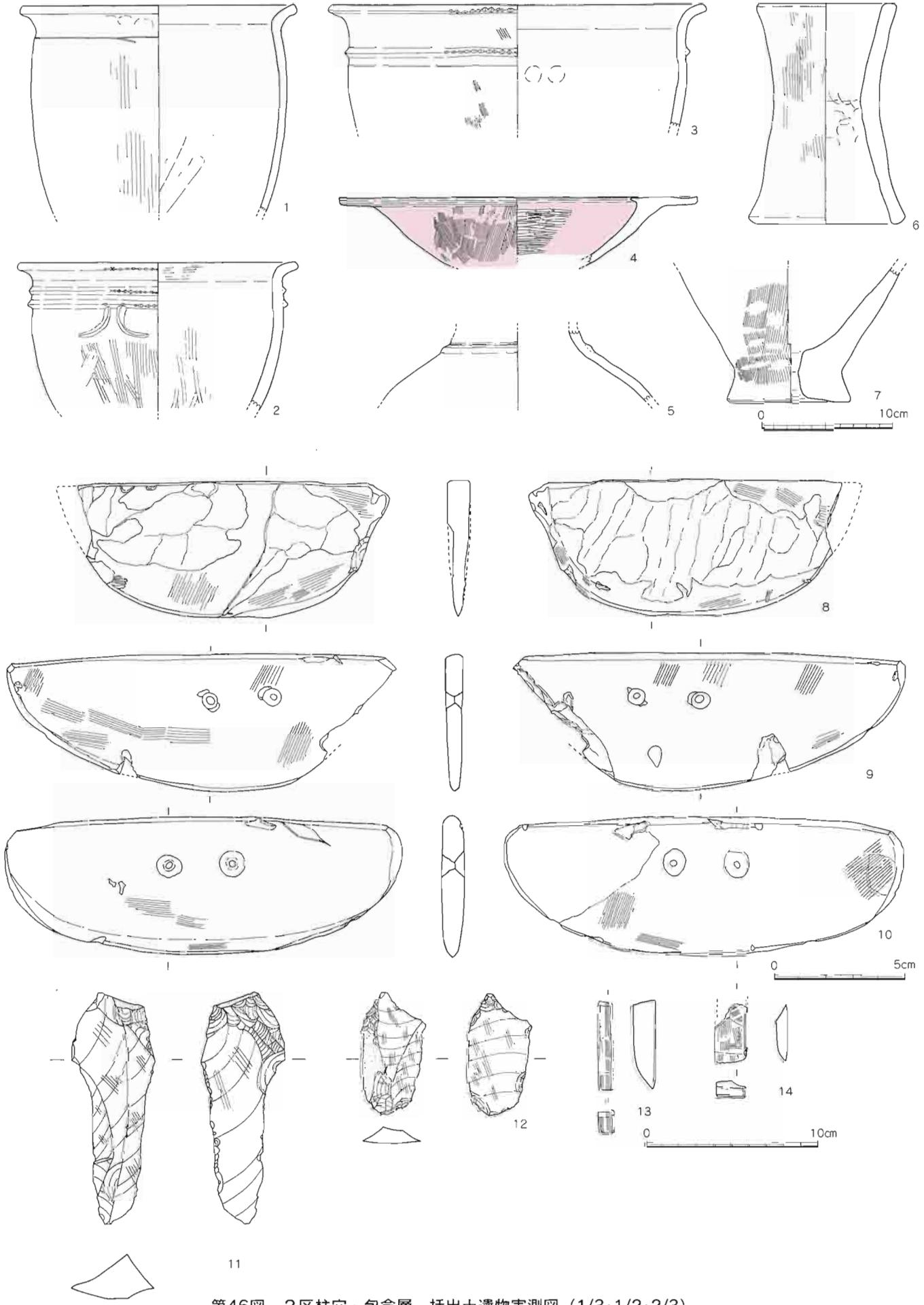
(6) 柱穴および包含層一括出土遺物（第47図 図版35）

土 器

1~3、7は甕である。1はP225より出土。外面頸部付近に沈線が見られる。2は頸部下部に断面三角形の突帯を2条貼り付け、口縁部とともに刻み目が施される。また、下位の突帯下には「L」字状、逆「L」字状の突帯が貼り付けられている。3も頸部下部に断面三角形の突帯を貼り付け、口縁部とともに刻み目が施されている。7は底面に穿孔がみられ、外面には底面付近までハケが見られる。4は高坏の坏部である。鋤先状の長い口縁を持ち、外面にはハケ、内面にはミガキ施され、朱が塗布されている。5は壺である。頸部に断面三角形の突帯が貼り付けられている。6はP275より出土した器台である。外面にはハケ、内面には指押さえが見られ、また内面のくびれ付近には接合痕も見られる。

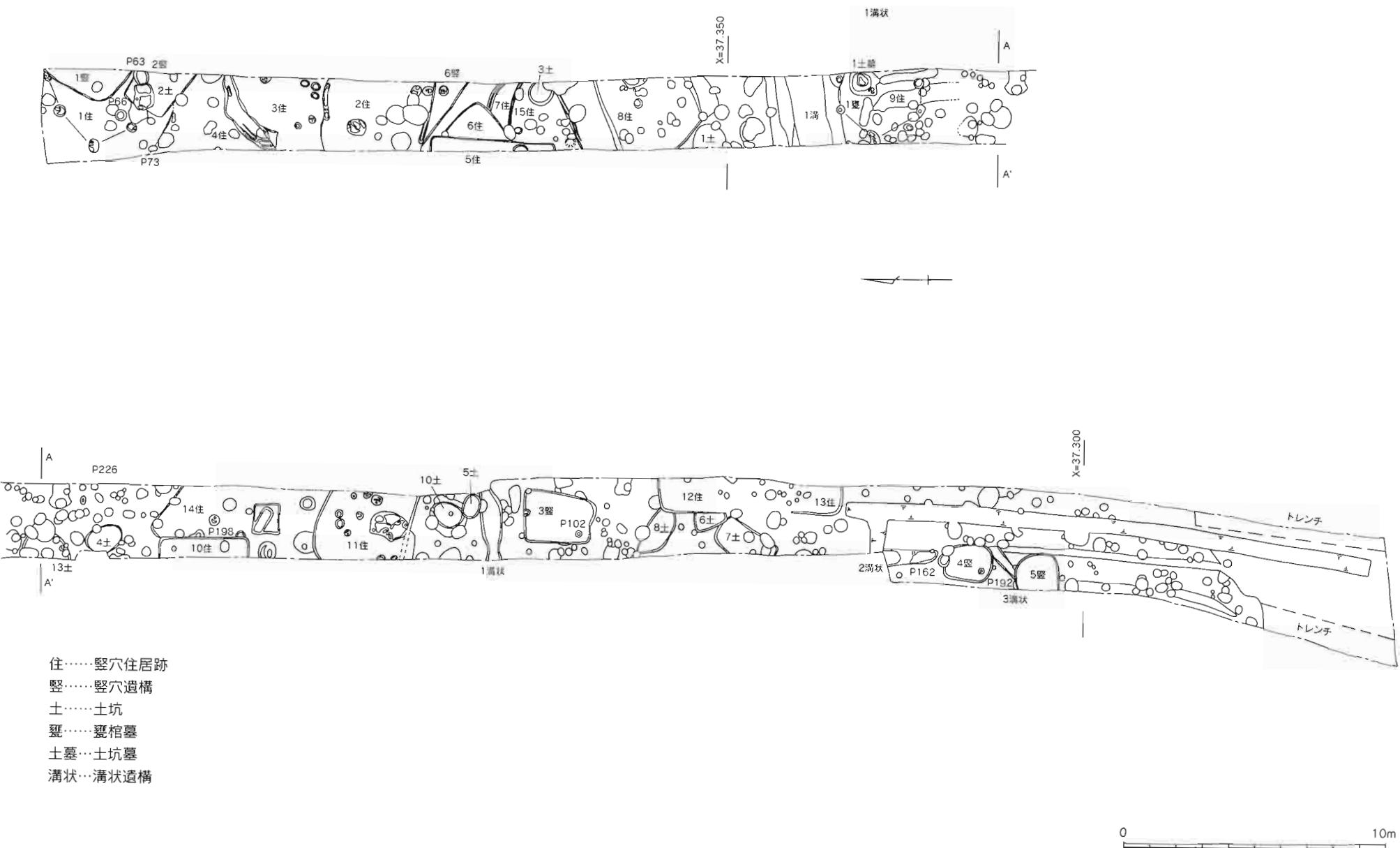
石 器

8~10は石庖丁である。1はP123より出土し、未製品である。安山岩製で一部に研磨跡が見ら



第46図 2区柱穴・包含層一括出土遺物実測図 (1/3·1/2·2/3)

れる。9、10は包含層一括遺物でそれぞれ玄武岩製、片岩製である、11、12は黒曜石製の縦長剥片である。13は柱穴より出土した粘板岩製の柱状片刃石斧である。完形品である。14は柱穴より出土したやや硬質の砂岩製の砥石である。下部の形態から柱状片刃石斧の転用の可能性が考えられる。



第47図 3区遺構配置図 (1/200)

3. 3区

3区は全長87mの調査区である。2区と同様に遺構の切り合いが複雑である。遺構面は一部2層みられる。

(1) 壺穴住居跡

1号壺穴住居跡

(第48図)

調査区の北端で検出された円形住居である。1・2号壺穴遺構、3号土坑に切られる。南壁の一部と4本の柱穴が確認された。規模は径約5m + α 、検出面からの深さ約10cmである。柱穴の検出面からの深さは約30~55cmである。炉、壁周溝は確認されなかった。

1号壺穴住居跡出土遺物

(第50図1・2 図版36)

1、2とも甕である。2は縦方向のハケが施され、底面はやや上げ底気味である。

2号壺穴住居跡

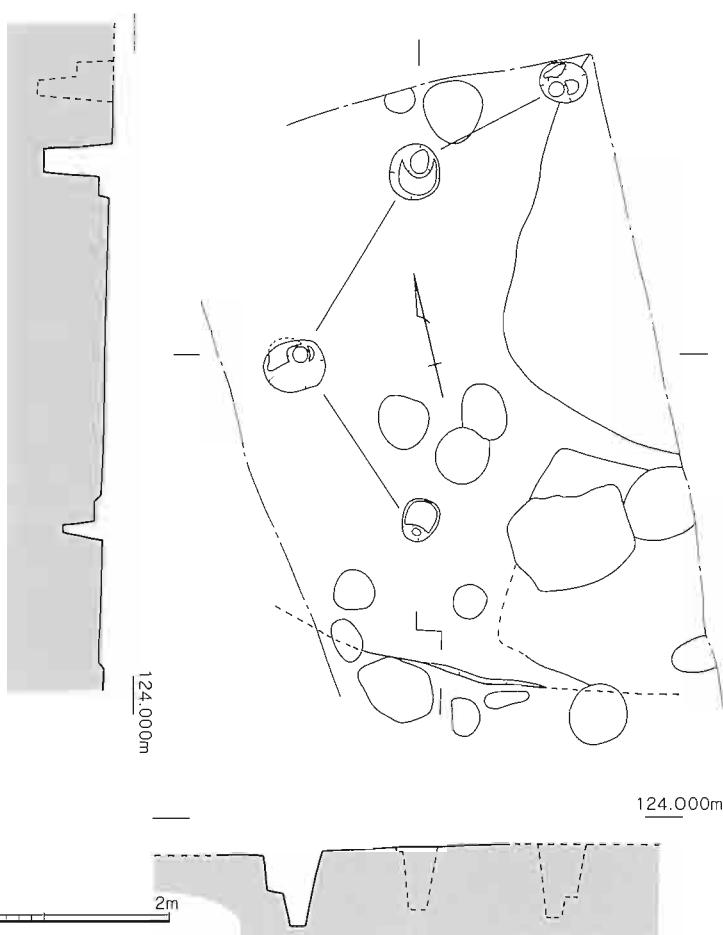
(第49図)

1号壺穴住居跡の南約10mで確認された。3号壺穴住居跡を切る。北壁・南壁の一部が確認でき、平面形は方形、もしくは長方形を呈すると考えられる。規模は約4m × 約2.6m + α 、検出面からの深さ約25cmである。壁周溝は確認できたが、主柱穴・炉は確認できなかった。

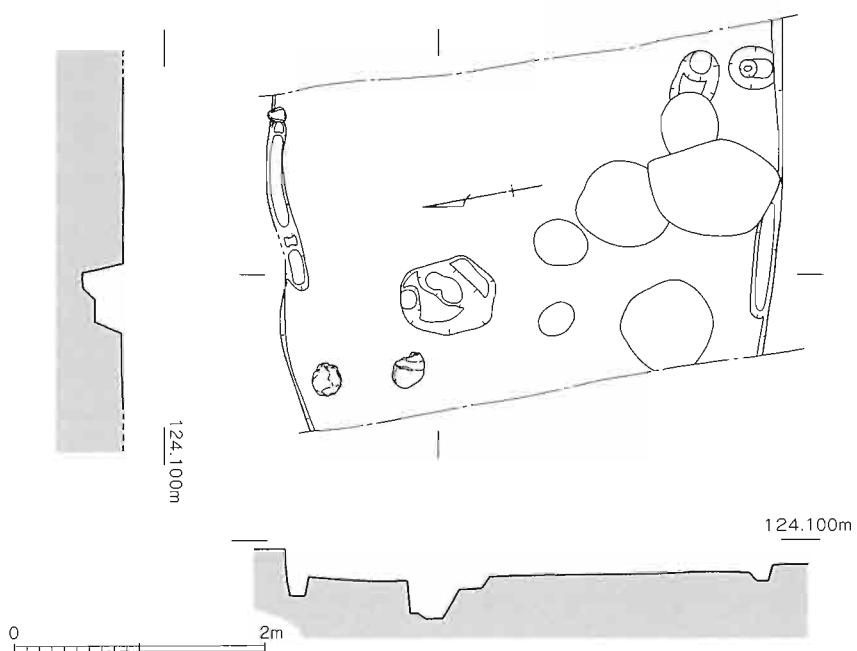
2号壺穴住居跡出土遺物

(第50図3~7 図版36)

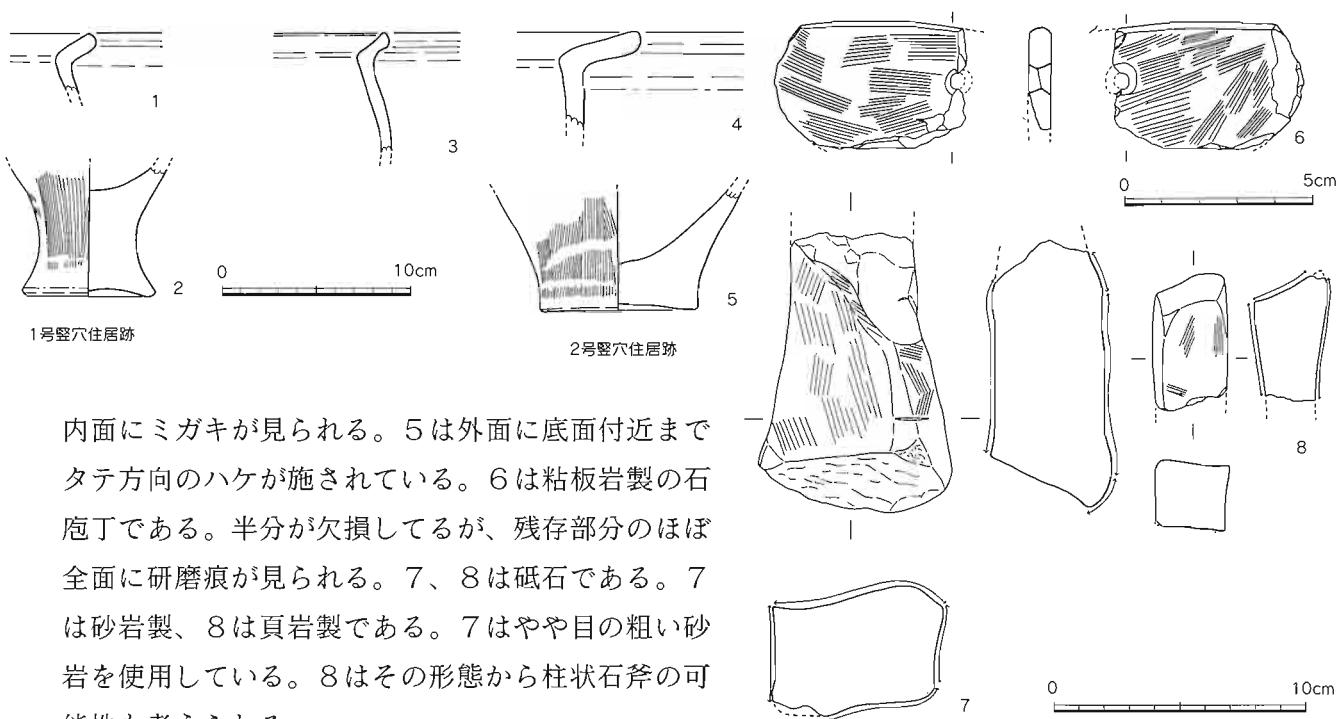
3~5は甕である。3は



第48図 3区1号壺穴住居跡実測図 (1/60)



第49図 3区2号壺穴住居跡実測図 (1/60)

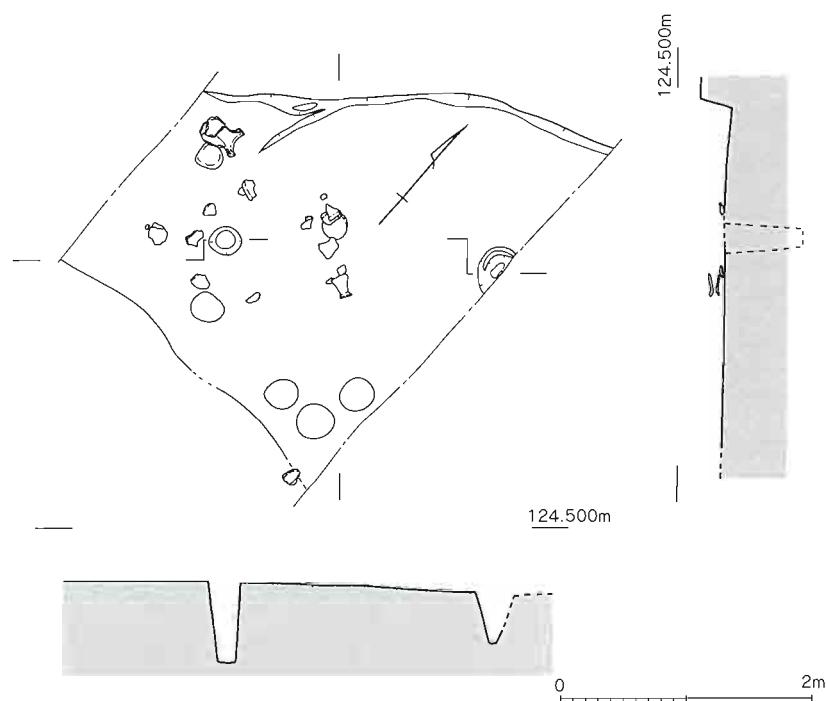


内面にミガキが見られる。5は外面に底面付近までタテ方向のハケが施されている。6は粘板岩製の石庖丁である。半分が欠損しているが、残存部分のほぼ全面に研磨痕が見られる。7、8は砥石である。7は砂岩製、8は頁岩製である。7はやや目の粗い砂岩を使用している。8はその形態から柱状石斧の可能性も考えられる。

3号竪穴住居跡（第51図）

2号竪穴住居跡とほぼ同位置にある。4号竪穴住居跡を切り、2号竪穴住居跡に切られる。北壁・の一部が確認でき、東壁・西壁は調査区外へ広がる。平面形は円形と考えられ、規模は径約3m+α、検出面からの深さ約30cmである。ベッドの一部・主柱穴が確認できたが、炉は確認されなかった。

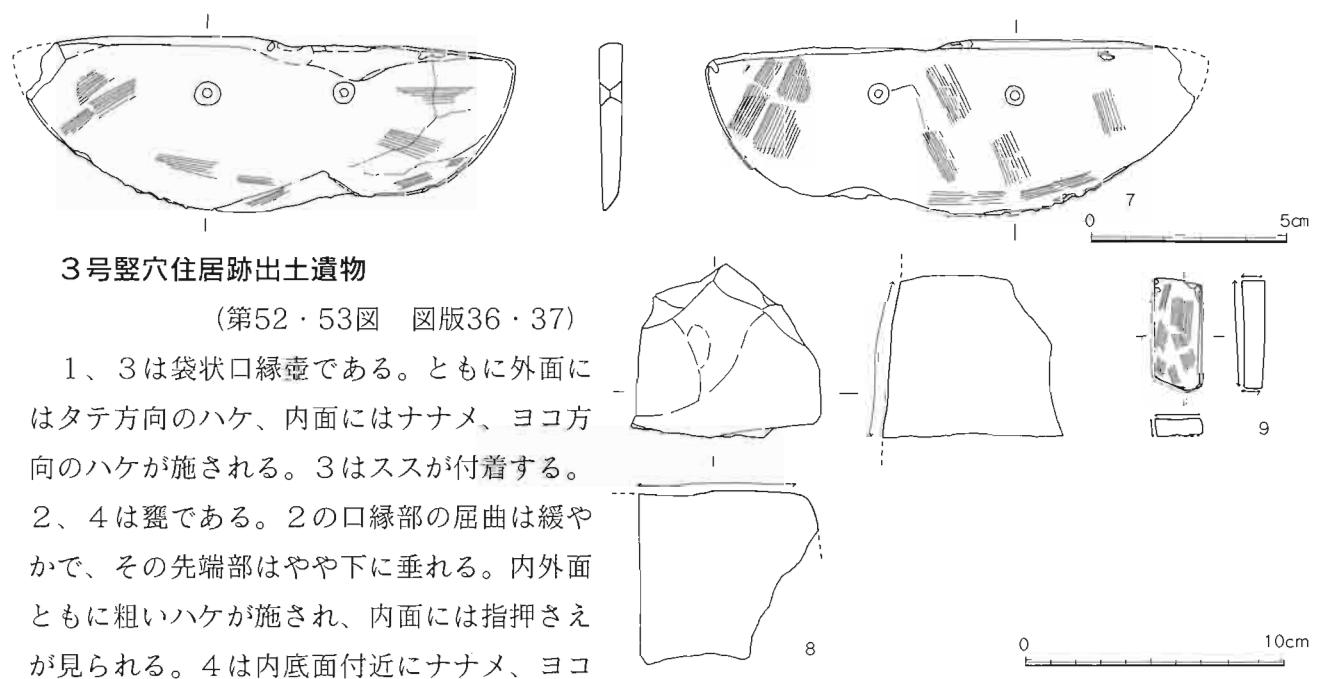
第50図 3区1・2号竪穴住居跡実測図
(1/2-1/3-1-4)



第51図 3区3号竪穴住居跡実測図 (1/60)



第52図 3区3号竪穴住居跡出土遺物実測図(1) (1/3)



第53図 3号竪穴住居跡出土遺物実測図(2) (1/2・1/3・1/4)

規模は約5.5m + α × 約2.7m + α 、検出面からの深さ20cmである。主柱穴を1本確認し、調査区東側へ広がると炉を挟んで2本柱になると考えられる。柱穴の床面からの深さは約20cmである。また、南壁側にベッドが確認された。

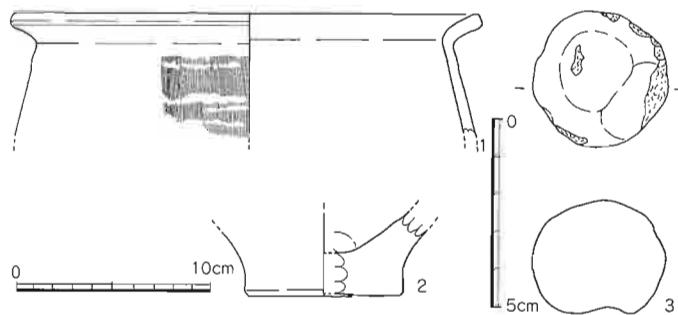
8号竪穴住居跡出土遺物

(第61図 図版38・39)

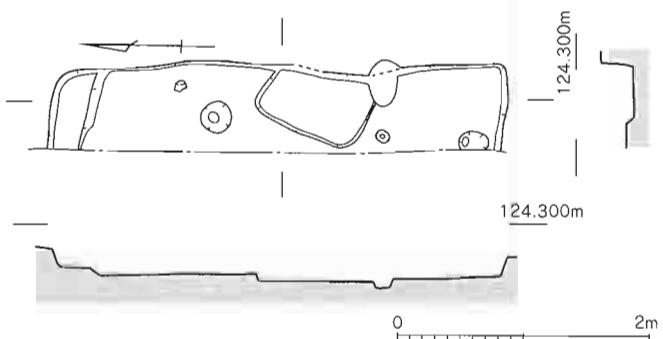
1～4はすべて甕である。1は口縁部下部に断面三角形の突帯を貼り付ける。内面にはヨコ方向のミガキが一部見られる。4は外面にタテ方向のミガキが見られる。

9号竪穴住居跡 (第62図 図版18)

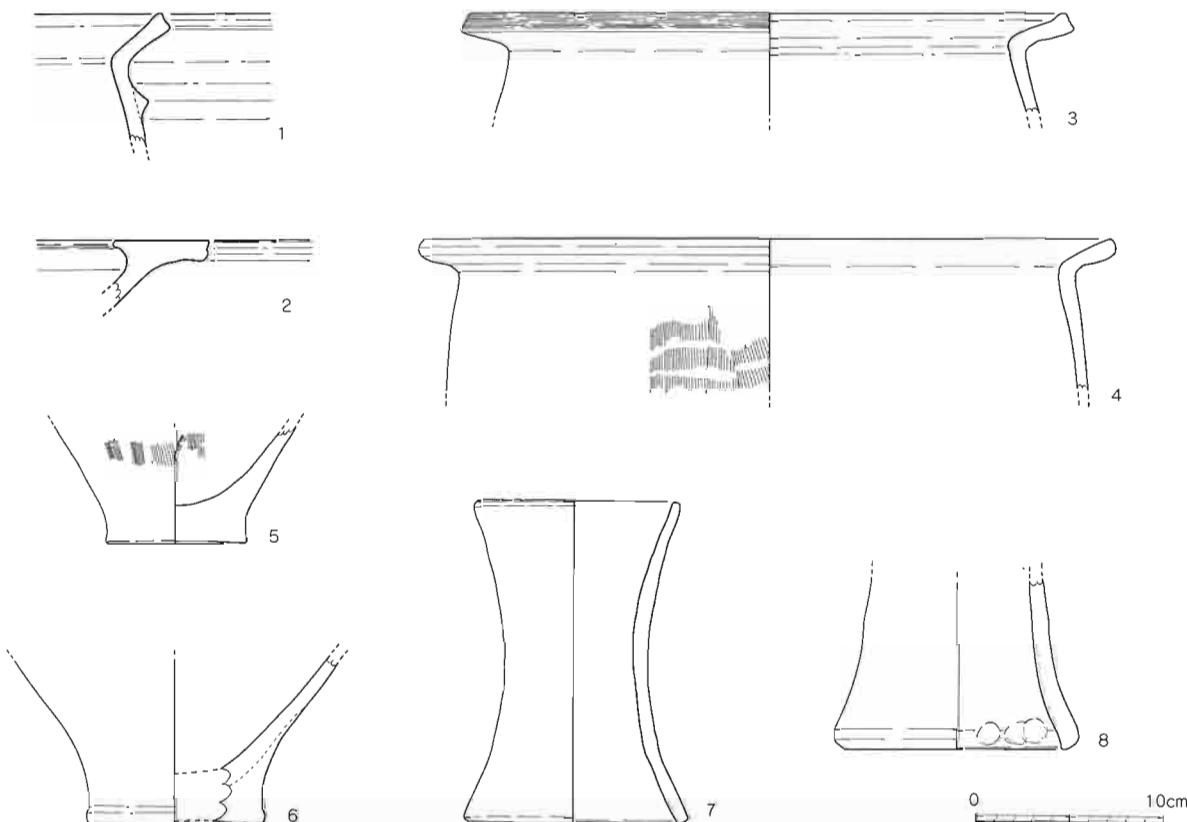
8号竪穴住居跡の南側で検出された。1号土坑墓、1号溝に切られる。壁は削平されており確認できず、規模は不明だが、円形住居になると考えられる。主柱穴は6本検出され、東側調査区外へ展開し、8本柱になるとと考えられる。炉、壁周溝は確認されなかった。



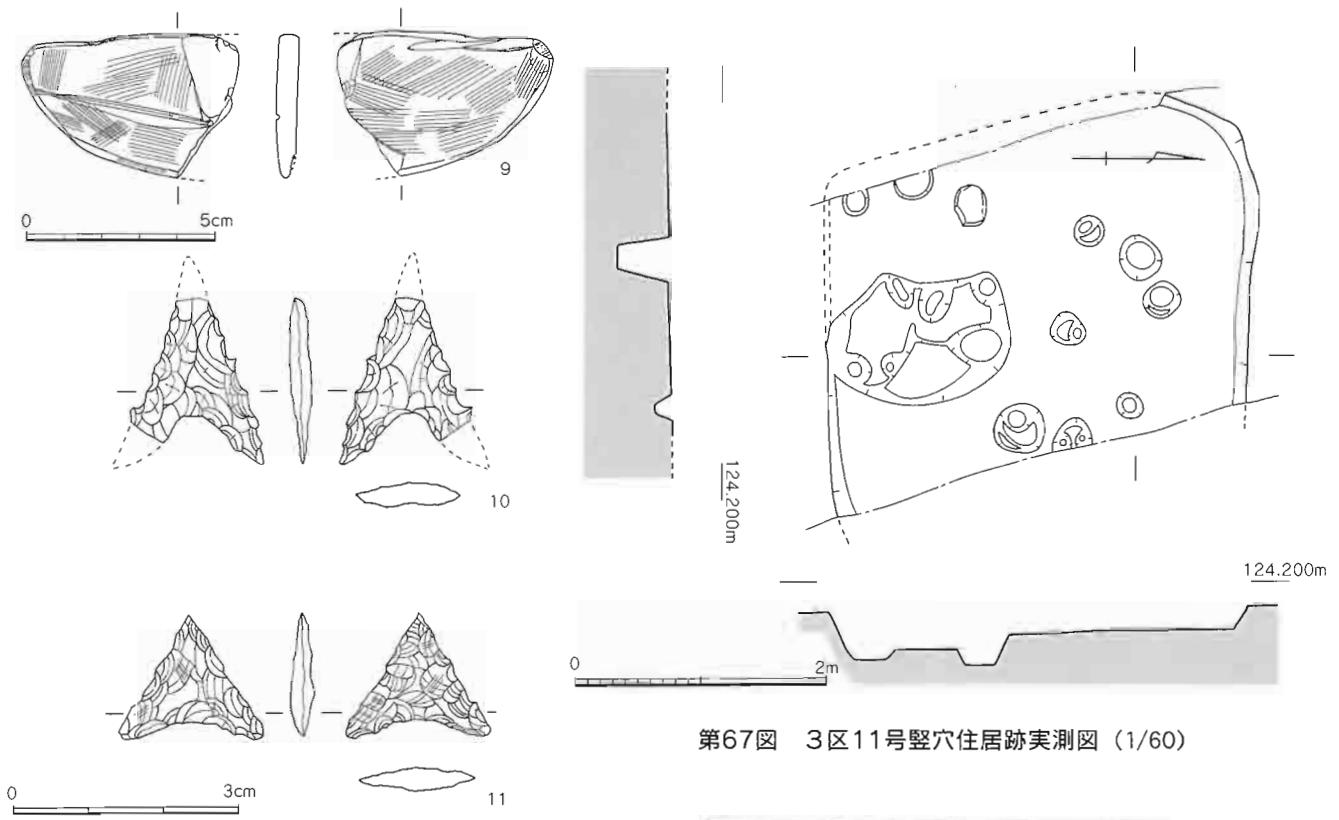
第63図 3区9号竪穴住居跡出土遺物実測図 (1/3-1/2)



第64図 3区10号竪穴住居跡実測図 (1/60)



第65図 3区10号竪穴住居跡出土遺物実測図(1) (1/4)



第66図 3区10号竪穴住居跡出土遺物実測図(2) (1/1-1/2)

9号竪穴住居跡出土遺物 (第63図 図版39)

1、2は甕である。1は口縁部先端がやや丸く仕上げられ、外面にタテ方向のハケが施される。2は内底面近くに指押さえが見られる。3は投弾である。一部剥離しているが、ほぼ完形である。

10号竪穴住居跡 (第64図 図版18)

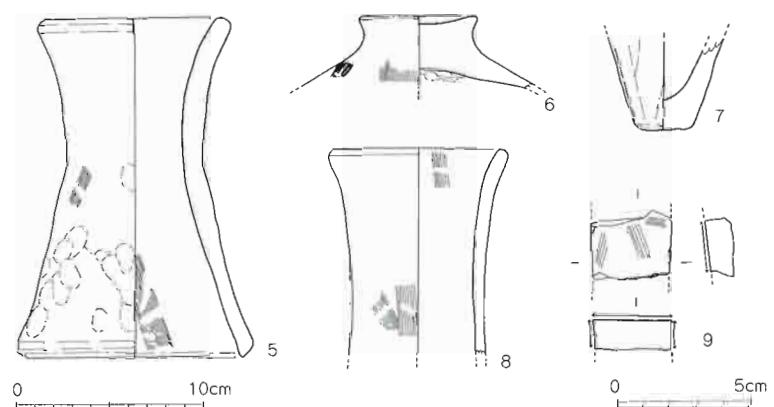
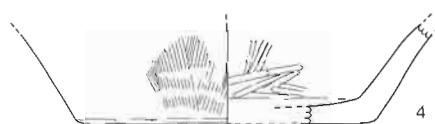
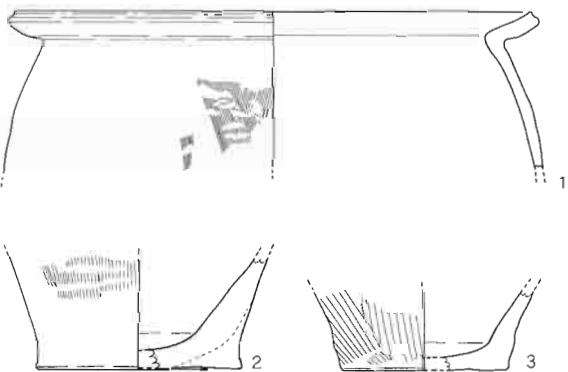
9号竪穴住居跡の南約10mで検出された。東壁と北壁・南壁の一部が確認され、西側調査区外へ広がる。平面形は方形、もしくは長方形を呈すると考えられ、規模は約3.6m×0.7m + α、検出面からの深さ約20cmである。炉、主柱穴などは確認されなかった。

10号竪穴住居跡出土遺物

(第65・66図 図版39)

1、3～6は甕である。1、3はともに口縁部は跳ね上げている。1は頸部下部に断面三角形の突帯を貼り付ける。2は高壺の壺部である。鋤先状の口縁を呈し、先端には凹線状の凹みが

第67図 3区11号竪穴住居跡実測図 (1/60)



第68図 3区11号竪穴住居跡出土遺物実測図 (1/2-1/3)

見られる。5、6は底部である。いずれも底部先端が外へやや張り出している。7、8は器台である。いずれも摩耗が激しく調整は明確ではないが、8は底部付近に指押さえが見られる。9は片岩製の石庖丁である。ほぼ全面に研磨痕があり、未製品である。10、11は黒曜石製の打製石鏃で、11は完形である。製作途中での破損品であろうか。

11号竪穴住居跡 (第67図 図版18)

10号竪穴住居跡の南約5mで検出された。14号竪穴住居跡を切る。北壁・南壁の一部が確認された。北壁の一部がややカーブしていることから、平面形はやや不定形気味になると考えられる。規模は約3.5m + α × 約2.5m + α 、検出面からの深さ約20cmである。屋内土坑と思われるものが検出されたが、主柱穴・壁周溝・炉は確認できなかつた。

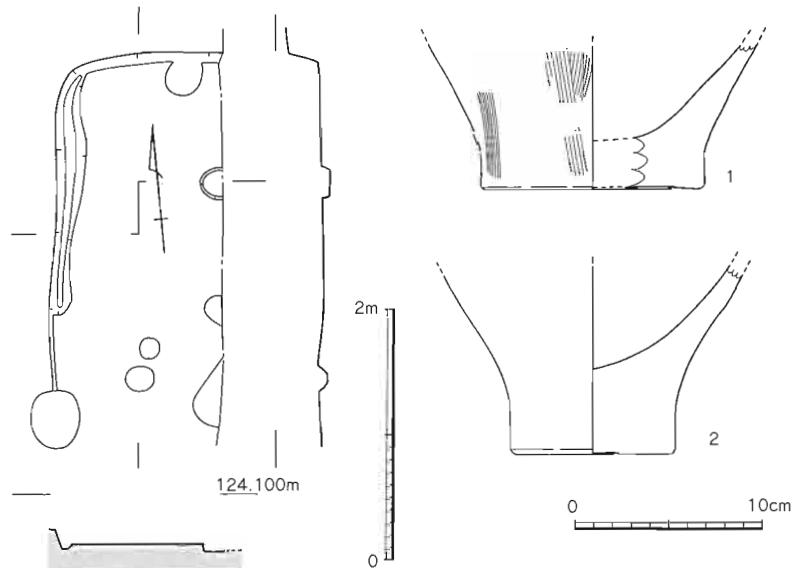
11号竪穴住居跡出土遺物

(第68図 図版40)

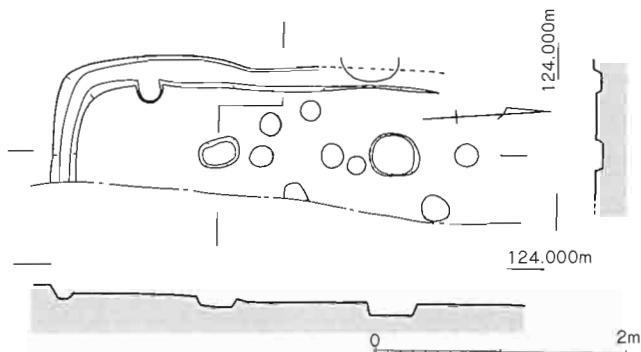
1～4は甕である。1、4は内面にヨコ方向のミガキが見られる。3は外面に粗いハケが底面付近まで施されている。5、8は器台である。5は内面にタテ方向のハケがみられ、外面下半には指押さえが見られる。6は蓋である。7はミニチュア土器であろうか。外面にはケズリが施されている。9は頁岩製の砥石である。

12号竪穴住居跡 (第69図 図版18)

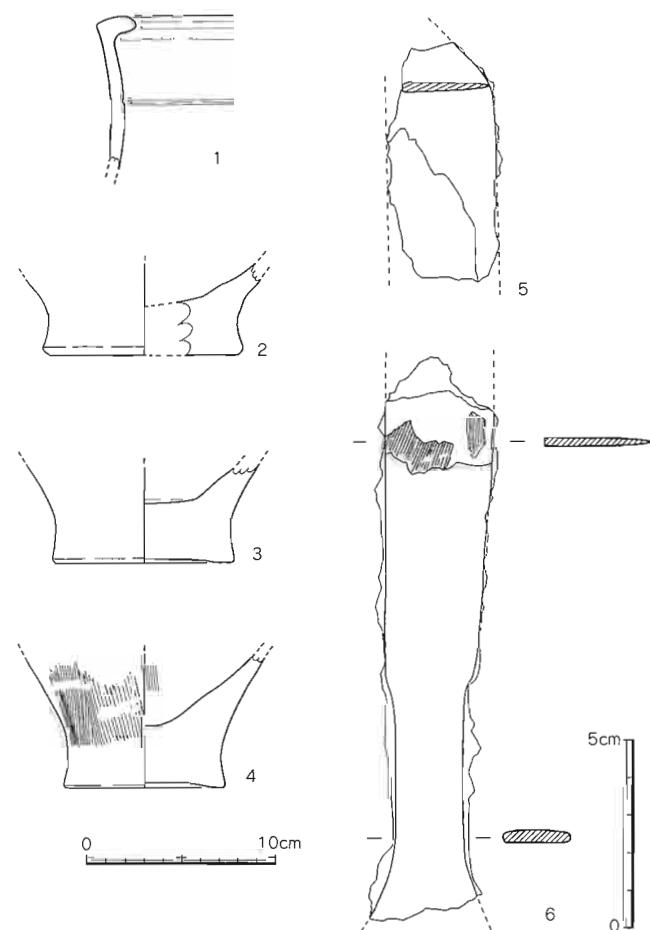
11号竪穴住居跡の南約12mで検出された。7・9号土坑を切る。北壁・西壁の一部が確認され、東側調査区外へひろがる。南壁は削平によって確認できなかつた。平面形は方形、もしくは長方形を呈すると考えられ、規模は



第69図 3区12号竪穴住居跡実測図 (1/60)



第70図 3区13号竪穴住居跡実測図 (1/60)



第71図 3区13号竪穴住居跡出土遺物実測図 (1/2·1/4)

規模は約 $2.7\text{m} + \alpha$ × 約 $1.3\text{m} + \alpha$ 、検出面からの深さ約15cmである。壁周溝の一部が確認された。

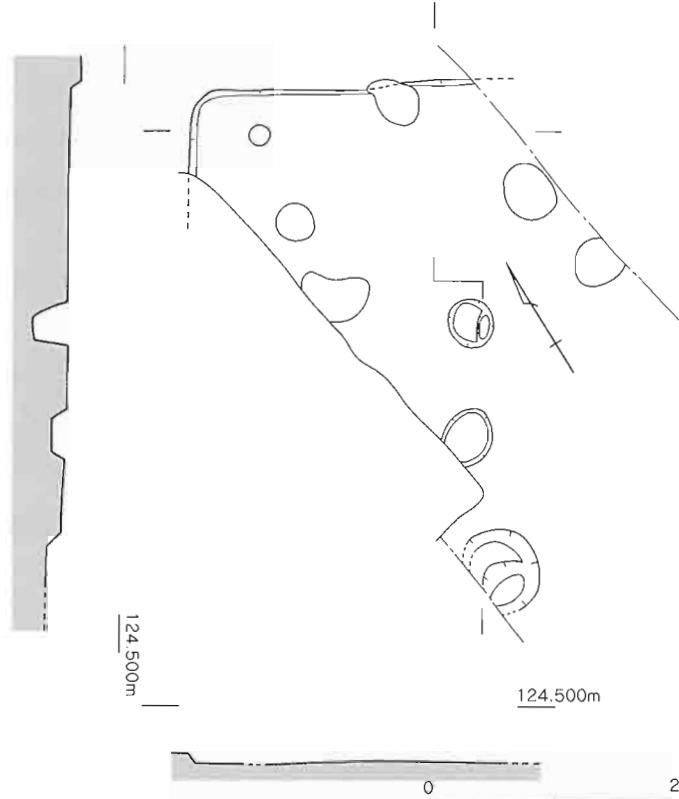
12号竪穴住居跡出土遺物 (第69図 図版40)

1、2ともに甕である。1は外面にタテ方向のハケが施されているが、底部近くはナデ消されている。2は摩耗が激しく、調整は不明である。

13号竪穴住居跡 (第70図 図版18)

12号竪穴住居跡の南で検出された。南壁・西壁の一部が確認され、東側調査区外へ広がる。北壁は削平を受けている。平面形は方形、もしくは長方形を呈すると考えられ、規模は約 $3\text{m} + \alpha$ ×

約 $1\text{m} + \alpha$ 、検出面からの深さ約10cmである。主柱穴・炉などは確認できなかった。



第72図 3区14号竪穴住居跡実測図 (1/60)

13号竪穴住居跡出土遺物

(第71図 図版41)

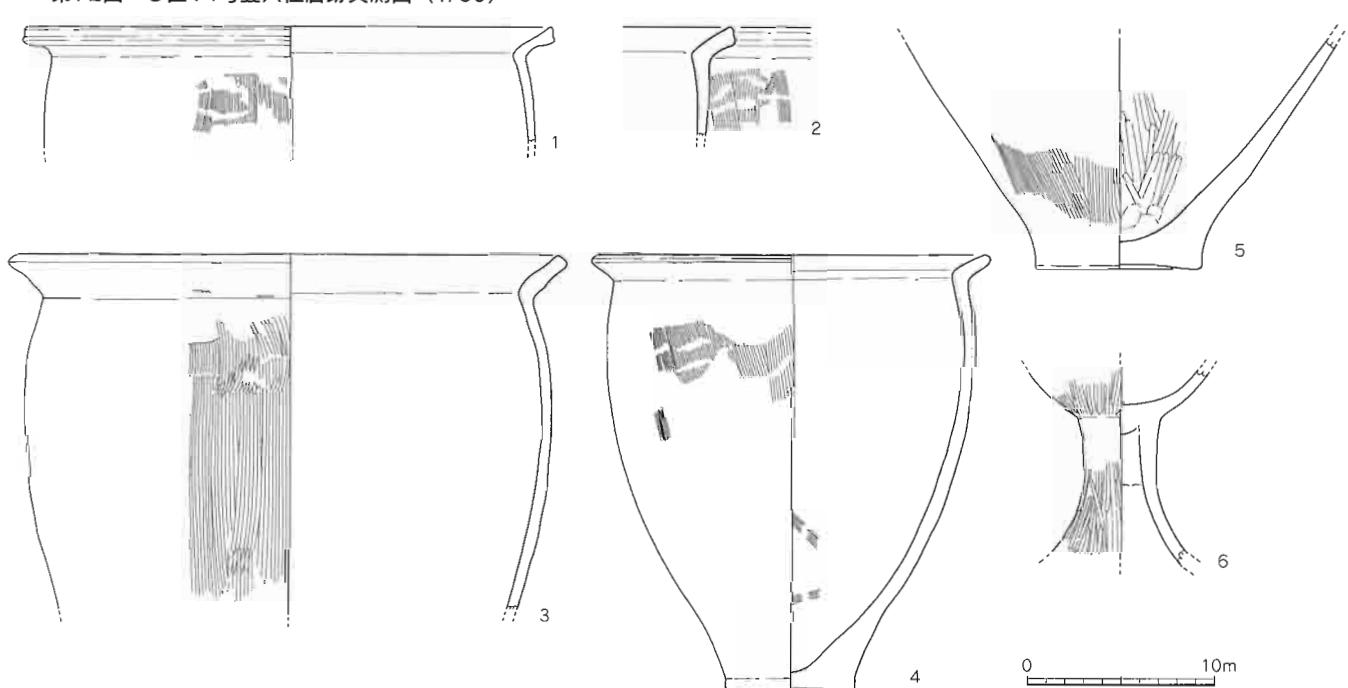
1～4は甕である。1は胴部中位付近に1条の沈線が施されている。5は内外面ともにタテ方向のハケが施されているが、底部付近はナデによって消されている。

5、6は鉄刀である。5は残存長約6.4cm、幅3cm、厚さ0.4cm、6は残存長約15cm、幅3cm、厚さ0.3cmであるが、一個体の可能性がある。

14号竪穴住居跡 (第72図)

11号竪穴住居跡の北側で検出された。

10・11号竪穴住居跡、12号土坑に切



第74図 3区14号竪穴住居跡出土遺物実測図 (1/4)

られる。北東壁・北西壁の一部が確認された。平面形は方形、もしくは長方形を呈すると考えられ、規模は約 $2.4m + \alpha$ × 約 $4.2m + \alpha$ 、検出面からの深さ約10cmである。南面土坑が検出された。

14号竪穴住居跡出土遺物

(第74図 図版41)

1～5は甕である。1は口縁部先端を凹状に壅ませている。3は内底面付近にタテ方向のミガキが施され、その下部には指押さえが見られる。また、底部先端は外へやや張り出している。4, 5ともに底部はわずかに上げ底である。6は高壺である。壺部は半球状を呈し、外面にはミガキが施される。

15号竪穴住居跡 (第73図)

7号竪穴住居跡の下層で検出された。5～7号竪穴住居跡に切られる。北壁の一部が確認されたのみである。規模は不明である。壁面は削平されていた。壁周溝の一部が確認された。

(2) 竪穴遺構

1号竪穴遺構 (第75図)

調査区の北端で検出された。1号竪穴住居跡を切る。北西壁・南西壁の一部が確認された。平面形は方形、もしくは平面形を呈すると思われる。規模は約 $2.5m \times$ 約 $1.7m$ 、検出面からの深さ約10cmである。

2号竪穴遺構 (第75図)

1号竪穴遺構の南側で検出された。1号竪穴住居跡を切り、3号土坑に切られる。北東・南西壁の一部と北西壁が確認され、東側調査区外へ広がる。平面形は長方形を呈すると考えられ、規模は約 $1.9m \times$ 約 $2.1m + \alpha$ 、検出面からの深さ約10cmである。

3号竪穴遺構 (第75図 図版18)

12号竪穴住居跡の北約4mで検出された。10号土坑を切る。平面形はややいびつな長方形を呈し、規模は約 $1.9m \times$ 約 $1.4m$ 、検出面からの深さ約20cmである。

4号竪穴遺構 (第75図)

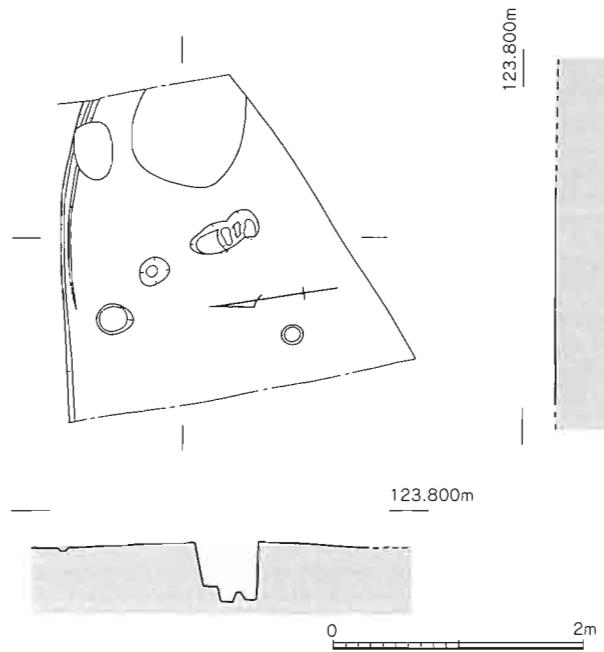
13号竪穴住居跡の南約1.8mで検出された。平面形は長方形を呈し、規模は約 $2.7m \times$ 約 $1.9m$ 、検出面からの深さ約10cmである。

5号竪穴遺構 (第75図 図版19)

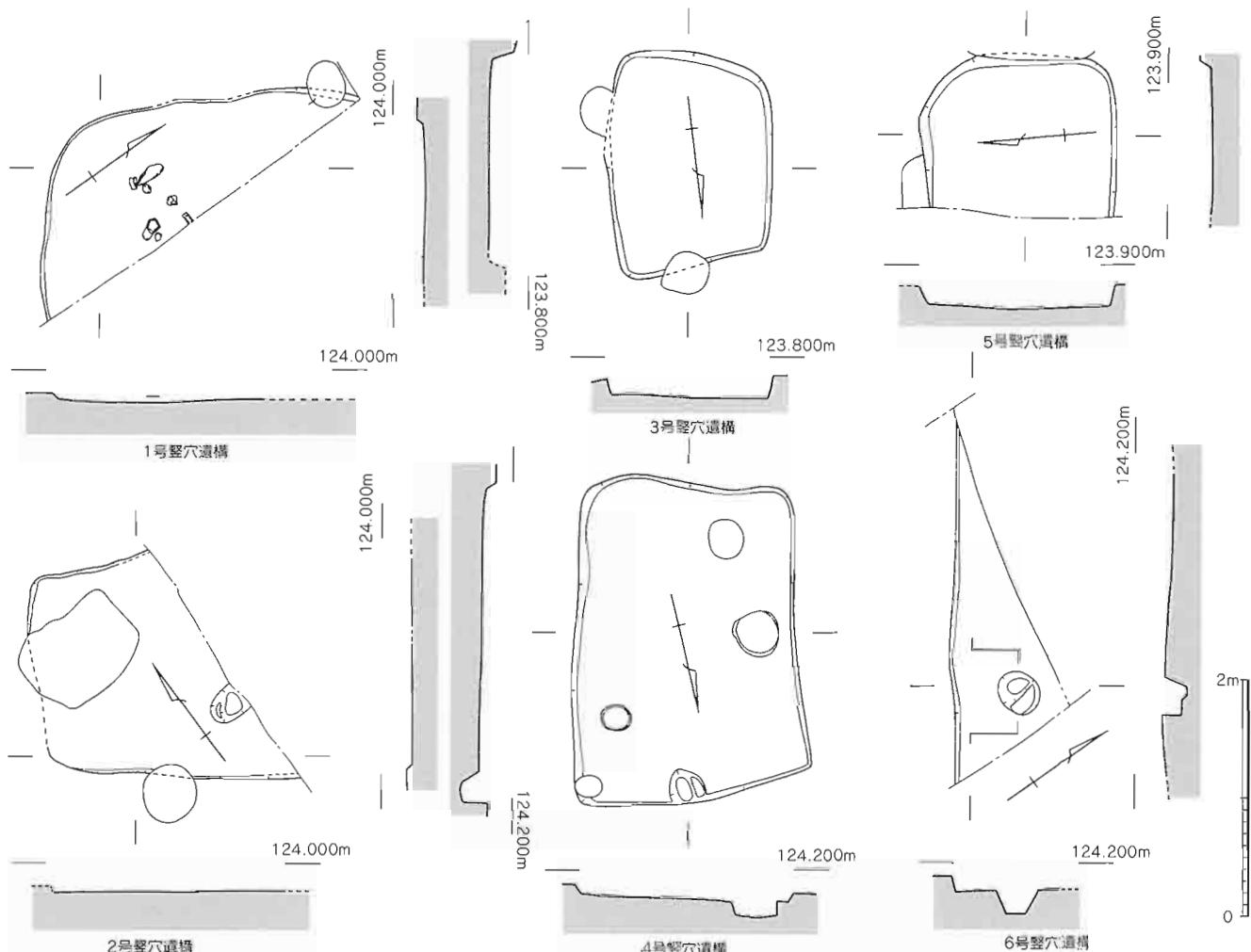
4号竪穴遺構の南側で検出された。平面形は方形、もしくは長方形を呈し、規模は約 $1.7m \times$ 約 $1.3m + \alpha$ 、検出面からの深さ約15cmである。

6号竪穴遺構 (第75図)

2号竪穴住居跡の南側で検出され、これに切られる。北西から南東へ向かって延びる壁の一部しか確認ができなかつた。その規模は約3mで、検出面からの深さは約20cmである。



第74図 3区15号竪穴住居跡実測図 (1/60)



第75図 3区竪穴遺構実測図 (1/60)

竪穴遺構出土遺物 (第76図 図版41・42)

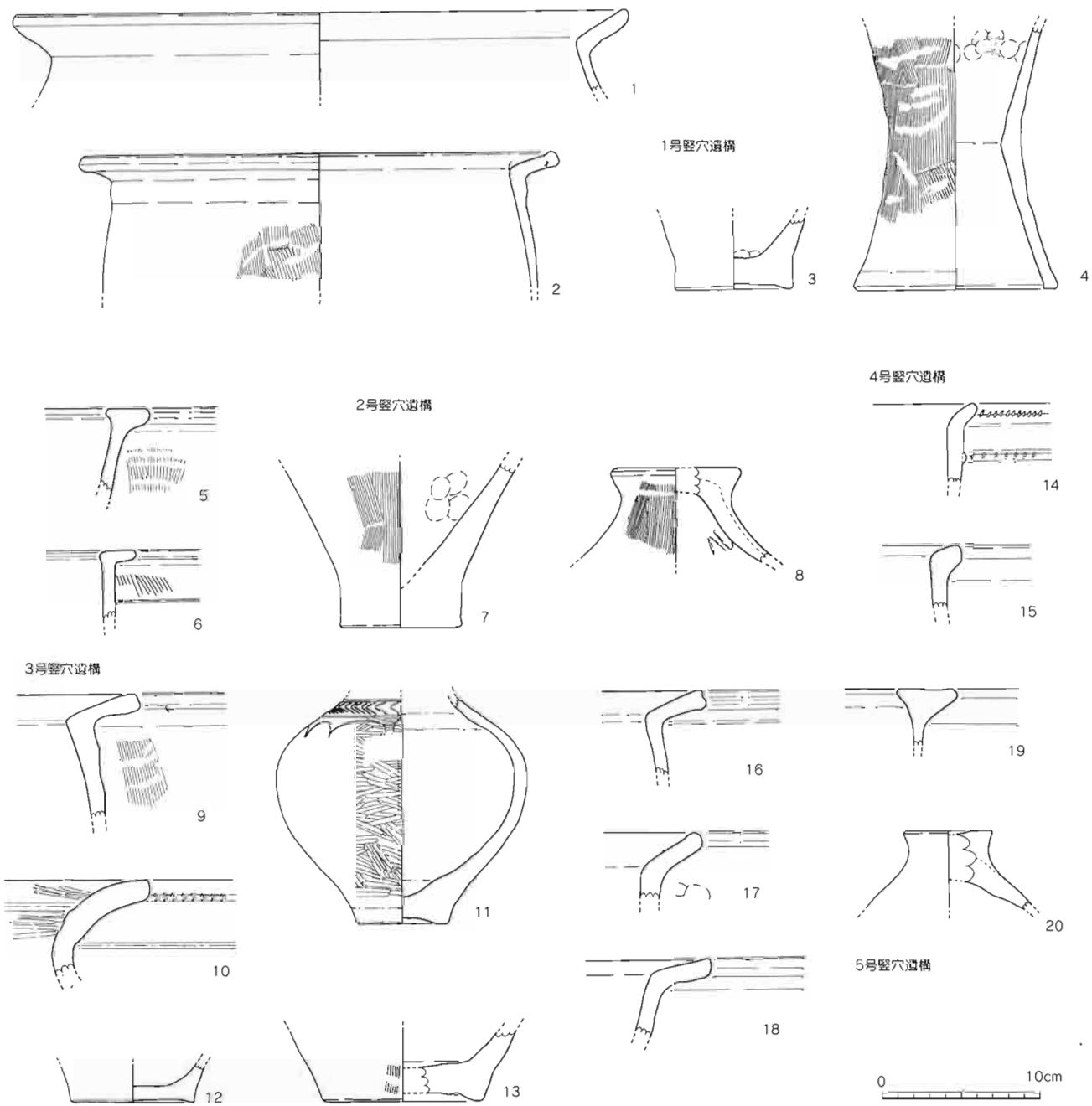
1～4は1号竪穴遺構出土である。1～3は甕である。2は口縁部先端をやや跳ね上げている。3はやや上げ底気味で、内底面近くに指押さえが見られる。4は器台である。外面は上位から中位にかけてタテ方向の細かいハケが施されている。

5～8は2号竪穴遺構出土である。いずれも甕で、6は頸部下部に1条の沈線を施す。7は外面にハケが施されているが、底面付近はナデが見られる。8は蓋で内面にケズリが見られる。

9～13は3号竪穴遺構出土である。9、10、12、13は甕で、9は外面頸部下部にハケが施される。10は口縁部先端に刻み目、頸部に1条の沈線が施され、内面にはヨコ方向のミガキが施される。11は壺である。外面には全面にわたってミガキが施される。頸部には2条の沈線に挟まれて羽状文、その下部に半円文が施されている。

14、15は4号竪穴遺構出土でともに甕である。14は頸部下部に断面三角形の突帯を貼り付け、この突帯と口縁部先端に刻み目を施す。

16～20は5号竪穴遺構出土である。16～20は甕である。16は頸部下部に1条の沈線が施され、内面にはヨコ方向のハケが見られる。また口縁部先端には凹線状の凹みが見られる。20は蓋である。摩耗のため、調整は不明である。



第76図 3区竪穴遺構出土遺物実測図 (1/4)

(3) 土坑

1号土坑 (第77図)

8号竪穴住居跡の南側で検出された。西側が一部、調査区外へ広がる。平面形は円形を呈し、底面は平坦である。壁面は底面から上端へ向かって内側へ斜めに傾斜している。規模は上端径約1.5m、下端径約1.6m、検出面からの深さ約45cmである。土坑の下端の径が上端より広がっており、袋状貯蔵穴と考えられる。

2号土坑 (第77図)

調査区北端から南約4mで検出された。1号竪穴住居跡、2号竪穴遺構を切る。平面形は橢円形

を呈し、平坦な底面で段落ちが見られる。規模は長軸約1cm、短軸約0.7m、検出面からの深さ約70cmである。

3号土坑（第77図 図版19）

7号竪穴住居跡内で検出された。7・15号竪穴住居跡を切る。平面形は円形を呈し、底面は南側に向かってやや傾斜している。東側は調査区外へ広がる。規模は径約95cm、検出面からの深さ約10cmである。

4号土坑（第77図）

10号竪穴住居跡の北側約3mで検出された。平面形は橢円形を呈し、西側の一部は調査区外へ広がる。底面はわずかな凹凸が見られる。規模は長軸約1.3m、短軸約1m、検出面からの深さ約20cmである。比較的多くの土器の小破片が出土し、廃棄土坑と考えられる。

5号土坑（第77図）

11号竪穴住居跡の南側約3mで検出された。10号土坑を切る。平面形は橢円形を呈し、底面は中央に向かって緩やかに傾斜する。規模は長軸約0.9m、短軸約0.6m、検出面からの深さ約15cmである。

6号土坑（第77図 図版19）

12号竪穴住居跡の西側で検出された。8号土坑を切り、12号竪穴住居跡に切られる。平面形は長方形を呈し、底面は南側へ向かって緩やかに傾斜している。規模は長軸約1.2m、短軸約0.8m+ α 、検出面からの深さ約20cmである。

7号土坑（第77図）

5号土坑の南西側で検出され、6号土坑に切られる。平面形は長方形を呈しており、底面は北側へ向かって傾斜している。底面は平坦である。規模は長軸約2.5m、短軸約1.2m、検出面からの深さ約10cmである。

8号土坑（第78図）

6号土坑の北側で検出された。12号竪穴住居跡に切られる。平面形はやや不定形気味の橢円形を呈し、床面はわずかな凹凸があるが、ほぼ平坦である。規模は長軸約2m、短軸約1m、検出面からの深さ約35cmである。遺物は出土しなかった。

9号土坑（第78図）

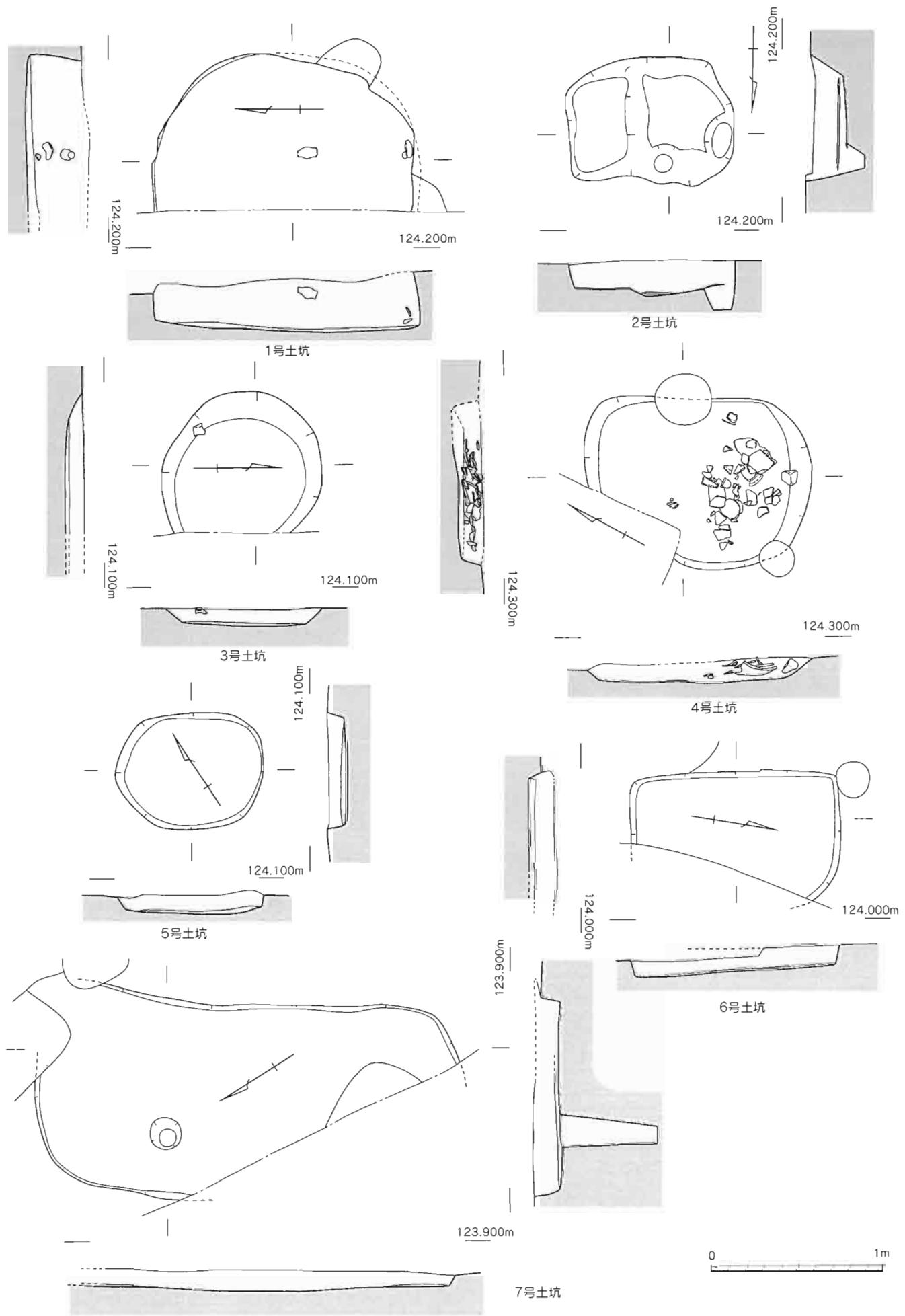
3号竪穴遺構の下層で検出された。平面形はやや不定形気味の橢円形を呈し、底面はほぼ経右端である。南側壁面よりに大きな落ち込みが見られる。規模は長軸約1.9m、短軸約1.4m、検出面からの深さ約20cmである。

10号土坑（第78図）

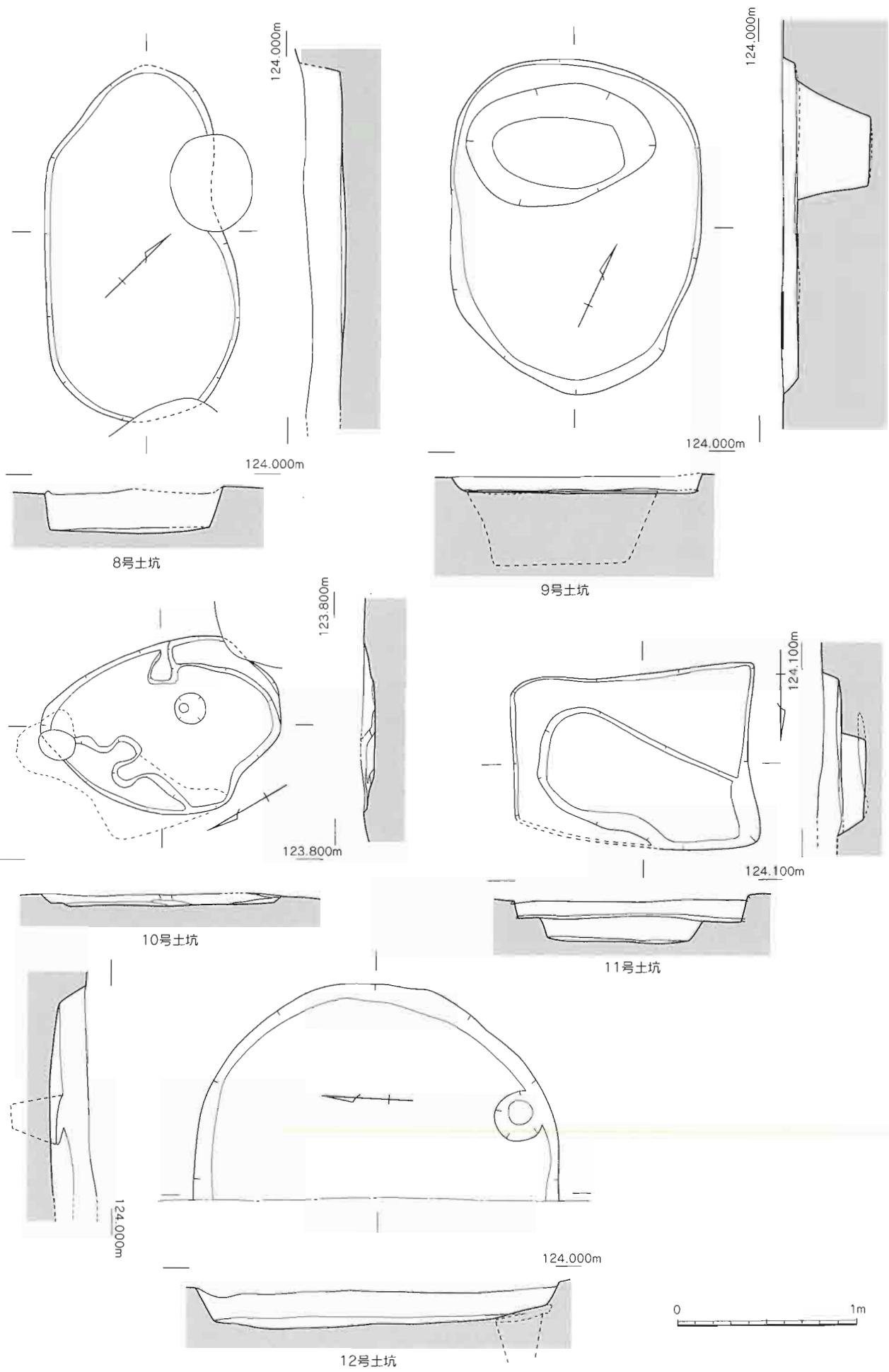
11号竪穴住居跡の南側で検出された。5号土坑に切られる。平面形は円形を呈し、床面は段落ちが見られ、わずかに傾斜する。規模は長軸約1.4m、短軸約0.9m、検出面からの深さは、下段で約50cmである。遺物は出土しなかった。

11号土坑（第78図 図版19）

14号竪穴住居跡の下層で検出された。平面形は長方形を呈し、床面は平坦な面の段落ちが2段見られる。規模は長軸約1.4m、短軸約1m、下段の検出面からの深さは、下段で約30cmである。遺物は出土しなかった。



第77図 3区土坑実測図(1) (1/30)



第78図 3区土坑実測図(2) (1/30)

12号土坑（第78図 図版19）

4号土坑の北約2mの下層で確認された。平面形は円形、もしくは橢円形を呈すると考えられ、西側は調査区外へ広がる。床面は北側に向かって緩やかに傾斜し、南壁際には柱穴による掘り込みが見られる。規模は長軸約1.2m + α、短軸約2.1m、検出面からの深さ約25cmである。遺物は出土しなかった。

土坑出土遺物（第79図 図版43・44）

1～3は1号土坑出土である。1は完形の小型壺である。外面の下半部にタテ方向のハケが施されている。2は甕である。頸部下部に断面三角形の突帯を貼り付け、その突帯には刻み目が施されている。3は蓋である。外面にハケがわずかに確認できる。

4、5は2号土坑出土である。4は甕である。外面はナデがみられ、底面にはハケが施されている。5は鉄製品であるが、器種は不明である。長さ5.5cm、最大幅3cm、厚さ0.3cmである。

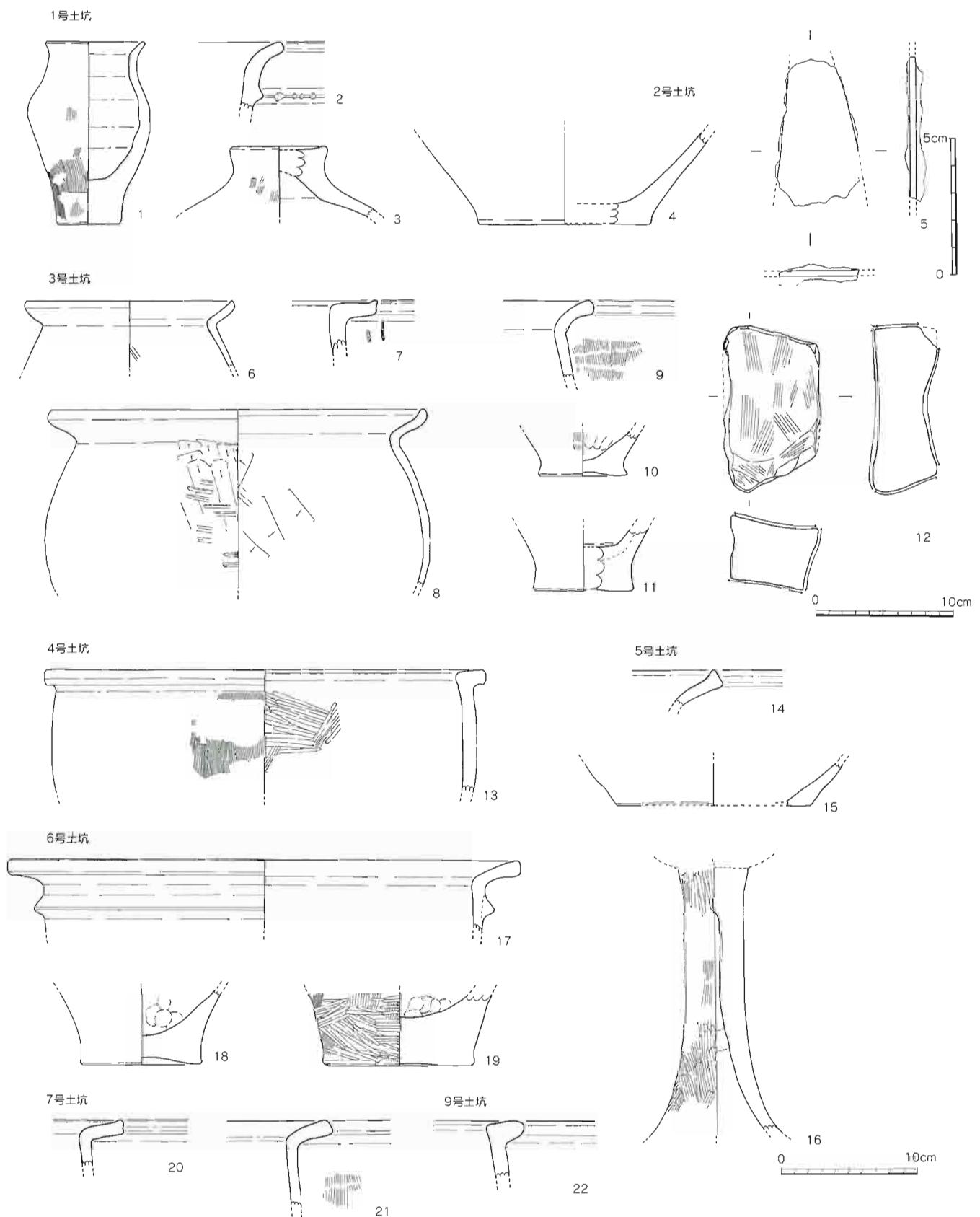
6～12は3号土坑出土で6～11は甕である。6は内外面ともにケズリが見られる。7は外面に工具痕と思われるものが見られ、ススが付着する。8は内面・外面ともにケズリが施されている。9は頸部屈曲部に粘土紐と思われる貼り付けがある。12は砂岩製の砥石である。5面に研磨痕が見られる。

13は4号土坑出土で、図化できたのは1点のみである。13とともに甕である。13は外面にタテ方向のハケを施した後、底面近くにナデを施す。内面はナナメ、ヨコ方向のミガキが見られる。

14～16は5号土坑出土である。14は甕の口縁である。先端をやや跳ね上げている。15は甕の底部である。16は高壠の脚部でハケの後、ミガキを施している。

17～19は6号土坑出土でいずれも甕である。17はやや開き気味の口縁部を持ち、頸部下部に断面三角形の突帯を貼り付ける。18はやや上げ底気味で内面に指押さえが見られる。19は外面全体にわたって、タテ、ナナメ方向のハケが施された後、ヨコ、ナナメ方向のミガキが施されている。20、21は7号土坑出土でともに甕である。20は口縁部先端をやや窪ませており、朱が一部残存している。21は外面の頸部下部にタテ方向のハケが施されている。

22は9号土坑出土遺物で、甕である。短い「T」字状の口縁を持ち、器面の摩耗は激しいが外面にハケ、内面にナデを施したとみられる。



第79図 3区土坑出土遺物実測図 (1/2・1/4)

(4) 溝状遺構

1号溝状遺構 (第80図 図版20)

4号竪穴遺構の北側で検出された。南北方向に伸び、断面形は逆台形状を呈する。調査区内での規模は長さ約2.6m、幅約0.4~0.8m、検出面からの深さは約15cmである。南側は調査区外へ延びる。

1号溝状遺構出土遺物 (第80図1・2 図版44)

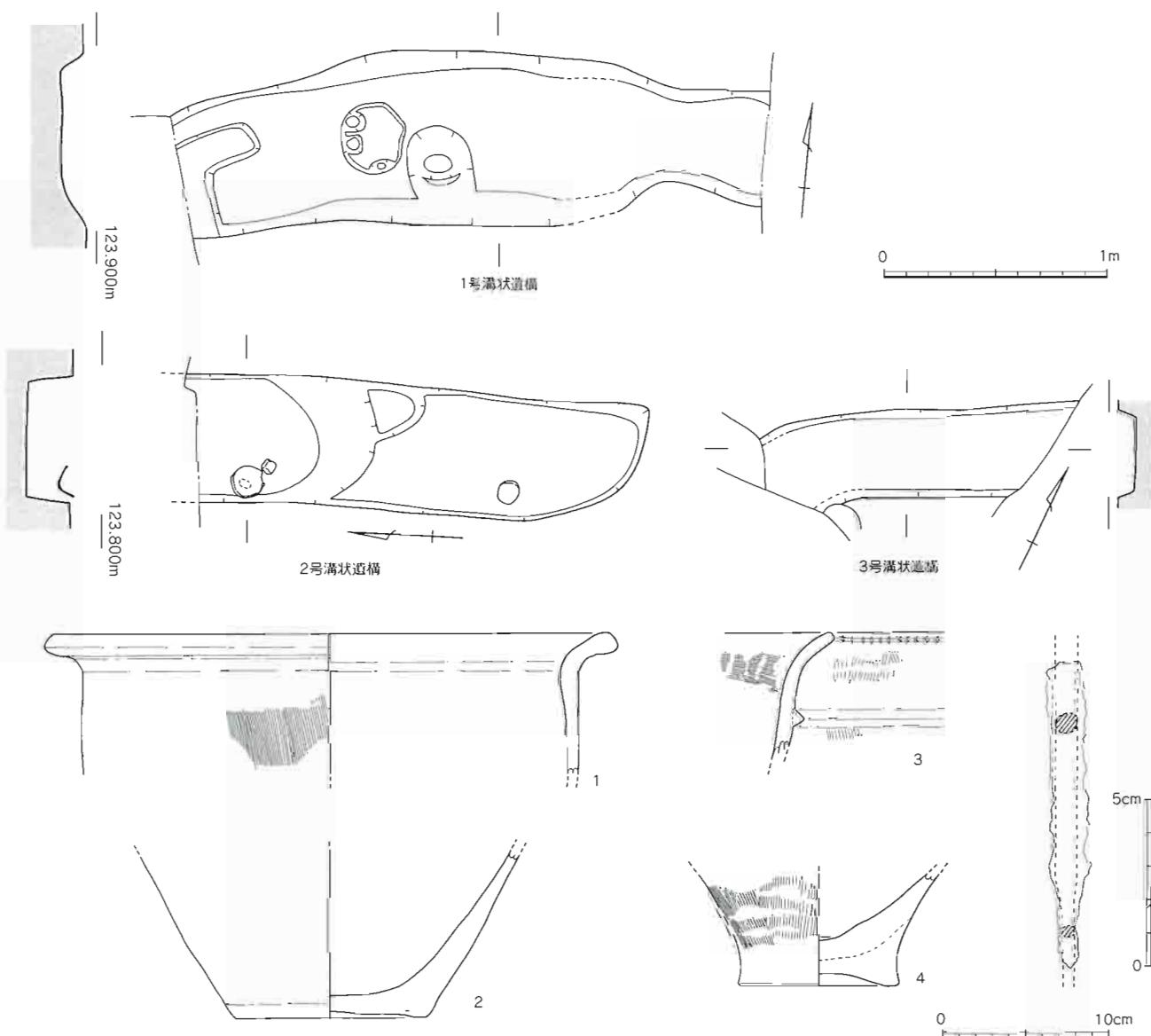
1、2ともに甕である。1は外面の頸部下部にナナメ方向のハケが施される。2は摩耗を受けているため、器面調整は不明である。底部は平底である。

2号溝状遺構 (第80図 図版20)

3号竪穴遺構の北側で検出された。6号土坑に切られる。溝は東西方向に伸び、調査区を横切り、断面形は逆台形を呈する。規模は長さ約2m、幅は約0.5~0.6m、検出面からの深さは約20cmである。

2号溝状遺構出土遺物 (第80図3~5 図版44)

3、4は甕である。1は頸部下部に断面三角形の突帯を貼り付ける。口縁部内面にはヨコ方向の



第80図 3区溝状遺構実測図 (1/30) 及び出土遺物実測図 (1/2・1/3)

ハケが施され、口縁端部には刻み目が施される。4は外面にナナメ方向のハケが施された後、底面付近はナデによって消されている。底面は上げ底である。5は鉄鏃である。刃部・基部を欠損し、残存長9.2cm、厚さ2mmである。

3号溝状遺構 (第80図 図版20)

4号竪穴遺構と5号竪穴遺構の間で検出され、この2つの遺構に切られる。溝は北東から南西方向に伸び、断面形は逆台形を呈する。確認面での規模は長さ約1.4m、幅約0.4m、検出面からの深さ約10cmである。

(5) 溝

1号溝 (第81図 図版21)

9号竪穴住居跡のやや北側で検出された。9号竪穴住居跡を切る。断面形は逆台形を呈し、検出面での幅約2.8m、深さ約0.8mである。埋土中より瓦器碗、青銅製の笄が出土した。

1号溝出土遺物 (第81図 図版45)

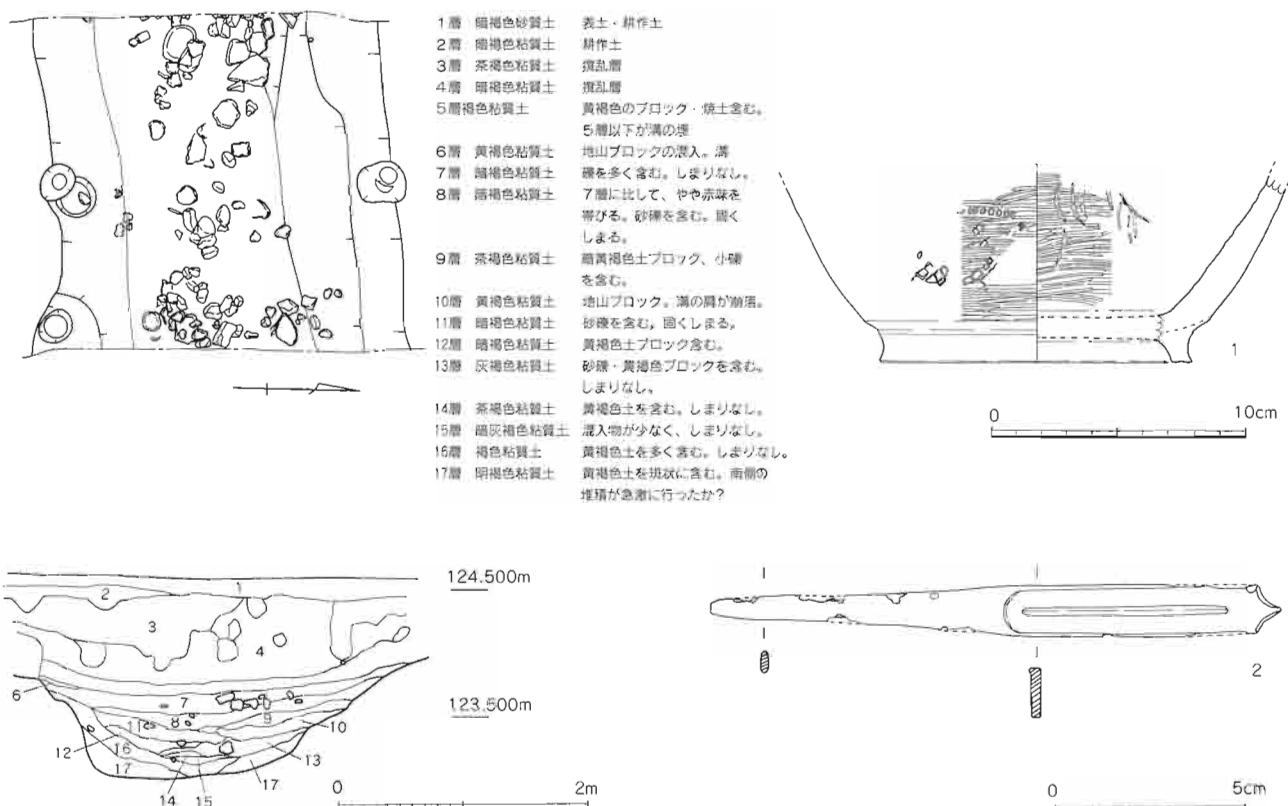
1は高台付瓦器碗である。外面、内面ともにミガキの後、タタキが施されている。高台は貼り付けて、断面形は逆台形を呈する。2は青銅製の笄である。全長15cm、幅0.7~1.4cm、厚さ0.3cmである。

(6) 墓

1. 瓢棺墓

1号瓢棺墓 (第82図 図版20・45)

1号溝の南側で検出された。上部はほとんどが削平を受けており、墓坑は底面付近しか確認でき



第81図 3区1号溝実測図(平面図・土層断面図) (1/60) 及び出土遺物実測図 (1/2・1/3)

なかった。主軸はN-75°-Eにとる。合口甕棺墓で、墓坑の平面形は橢円形を呈し、規模は長軸約0.6m、短軸約0.4m、検出面からの深さ約15cmである。下甕から推測できる埋置角度は約32°である。人骨や遺物は出土しなかった。

1号甕棺墓に使用された甕は、削平をかなり受けているため、上甕が破損しており、口縁部が残存していたか不明である。外面にタテ方向のハケが施されている。下甕は平底の底部を持ち、胴部中位まで残存する。上甕と同様に外面にはタテ方向のハケが施されている。

2. 土坑墓

1号土坑墓 (第82図 図版20)

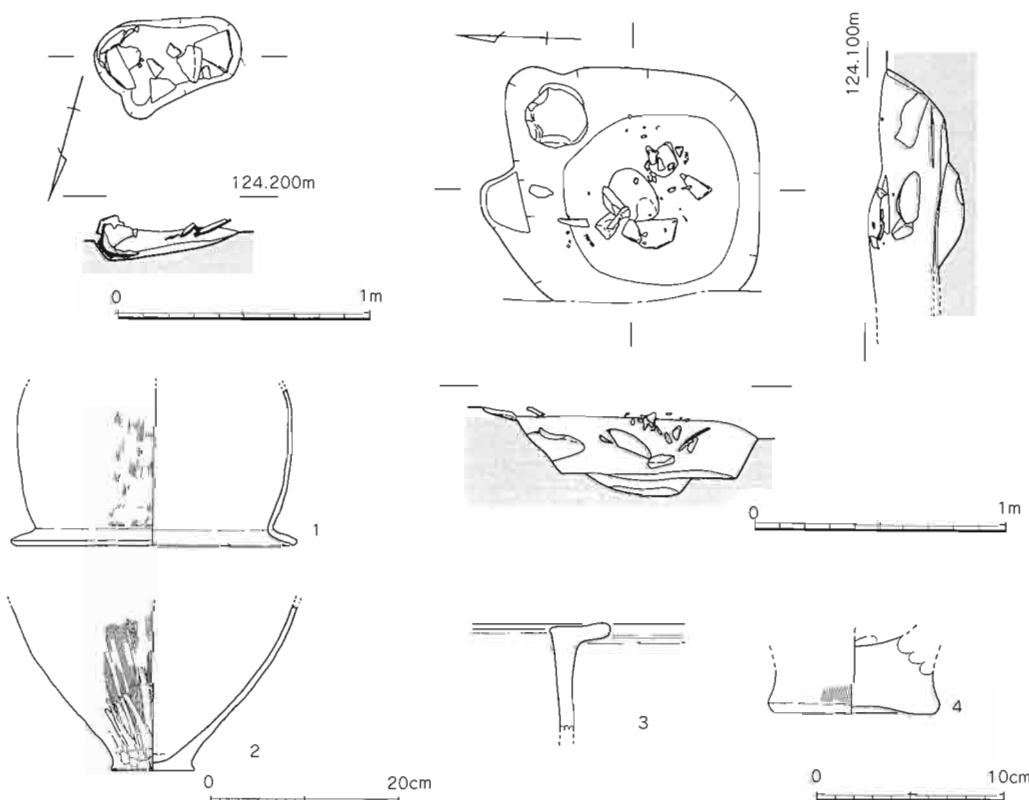
1号溝の南側で検出された。9号竪穴住居跡を切る。平面形は不定形を呈し、壁面の立ち上がりは垂直に近く、底面の断面形は逆台形である。規模は長軸約0.9m + α、短軸約0.9m、検出面からの深さ約40cmである。

1号土坑墓出土遺物 (第82図3・4 図版45)

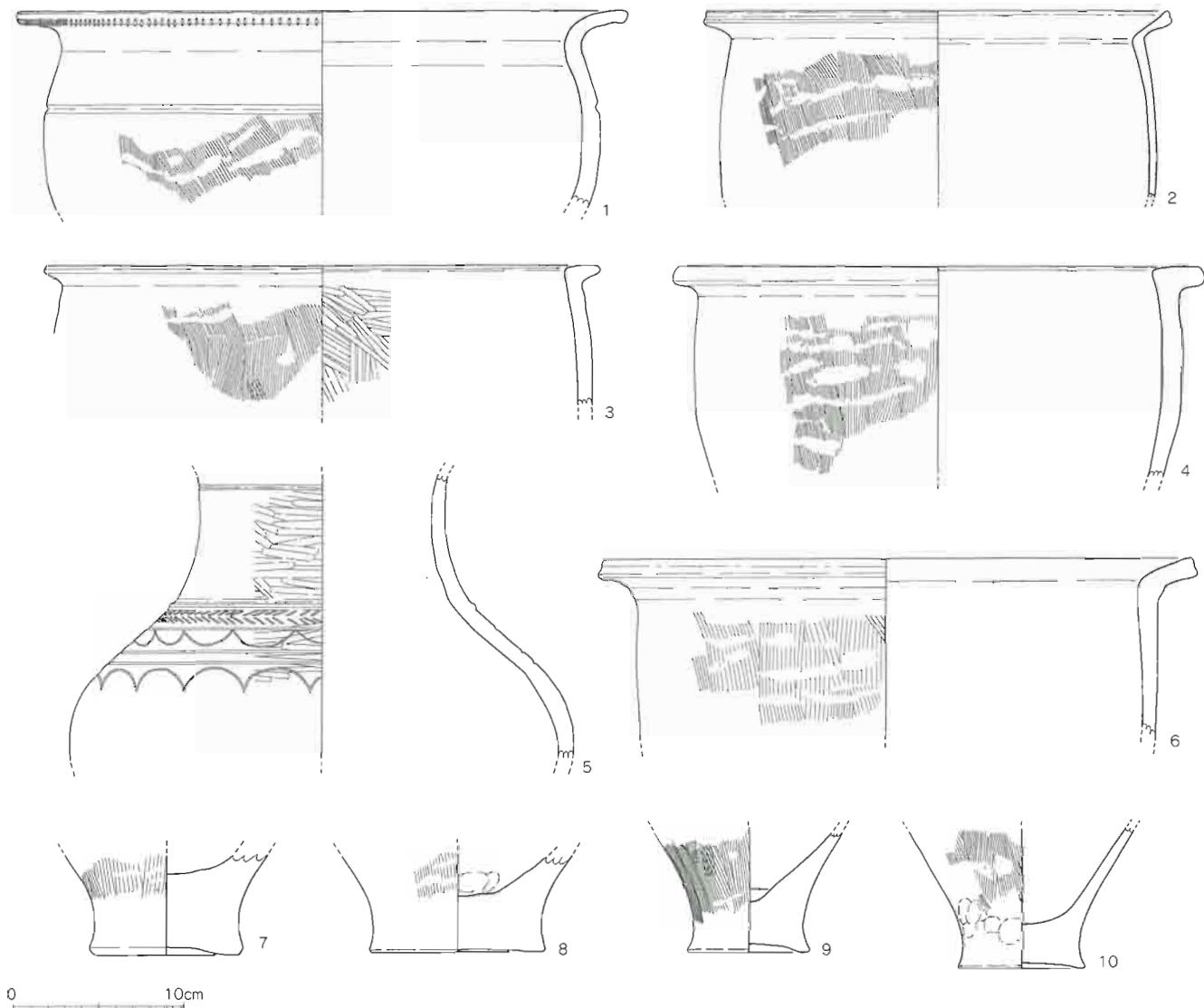
1、2とも甕である。1はやや内傾気味の「T」字状口縁をもつ。2は上げ底の分厚い底部をもつ。外面は底部近くまでハケが施される。

(7) 柱穴・包含層一括出土遺物 (第83図 図版46・47)

1～4、6～10は甕である。すべて柱穴出土である。1は口縁部先端に刻み目、胴部上位に1条の沈線が施されている。2、6は口縁部先端をやや凹状に窪ませており、外面にはタテ方向のハケが見られる。3は外面にタテ方向のハケ、内面頸部下部にはナナメ方向のミガキが施されている。6は外面にやや粗いハケが施されている。7～10はいずれも底部でやや上げ底気味である。特に9



第82図 3区1号甕棺墓・1号甕棺及び1号土坑墓実測図 (1/8・1/30)



第83図 3区柱穴及び包含層一括出土遺物実測図(1) (1/4)

は摩耗も少なく、細かいハケが全体にわたって残存している。底部付近はナデによって消されている。

5は壺でこれも柱穴出土である。外面の頸部から胴部上半にかけてヨコ方向のミガキが施されている。調整後、頸部上部には1条の沈線、頸部と胴部の境から下部へ順に1条の沈線、羽状文、1条の沈線、弧文、2条の沈線、弧文と施されている。

11は玄武岩製の石庖丁である。12は硬質砂岩製の石庖丁の未製品である。13は柱穴出土の抉入柱状片刃石斧である。粘板岩製で半分が欠損している。14～17は包含層一括出土の磨製石剣である。石材は安山岩や緑泥片岩、結晶片岩などの片岩系が使用されている。18は結晶片岩製の磨製石斧である。刃部は調整途中と考えられ、裏面が剥離していることから未製品と考えられる。23は粘板岩製の柱状片刃石斧である。19～25は砥石である。22が柱穴出土である以外は、包含層一括出土である。石材は砂岩、粘板岩などが使用されている。23、25は研磨の痕が顕著に見られる。28、29はほぼ完形の投弾である。27は安山岩製の磨石である。ほぼ完形で両面とも使用されている。26は緑泥片岩製の磨製石鎌の完形品である。30、31は磨製石鎌の未製品である。30は包含層一括出土、31は柱穴出土である。とともに刃部を作り、研磨している中途段階と考えられる。とともに片岩系の石材である。

32は包含層一括出土の鉄鎌である。



第84図 3区柱穴出土・包含層一括出土遺物実測図(2) (1/2)

4. 4区

4区は3区の南端から西方向に伸びる約47mの調査区である。調査区の全体にわたって、耕作などによる搅乱が激しく、現道路面から遺構面までの深さも浅かった。特に調査区の東端は3区の南端から続く大きな搅乱坑が見られ、大量の土器や石棺材などが出土した。

(1) 土坑

1号土坑 (第86図 図版23)

調査区西端から約8mの地点で検出された。土坑の南側は耕作の機械痕により削平されている。平面形は隅丸長方形を呈する。壁面は垂直に立ち上がり、底面の断面形は舟底状を呈する。規模は長軸約1.6m + α 、短軸約1.4m、検出面からの深さは約15cmである。

2号土坑 (第86図 図版23)

1号土坑の東側約7mの地点で検出された。土坑の北側は耕作の機械痕により削平されている。平面形は隅丸長方形を呈する。壁面は垂直に立ち上がり、底面は舟底状を呈する。規模は長軸約2.1m + α 、短軸約1.4m、検出面からの深さは約25cmである。

3号土坑 (第86図 図版23)

2号土坑の東側約14mで検出された。耕作により大部分が削平されている。壁面は垂直に立ち上がり、底面の断面形は逆台形である。確認できた規模は幅約1.5m、遺構面からの深さ約40cmである。

4号土坑 (第86図 図版23)

2号土坑の東側で検出された。耕作の機械により大部分が削平されている。壁面は垂直に立ち上がり、底面は西に向かって傾斜する。確認できた規模は幅約1.4m、遺構面からの深さ約25cmである。

5号土坑 (第86図)

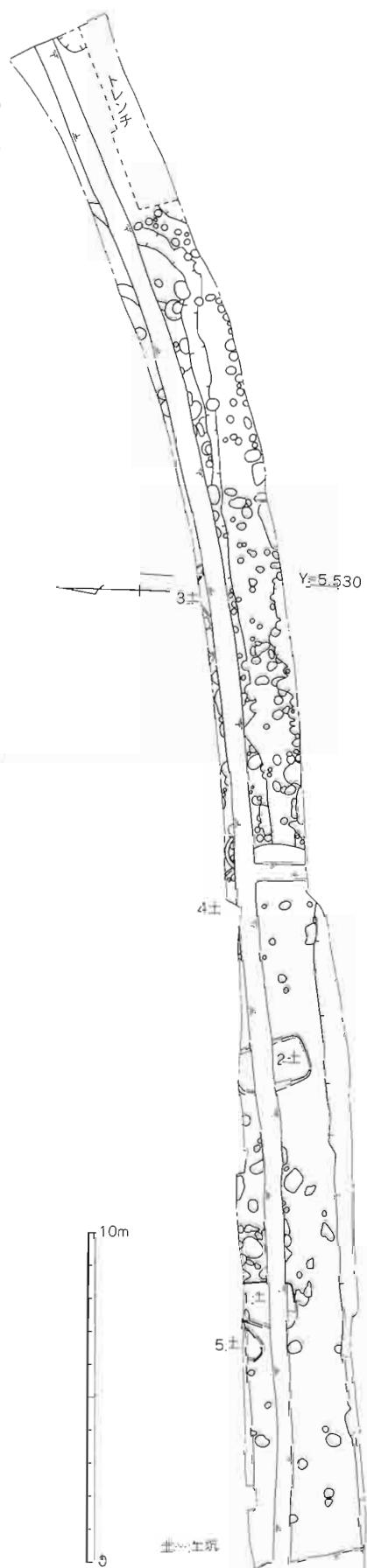
1号土坑の西側で検出された。平面形は橢円形を呈し、北側は調査区外へ広がる。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、底面の断面形は逆台形である。規模は長軸約0.8m + α 、短軸約0.7m、深さ約25cmである。

土坑出土遺物 (第87図 図版47)

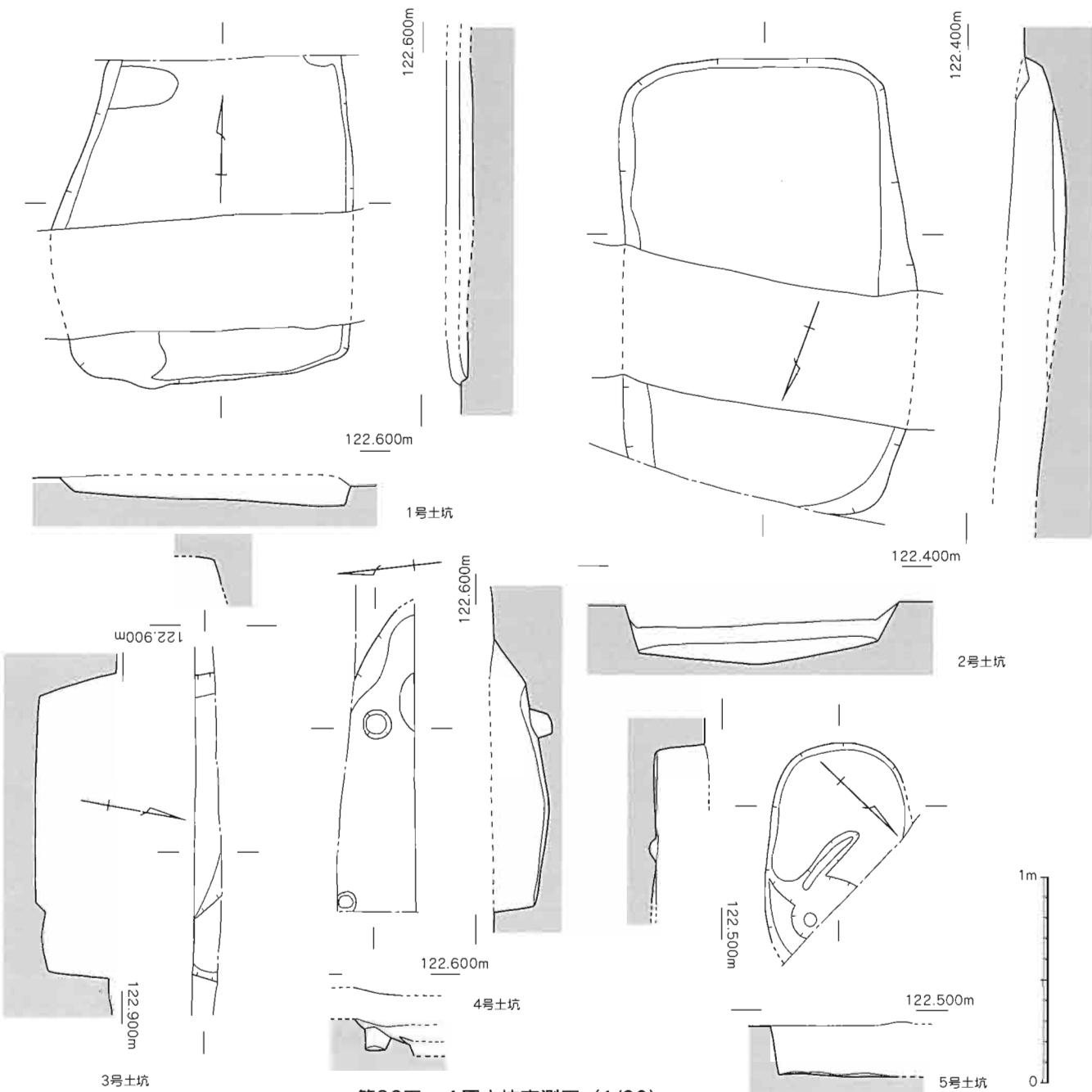
1は1号土坑、2、3は2号土坑出土遺物である。1は甕である。摩耗により器面調整は確認できない。2、3とも甕である。2は口縁部内面にヨコ方向のハケが施されている。

(2) 4区包含層一括出土遺物 (第87図 図版47)

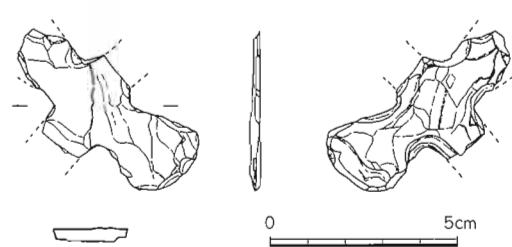
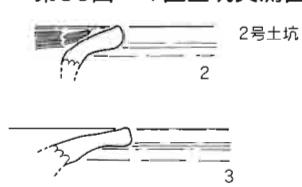
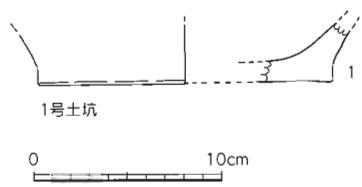
1は壺である。口縁部先端はやや、外側に垂れ気味の鋤先状を呈する。摩耗が激しいが、外面にはハケ、ナデ、内面にはナデが施されている。



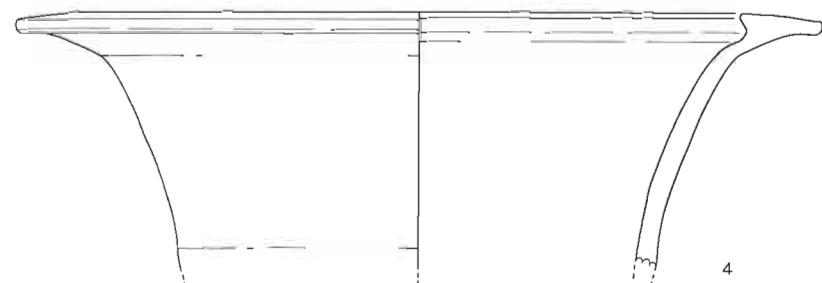
第85図 4区遺構配置図 (1/200)



第86図 4区土坑実測図 (1/30)



第88図 包含層一括出土遺物実測図 (1/2)



第87図 4区土坑出土及び包含層出土遺物実測図 (1/4)

5. 遺跡一括出土遺物

(第88図 図版47)

1は包含層一括出土遺物の十字型石器である。緑泥片岩製である。2方向の先端が欠損しており、最大長3.7cm、厚さ0.6cmである。

第3章　まとめ

1. 集落について

後迫遺跡で検出された遺構は弥生時代前期末～後期後半頃までの竪穴住居跡、竪穴遺構、土坑が主である。竪穴住居跡は前期末～中期初頭、中期後半～末、後期中頃～後半にやや偏る傾向がある。竪穴住居跡の平面形態は円形、方形ともに見られ、方形住居は2本の主柱穴の間に炉を持つものが中心で壁周溝、ベッドを持つものあった。円形住居は主柱穴が8～10本のものが中心であるが、2区8号竪穴住居跡のように主柱穴を4本しか持たないものもあった。

時期的な観点からみると、大分県教育委員会が調査した後迫遺跡での竪穴住居跡は中期後半と後期中頃から後半、特に後者の時期のものが大多数を占めている。これに対し、今回の調査では前期末～中期前半にかけての住居が多く見られることから、遺跡一帯での集落の変遷をある程度は把握できるのではないかと思われる。今回の調査区は台地の南端に位置しており、前期末～中期初頭の時期にこの一帯で集落ができはじめ、時期が下るにつれて、北側へ移動していったと考えることができよう。

竪穴遺構についても前期末～後期中頃にかけて検出されている。これについては、第三章の冒頭でも述べたように主柱穴や炉、壁周溝が検出されなかつたことから、竪穴住居跡と確定できない面があったため、竪穴遺構としたが、住居跡の可能性もあり、十分に本遺跡における集落変遷の中で捉えることができよう。

土坑については、前期末～後期前半にかけて各時期のものが満遍なく検出されている。このうち、2区3号土坑と3区1号土坑はその形態から貯蔵穴であったことがわかるものもあり、また、3区5号土坑のように廃棄土坑であったことが推測できるものがあるが、大半は用途については不明である。形態については円形・方形・楕円形・不定形など様々である。

後迫遺跡での集落は遺構密度が希薄になる時期があるものの、弥生時代前期末～後期後半頃までほぼ全時期を通じて展開する。また、この中で墓が確認されている時期は中期後半～末の時期にはほぼ限定されるが、ここで周辺の台地や沖積地上に展開する集落との関係について考えてみたい。山田原台地西側に位置する辻原台地の小迫辻原遺跡では前期後半～中期初頭にかけて集落形成が開始されたとみられる。その後は、中期後半～末頃に再び集落遺構がみられる。墓についても同様の時期の石蓋土坑墓や木棺墓、甕棺墓が確認されている。さらに辻原台地の北西にあつた原台地の朝日宮ノ原遺跡では中期後半～中頃の集落、小児用甕棺墓群がみられる。

その辻原台地南側にある吹上原台地の吹上遺跡では前期後半～中期前半にかけての袋状貯蔵穴や土坑、中期末～後期初頭の住居跡などの集落関連遺構が見られる。一方、墓は中期後半～後期前半に特定集団墓の墓地群を含む、甕棺墓や石蓋土坑墓、木棺墓などがある。また、山田原台地東側の花月川右岸の沖積地上の三和教田遺跡B地点では、中期初頭～前半の土坑、後期中頃～後半にかけての環濠集落が見つかっている。

以上の状況をみてみると沖積地上の三和教田遺跡を除き、台地上に展開する遺跡では中期後半～後期前半の時期内に集落と墓地がともに展開していることがわかる。その後、朝日宮ノ原遺跡では集落・墓地とともに形成されていない。小迫辻原遺跡、吹上遺跡については後期前半～中頃にかけて、集落・墓地の空白期間がみられるが、後期後半になって再び集落が形成されている。小迫辻原遺跡

はその集落が古墳時代前期前半まで継続して営まれ、方形区画の溝をもつ豪族居館の出現につながってく。吹上遺跡についても、環濠の可能性のある大溝が見つかっている。一方集落の存在が比較的希薄とみられる後期中頃から後半の時期、花月川右岸の沖積地上に環濠集落である三和教田遺跡B地点が出現する。また、草場第二遺跡のある丘陵南側裾の本村遺跡では後期後半～終末にかけての集落が出現しており、この時期に集落が台地裾や沖積微高地上に展開していくことが窺える。これは弥生時代中期以降の鉄器の急速な普及によって生産力が向上し、人口が増加し、生活場所の不足など様々な要因で新たな居住地を台地裾や沖積微高地上に求めていったと考えることができよう。ただ、集落を営んだ地は湧水も付近にあるような場所を選んだことは想像に難くない。

奈良時代の遺構は2区より竪穴遺構1基、掘立柱建物2棟が検出された。2棟の掘立柱建物跡については、遺物は出土していないものの大分県教委の調査区より8世紀代の同規模の掘立柱建物が9棟検出されていることから、同時期のものと考えて差し支えないであろう。これら2棟の掘立柱建物は桁行が3間で、その柱間が心々距離で約2～2.5mあり、大型の建物であったことが推定できる。周辺遺跡で奈良時代の遺構が調査された遺跡は三和教田遺跡B地点、小迫辻原遺跡がある。三和教田遺跡B地点では小型の円面硯が出土し、それと同時期と見られる2間×2ヤの総柱建物が2棟確認されている。また、小迫辻原遺跡では8～9世紀にかけての「コ」の字型に並ぶ7棟の建物群が見つかっており、「大領」と書かれた墨書き土器も出土している。これら2つの遺跡ともに官衙に関連する施設があったと思われ、その中間に位置する本遺跡での大型掘立柱建物の存在は官衙関連の施設があった可能性も考えられる。

2. 墓について

今回の調査で見つかった墓は甕棺墓2基、箱式石棺墓4基、土坑墓が2基である。

甕棺墓

甕棺墓は2区、3区でそれぞれ1基ずつである。2区1号甕棺墓はやや内傾した鋤先状の口縁部を持ち、頸部に1条、胴部最大径の部分に2条の突帯を貼り付けている。また、底部は不安定さを感じさせるほど窄み、わずかに上げ底であるがほぼ平底にちかい。この形態からみると時期は須玖II式新段階、中期後半～末に位置付けられるとみられる。

3区1号甕棺墓は合わせ口の甕棺墓である。上甕は「く」の字状の口縁を持ち、口縁部径は胴部より大きくなる。また、下甕は平底の底部で、その底部端がやや外に突出している。これらの形態的特徴から2区1号甕棺墓とほぼ同時期の中期後半～末に位置付けられよう。

甕棺墓は今回の調査区内においては、2基しか検出されなかつたが、周辺の遺跡に目を向けるとかなり大きな甕棺墓群が存在していたことがわかる。大分県教委が行った後追遺跡の調査区は今回の調査区のすぐ北側にあたるが、ここでは15基の甕（壺）棺墓が調査されている。このうち、壺を使用している墓、中期中頃～中期後半（5号）、後期後半（14号）の2基を除けば、その時期は中期後半に比定されており、今回の調査で見つかった2基の甕棺墓とほぼ時期を同じくする。ただ、この調査区の甕棺墓の位置関係をみると墓群といえるような密集度ではなく、1～2基ごとに点在している程度である。今回の調査区は幅が3m前後と面的な調査はできなかつたが、前述の状況からすると、2区1号甕棺墓、3区1号甕棺墓の周囲にもせいぜい数基の甕棺墓があつたに過ぎない

と考えることができるのでないだろうか。さらにこの時期の竪穴住居跡も多く見られることから、集落と墓地が並存していたとみることができる。

一方、本遺跡の東側も甕（壺）棺墓群が調査された草場第2遺跡がある。この調査では13基の甕（壺）棺墓が調査された。うち、甕棺墓が7基、壺棺墓が6基である。これらの墓の時期は後期後半～終末の中で比定されている。これらの甕（壺）棺墓群は後迫遺跡のものと大きな時期差が生じることとなる。

先に後迫遺跡の集落と墓地が同一区域内に存在することは述べたが、草場第二遺跡では墓地のみが発見されている。この後期後半から終末にかけての時期の集落が見つかっていなかったが、近年の調査で台地南側の裾で集落が発見された。この本村遺跡と草場第二遺跡は台地頂部と裾部が斜面を挟んで目と鼻の先にあり、同時期に存在したことはほぼ間違いないだろう。草場第二遺跡と本村遺跡は集落と墓地が区別されているということになり、後迫遺跡と、集落構造が異なる状況が見られる。

石棺墓

石棺墓4基はいずれも箱式石棺である。弥生時代中期末～後期初頭頃の竪穴住居跡を掘り込んでいることからその時期は弥生時代終末から古墳時代前期にかけてのものと考えられる。

4号石棺以外は完存しており、棺蓋はいずれも5～6枚の板石を鎧重ねにしている。棺身は両小口に1枚ずつ、長側辺については長さに応じて1～4枚の板石を使用している。

これらの石棺、特に棺身の構造は長側辺で板石を挟む形態（1・2号棺）、小口で長側辺を挟む形態（3号棺）、小口と長側辺を交互に合わせる形態（4号棺）がある。これらの石棺棺身の組み合わせについては一般的に有明海沿岸を中心とした北西九州から中九州にかけての地域では長側辺が小口板を挟む形態、東九州の瀬戸内海沿岸から日向灘沿岸にかけての地域は逆に小口板が長側板が小口板を挟む形態が一般的である。本遺跡の石棺はこれに照らし合わせてみると両方の形態が存在することになる。ここで棺身の組み合わせ方について、少し触れておきたい。棺身板石の組み合わせ型にはいくつかのパターン見られ、

1. 長側板で小口板を挟む形態
2. 小口板で長足板を挟む形態
3. 長側板と小口板が交互に板石内面に据える形態、
4. 一方が長側板で小口板を挟み、他方が小口板で長側板を挟む形態

の大きく4つに分けることができる。ここで、筑後川中流域の日田・玖珠郡の弥生時代から古墳時代にかけて、箱式石棺が調査された主な遺跡について見てみる。

日田市内では後迫遺跡のほか、草場第二遺跡、夕田古墳、大肥条里中村地区、元宮遺跡、長者原遺跡などでも発見されている。また、天瀬町の宇土遺跡や玖珠町の陣ヶ台遺跡でも箱式石棺が調査されている。

これらの遺跡から発見された石棺を見てみると、1の長側板で小口板を挟む形態が約半数を占める。これは基本的に西北～中九州に見られる箱式石棺と同じ形態である。一方で、大分県教委調査の後迫遺跡2号石棺、陣ヶ台遺跡1号方形周溝墓A号石棺や6号方形周溝墓B号石棺、宇土遺跡1号石棺などわずかではあるが2の形態が存在するのも注目できる。これは前述したように東九州に

多く見られる形態であり、少なからずも東九州の影響下に成立したものであることも考えられる。これは従来、北部九州の強い影響の下、いわゆる甕棺文化圏の一端を担ってきたこの地域でも東九州の墓制の影響を受けている面があるといえるのではないだろうか。また、この他3や4の形態も存在するが、このような形態は少数で、石材加工の段階での破損などにより、やむなく、このような組み合わせ方になったとも考えられる。

2区の1号土坑墓については、遺物が出土していないため、確実な時期決定はできないが、7号竪穴住居跡を切っていることから、少なくとも後期前葉の遺構のものと考えられる。また、3区1号土坑墓についてはその平面形が方形に近いことなどから弥生時代のものではなく、後世のものとも考えられ、遺物は搅乱時に流れ込んだ可能性もある。

3. 中世溝について

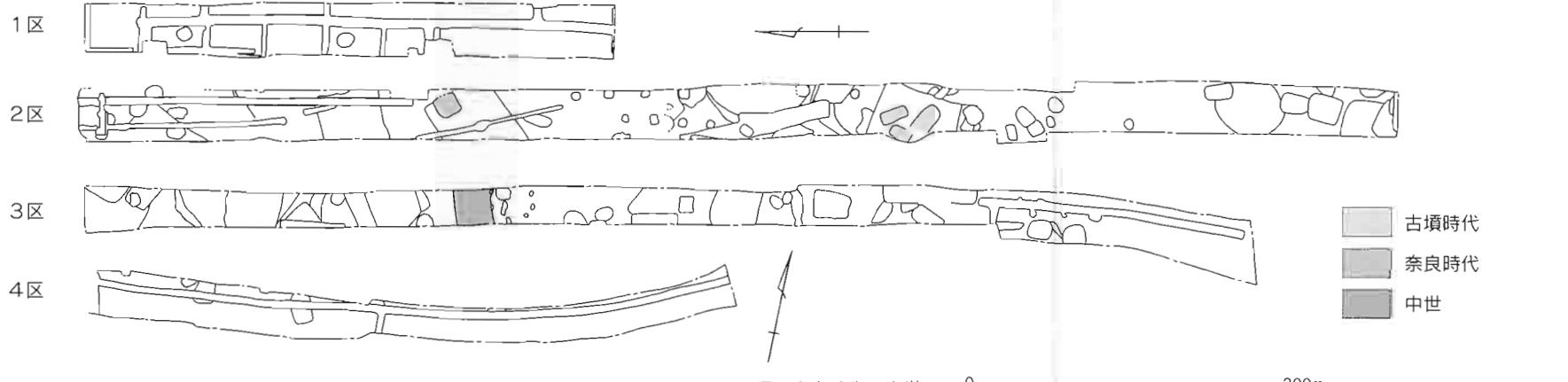
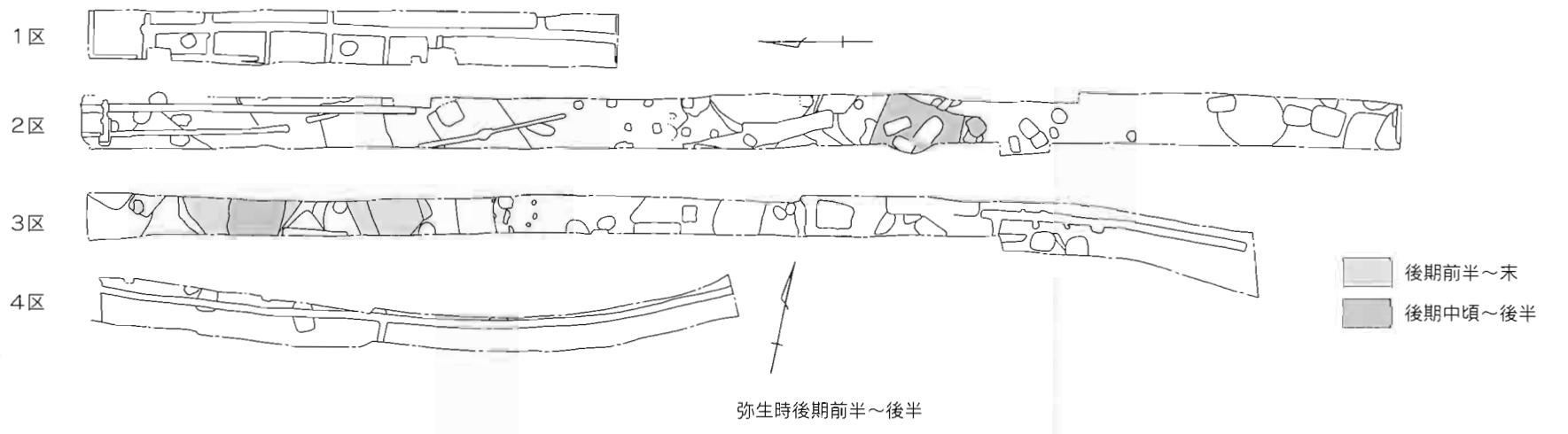
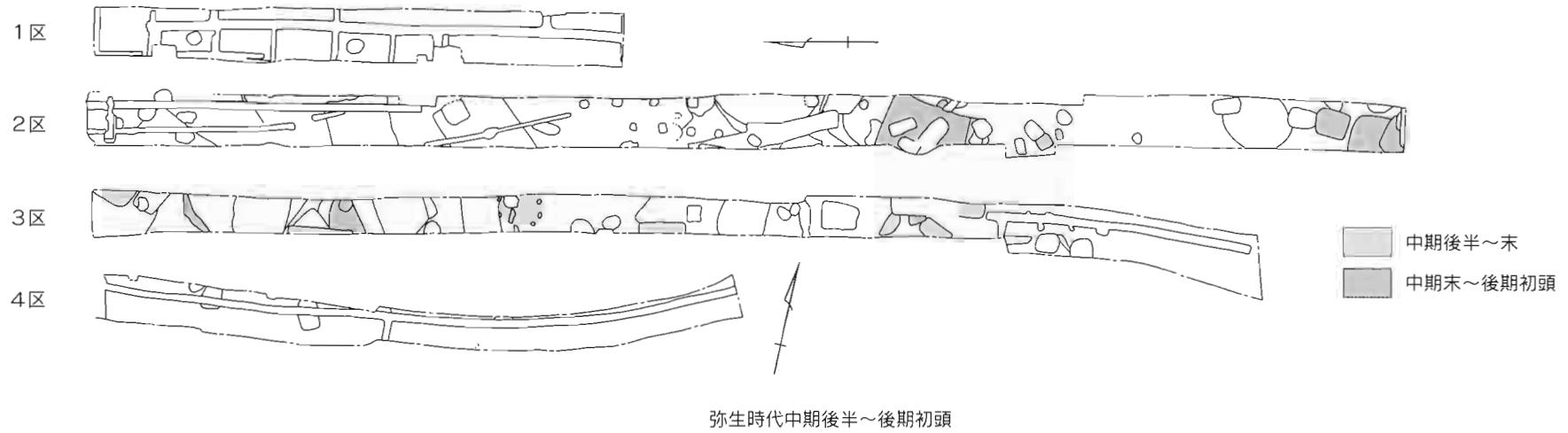
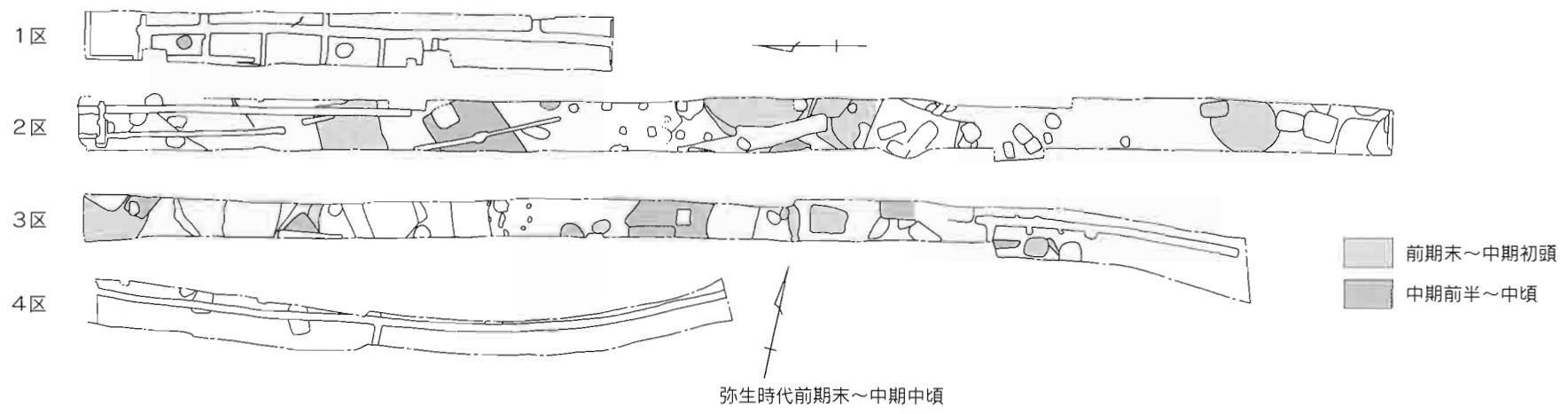
今回の調査で幅約2.7m、深さ70cmの断面形が逆台形を呈した中世の溝がみつかった。溝の埋土中からは瓦器碗、青銅製の笄などが出土した。この瓦器碗は高台を貼り付けている位置が体部への立ち上がり部分に寄っていることや高台の端部が平坦に仕上げられていることから12世紀後半～13世紀前半くらいに位置付けられ、この溝も同時期と考えられる。また、大分県教委の調査区でも12世紀代の墓が発見されており、何らかの関係も窺える。

この時期、日田では大蔵氏が勢力を拡大した時期である。その後、大蔵氏は慈眼山大蔵古城跡を本拠とし、各地に親族や在地氏族を配置して、中世の日田を治めた。その後大蔵氏滅亡後、中世後期になって、大友氏が日田を治めるが、大友家20代目の大友義鑑は領内各地に8人の郡老をおいて、領地支配を行っている。その内の1人、羽野氏が遺跡周辺一帯を支配していたことが資料に残されている。その居城が大字三和字城ノ辻・城脇付近にあったとされており、まさに今回の調査区一帯にあたる。中世前期に大蔵氏が各地に配置した親族や在地氏族の流れを汲む氏族がこの一帯を治めた可能性は充分考えられる。この他、上ノ堀という字名からも城の存在を想起させる。今回検出された溝は台地南側の落ち際にあたり、城を囲む溝として十分に考えることができる。また、出土した遺物の時期は羽野氏が治めていた時期とは異なるものの、中世期を通じて城があったことは十分に考えられる。

後迫遺跡は弥生時代の大集落であることはこれまでの調査で解明されてきている。さらに今回見つかった奈良時代の掘立柱建物跡や中世溝の検出などにより弥生時代以降、断続的にではあるが、各時代の遺構の存在が明らかになってきている。今後の調査にさらなる問題点を提起したといえよう。

＜参考文献＞

- 行時志郎「本村遺跡2次・3次」『平成12年度（2000年度）日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会 2000
坂本嘉弘編『陣ヶ台遺跡』玖珠町文化財調査報告書第9集 玖珠町教育委員会 1999
渋谷忠章他編『宇土遺跡発掘調査報告書』天瀬町教育委員会 1986
長順一郎「一豊後國日田郡一中世村落と武士団」『日田文化』35号 日田市教育委員会 1992
友岡信彦編『後迫遺跡』九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書（18）大分県教育委員会 2001



第89図 時期別遺構変遷図 (1/400)

第1表 出土土器観察表(1)

挿図番号	区名	遺構	種別	器種	法量()は復元径・残存高(cm)				調 整		胎土 a石英 b長石 c角閃石 d雲母 e矽砂粒	焼成	色 調		備 考
					口径	肩部最大径	底径	器高	外 面	内 面			外 面	内 面	
第6図 1	1	1土	弥生	甕			6.3	(3.9)	ハケ、ナデ		b.c	不良	淡黄褐色	淡黄褐色	
第6図 2	1	1土	弥生	高坏		脚径4.4			ミガキ	ミガキ	c.e	良好	赤褐色	暗黄褐色	外面朱
第6図 3	1	一括	弥生	甕			6.0	(3.7)	ハケ、ナデ	指押さえ	a.b.c	やや不良	黒褐色	淡赤褐色	
第6図 4	1	一括	弥生	支脚	6.4		10.4	8.7	指押さえ、ナデ	指押さえ、ナデ	a.c	良好	淡赤褐色	淡赤褐色	
第6図 5	1	一括	弥生	器台			(9.5)	(10.5)	ハケ、ナデ?	ナデ	a.b.c	やや不良	暗黄褐色	暗黄褐色	
第6図 6	1	一括	弥生	壺	(19.2)			(5.7)	ミガキ、ハケ	ハケ?	b.c	良好	暗黄褐色	暗黄褐色	
第6図 7	1	一括	弥生	高坏	(26.2)			(4.4)	ナデ?	ナデ	a.b.c	良好	暗褐色	暗褐色	
第6図 8	1	一括	弥生	甕	(27.8)			(4.8)	ハケ	ナデ	a.b.c	やや不良	淡黑褐色	暗褐色	
第6図 9	1	一括	弥生	甕	(30.0)			(4.2)	ナデ	ナデ	a.b.c	良好	赤褐色	黄褐色	外面朱
第6図 10	1	一括	弥生	甕			(8.4)	(6.2)		指押さえ	b.c	良好	赤褐色	暗茶褐色	
第6図 11	1	一括	弥生	甕			(7.4)	(5.8)	ハケ、ナデ	ハケ	c	やや不良	淡赤褐色	暗褐色	
第6図 12	1	一括	弥生	甕	(7.0)			(5.2)	ハケ、ナデ	ナデ	a.b.c	良好	暗赤褐色	暗褐色	
第6図 13	1	一括	弥生	甕			(6.8)	(5.9)		指押さえ	b.c	やや不良	暗赤褐色	暗褐色	
第6図 14	1	一括	弥生	甕			(8.6)	(3.4)	ミガキ	指押さえ、ナデ	a.b.c	良好	黄褐色	黄褐色	
第6図 15	1	一括	弥生	甕			(10.6)	(4.1)	ナデ、指押さえ	指押さえ	a.b.c	やや不良	黄褐色	暗茶褐色	
第6図 16	1	一括	弥生	甕			(7.6)	(7.7)	ハケ、ナデ		a.c	やや不良	淡赤褐色	淡黄褐色	
第9図 1	2	1住	弥生	鉢?	(19.4)	(18.4)		(5.2)	ハケ、ナデ	ナデ	a	良好	淡暗褐色	黄褐色	突帯
第9図 2	2	1住	弥生	甕				(7.0)	ハケ、ナデ	ミガキ、ナデ	a.b	良好	赤褐色	赤褐色	
第9図 3	2	1住	弥生	甕			(6.4)	(5.8)			b	良好	淡橙色	淡褐色	
第11図 1	2	2住	弥生	高坏				(4.1)	ナデ	ミガキ、ナデ	b	不良	暗黄褐色	暗黄褐色	
第11図 2	2	2住	弥生	壺?	(17.8)			(7.2)	ミガキ、ナデ	ナデ	a.b	良好	暗黄褐色	暗黄褐色	
第11図 3	2	2住	弥生	甕			(6.2)	(3.5)	ナデ		b	良好	暗赤褐色	暗褐色	
第11図 4	2	2住	弥生	甕			(5.8)	(3.2)			a.b.c	良好	黄褐色	暗褐色	
第14図 1	2	3住	弥生	甕			(3.9)	ナデ	ナデ	b.c	良好	暗褐色	淡黑褐色	沈線、突帯	
第14図 2	2	3住	弥生	甕			(5.0)	ナデ?	ナデ?	a.e	やや不良	淡赤褐色	淡赤褐色	刻目口縁、刻目突帯	
第14図 3	2	3住	弥生	甕			(4.5)	ナデ	ナデ	b.c	やや不良	暗褐色	黄褐色	刻目口縁、刻目突帯	
第14図 6	2	4住	弥生	甕			(1.9)	ナデ	ナデ	b.e	良好	淡褐色	淡褐色		
第14図 7	2	4住	弥生	器台			(12.6)	(5.6)			a.b.c	やや不良	淡赤褐色	淡赤褐色	
第14図 8	2	4住	弥生	器台			(10.4)	(4.6)	ハケ、ミガキ、ナデ	ナデ、ミガキ	a.b	良好	暗茶褐色	暗茶褐色	スカシあり
第16図 1	2	5住	弥生	甕	23.8	23.5	9.5	26.0	ハケ、ナデ	ナデ、ケズリ?	b.c.e	良好	淡黄褐色	淡茶褐色	刻目口縁、スス付着
第16図 2	2	5住	弥生	壺	11.0	14.4	6.6	17.5	ハケ、 ^{滑脱} 押さえ、ナデ	ケズリ、ナデ	b.c.e	良好	橙褐色	淡橙褐色	
第16図 3	2	5住	弥生	甕			(9.6)	(3.3)	ハケ、指押さえ	ミガキ	b	良好	暗黄褐色	暗褐色	
第18図 1	2	6住	弥生	甕	(25.6)			(8.2)	ハケ、ナデ	ナデ	a.e	不良	淡黄褐色	淡黄褐色	内面に2条の沈線
第18図 2	2	6住	弥生	甕	(25.0)			(9.6)	ハケ、ナデ		b.c.e	良好	茶褐色	淡茶褐色	
第18図 3	2	6住	弥生	甕	(27.6)	(25.4)		(10.5)			b	不良	淡黄褐色	淡黄褐色	
第18図 4	2	6住	弥生	壺	(8.6)	(11.8)		(5.5)	ナデ	ナデ	a.b	良好	淡褐色	淡褐色	スス付着
第18図 5	2	6住	弥生	甕			(8.4)	(7.3)	ハケ		a.b	やや不良	黄褐色	暗褐色	
第18図 6	2	6住	弥生	甕			6.2	(5.6)			b	不良	淡赤褐色	淡褐色	
第18図 7	2	6住	弥生	甕			5.8	(6.1)	ハケ、ナデ	ミガキ	a.b	やや不良	黄褐色	暗褐色	スス付着
第22図 1	2	7住	弥生	甕	(28.2)	(30.0)		(18.8)	ハケ、ナデ	ナデ	b.c.e	良好	暗茶褐色	淡黄褐色	
第22図 2	2	7住	弥生	甕	(31.0)	(31.2)		(17.8)	ナデ?ハケ?	^{滑脱} ナデ?ハケ?	b.c	良好	淡橙褐色	淡橙褐色	
第22図 3	2	7住	弥生	甕			(8.8)	(2.5)	ナデ	ナデ、指押さえ	a.b.c	良好	暗褐色	暗褐色	
第24図 1	2	8住	弥生	甕	(36.0)			(10.9)	ハケ、指押さえ	ナデ	b	良好	暗茶褐色	暗茶褐色	
第24図 2	2	8住	弥生	甕			7.6	14.5	ハケ	ミガキ、ナデ	b.c.e	良好	茶褐色	橙褐色	
第24図 3	2	8住	弥生	甕			(6.7)	(10.2)		指押さえ、ナデ	c.e	良好	淡黄褐色	茶褐色	
第25図 1	2	9住	弥生	甕	(26.4)			(7.9)	ハケ?ナデ?	ナデ	a.c	良好	暗黄褐色	暗黄褐色	
第25図 2	2	9住	弥生	甕	(24.8)	(23.0)		(12.6)	ハケ?	ナデ	b.c.e	良好	淡灰褐色	灰黄色	
第25図 3	2	9住	弥生	甕			(11.0)	(4.3)	ハケ、ナデ	指押さえ	b.d	良好	暗褐色	暗褐色	
第25図 4	2	9住	弥生	甕			(5.4)	(3.9)	ハケ		b.d	やや不良	暗褐色	淡黑褐色	
第28図 1	2	3豊	弥生	甕			(1.3)	ナデ	ナデ	a.b	やや不良	黄褐色	黄褐色		
第28図 2	1	4豊	土師	蓋	(16.0)			3.7	ヘラケズリ、ナデ	ナデ	a.c.e	良好	明赤褐色	明赤褐色	
第28図 3	2	4豊	土師	蓋	(15.2)			(2.9)	ヘラケズリ、ナデ	ナデ	c.e	良好	淡褐色	淡褐色	
第28図 4	2	4豊	須恵	坏身	(12.2)		(8.4)	4.6	^{目輪ナデ、} ^{斜面ヘラギリ未調査}	^{目輪ナデ、不整肩肩ナデ}	b	良好	灰黑色	灰黑色	
第28図 5	2	7豊	弥生	壺			(24.9)		ハケ、ミガキ	指押さえ、ナデ	b.c.e	良好	茶褐色	茶褐色	頸部に突帯
第28図 6	2	7豊	弥生	甕			6.4	(8.8)	ハケ、 ^{目輪} 指押さえ	ミガキ	a.b	良好	赤褐色	暗黄褐色	スス付着
第28図 8	2	8豊	弥生	甕			(5.7)	ハケ、ナデ	ハケ?	b.c	不良	淡黄褐色	淡黄褐色		
第28図 9	2	8豊	弥生	甕			(8.5)	ハケ、ナデ	ナデ?	a.b.c	良好	暗褐色	暗褐色	突帯	

第2表 出土土器観察表(2)

挿図番号	区名	遺構	種別	器種	法量()は復元径・残存高(cm)			調整		胎土 a石英 b長石 c角閃石 d雲母 e細砂粒	焼成	色調		備考	
					口径	腹部最大径	底径	器高	外 面	内 面		外 面	内 面		
第28図 10	2	9堅	弥生	甕				(8.4)	(5.7) ハケ		a.b	良好	淡褐色	淡褐色	内面剥離
第28図 11	2	11堅	弥生	甕				(4.5)	ハケ		a.b	やや不良	淡黒褐色	淡赤褐色	外面に沈線
第28図 12	2	11堅	弥生	甕				(3.8)		ハケ	a.b	良好	淡赤褐色	淡赤褐色	口縁に刻目
第28図 13	2	11堅	弥生	甕				(2.3)	ハケ		b	やや不良	淡黄褐色	淡黄褐色	
第28図 14	2	11堅	弥生	甕	(19.6)			(3.5)			a	不良	淡黄褐色	淡黄褐色	
第28図 15	2	11堅	弥生	甕				(6.2)	(3.5) ハケ、ナデ	指押さえ	a.b.c	良好	淡暗褐色	明褐色	
第28図 16	2	11堅	弥生	甕				(6.4)	(2.1) ハケ、ナデ		a.b	良好	茶褐色	茶褐色	
第28図 18	2	12堅	弥生	壺	(16.2)			(8.3)	ナデ	指押さえ、ナデ	b.c.e	良好	赤褐色	淡橙色	
第28図 19	2	12堅	弥生	高坏	(17.8)			(5.6)	ハケ	ミガキ	a.b	良好	暗赤褐色	暗赤褐色	全面に朱
第28図 20	2	12堅	弥生	高坏				(14.8)	ナデ	ナデ	c.e	良好	淡檀褐色	淡檀褐色	
第28図 21	2	12堅	弥生	甕				(3.3)	ナデ	ナデ	a	やや不良	淡黄褐色	淡黄褐色	朱一部残存
第28図 22	2	12堅	弥生	甕				(6.6)	(3.4) ナデ	指押さえ	a.e	良好	暗褐色	暗褐色	
第28図 23	2	12堅	弥生	支脚				(8.2)	6.8 ケズリ	ケズリ、指押さえ	a.b.c	良好	暗赤褐色	暗赤褐色	
第28図 25	2	13堅	弥生	甕					ナデ	ナデ	a.b	良好	暗黄褐色	暗黄褐色	胸部、突帯
第28図 26	2	13堅	弥生	甕				(8.8)	(4.7) ハケ、ナデ		a.b	良好	赤褐色	暗褐色	
第28図 27	2	13堅	弥生	甕				(9.1)	(6.5) ハケ、ナデ	指押さえ	a.b	良好	茶褐色	暗褐色	
第28図 28	2	13堅	弥生	器台	(14.4)			(13.4)	ハケ、指押さえ、ナデ	ハケ、指押さえ、ナデ	b.c.e	良好	淡檀褐色	淡灰褐色	
第33図 1	2	2土	弥生	甕				(4.3)	ナデ	ミガキ、ナデ	c	良好	暗褐色	暗黄褐色	
第33図 2	2	2土	弥生	甕	(17.4)			(3.0)	ナデ	ナデ	a.b	不良	黄褐色	黄褐色	
第33図 3	2	2土	弥生	甕				(8.4)	(4.9) ハケ?ナデ?	ナデ?	a.b.c	やや不良	淡赤褐色	黄褐色	
第33図 4	2	2土	弥生	甕				(8.0)	(5.3) ハケ、ナデ	ナデ?指押さえ	a.b.c	やや不良	暗赤褐色	暗黄褐色	
第33図 5	2	2土	弥生	高坏				(16.8)	ミガキ	指押さえ、ナデ	b.c.e	良好	暗赤褐色	淡茶褐色	外面朱
第33図 6	2	3土	弥生	蓋	6.8			(11.7)	ハケ、指押さえ	ナデ	b.c.e	良好	暗赤褐色	明黄褐色	蓋上ケズリ、内側に黒斑
第33図 7	2	3住	弥生	甕	(28.2)			(9.0)	ハケ、ナデ	ナデ	b.c.e	良好	茶褐色	茶褐色	スス付着
第33図 8	2	3土	弥生	甕	(26.4)	(27.6)		(21.5)	ハケ、ナデ	指押さえ、ナデ	b.c.e	良好	淡黄褐色	灰褐色	突帯
第33図 9	2	3土	弥生	甕	(23.7)	(23.7)	7.6	24.5	ハケ	ナデ?	b.c.e	良好	明檀褐色	明檀褐色	
第33図 10	2	4土	弥生	甕				8.3	(8.8) ハケ	指押さえ、ナデ	b.c.e	良好	淡黄褐色	暗黄褐色	底面ナデ、背面に黒斑
第33図 11	2	6土	弥生	甕	(17.2)	(16.8)		(6.3)	ハケ、ナデ	ナデ	a.b	良好	暗黄褐色	暗黄褐色	
第33図 12	2	6土	弥生	鉢	(31.0)			(11.1)	ハケ、指押さえ	ハケ、指押さえ	a.b.c	良好	淡黄褐色	淡黄褐色	
第33図 13	2	6土	弥生	甕	(27.2)	(28.4)		(11.8)	ハケ、ナデ	指押さえ、ナデ?	b.c.e	良好	淡黄褐色	淡黄褐色	沈線
第33図 14	2	6土	弥生	甕	(17.4)			(7.1)	ミガキ、ナデ?	ナデ?	a.d	良好	明褐色	明褐色	口縁に刻目
第33図 15	2	6土	弥生	甕				(10.0)	(8.0) 指押さえ	ミガキ	b	やや不良	黄褐色	焦褐色	
第34図 17	2	7土	弥生	甕				(6.2)	ハケ、ナデ	ナデ	a.c	不良	淡黄褐色	淡黄褐色	
第34図 18	2	7土	弥生	甕				(5.1)	ナデ	ナデ	b	良好	暗褐色	黄褐色	
第34図 19	2	9土	弥生	甕				(8.8)	(10.2) ハケ、指押さえ	ナデ?	b.c.e	良好	茶褐色	淡檀褐色	
第34図 20	2	9土	弥生	甕				8.6	(11.0) ハケ		b.c.e	良好	淡茶褐色	淡黑褐色	スス付着
第34図 21	2	10土	弥生	甕				(12.0)	(3.0)		b.d	やや不良	淡黄褐色	暗黄褐色	底面にハケ
第34図 22	2	11土	弥生	甕				(7.9)	(6.5)		a.b	やや不良	暗褐色	暗褐色	
第34図 23	2	14土	弥生	甕				(4.8)	(4.9) ハケ、ナデ		b.c	不良	赤褐色	赤褐色	
第34図 24	2	14土	弥生	壺	(27.6)			(9.3)			b.c.e	良好	淡黄褐色	淡黄褐色	
第34図 26	2	15土	弥生	甕				(5.0)	(9.0) ハケ?ナデ?	ミガキ	a.b.c	良好	暗黄褐色	暗黄褐色	
第34図 27	2	16土	弥生	甕				(4.3)	ハケ、ナデ	ナデ	b.c	良好	暗褐色	黄褐色	
第34図 28	2	16土	弥生	甕					ハケ		a.b	良好	淡黄褐色	淡黄褐色	
第34図 29	2	17土	弥生	甕				(5.2)	(3.8)		a.c	やや不良	黄褐色	黄褐色	
第34図 30	2	18土	弥生	甕	(19.2)			(7.0)	ハケ、ナデ		b	やや不良	暗褐色	暗褐色	工具痕あり
第34図 31	2	18土	弥生	甕	(23.3)			(5.0)			b.c	不良	淡黄褐色	淡黄褐色	スス付着
第34図 32	2	18土	弥生	甕	(22.6)			(7.0)	ナデ		b	やや不良	黄褐色	焦褐色	突帯、スス付着
第34図 33	2	19土	弥生	甕	(27.6)			(4.2)			a	やや不良	淡黄褐色	淡黄褐色	朱一部残存
第34図 34	2	19土	弥生	甕	(31.6)			(6.0)	ナデ	ナデ	a	不良	黄褐色	黄褐色	頂部を工具でケズリ
第34図 35	2	19土	弥生	甕				(6.2)	(4.4) ハケ、ナデ	ナデ	a.b	良好	暗黄褐色	暗黄褐色	
第34図 36	2	19土	弥生	甕				(7.8)	(3.8)		a.b	不良	黄褐色	暗褐色	底面にハケ
第34図 37	2	19土	弥生	蓋	(4.4)			(3.7)	ハケ	指押さえ	a.d	良好	淡褐色	淡褐色	
第34図 38	2	19上	弥生	壺?	(10.8)			(4.7)	ハケ	ナデ	a	やや不良	黄褐色	黄褐色	
第34図 39	2	20土	弥生	甕				(3.3)			a.b	良好	赤褐色	赤褐色	突帯
第34図 40	2	20土	弥生	甕				(5.0)	ハケ、ナデ		a	不良	淡黄褐色	淡黄褐色	
第34図 41	2	21土	弥生	甕				(2.5)			a	不良	淡黄褐色	淡黄褐色	
第34図 42	2	21土	弥生	甕				(6.2)	(2.9)	指押さえ	a.b	良好	淡赤褐色	暗赤褐色	

第3表 出土土器観察表(3)

挿図番号	区名	遺構	種別	器種	法量()は復元径・残存高(cm)				調整		胎土 a.石英 b.長石 c.角閃石 d.雲母 e.磁鉄鉱	焼成	色調		備考	
					口径	肩部最大径	底径	器高	外 面	内 面			外面	内面		
第34図 43	2	21土	弥生	甕		(11.6)	(6.5)	指押さえ		a.b.d	良好	暗褐色	黄褐色	甕棺?、スヌ付着		
第34図 44	2	21土	弥生	甕		(20.0)			ハケ	b	良好	淡赤褐色	茶褐色	突帯		
第34図 46	2	24土	弥生	甕	(14.8)	(14.8)		(8.2)	ハケ	a.b	やや不良	赤褐色	赤褐色			
第34図 47	2	24土	弥生	甕		(22.6)	(20.0)	(7.9)		a.d	不良	淡黄褐色	淡黄褐色			
第34図 48	2	24土	弥生	甕				(4.0)		a.b	やや不良	黒褐色	黄褐色	朱残存、突帯?		
第35図 49	2	24土	弥生	甕	(6.4)			(5.3)		b	良好	赤褐色	淡黒褐色			
第35図 50	2	25土	弥生	壺	(27.5)			(9.8)	ナデ	ナデ	b.c.e	良好	暗茶褐色	茶褐色	頸部に突帯	
第35図 51	2	25土	弥生	甕			(10.2)	(2.0)	指押さえ	指押さえ	a.b	良好	黄褐色	黄褐色		
第35図 53	2	25土	弥生	甕			7.2	(7.2)	ナデ	指押さえ、ナデ	b.c.e	良好	暗黒褐色	茶褐色	底面ナデ	
第35図 54	2	26土	弥生	壺	(24.0)			(9.8)		ハケ?	a.b	不良	淡黄褐色	淡黄褐色		
第35図 55	2	26土	弥生	甕	(26.8)			(3.0)	ハケ、ナデ	ナデ	a.c	やや不良	淡黄褐色	淡黄褐色	沈線	
第35図 56	2	27土	弥生	甕				(2.4)	ナデ	ナデ	a.b	やや不良	淡黄褐色	淡黄褐色		
第35図 57	2	28土	弥生	甕	(8.0)			(2.2)			a.b	不良	赤褐色	淡黒褐色		
第39図 1	2	1甕棺	弥生	甕棺	(33.6)	[65.0]	11.0	78.9	指押さえ、ナデ	指押さえ、ナデ	b.c.e	良好	茶褐色	淡茶褐色	口縁下部に1条の突部、 肩部中位に2条の突部	
第47図 1	2	P225	弥生	甕	(21.2)	(20.2)		(16.2)	ハケ、ナデ	ケズリ、ナデ	b.c.e	良好	灰褐色	淡灰褐色		
第47図 2	2	一括	弥生	甕	(21.6)			(11.5)	ハケ、ナデ	ミガキ	b.c.e	良好	淡黄褐色	淡赤褐色	肩目口縁、2条の肩目突 部、肩部に貼付文様	
第47図 3	2	一括	弥生	甕	(29.1)			(9.6)	ナデ、ハケ	指押さえ、ナデ	b.c.e	良好	淡橙褐色	淡橙褐色	肩目口縁、刻目口縁	
第47図 4	2	一括	弥生	高坏	(27.0)			(5.3)	ハケ、ナデ	ナデ、ミガキ	b	良好	赤褐色	赤褐色	全面に朱	
第47図 5	2	一括	弥生	壺				(5.6)			a.b	良好	暗黄褐色	暗黄褐色	一部朱残存	
第47図 6	2	P275	弥生	器台	(10.2)		(12.0)	17.2	ハケ、ナデ	指押さえ、ナデ	b.c.e	良好	淡黄褐色	淡灰褐色		
第47図 7	2	一括	弥生	甕			(7.2)	(7.7)	ハケ、ナデ	ナデ	b.c.e	やや不良	赤褐色	暗茶褐色		
第50図 1	3	1住	弥生	甕				(2.8)	ナデ	ナデ	b	良好	黄褐色	明赤褐色		
第50図 2	3	1住	弥生	甕			7.0	(6.7)	ハケ、ナデ		b	良好	淡褐色	黑褐色	底面ナデ	
第50図 3	3	2住	弥生	甕				(4.8)	ナデ	ミガキ、ナデ	b.c	良好	暗黄褐色	暗黄褐色		
第50図 4	3	2住	弥生	甕				(4.0)	ナデ?	ナデ?	a.b.c	やや不良	淡赤褐色	淡赤褐色		
第50図 5	3	2住	弥生	甕			(6.2)	(4.7)	ハケ、ナデ		b.c	良好	暗褐色	暗黄褐色		
第52図 1	3	3住	弥生	壺	17.5	[30.0]		(30.8)	ハケ、ナデ	指押さえ、ナデ	a.c.e	良好	淡橙褐色	淡茶褐色		
第52図 2	3	3住	弥生	甕	(17.6)			(13.2)	ハケ、ナデ	ハケ、ナデ	b.c	良好	淡黄褐色	淡茶褐色		
第52図 3	3	3住	弥生	壺	18.0			(10.0)	ハケ、ナデ	ハケ、ナデ	a.b	良好	淡黄褐色	淡赤褐色	スヌ付着	
第52図 4	3	3住	弥生	甕			(4.8)	(12.0)	ハケ	ハケ	a.b	良好	暗黄褐色	暗黄褐色		
第52図 5	3	3住	弥生	器台	10.3		(13.4)	16.8	タタキ、ナデ	指押さえ、ナデ	b.c.e	良好	淡橙褐色	淡黄褐色		
第52図 6	3	3住	弥生	器台			(13.8)	(10.5)	指押さえ		a.b	良好	淡茶褐色	淡茶褐色		
第54図 1	3	4住	弥生	甕	(22.6)			(4.2)	ハケ、ナデ	ナデ?	a.b.c	やや不良	淡墨褐色	淡橙色		
第54図 2	3	4住	弥生	甕				(4.3)	ハケ、ナデ	ミガキ、ナデ	a.c	良好	暗褐色	暗褐色		
第54図 3	3	4住	弥生	甕			(6.8)	(4.3)	ミガキ	ナデ、指押さえ	b.c	良好	赤褐色	黄褐色		
第54図 4	3	4住	弥生	甕			(5.8)	(1.5)	ナデ		b.c	良好	淡黒褐色	淡黒褐色		
第56図 1	3	5住	弥生	甕	(28.0)	(24.4)		(11.2)	ハケ、ナデ	ナデ	a.b	良好	暗黄褐色	暗黄褐色	朱一部残存	
第56図 2	3	5住	弥生	甕				(6.7)	ハケ、ナデ	ナデ	a.b.c	不良	淡黄褐色	淡黄褐色	突帯	
第56図 3	3	5住	弥生	甕			7.0	(5.8)	ハケ、ナデ		a.b	良好	暗赤褐色	暗褐色		
第56図 4	3	5住	弥生	甕	(23.6)			(10.5)	ハケ、ナデ	ナデ	a.b.c	やや不良	黄褐色	黄褐色	一部朱残存	
第56図 5	3	5住	弥生	壺	(33.4)	[肩部(22.4)]		(13.9)	ミガキ、ナデ	ミガキ、ナデ	c.e	良好	淡橙褐色	淡橙褐色		
第56図 6	3	5住	弥生	甕	(41.4)			(13.5)	ナデ		b.c.e	良好	淡黄灰色	淡黄灰色	突帯	
第56図 7	3	5住	弥生	甕	(31.8)	(29.4)		(31.0)	ハケ、ナデ	ミガキ、ナデ	b.e	良好	淡黒褐色	淡褐色		
第56図 9	3	5住	弥生	甕	(29.5)			(5.7)	ナデ	ナデ	a.b	不良	淡黄褐色	淡黄褐色		
第56図 8	3	5住	弥生	壺	(19.2)			(5.6)	ハケ、ナデ	ナデ	a.b	やや不良	淡黄褐色	暗褐色		
第56図 10	3	5住	弥生	甕			7.0	(18.3)	ハケ		c.e	良好	淡灰褐色	淡灰褐色	底面ナデ	
第57図 1	3	6住	弥生	甕	(26.2)	(23.0)		(7.1)	ハケ、ナデ	ミガキ、ナデ	b.c	良好	明褐色	明褐色		
第57図 2	3	6住	弥生	甕				(3.4)	ハケ?ナデ?	ナデ?	b.e	良好	淡褐色	淡褐色		
第57図 3	3	6住	弥生	甕			7.0	(8.1)	ハケ、ナデ		b.d	良好	淡黄褐色	淡茶褐色		
第59図 1	3	7住	弥生	甕			(9.5)	(5.8)	ハケ、ナデ		a.b.c	やや不良	暗赤褐色	淡茶褐色		
第59図 2	3	7住	弥生	甕			(9.2)	(3.0)	ハケ、ナデ		a.b	良好	赤褐色	暗褐色		
第59図 3	3	7住	弥生	甕			6.8	(10.0)	ハケ	ミガキ、ハケ	b	やや不良	赤褐色	茶褐色		
第61図 1	3	8住	弥生	甕				(7.3)	ハケ、ナデ	ミガキ	a.b	良好	黄褐色	黄褐色		
第61図 2	3	8住	弥生	甕			(7.6)	(4.1)	ハケ	指押さえ	a.b	やや不良	淡赤褐色	淡黒褐色	底面にハケ	
第61図 3	3	8住	弥生	甕			(7.0)	(4.8)	ハケ、指押さえ		b.c	やや不良	暗赤褐色	暗茶褐色	底面ハケ	
第61図 4	3	8住	弥生	甕			(7.1)	(3.2)	ミガキ	ナデ	b.c	良好	暗赤褐色	淡赤褐色		
第63図 1	3	9住	弥生	甕	(24.0)			(6.5)	ハケ、ナデ	ナデ	a.b	良好	黄褐色	黄褐色		

第4表 出土土器観察表(4)

押図番号	区名	遺構	種別	器種	法量()は復元径・残存高(cm)				調整		胎土(a石英 b長石c角閃石 d雲母e細砂粒)	焼成	色調		備考	
					口径	腹部最大径	底径	器高	外 面	内 面			外面	内面		
第63図 2	3	9住	弥生	甕				(6.4)	(2.6)		指押さえ	a.b.c	不良	淡黒褐色	淡黒褐色	
第63図 1	3	10住	弥生	甕				(5.3)	ナデ			b.c	やや不良	暗黄褐色	淡黄褐色	
第63図 2	3	10住	弥生	高坏				(2.7)				b.c	良好	暗褐色	暗褐色	
第63図 3	3	10住	弥生	甕	(22.4)			(4.0)		ナデ		b.d	やや不良	淡黄褐色	淡黄褐色	口唇部に沈線
第63図 4	3	10住	弥生	甕	(27.2)			(6.1)	ハケ、ナデ			b	やや不良	淡褐色	淡黄褐色	
第63図 5	3	10住	弥生	甕				(7.4)	(6.2)	ハケ、ナデ	ハケ	a.b.c	やや不良	淡黄褐色	淡黄褐色	
第63図 6	3	10住	弥生	甕				(8.8)	(6.5)	ハケ?ナデ?		b.c	不良	淡赤褐色	淡黄褐色	スス付着
第63図 7	3	10住	弥生	器台	(10.6)			(11.6)	17.1			a.b	不良	淡橙色	淡橙色	
第63図 8	3	10住	弥生	器台				(8.8)	(6.9)		指押さえ	a.b.c	不良	淡赤褐色	淡赤褐色	
第68図 1	3	11住	弥生	甕	(27.2)			(8.3)	ハケ、ナデ	ミガキ、ナデ		b.c	良好	淡明褐色	淡暗褐色	
第68図 2	3	11住	弥生	甕				(8.4)	(4.5)	ハケ、ナデ	ナデ	c.e	不良	淡黄褐色	淡黄褐色	底面ハケ
第68図 3	3	11住	弥生	甕				(6.6)	(3.2)	ハケ	ナデ	a.b.c	良好	暗褐色	淡赤褐色	
第68図 4	3	11住	弥生	甕				(11.0)	(3.6)	ハケ、ナデ	ミガキ	b.c	良好	淡黒褐色	淡黒褐色	
第68図 5	3	11住	弥生	器台	(12.4)			(10.2)	17.9	ハケ、指押さえ	ハケ、ナデ	a.b	不良	黄橙色	黄橙色	
第68図 6	3	11住	弥生	蓋				6.2	(4.2)	ハケ、ナデ	指押さえ、ナデ	b.c	やや不良	淡黄褐色	淡黄褐色	
第68図 7	3	11住	弥生	ミニチア				3.6	(3.7)	ケズリ	ハケ?	a.b	やや不良	淡黄褐色	暗灰色	
第68図 8	3	11住	弥生	器台				(9.4)	(10.8)	ハケ	ハケ	a.b	不良	明黄褐色	明黄橙色	
第69図 1	3	12住	弥生	甕				(9.0)	(5.9)	ハケ、ナデ		a.b.c	やや不良	黄褐色	淡暗褐色	
第69図 2	3	12住	弥生	甕				(6.2)	(7.2)			b.c	不良	赤褐色	暗褐色	
第71図 1	3	13住	弥生	甕				(6.2)	ハケ、ナデ	ナデ		a.c	不良	淡茶褐色	淡茶褐色	沈線
第71図 2	3	13住	弥生	甕				(7.8)	(7.4)	ナデ		a.b.c	やや不良	淡赤褐色	淡黄褐色	
第71図 3	3	13住	弥生	甕				7.2	(4.0)	ハケ?ナデ?	ナデ?	a.b.c	やや不良	淡赤褐色	淡茶褐色	
第71図 4	3	13住	弥生	甕				6.3	(5.2)	ハケ、ナデ	ハケ、ナデ	b.c	良好	淡赤褐色	淡茶褐色	
第74図 1	3	14住	弥生	甕	(27.6)			(7.1)	ハケ、ナデ	ナデ		b.c.e	良好	淡黄褐色	淡黄褐色	
第74図 2	3	14住	弥生	甕	(28.6)	(28.0)		(18.7)	ハケ、ナデ	ナデ		b.c.e	良好	暗灰褐色	淡灰褐色	
第74図 3	3	14住	弥生	甕				(5.8)	ハケ、ナデ	ナデ		b	良好	淡黄褐色	淡黄褐色	
第74図 4	3	14住	弥生	甕				6.8	(9.0)	ハケ、ナデ	ミガキ	b.c.e	良好	淡黄褐色	暗褐色	
第74図 5	3	14住	弥生	甕	21.2	19.0	7.4	23.1	ハケ、ナデ	ハケ、ナデ	a.b	やや不良	暗褐色	淡赤褐色	底面に一部ハケ	
第74図 6	3	14住	弥生	高坏				(7.7)	ミガキ	ナデ		c.d	良好	晴赤褐色	暗赤褐色	
第76図 1	3	1堅	弥生	甕	(29.2)			(3.8)	ナデ	ナデ		a.c	やや不良	淡黄褐色	淡黄褐色	
第76図 2	3	1堅	弥生	甕	(22.2)			(6.5)	ハケ、ナデ			a.b.c	やや不良	暗褐色	淡赤褐色	
第76図 3	3	1堅	弥生	甕				5.8	(3.4)	ナデ	指押さえ	c.d	やや不良	淡明赤褐色	淡明赤褐色	
第76図 4	3	1堅	弥生	器台				9.8	(12.5)	ハケ、ナデ	指押さえ、ナデ	a.b.c	やや不良	淡赤褐色	淡赤褐色	
第76図 5	3	2堅	弥生	甕				(4.3)	ハケ、ナデ	ナデ		a.c	良好	暗褐色	淡黄褐色	
第76図 6	3	2堅	弥生	甕				(3.5)	ハケ、ナデ			a.e	やや不良	淡褐色	淡褐色	沈線、突蒂
第76図 7	3	2堅	弥生	甕				(5.8)	(7.6)	ハケ、ナデ	指押さえ	b.c	良好	黄褐色	黑褐色	
第76図 8	3	2堅	弥生	蓋				(6.6)	(4.6)	ハケ、ナデ	ケズリ?	c	良好	淡赤褐色	淡赤褐色	
第76図 9	3	3堅	弥生	甕				(6.0)	ハケ、ナデ	ナデ		b.e	良好	暗赤褐色	暗黄褐色	刻目口縁、刻目突蒂
第76図 10	3	3堅	弥生	壺				(4.7)	ナデ	ミガキ、ナデ	a.b	良好	明褐色	明褐色	刻目口縁、沈線	
第76図 11	3	3堅	弥生	壺		16.0		(14.3)	ミガキ			a.b.c	良好	茶褐色	明茶褐色	重蘿に沈線、羽状文、弧文
第76図 12	3	3堅	弥生	甕				(7.8)	(2.3)	ナデ		a.b	やや不良	明褐色	暗褐色	スス付着
第76図 13	3	3堅	弥生	甕				(7.8)	(3.4)	ハケ	ハケ?	b.c	不良	暗茶褐色	暗茶褐色	
第76図 14	3	4堅	弥生	甕				(3.8)	ナデ	ナデ		b.e	良好	暗赤褐色	暗黄褐色	刻目口縁、刻目突蒂
第76図 15	3	4堅	弥生	甕				(3.1)	ナデ			b	良好	黑褐色	黄褐色	
第76図 16	3	5堅	弥生	甕				(4.0)				a.b.c	不良	淡黄褐色	淡黄褐色	
第76図 17	3	5堅	弥生	甕				(3.2)	ナデ、指押さえ	ナデ		a.b	良好	黑褐色	暗褐色	
第76図 18	3	5堅	弥生	甕				(3.7)	ハケ、ナデ	ナデ		b.c	良好	淡黑褐色	淡黑褐色	
第76図 19	3	5堅	弥生	甕				(2.6)	ナデ	ナデ		a.c	やや不良	暗褐色	暗褐色	一部朱残存
第76図 20	3	5堅	弥生	蓋				(5.6)	(4.8)			a	不良	淡黄褐色	淡黄褐色	一部朱残存
第61図 1	3	1土	弥生	壺	5.5	6.8	3.3	10.2	ハケ、ナデ			b.c	良好	暗茶褐色	暗茶褐色	
第62図 2	3	1土	弥生	甕				(3.8)	ナデ?			a.b.c	やや不良	淡赤褐色	淡赤褐色	刻目突蒂
第63図 3	3	1土	弥生	甕	(7.2)			(4.2)	ハケ、ナデ	ナデ		a.b.c	良好	赤褐色	暗褐色	
第64図 4	3	2土	弥生	甕				(9.6)	(4.7)	ナデ?		b.c.d	不良	黄褐色	黄褐色	底面ハケ
第65図 6	3	3土	弥生	甕	(15.2)			(5.0)	ハケ、ナデ	ミガキ、ナデ		a.e	良好	淡橙色	淡橙色	
第66図 7	3	3土	弥生	甕	(28.4)			(4.0)	ナデ	ナデ		a.b	良好	暗黄褐色	暗褐色	スス付着
第67図 8	3	3土	弥生	甕	(27.6)	(28.4)		(13.0)	ケズリ、ナデ	ハケ、ナデ		b.c.e	良好	茶褐色	淡茶褐色	
第68図 9	3	3土	弥生	甕				(4.4)	ハケ、ナデ	ナデ		b.c	良好	暗褐色	淡黄褐色	甕部に粘土紐貼付?

第5表 出土土器観察表(5)

掲出番号	区名	遺構	種別	器種	法量()は復元径・残存高(cm)				調整		胎土 a石英 b長石 c角閃石 d雲母 e鈣砂粒)	焼成	色調		備考	
					口径	側部最大径	底径	器高	外 面	内 面			外 面	内 面		
第69図 10	3	3土	弥生	甕			6.4	(3.1)	ハケ、ナデ	指押さえ	a.b	良好	明褐色	明褐色		
第70図 11	3	3土	弥生	甕			(5.6)	(3.5)	ナデ		a.c	良好	淡茶褐色	黑褐色		
第71図 13	3	4土	弥生	甕	(24.2)	(23.8)		(6.9)	ハケ、ナデ	ミガキ、ナデ	a.b	良好	黑褐色	淡暗褐色		
第72図 14	3	5土	弥生	甕				(1.9)	ナデ?	ナデ?	a.c	やや不良	暗褐色	褐色		
第73図 15	3	5土	弥生	甕			(10.6)	(2.3)	ナデ?	ナデ?	a.c	やや不良	黄褐色	黄褐色		
第74図 16	3	5土	弥生	高坏				(5.0)	ミガキ、ハケ		a.b.	やや不良	茶褐色	茶褐色	内面にシボリ痕	
第75図 17	3	6土	弥生	甕	(28.2)			(4.1)	ナデ	ナデ	c.e	不良	淡黄褐色	淡黄褐色		
第76図 18	3	6土	弥生	甕			6.8	(4.1)	ナデ	指押さえ	b.c	良好	淡赤褐色	暗茶橙色		
第77図 19	3	6土	弥生	甕			8.5	(4.0)	ハケ、ミガキ	指押さえ	a.c	良好	淡黑褐色	黄褐色		
第78図 20	3	7土	弥生	甕				(2.6)	ナデ?	ナデ?	a.b.c	やや不良	淡黄褐色	淡黄褐色	一部朱残存	
第79図 21	3	7土	弥生	甕				(4.8)	ハケ、ナデ	ナデ	c	やや不良	淡黄褐色	淡黄褐色		
第80図 1	3	1溝状	弥生	甕	(25.2)			(6.4)	ハケ、ナデ		b.c	良好	暗茶褐色	淡黄褐色		
第80図 2	3	1溝状	弥生	甕			8.6	(7.4)	ハケ、ミガキ		a.b	良好	黄褐色	黄褐色	底面ミガキ	
第80図 3	3	2溝状	弥生	甕				(5.8)	ハケ、ナデ	ハケ、ナデ	b.c	良好	淡黑橙色	淡黑橙色	刻目口縁	
第80図 4	3	2溝状	弥生	甕				(7.2)	(5.1)	ハケ、ナデ	ナデ?	a.b.c	良好	暗赤褐色	淡黄褐色	
第81図 1	3	1溝	瓦器	碗			(12.4)	(7.0)	ミガキ、タタキ	ミガキ、タタキ	c.e	良好	暗黑褐色	灰黑色		
第82図 1	3	1甕棺	弥生	甕棺	(9.4)	(29.0)		(15.8)	ハケ、ナデ		b.c.e	良好	淡橙褐色	淡黄褐色		
第82図 2	3	1甕棺	弥生	甕棺			8.7	(17.5)	ハケ、ナデ	指押さえ、ナデ	b.c.e	良好	橙褐色	橙褐色		
第82図 3	3	1土墓	弥生	甕				(4.4)	ハケ、ナデ	ナデ	b.c	やや不良	黄褐色	黄褐色	一部朱残存	
第82図 4	3	1土墓	弥生	甕				(8.4)	(3.2)	ハケ	ナデ、指押さえ	a.c	良好	晴褐色	晴褐色	
第83図 1	3	P102	弥生	鉢?	(26.8)	(24.8)		(8.8)	ハケ、ナデ	ナデ	a.b.c	やや不良	暗褐色	暗褐色	刻目口縁、沈線	
第83図 2	3	P198	弥生	甕	(27.4)	(25.6)		(10.8)	ハケ、ナデ	ナデ	b	良好	褐色	淡赤褐色		
第83図 3	3	P182	弥生	甕	(24.8)			(6.2)	ハケ、ナデ	ミガキ、ナデ	c.e	良好	褐色	褐色		
第83図 4	3	P162	弥生	甕	(23.0)	(21.6)		(9.3)	ハケ、ナデ	ナデ?	a.b.c	良好	晴褐色	暗黄褐色		
第83図 5	3	P73	弥生	甕	瓢箪(13.0)	(22.4)			ハケ、ミガキ	ミガキ?	a.b.c	良好	暗黄褐色	淡黄褐色	羽状文、沈線、弧文	
第83図 6	3	P198	弥生	甕	(27.0)			(8.0)	ハケ、ナデ	ナデ	a.b.c	良好	暗褐色	暗黄褐色		
第83図 7	3	P66	弥生	甕			6.8	(4.4)	ハケ、ナデ	ナデ?	a.b.c	良好	黄褐色	黄褐色	底面ハケ	
第83図 8	3	一括	弥生	甕			7.8	(4.3)	ハケ、ナデ	指押さえ	b.c	やや不良	暗赤褐色	暗赤褐色		
第83図 9	3	一括	弥生	甕			7.2	(7.0)	ハケ、ナデ		a.b.c	良好	淡黄褐色	淡暗褐色	朱一部残存	
第83図 10	3	一括	弥生	甕			7.4	(8.1)	ハケ、ナデ		a.b	良好	明橙色	暗褐色		
第87図 1	4	1土	弥生	甕				(11.8)	(2.1)	ナデ		a.b.c	良好	明赤褐色	暗黄褐色	
第87図 2	4	2土	弥生	甕				(1.7)	ナデ	ハケ	a.b.c	良好	暗褐色	暗茶褐色		
第87図 3	4	2土	弥生	甕				(1.5)			a.b.c	不良	黄褐色	黄褐色	一部朱残存	
第87図 4	4	一括	弥生	甕	(32.4)			(10.4)	ハケ、ナデ	ナデ	a.b.c	良好	淡黄褐色	淡黄褐色		

第6表 出土石器観察表(1)

挿図番号	区名	遺構	器種	石材	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	備考
第14図 5	2	3住	砥石	砂岩	(6.1)	4.3	5.1	212.2	
第14図 6	2	3住	投弾	花崗岩	6.4	5.5	4.2	25.6	
第19図 6	2	6住	凹石	安山岩	12.5	10.6	6.4	1214.4	
第19図 7	2	6住	磨石	硬質砂岩	14.9	9.9	6.2	1397.5	
第19図 8	2	6住	石庖丁	粘板岩	(7.0)	3.6	0.7	25.6	
第19図 9	2	6住	柱状片刃石斧	粘板岩	(6.4)	(2.9)	(3.5)	90.6	
第19図 10	2	6住	投弾	花崗岩	(6.3)	(3.1)	(3.9)	83.3	
第22図 4	2	7住	投弾	花崗岩	5.8	3.2	2.4	53.6	
第22図 5	2	7住	砥石	砂岩	(7.7)	(4.2)	(3.6)	173.2	
第22図 6	2	7住	砥石	頁岩	(4.9)	(4.5)	(1.2)	28.5	
第22図 7	2	7住	石庖丁	砂岩	(4.4)	(3.4)	0.6	13.8	未製品?
第24図 4	2	8住	打製石斧	安山岩?	(8.9)	(6.9)	1.4	142.3	未製品?破損品?
第25図 5	2	9住	砥石	砂岩	(4.2)	1.8	1.6	16.9	
第28図 7	2	6豊	石庖丁	砂岩	(5.8)	3.6	0.6	14.6	
第28図 17	2	11豊	磨製石剣	片岩系	(5.5)	1.9	1.3	17.7	
第28図 24	2	12豊	石戈	緑泥片岩	(8.6)	(4.9)	(1.2)	49.2	
第33図 16	2	6土	磨製石斧	片岩系	(14.3)	7.6	3.6	625.3	
第34図 25	2	15土	磨製石斧	緑泥片岩	14.4	6.0	3.1	412.3	
第34図 45	2	22土	投弾	花崗岩	3.0	2.4	1.8	13.1	
第35図 52	2	26土	磨製石斧	緑泥片岩	(12.3)	5.6	4.3	528.8	
第47図 8	2	P123	石庖丁	安山岩	(12.2)	5.3	0.9	82.5	未製品
第47図 9	2	P263	柱状片刃石斧	粘板岩	5.3	0.8	1.3	10.4	完形
第47図 10	2	一括	石庖丁	片岩系	15.5	5.4	0.9	111.8	完形
第47図 11	2	一括	剥片	黒曜石	6.8	2.4	1.3	16.3	完形
第47図 12	2	一括	剥片	黒曜石	3.5	1.9	0.5	2.9	
第47図 13	2	一括	石庖丁	玄武岩	(15.2)	5.4	0.7	83.2	
第47図 14	2	P229	砥石	硬質砂岩	(3.4)	1.7	0.7	8.7	柱状片刃石斧の転用
第50図 6	3	2住	石庖丁	粘板岩	(5.1)	(3.3)	0.6	17.8	
第50図 7	3	2住	砥石	砂岩	(11.3)	6.8	4.9	490.4	
第50図 8	3	2住	砥石	頁岩	(5.4)	3.0	2.9	69.4	柱状片刃石斧?
第52図 7	3	3住	石庖丁	玄武岩	(12.9)	4.6	0.6	50.8	
第52図 8	3	3住	砥石	砂岩	4.8	1.9	0.7	12.1	ほぼ完形
第52図 9	3	3住	石皿	安山岩	(7.0)	(7.2)	(7.2)	500.0	
第54図 5	3	4住	砥石	粘板岩	(8.1)	4.0	1.5	91.6	
第54図 6	3	4住	砥石	砂岩	(5.9)	3.2	1.3	41.2	
第54図 7	3	4住	石庖丁	緑泥片岩	(2.7)	(2.5)	0.7	6.0	
第56図 11	3	5住	磨製石剣	砂岩	(4.5)	(2.7)	0.6	12.0	
第63図 3	3	9住	投弾	花崗岩	3.6	3.5	3.0	746.0	
第66図 9	3	10住	石庖丁	片岩系	(5.8)	3.8	0.7	19.2	未製品?
第66図 11	3	10住	打製石鎌	黒曜石	1.6	1.9	0.5	0.5	完形
第66図 10	3	10住	打製石鎌	黒曜石	(2.2)	1.4	0.3	1.0	
第68図 9	3	11住	砥石	頁岩	(2.7)	3.1	1.2	18.7	
第79図 12	3	4土	砥石	砂岩	9.7	4.9	4.2	226.8	硬質砂岩? ほぼ完形
第84図 11	3	一括	石庖丁	玄武岩	(7.9)	(3.6)	0.6	32.4	

第7表 出土石器観察表(2)

挿図番号	区名	遺構	器種	石材	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	備考
第84図 12	3	一括	石庖丁	硬質砂岩	(8.0)	(3.3)	(0.7)	18.8	未製品
第84図 13	3	P63	快入柱状片刃石斧	粘板岩	9.3	(1.9)	3.6	92.8	
第84図 14	3	一括	磨製石劍	硬質砂岩	(4.6)	(3.1)	(1.2)	14.9	
第84図 15	3	一括	磨製石劍	頁岩	4.5	2.2	1.2	7.5	
第84図 16	3	一括	磨製石劍	綠泥片岩	(4.7)	3.2	1.1	24.0	
第84図 17	3	一括	磨製石劍	安山岩	(3.3)	2.8	0.5	5.0	
第84図 18	3	一括	磨製石斧	結晶片岩	(7.4)	4.8	1.0	80.7	未製品?
第84図 19	3	P185	砥石	砂岩	4.5	(2.5)	1.1	20.8	
第84図 20	3	一括	砥石	砂岩	(2.7)	2.8	2.8	32.1	
第84図 21	3	一括	砥石	砂岩	(5.4)	2.1	2.2	62.3	
第84図 22	3	一括	柱状片刃石斧	粘板岩	3.9	1.5	1.1	12.4	
第84図 23	3	一括	砥石	粘板岩	(5.4)	(2.3)	1.7	15.8	柱状片刃石斧?
第84図 24	3	一括	砥石	粘板岩	(8.0)	4.5	2.1	104.9	
第84図 25	3	一括	砥石	砂岩	(6.3)	(3.2)	2.4	77.9	
第84図 26	3	P226	磨製石鏃	綠泥片岩	2.8	1.0	0.2	0.8	完形
第84図 27	3	P198	磨石	安山岩	10.6	4.5	4.8	804.1	完形
第84図 28	3	一括	投擲	花崗岩	3.8	3.3	2.7	33.3	
第84図 29	3	一括	投擲	花崗岩	4.4	4.3	3.5	80.7	
第84図 30	3	P185	磨製石鏃	片岩系	6.8	3.3	0.5	87.7	未製品
第84図 31	3	一括	磨製石鏃	片岩系	3.6	2.8	0.6	33.3	未製品?
第88図		一括	十字形石器	綠泥片岩	3.7	3.1	0.6	23.4	

第8表 出土鉄器観察表

挿図番号	区名	遺構	器種	全長(cm)	刃部長(cm)	刃部幅(cm)	厚(cm)	重(g)	備考
第71図 6	3	12柱	鉄刀	(14.9)	(8.5)	2.9	0.2	87.9	
第71図 5	3	12柱	鉄刀	(6.4)	—	(2.9)	1.9	26.1	
第80図 5	3	2溝状	鉄鏃	9.2	—	0.7	0.6	16.6	
第79図 5	3	3土	不明	(5.5)	(3.1)	—	0.2	28.6	
第84図 32	3	一括	鉄斧	(3.4)	—	(5.1)	0.4	32.6	

第9表 出土青銅器観察表

挿図番号	区名	遺構	器種	長さ(cm)	幅(cm)		厚さ(mm)	重(g)	備考
第81図 2	3	1溝	斧	15	0.7~1.4	—	3	19.5	

第10表 出土玉類観察表

挿図番号	区名	遺構	器種	長さ(mm)	直径(mm)	孔径(mm)	重(g)	石材	色調
第42図 1	2	3号石棺	管玉	14.5	3.5	1.6	0.2	碧玉	
第42図 2	2	3号石棺	管玉	14.1	3.8	2.1	0.2	碧玉	
第42図 3	2	3号石棺	管玉	6.4	2.0	1.0	0.1未満	碧玉	
第42図 4	2	3号石棺	管玉	7.5	2.0	1.5	0.1未満	碧玉	

付編 後迫遺跡他出土の赤色顔料について

本田光子(別府大学)

大分県日田市後迫遺跡出土の赤色物について、その材質と状態を知るために顕微鏡観察および蛍光X線分析を行った。赤色物の出土例に関する今までの知見に寄れば、出土赤色物は鉱物質の顔料であり、酸化第2鉄：赤鉄鉱を主成分とするベンガラと、硫化水銀（赤）：辰砂を主成分とする朱の2種が用いられている。これら以外に古代の赤色顔料としては、四酸化三鉛を主成分とする鉛丹があるが出土例はまだ確認されていない。

ここではこれら3種類の赤色顔料を考えて分析を行った。試料は石棺材に付着していたもの、棺内に残存していたものであり、調査時に赤色物の試料採取を行った。分析調査には、赤色部分および土壤から任意の部分を蛍光X線分析測定用および顕微鏡観察用試料とした。

第11表に試料の一覧と分析結果および推定される赤色顔料の種類を示す。

第11表 試料一覧・分析結果

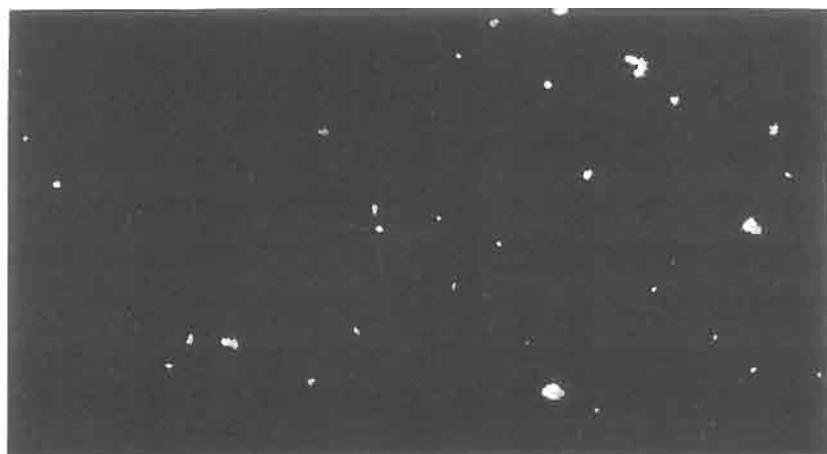
No.	試料の採取位置	顕微鏡観察		蛍光X線分析		赤色顔料の種類
		ベンガラ	朱	鉄	水銀	
1	1号石棺墓 粘土	○	×	○	×	ベンガラ
2	1号石棺 床面（棺中央）	○	×	○	×	ベンガラ
3	1号石棺 小口面（頭部側）	○	×	○	×	ベンガラ
4	1号石棺 小口面（足側）	○	×	○	×	ベンガラ
5	1号石棺 床面（頭部側）	○	×	○	×	ベンガラ
6	1号石棺 床面（頭部側）	○	○	○	×	ベンガラ>朱
7	3号石棺墓 蓋石内面	○	×	○	×	ベンガラ
8	3号石棺 小口面（頭部側）	○	×	○	×	ベンガラ
9	3号石棺 床面（管玉周辺）	○	×	○	×	ベンガラ
10	3号石棺 床面（管玉周辺）	○	×	○	×	ベンガラ

顕微鏡観察

赤色顔料の有無・状態・種類・粒度等を観察する目的で、実体顕微鏡および光学顕微鏡（透過光・落射光40～400倍）による観察を行った。

赤色顔料としては全試料からベンガラを、No.6にはベンガラの他に極めて微量の朱が認められた。

ベンガラには、パイプ状粒子が含まれるものはなかった。(顕微鏡写真参照)

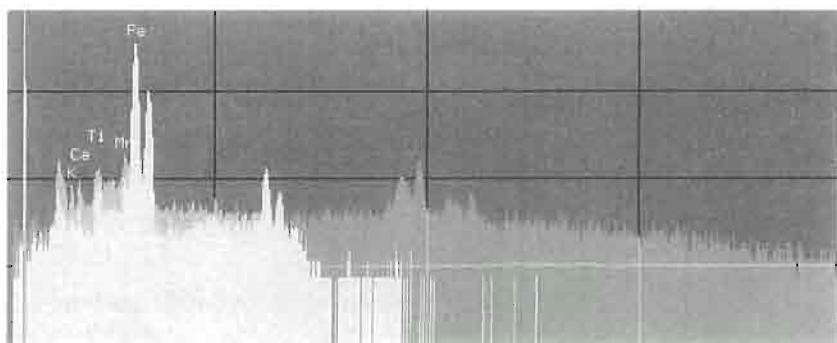


顕微鏡写真
試料 No.6
反射光：約150倍

蛍光X線分析

赤色物の主成分元素の検出を目的として別府大学設置の堀場製作所製エネルギー分散型蛍光X線分析装置MESA500を用い、15Kv-500μA、50秒、50Kv-30μAの測定条件で実施した。

赤色顔料の主成分元素としては全試料から鉄が検出された(蛍光X線スペクトル図参照)。



蛍光X線分析
スペクトル図
試料 No.2

まとめ

上記の結果から推定される赤色顔料の種類は表に示した通りである。1号石棺墓では床面あるいは遺骸全体にはベンガラが散布され、遺骸の頭胸部には極めて僅かではあるが朱が施されていたと推定される。3号石棺墓では棺の内面はベンガラにより塗布され、床面あるいは遺骸にもベンガラが施されていたものと考えられる。3号石棺墓については今回の観察では頭部側に朱を確認することができなかった。なお、顕微鏡観察で、朱が認められたNo.6については水銀が検出されなかったが、これは試料に含まれる朱の量が極めて少ないと考えられる。

調査の機会を戴きました日田市教育委員会、同若杉竜太氏に感謝いたします。

付編 後迫遺跡出土人骨について

舟橋京子^{*1}・田中良之^{*2}

* 1 : 九州大学大学院比較社会文化学府基層構造講座

* 2 : 九州大学大学院比較社会文化研究院

1. はじめに

大分県日田市後迫遺跡の甕棺・石棺から人骨が出土し、調査を担当した日田市教育委員会より九州大学大学院比較社会文化研究科基層構造講座へと人骨調査の依頼があった。それを受け本講座金宰賢（現東亜大学校）・舟橋京子が現場へ赴き、人骨の観察・実測および取り上げを行った。人骨はその後九州大学へと搬送され、本講座において整理・分析を行った。以下にその結果を報告する。なお、人骨は現在、九州大学大学院比較社会文化研究院考古人類資料室に保管されている。

2. 出土状況

【1号甕棺】

甕棺の胴部下半部からまとまった状態で人骨が出土している。そのうち、南側からは歯牙が出土しており、その北側からは上肢骨および骨盤片が、一番北側からは脛骨・腓骨等の下肢骨が出土している。これらの甕棺内の位置および甕棺のサイズからみて、南東（甕棺の口縁）方向に頭位をとった屈葬であったと考えられる。

【1号石棺】

石棺内の北西側から頭蓋骨片および下顎骨片が出土している。また、石棺の南東側からは左右大腿骨・脛骨が遠位を南東に向けて長軸をそろえ、膝関節が関節した状態で出土している。これらの位置関係からみて、北西方向に頭位をとった伸展葬であったと考えられる。

【4号石棺】

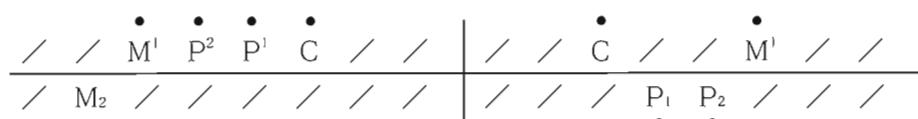
石棺内の西側から頭蓋骨片が出土しており、石棺内中央よりやや東側に棺床から15cm浮いた状態で歯牙が出土している。また石棺内東側の床面直上から、長軸を東西方向にして、脛骨・腓骨が近接した状態で出土している。これらの位置関係と石棺のサイズから見て、本来西に頭位をとった伸展葬であったが、後世の攪乱により歯牙が本来の位置から動かされたと考えられる。

3. 人骨所見

1号甕棺

【保存状態】

保存状態は不良である。頭蓋骨は部位同定不可能な骨片が遺存しており、歯牙も一部遺存している。



○歯槽開放 ×歯槽閉鎖 /欠損 △歯根のみ

・遊離歯 () 未萌出 C齶歯 以下同様

歯牙咬耗度は柄原(1957)の 1° a~ 1° bである。この他にも歯種同定不可能な歯冠片が多数見られる。

軀幹骨は、胸骨柄および左右不明肋骨片が遺存している。

上肢骨は左右不明上腕骨近位部骨端片、左右不明橈骨骨幹部が遺存している。また、左右不明第1中手骨片が遺存しており、遠位側の骨端は癒合し一部に骨端線が見られる。

下肢骨は左右腸骨片・右坐骨・左恥骨上肢片と右大腿骨頸付近、右脛骨骨幹部・左脛骨骨幹端部片、左右腓骨骨幹部が遺存している。また、左右距骨・左右踵骨も遺存している。他にも部位同定不可能な四肢骨片が遺存している。

【年齢・性別】

年齢は、第1中手骨以外、残存している四肢骨の骨端が全て遊離している状況および歯牙咬耗度から、12~14歳と推定される。性別は判定可能な部位が遺存していないため不明である。

1号石棺

【保存状態】

保存状態は不良である。頭蓋骨は部位同定不可能な小片が遺存しており、下顎骨片も一部遺存している。

下肢骨は右大腿骨遠位端・左大腿骨骨体部片および左右脛骨骨体部片が遺存している。大腿骨の粗線は発達しておらず、ヒラメ筋線も発達していない。

【年齢・性別】

年齢は、大腿骨及び脛骨のサイズから成人の可能性が高いと考えられる。

性別は大腿骨の粗線および脛骨のヒラメ筋線が発達していないことから、女性の可能性が高い。

4号石棺

【保存状態】

保存状態は不良である。頭蓋骨は部位同定不可能な小片が遺存しているのみである。歯牙は下顎左第1大臼歯が遺存している。咬耗度は柄原(1957)の 1° aである。この他にも左右同定不可能な脛骨・腓骨骨幹部片が遺存している。

【年齢・性別】

年齢は歯牙咬耗度から若年と推定される。性別は判定可能な部位が遺存していないため不明である。

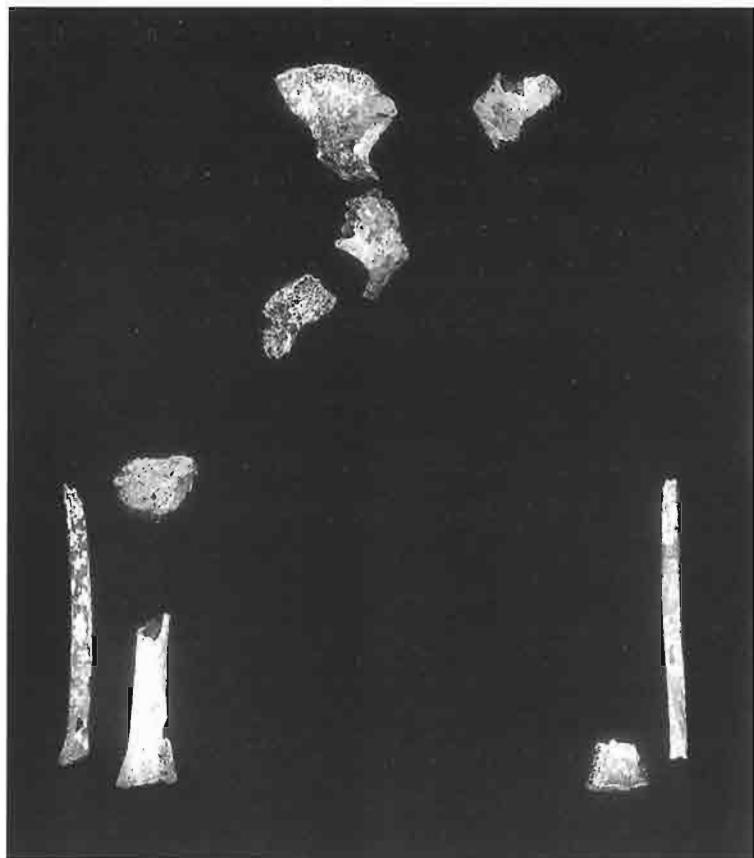
4. まとめ

以上出土人骨についての記載報告を行ってきた。本遺跡出土人骨は保存状態が不良であり、計測に耐えうる人骨は見られなかった。また、人骨の出土状況からみた埋葬方法に関しては、甕棺・石棺ともに特異な点は見られず、石棺に関しては2基とも単体埋葬であった。

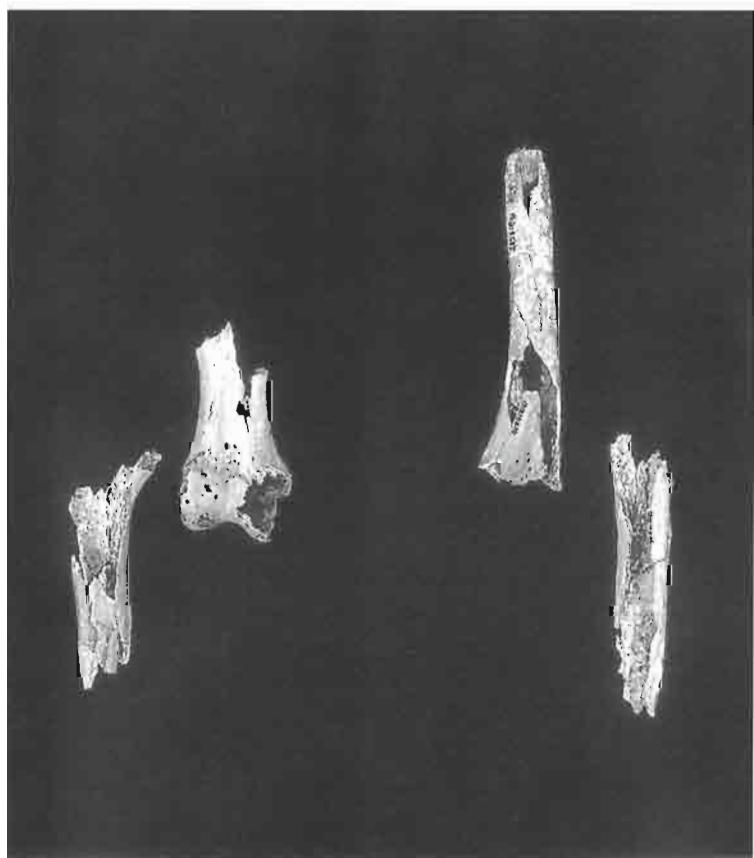
最後に、本報告にあたり、日田市教育委員会の各位にはご便宜を賜り、かつご迷惑をおかけした。深謝したい。また、九州大学大学院比較社会文化研究院石川健氏、比較社会文化学府基層構造講座端野晋平氏、大嶋健司氏には人骨整理の際多くのご助力をいただいた。あわせて感謝したい。

参考文献

柄原博, 1957: 日本人歯牙の咬耗度に関する研究. 熊本医学会雑誌, 31, 補冊4: 607-656.



1号墓棺出土人骨（下肢骨）



1号石棺出土人骨（下肢骨）

写 真 図 版



遺跡全景（西から）

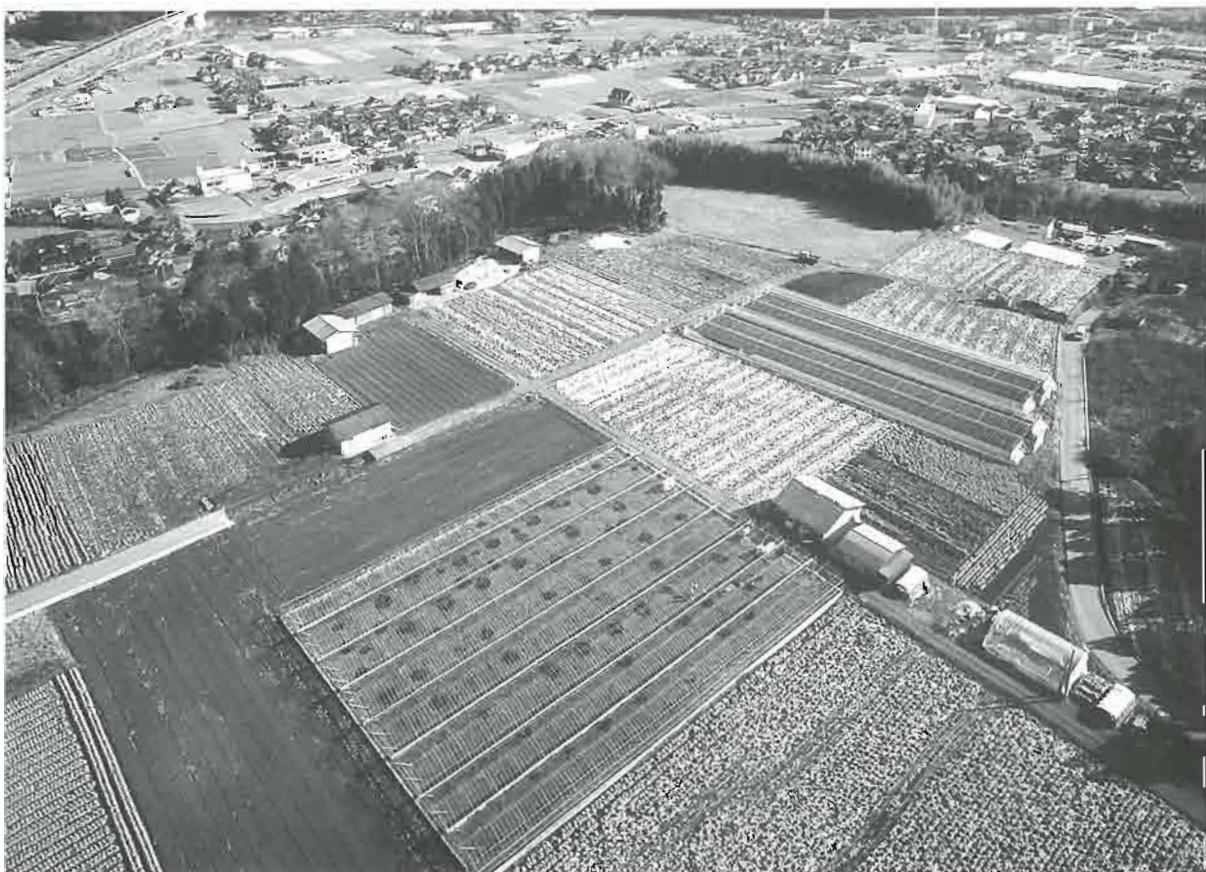


遺跡全景（東から）

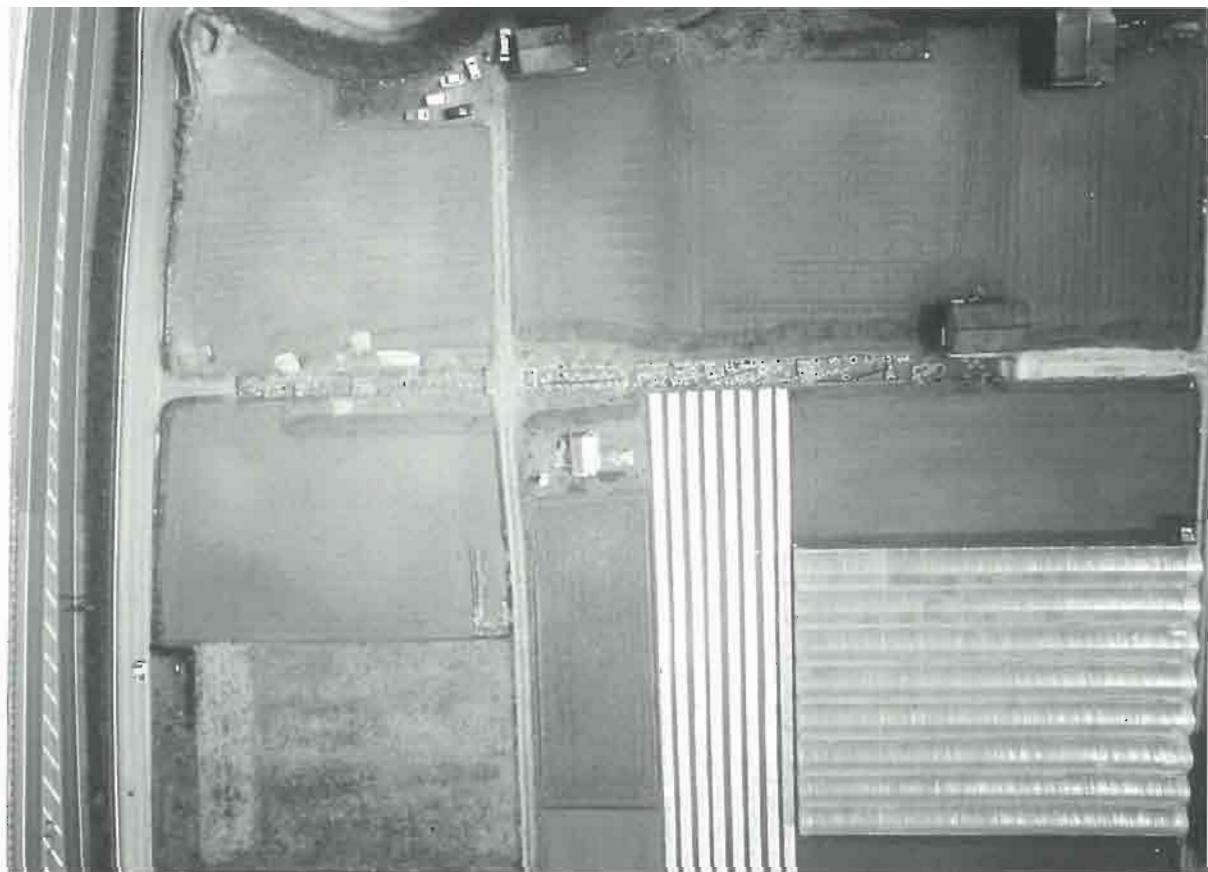
図版2



遺跡全景（南から）



遺跡全景（北から）

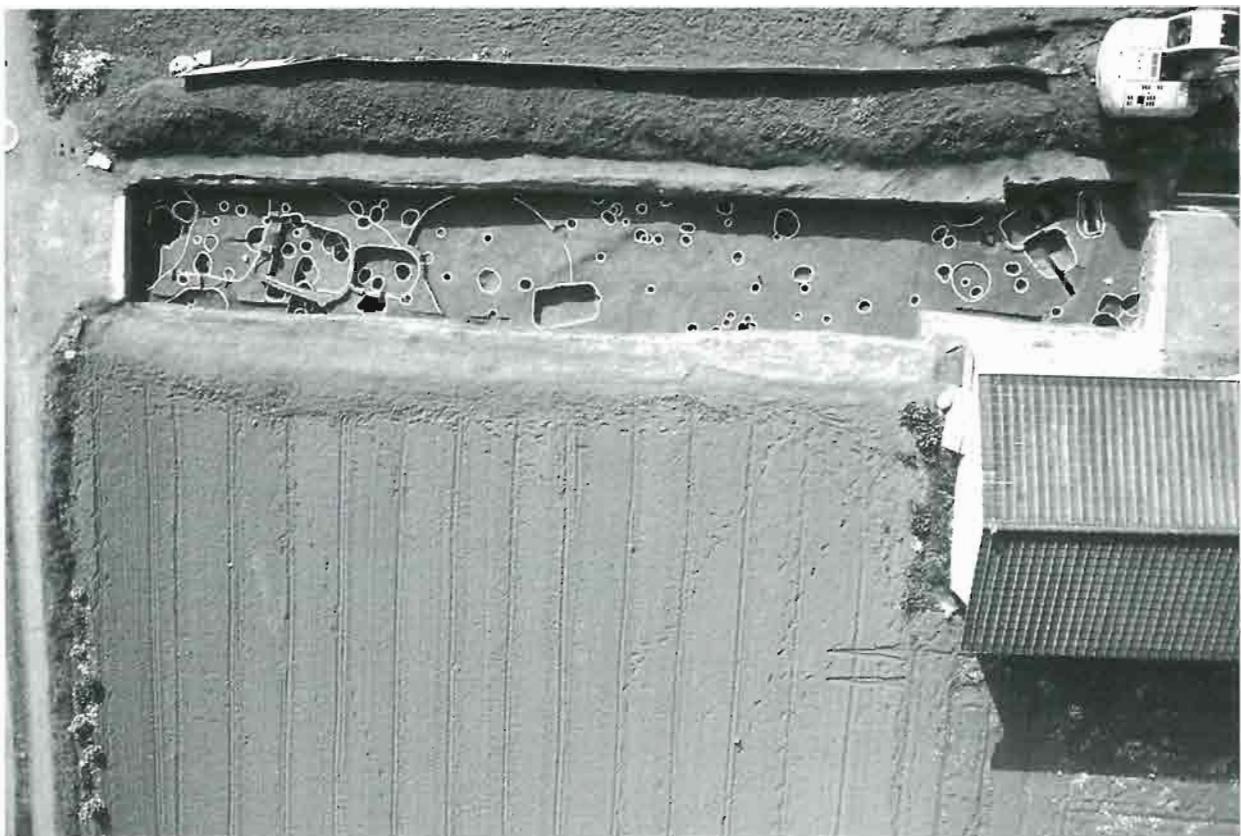


1・2区空中写真



2区空中写真（南から）

図版4



2区空中写真



1区1号土坑



2区1号竪穴住居跡



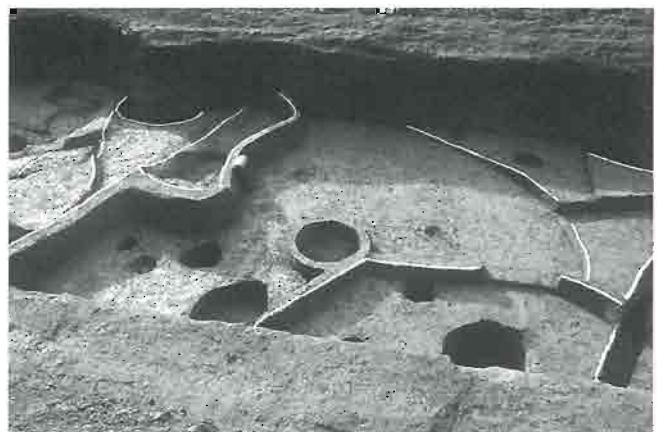
2区2号竪穴住居跡



2区3号竪穴住居跡



2区4号竖穴住居跡



2区5号竖穴住居跡



2区6号竖穴住居跡



2区7号竖穴住居跡



2区7号竖穴住居跡南面土坑



2区8号竖穴住居跡

図版6



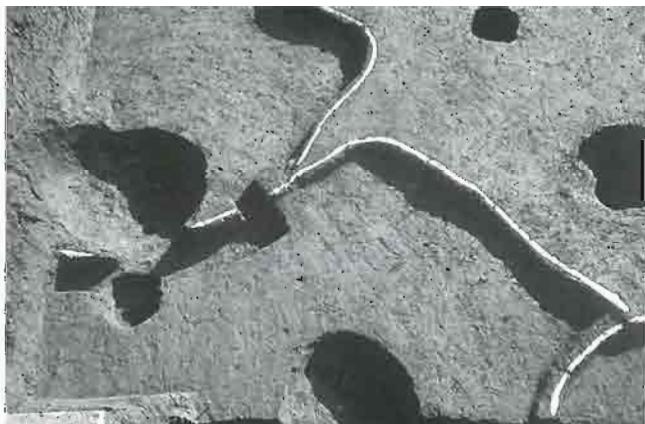
2区9号竪穴住居跡



2区1号竪穴遺構



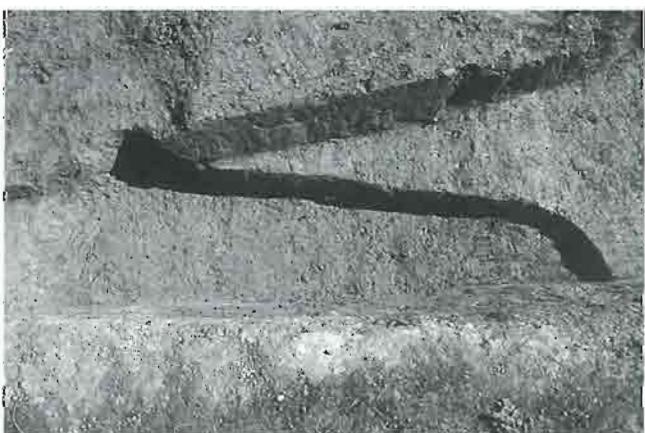
2区4号竪穴遺構



2区5号竪穴遺構



2区6号竪穴遺構



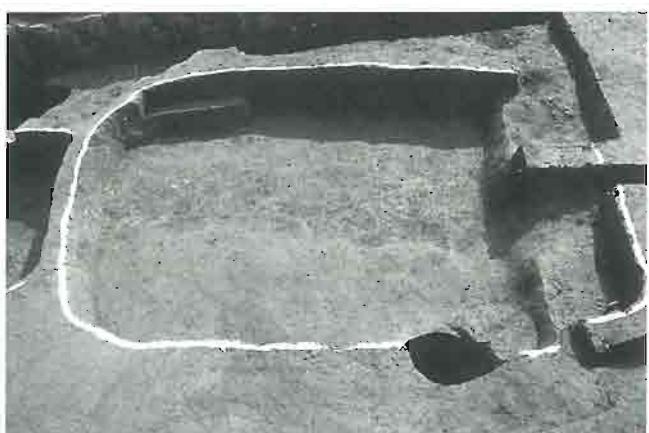
2区7号竪穴遺構



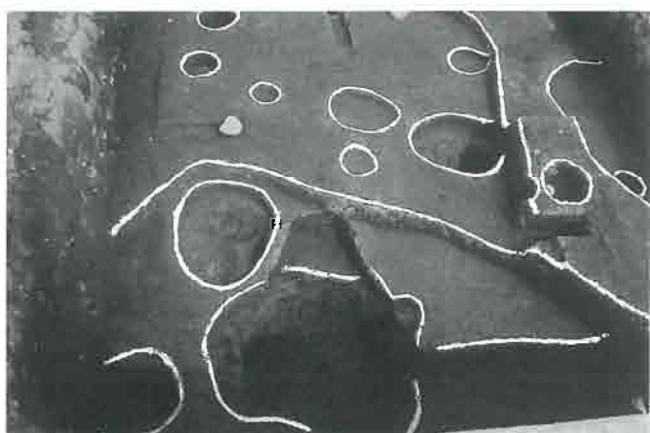
2区8号竪穴遺構



2区9号竪穴遺構



2区11号竪穴遺構



2区12号竪穴遺構・28号土坑



2区3号土坑

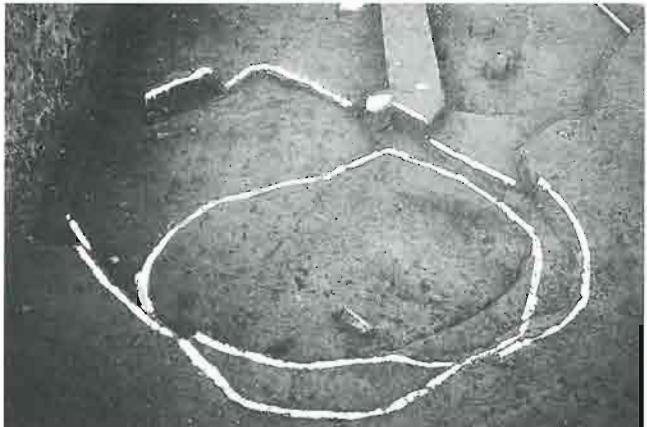


2区3号土坑

図版8



2区6号土坑



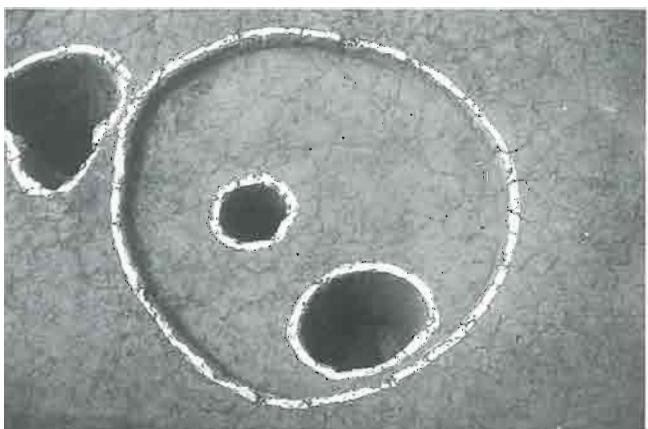
2区19・20号土坑



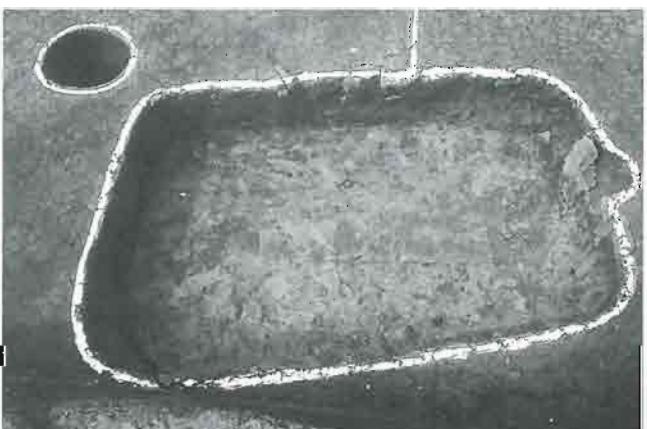
2区21号土坑



2区1号墓周辺土坑発掘状況



2区22号土坑



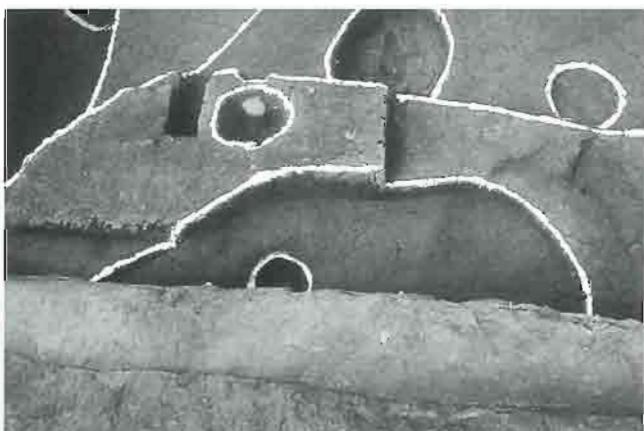
2区24号土坑



2区25号土坑



2区26号土坑



2区27号土坑



2区1・2号掘立柱建物跡



2区3号掘立柱建物跡



発掘作業風景

図版10



2区1号甕棺墓



2区1号甕棺墓



2区1号甕棺墓



2区1号甕棺墓



2区1号甕棺墓



2区1～3号石棺墓空中写真



2区1～3号石棺墓検出状況

図版12



2区1号石棺墓検出状況



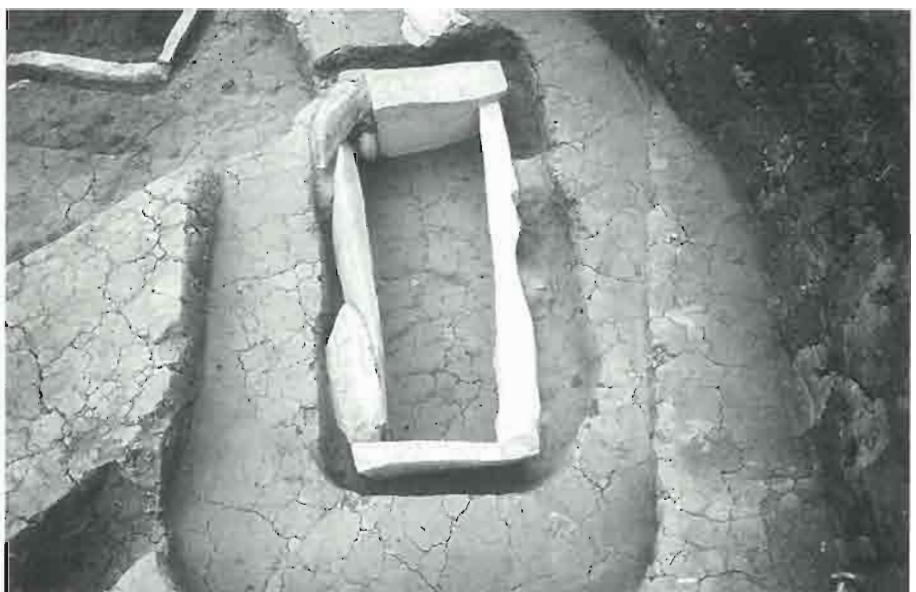
2区1号石棺墓人骨出土



2区1号石棺墓完堀状況



2区2号石棺墓検出状況



2区2号石棺墓完掘状況



2区1~3号石棺墓検出状況

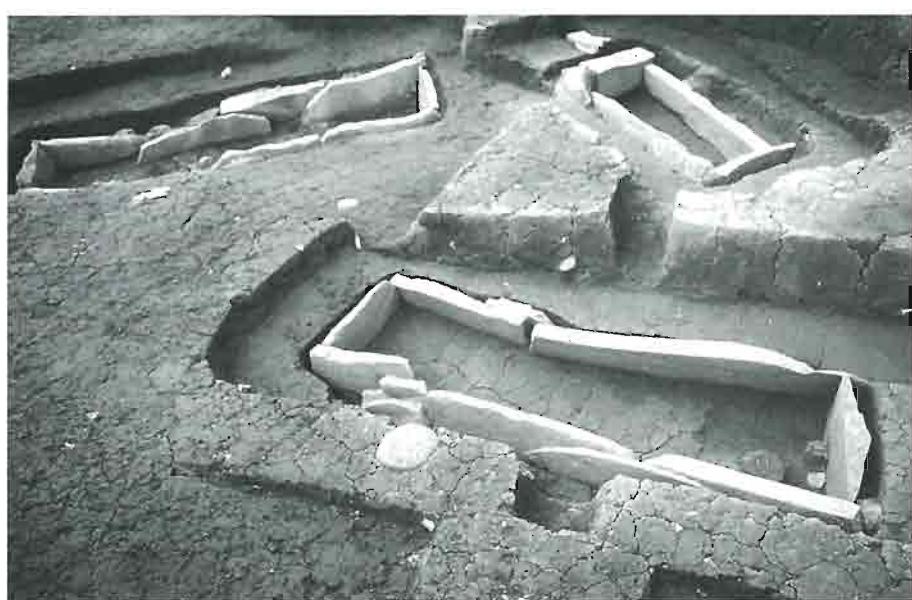
图版14



2区3号石棺墓完掘状况



2区3号石棺墓管玉出土状况



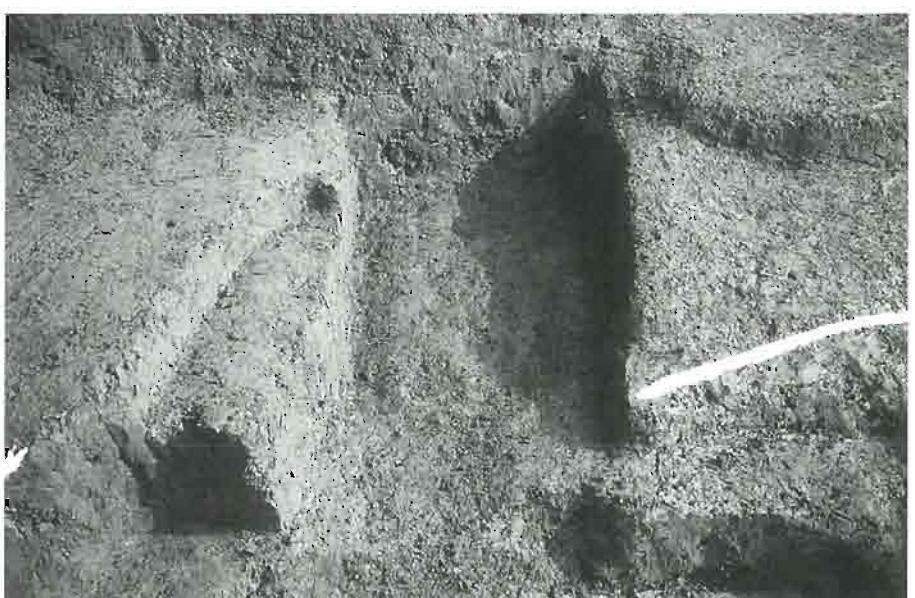
2区1~3号石棺墓完掘状况



2区4号石棺墓完掘状况

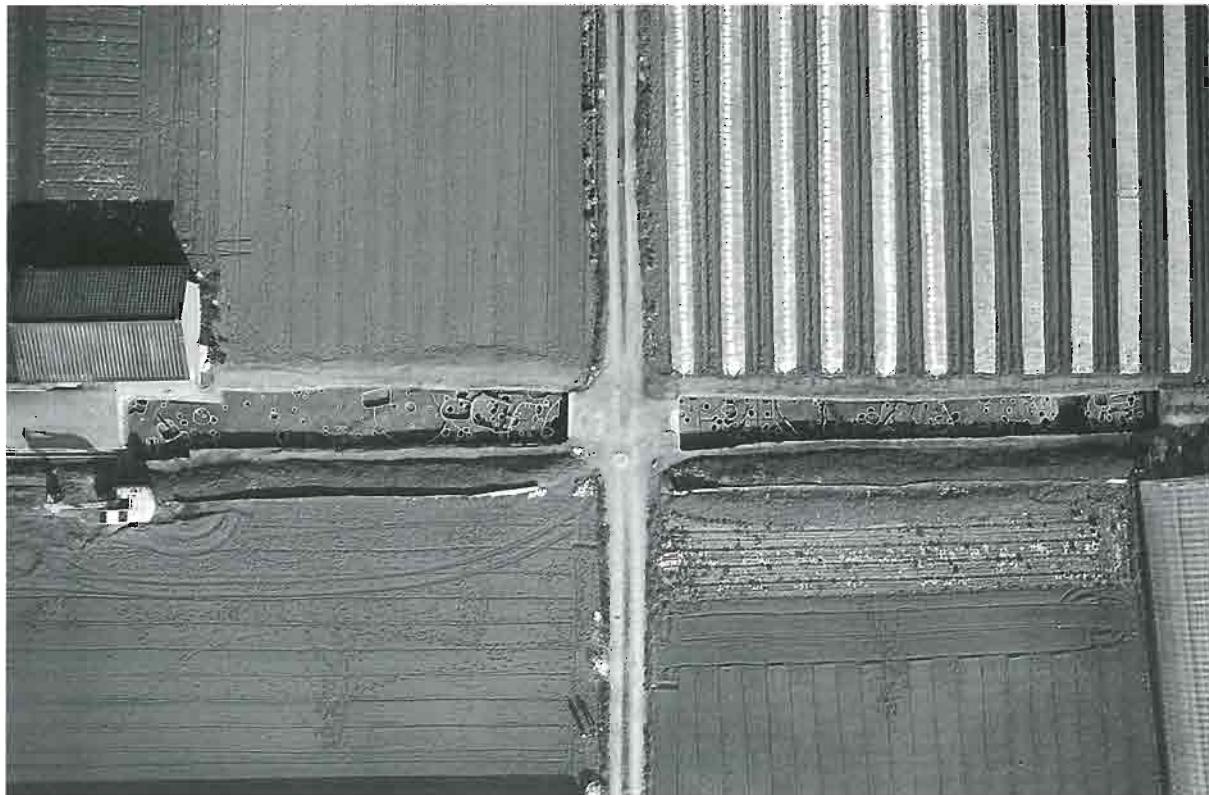


2区4号石棺墓人骨出土状况

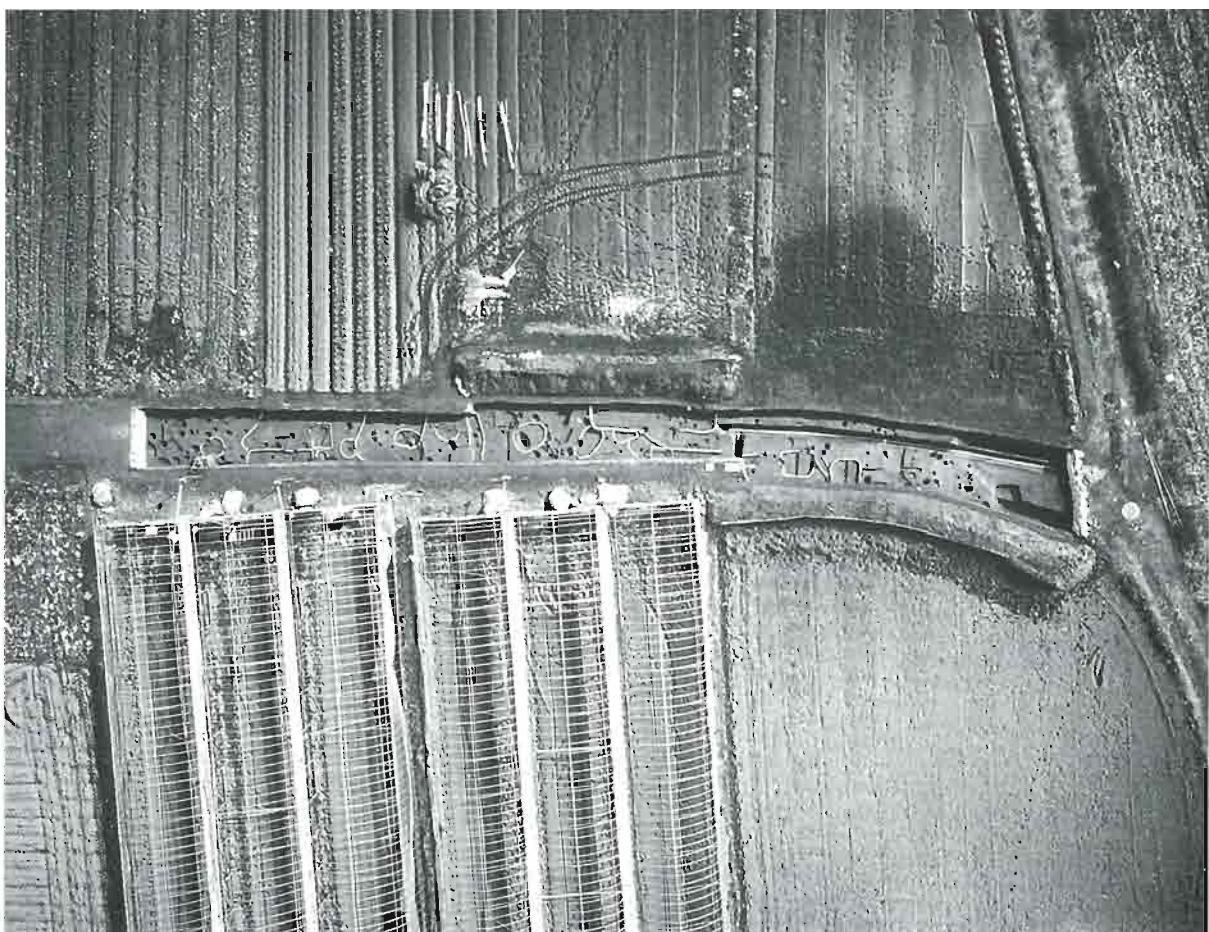


2区1号土坑墓完掘状况

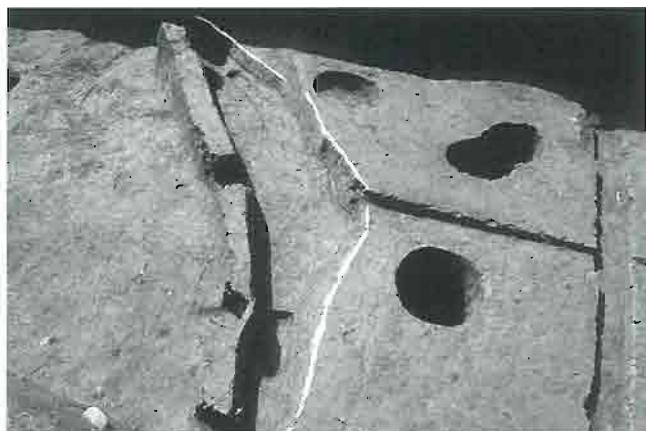
図版16



2・3区空中写真



3区空中写真



3区 4号竪穴住居跡



3区 5号竪穴住居跡



3区 5号竪穴住居跡遺物出土状況



3区 6号竪穴住居跡



3区 7号竪穴住居跡

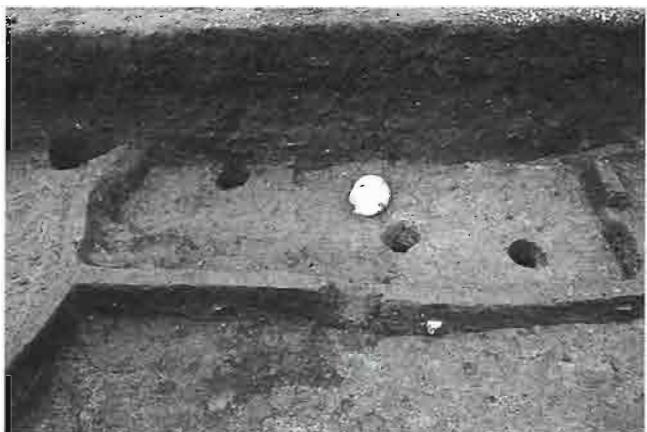


3区 8号竪穴住居跡

図版18



3区9号竖穴住居跡



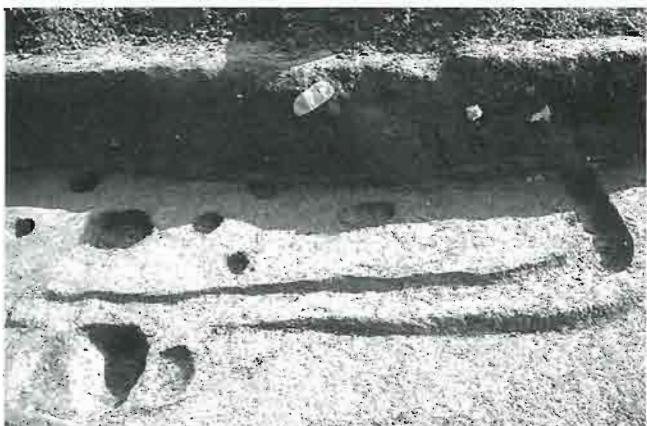
3区10号竖穴住居跡



3区11号竖穴住居跡



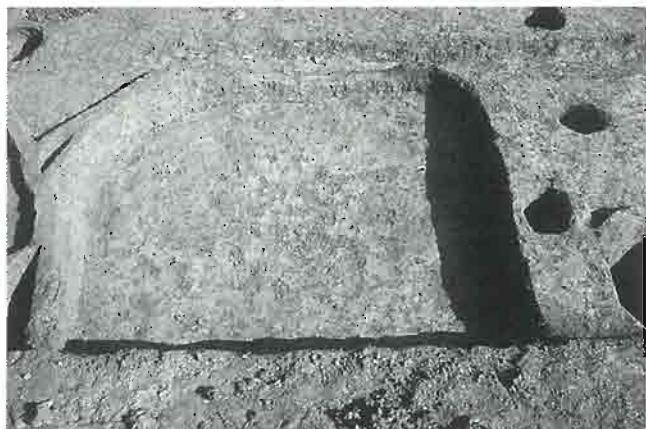
3区12号竖穴住居跡



3区13号竖穴住居跡



3区3号竖穴遺構



3区5号竪穴遺構



3区5号土坑



3区6号土坑



3区12号土坑



3区13号土坑



3区作業風景

図版20



3区1号溝状遺構



3区2号溝状遺構



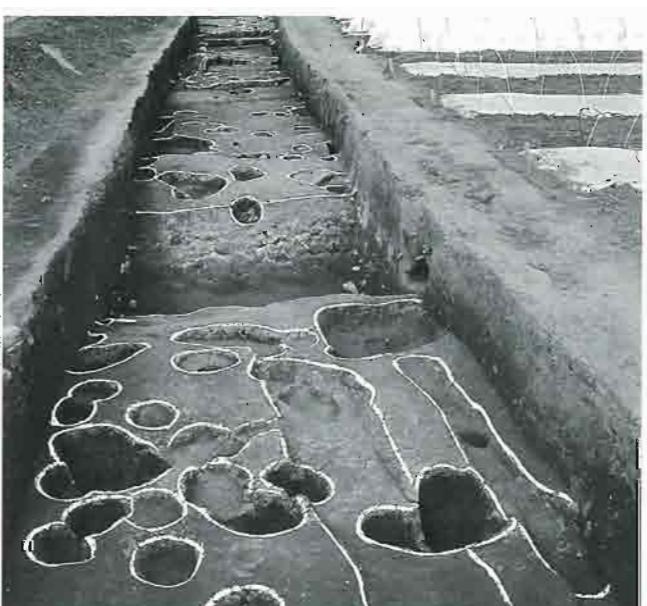
3区3号溝状遺構



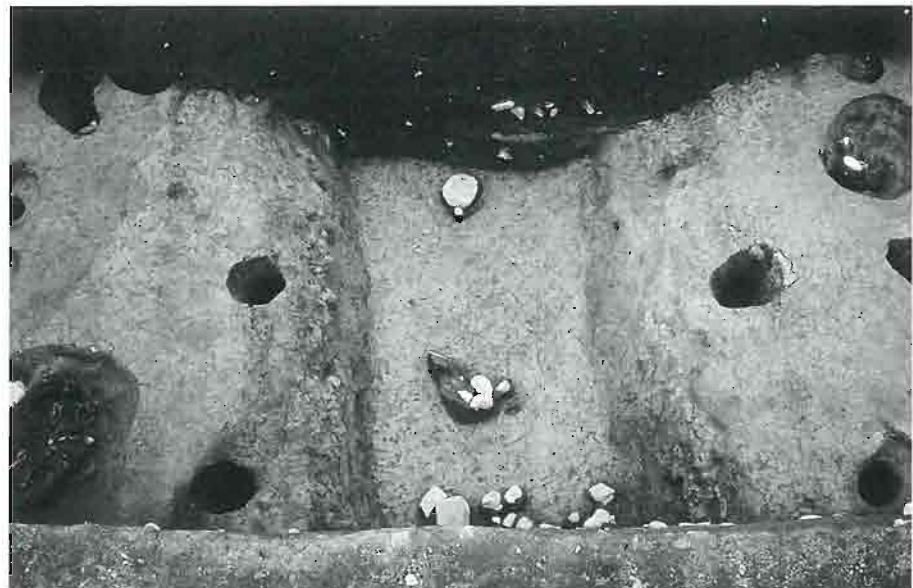
3区1号甕棺



3区1号土坑墓



3区北側発掘状況（南から）

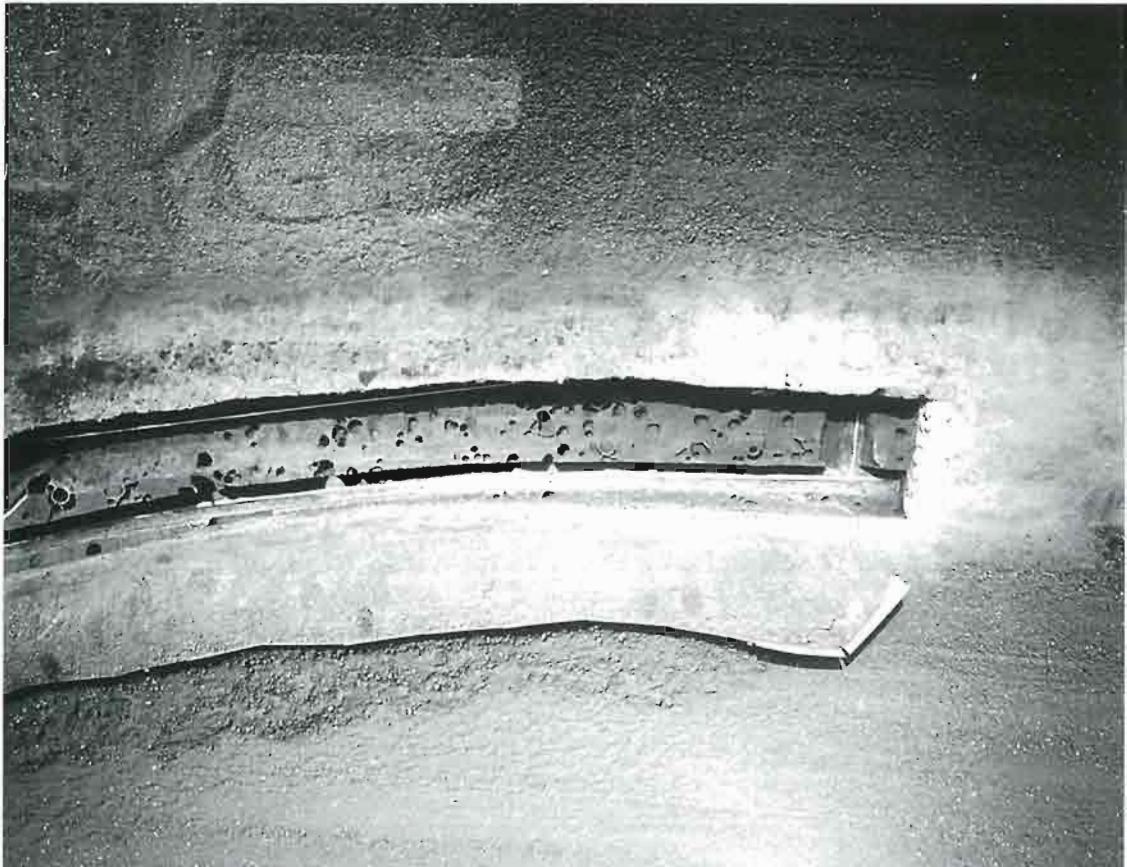


3区1号溝完堀状況



3区1号溝遺物出土状況

図版22



4区空中写真



4区空中写真



4区1号土坑



4区2号土坑



4区3号土坑



4区4号土坑



作業風景



作業風景

图版24



6-1



6-2

1区1号土坑



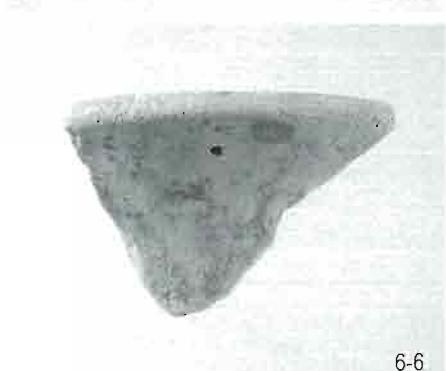
6-3



6-4



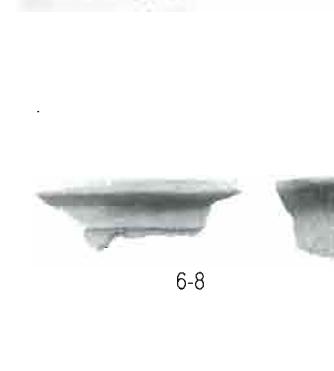
6-5



6-6



6-7



6-8

6-9



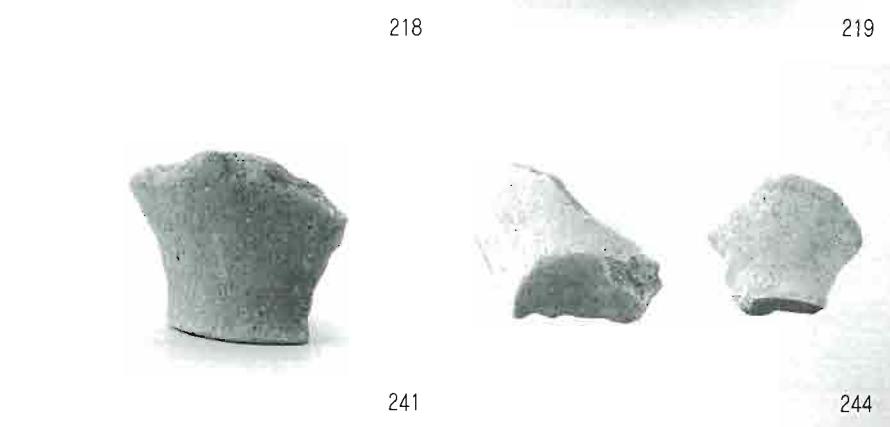
218



219



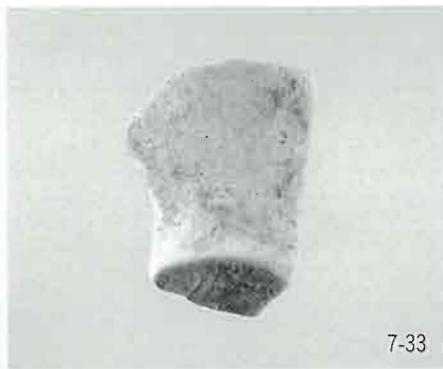
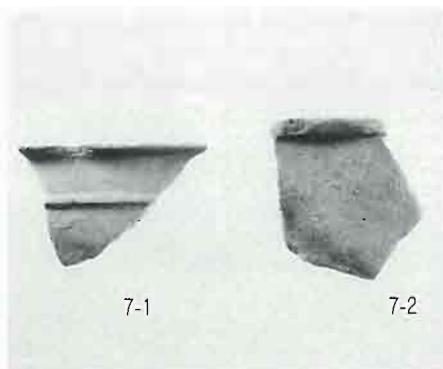
240



241

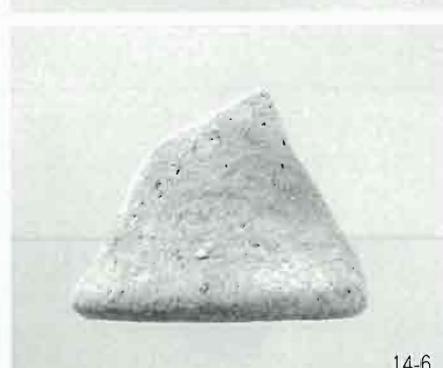
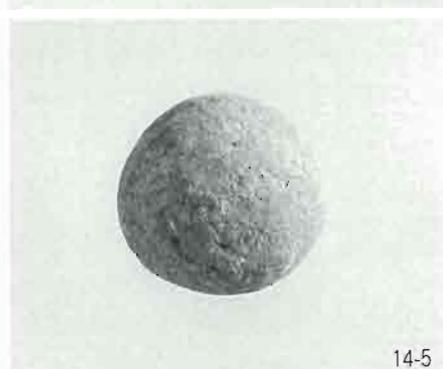
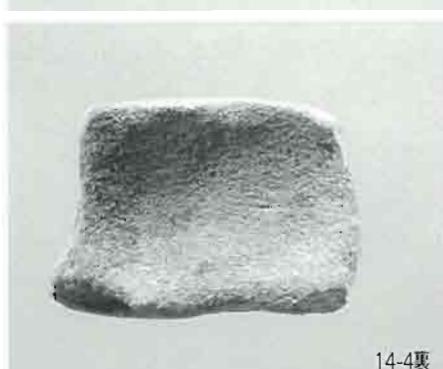
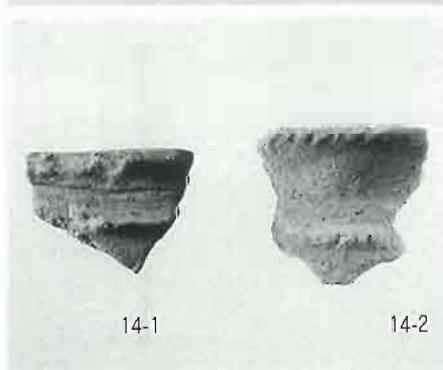
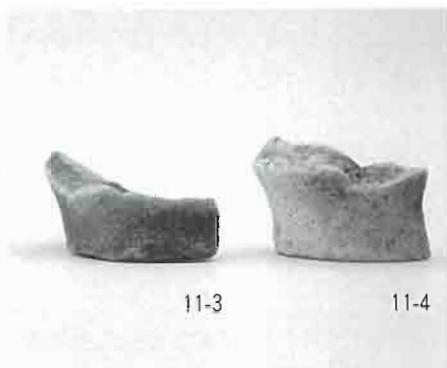
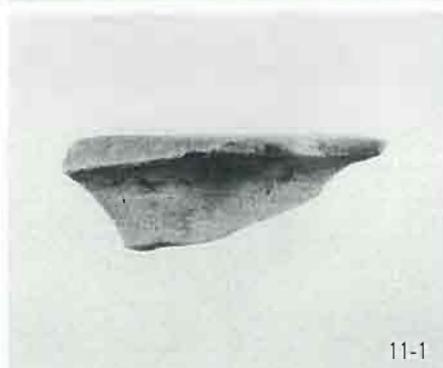
244

1区包含层一括



左 2区1号竪穴住居跡

下 2区2号竪穴住居跡



図版26



16-1

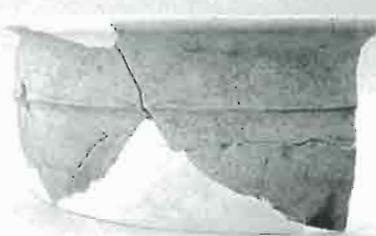


16-2

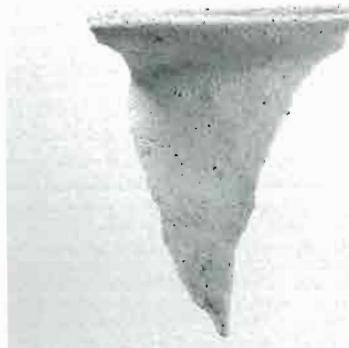


16-3

上 2区5号竪穴住居跡



19-1



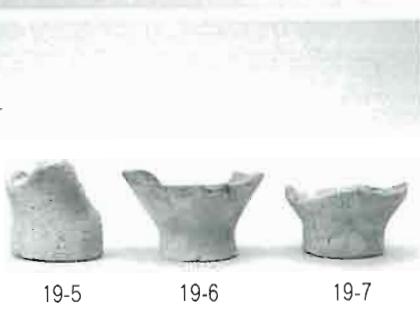
19-2



19-3



19-4



19-5



19-6



19-7



19-8



19-9



19-10

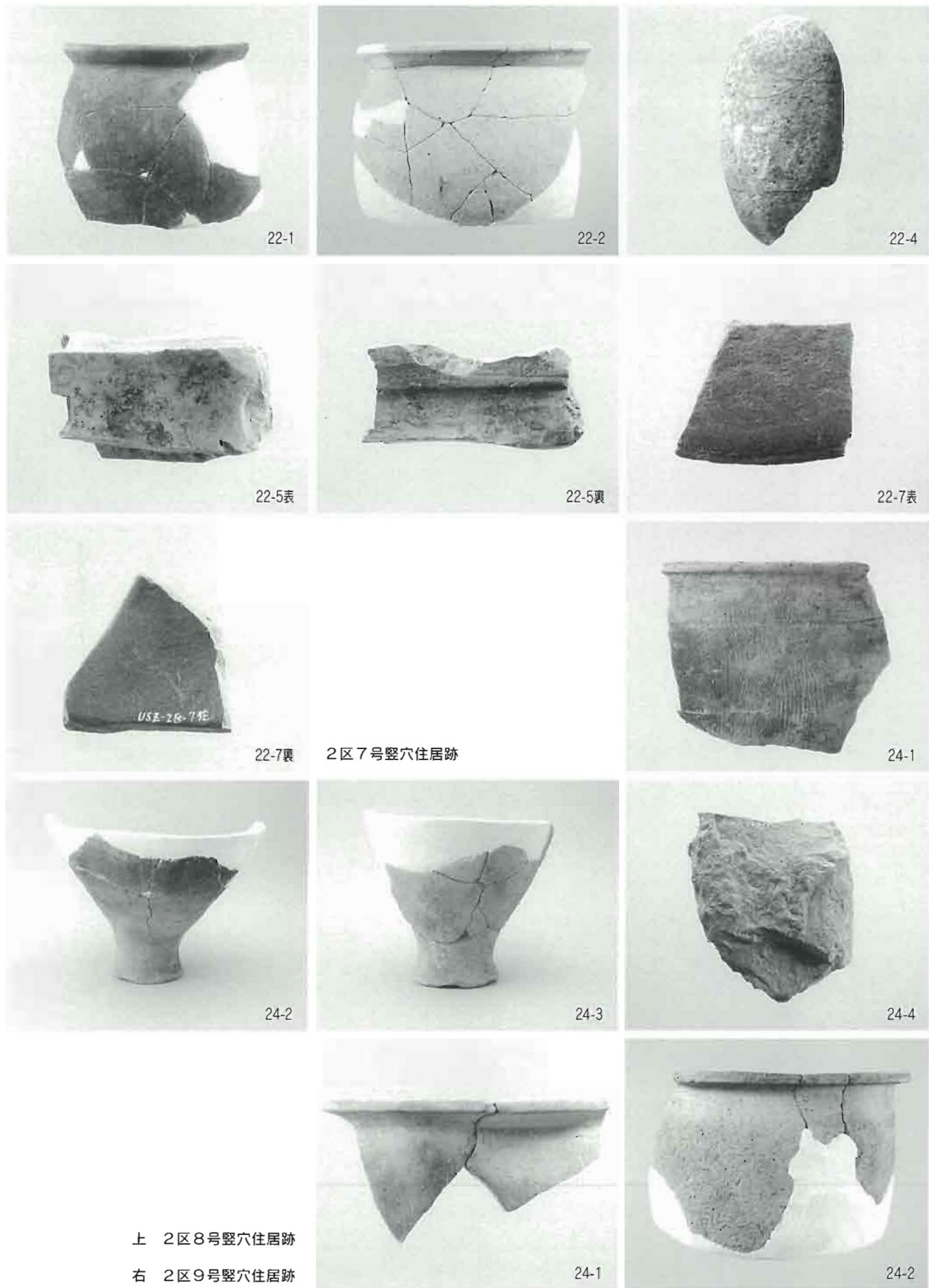


19-11



19-12

2区6号竪穴住居跡



図版28



24-4

24-3



24-5 2区9号竪穴住居跡



28-1



28-2



28-3

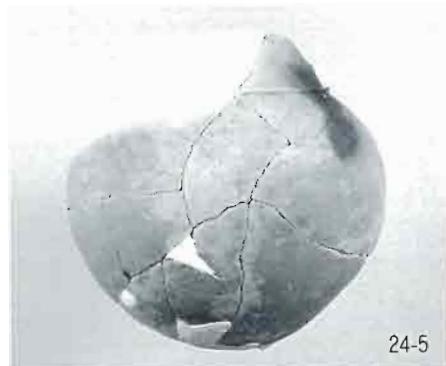


28-4



24-7

2区3・4・6号竪穴遺構



24-5



24-6



24-8



24-9

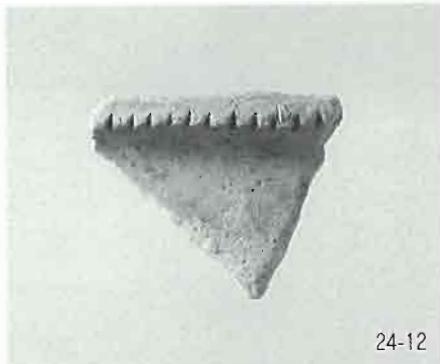


24-10

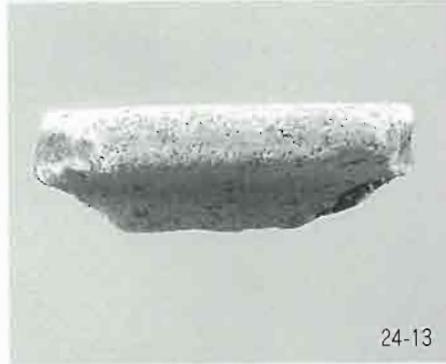
2区7～9号竪穴遺構



24-11



24-12



24-13



24-14



24-15



24-16



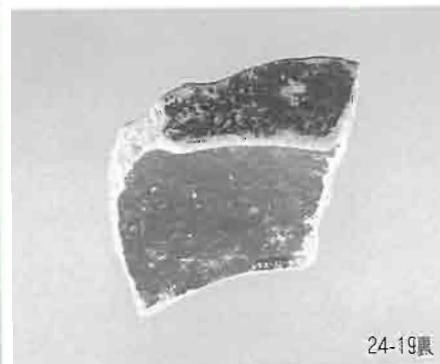
24-17



24-18



24-19表



24-19裏



24-20



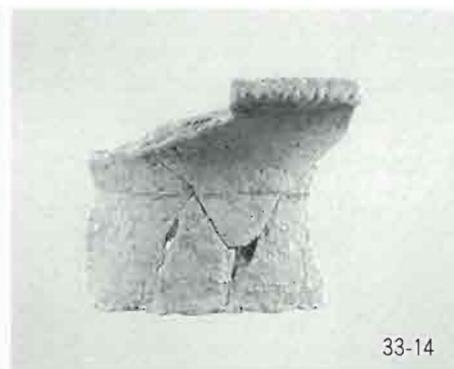
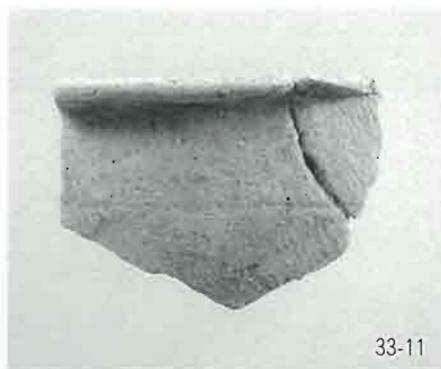
24-23



2区12号竪穴遺構

図版30





33-11

33-12

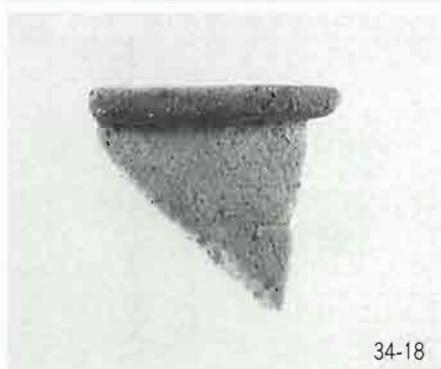
33-14



33-15

33-16

2区6号土坑



34-18

2区7号土坑



34-19



34-20

2区9号土坑



34-21



34-22

左 2区10号土坑

右 2区11号土坑

図版32



34-23



34-24



34-25



34-27



34-28



34-29

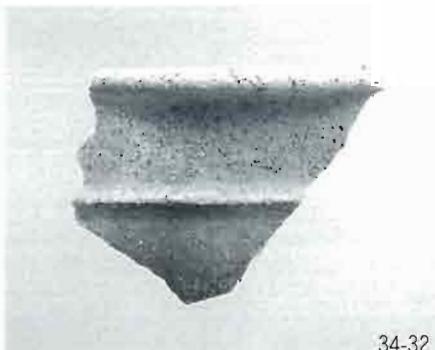
2区16~18号土坑



34-30



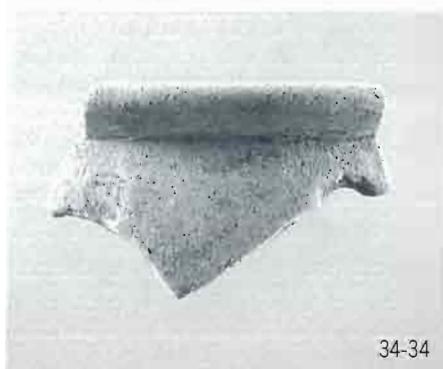
34-31



34-32



34-33



34-34

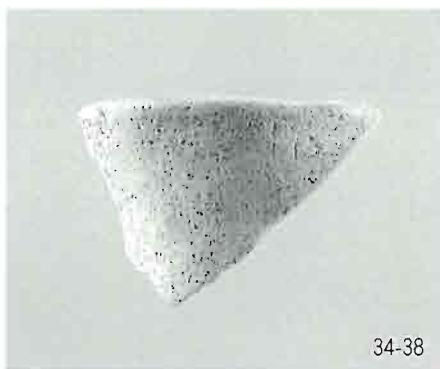


34-35

2区19号土坑

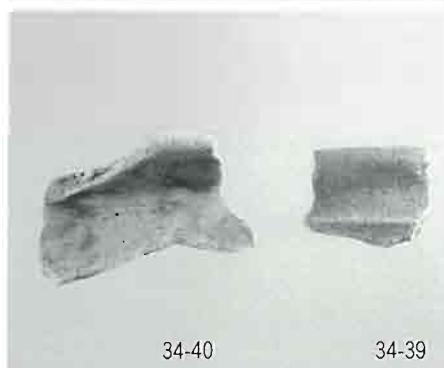


34-36



34-38

2区19号土坑

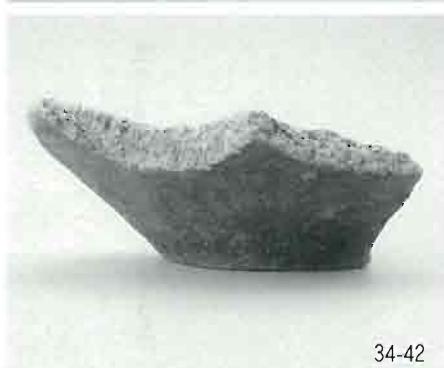


34-40

34-39



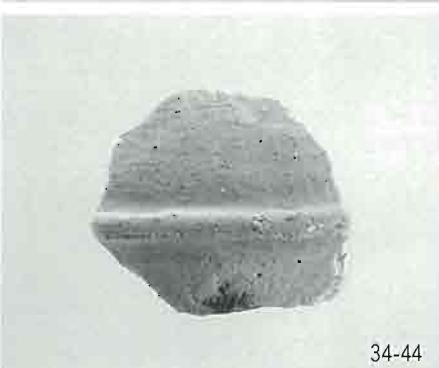
34-41



34-42



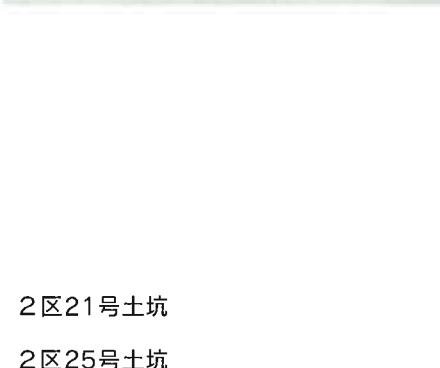
34-43



34-44



34-45



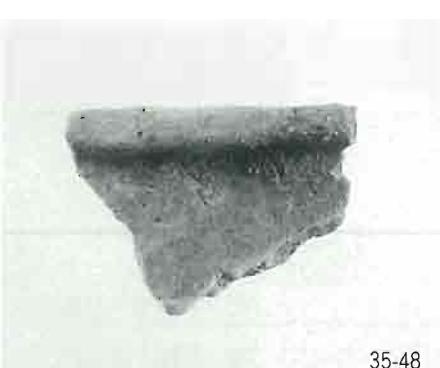
34-46

2区21号土坑

2区25号土坑



35-47

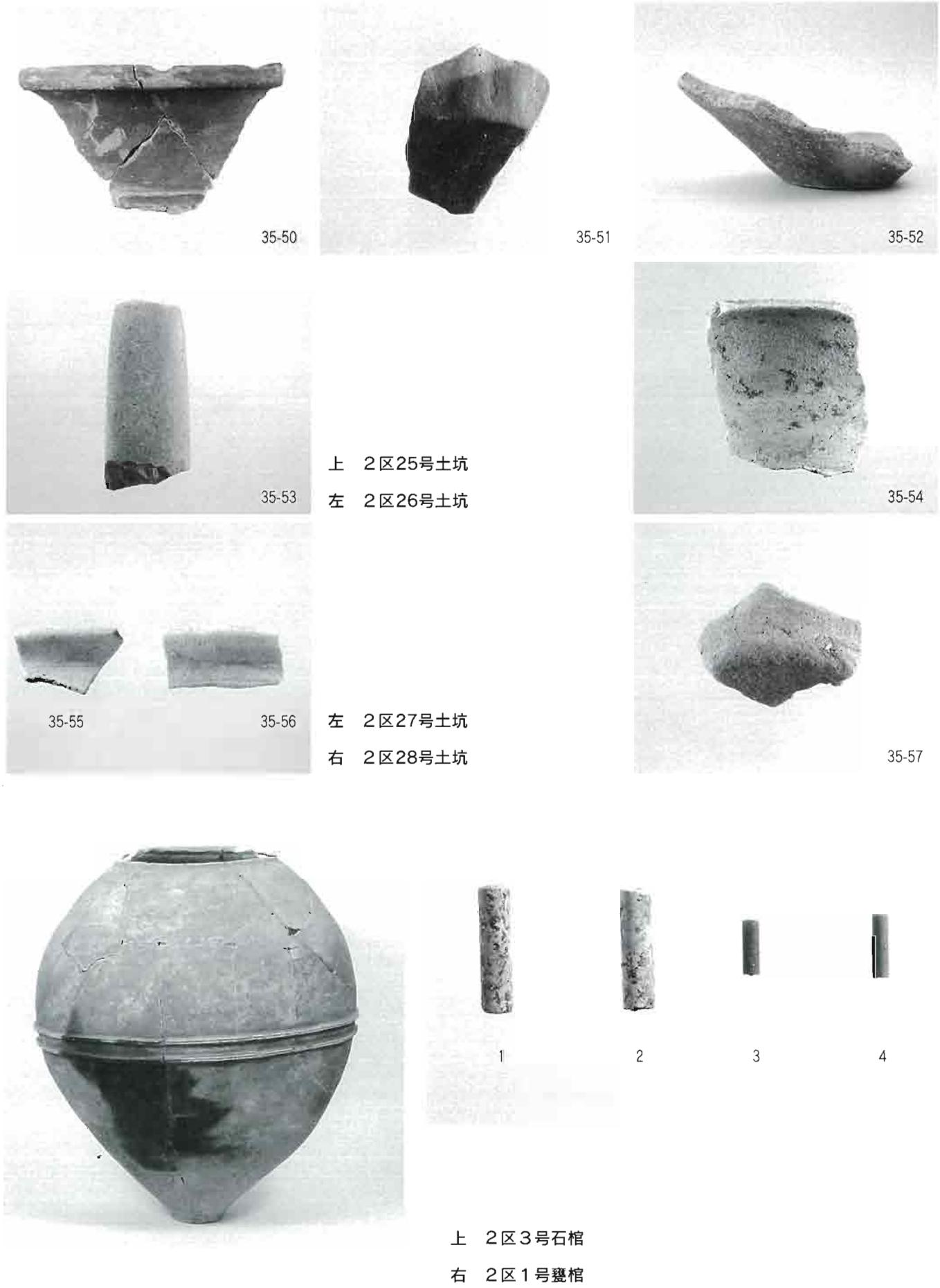


35-48

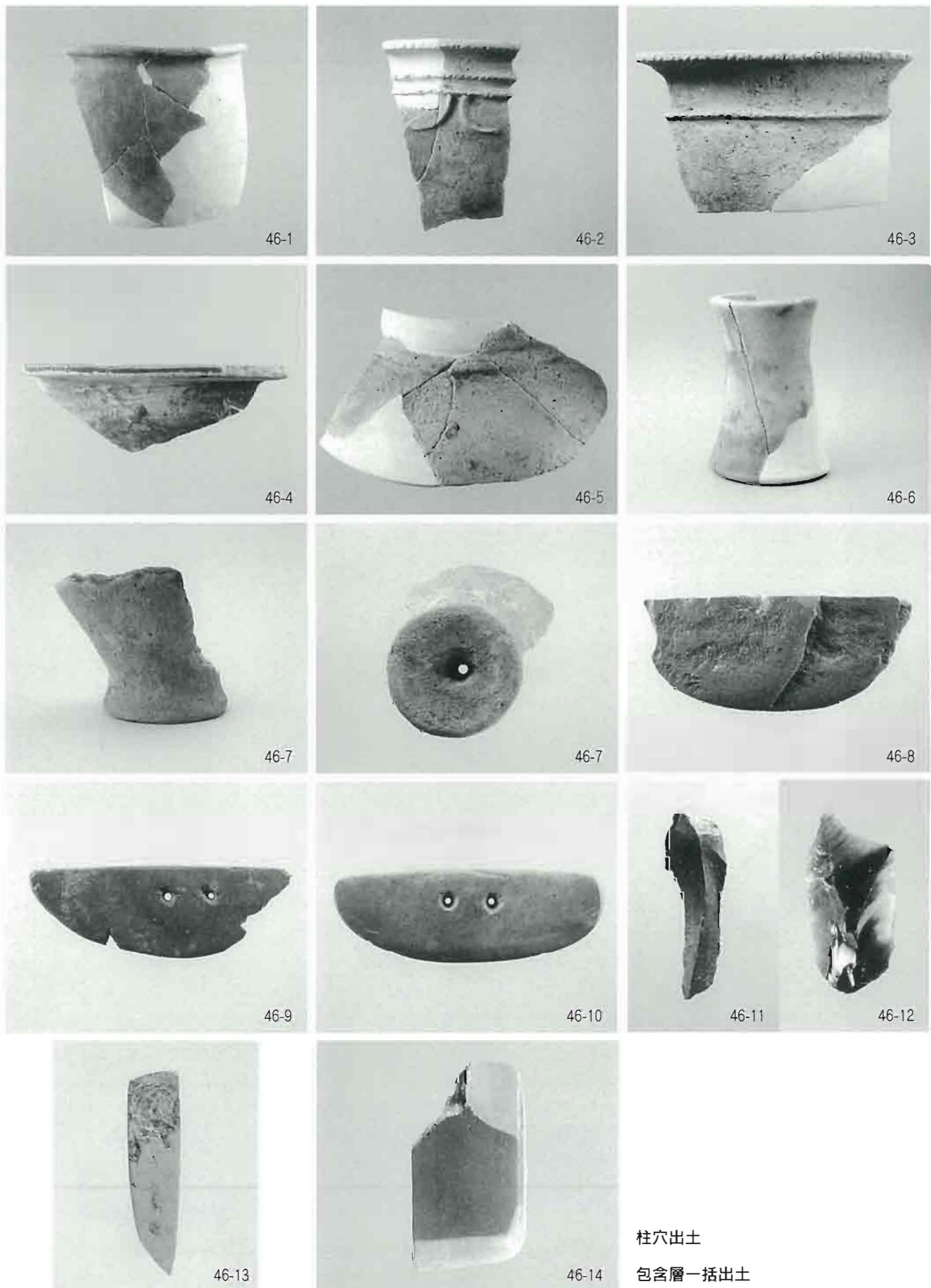


35-49

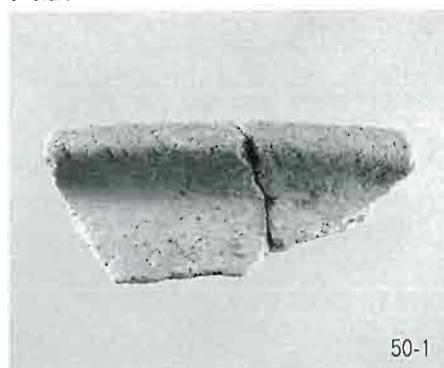
図版34



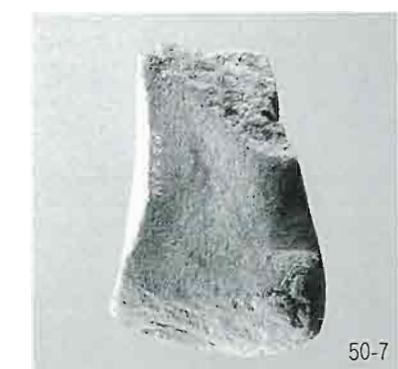
図版35



図版36



3区1号竪穴住居跡



50-5

50-6

50-7



50-8

3区2号竪穴住居跡

52-1



52-2

52-3

52-4



52-5

53-7

53-8



53-9

3区3号竪穴住居跡



54-1



54-2



54-3



54-4

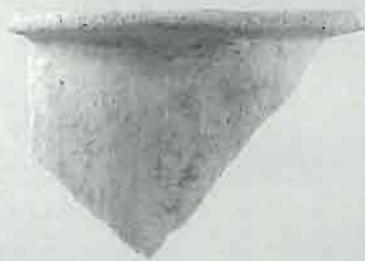


54-6



54-7

3区4号竪穴住居跡



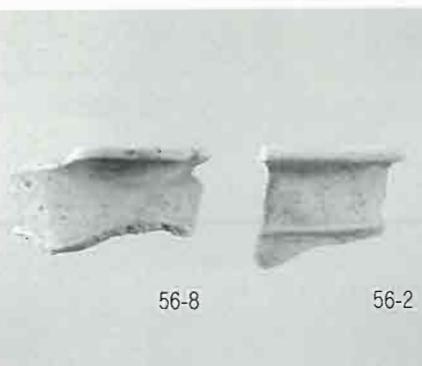
56-1



56-4



56-6

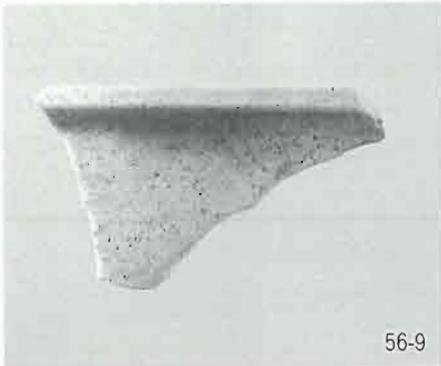


56-8

56-2

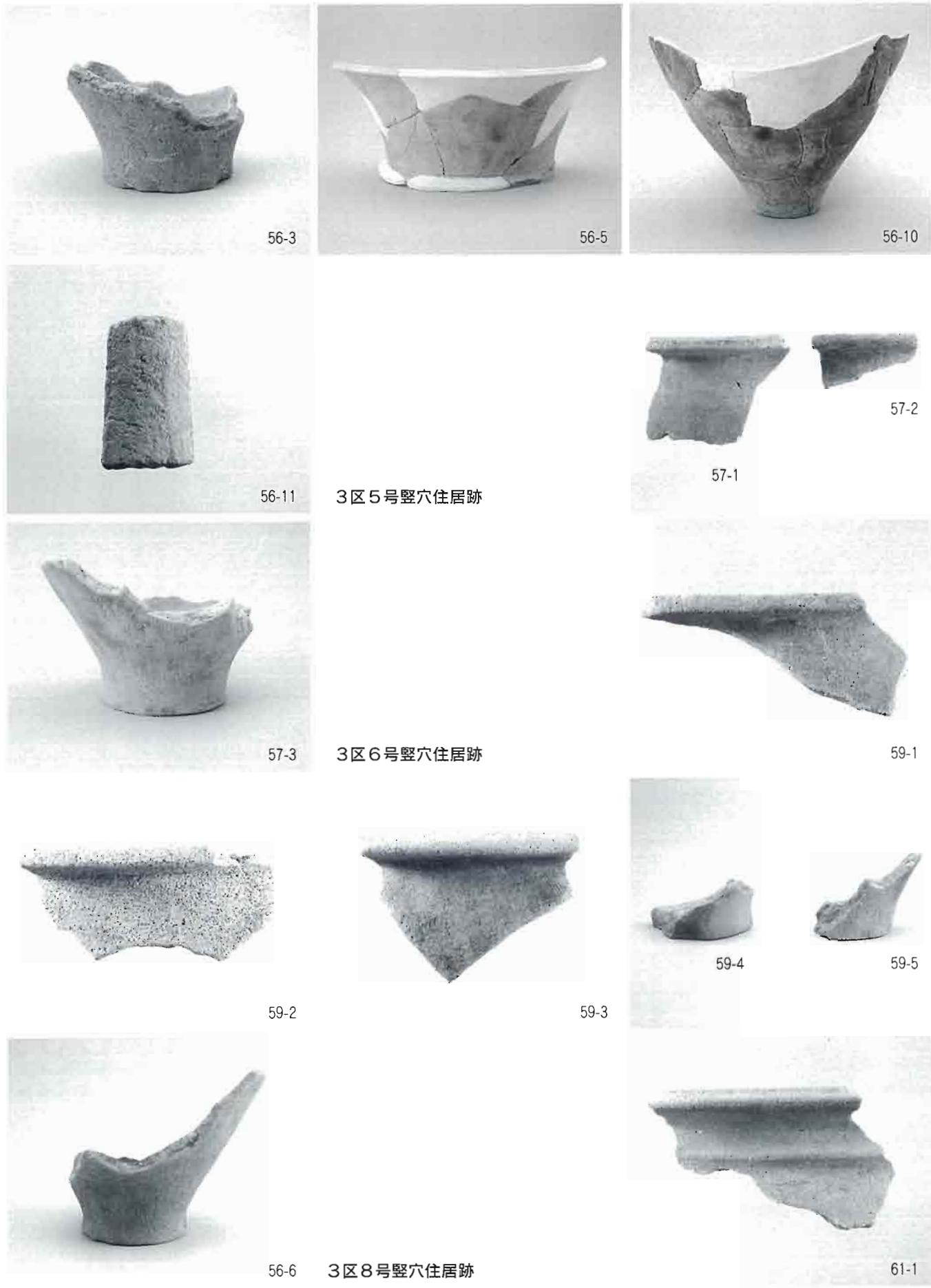


56-7



56-9

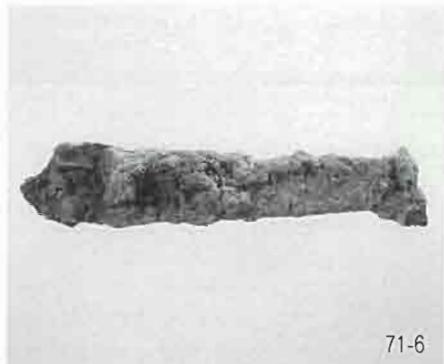
図版38





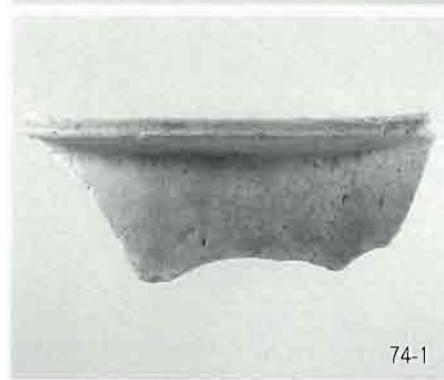
図版40





71-5

左 3区13号竪穴住居跡



74-1



74-2



71-3



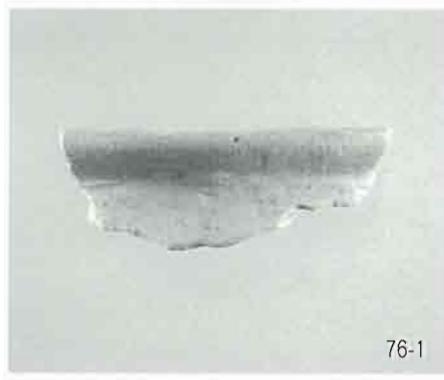
71-4



71-5



71-6



76-1



76-2

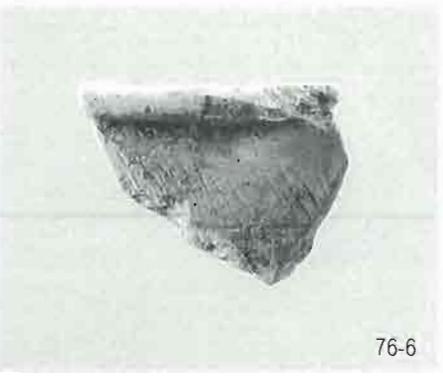


76-3



76-4

3区1号竪穴遺構

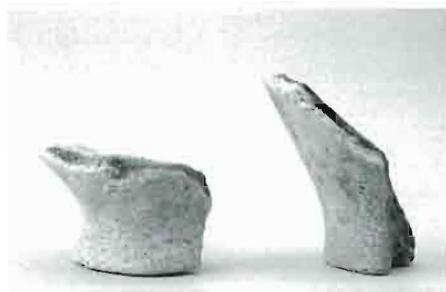


76-6

図版42



150中



162

3区2号竪穴遺構



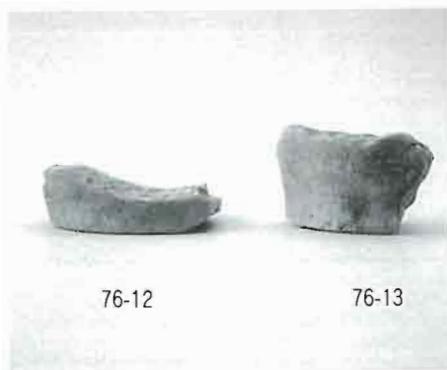
76-9



76-10



76-11



76-12



76-13



76-14

76-15

3区3・4号竪穴遺構



158下中



76-15



158右上



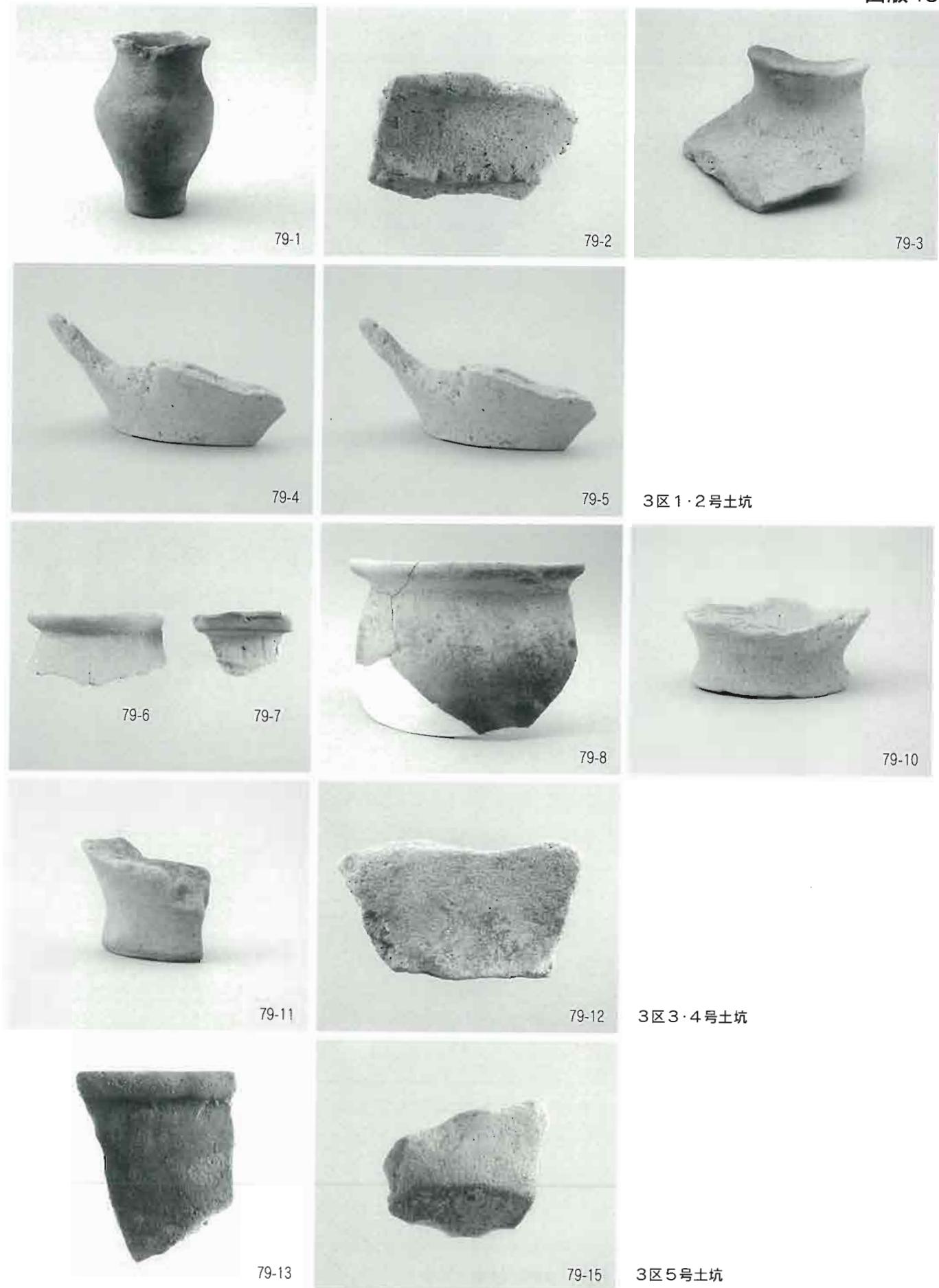
158左上



76-20

3区5号竪穴遺構

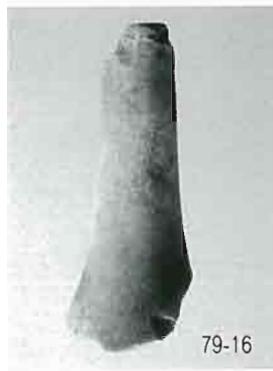
図版43



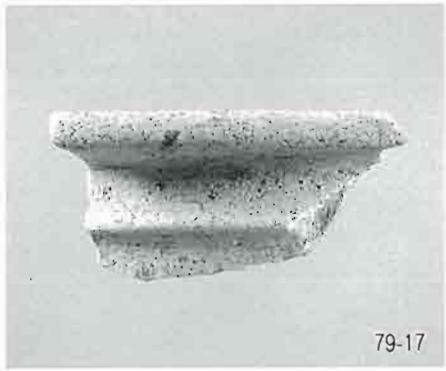
図版44



79-14



79-16



79-17



79-18



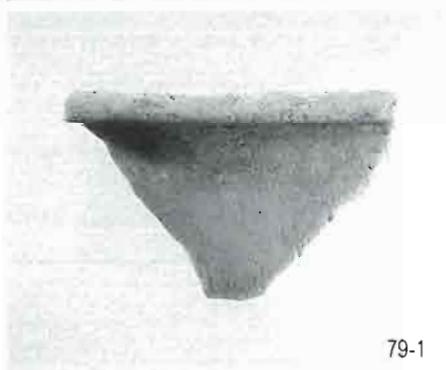
79-19



79-21



79-22 3区6·7·8·10号土坑



79-1



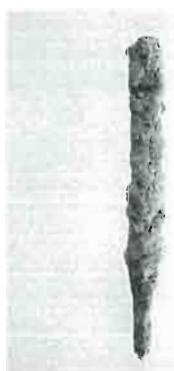
79-2



79-3



79-4

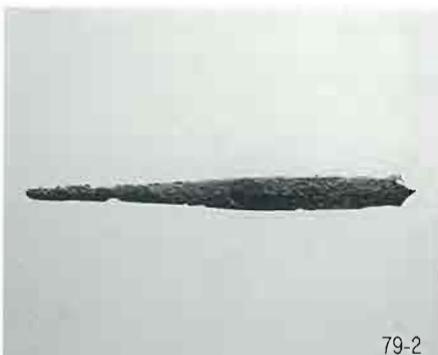


79-5

3区1·2号溝状遺構



81-1



79-2

3区1号溝

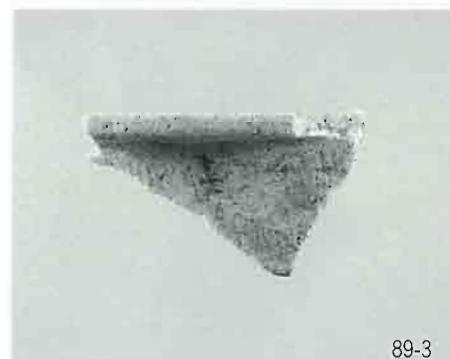


82-1

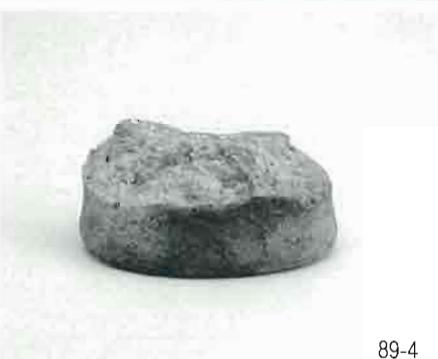


81-2

3区1号墓

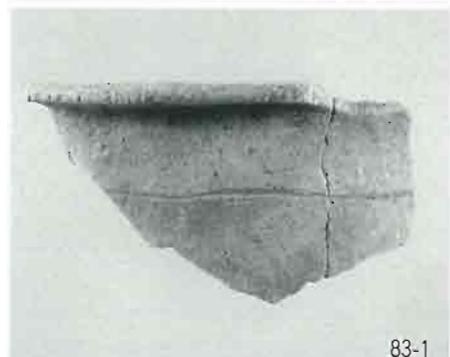


89-3



89-4

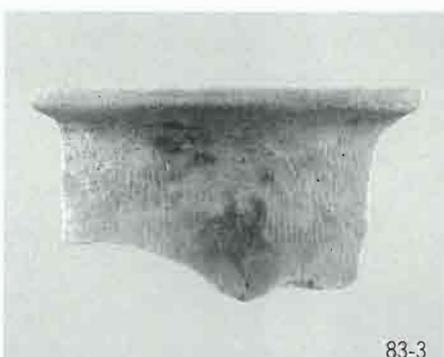
3区1号溝



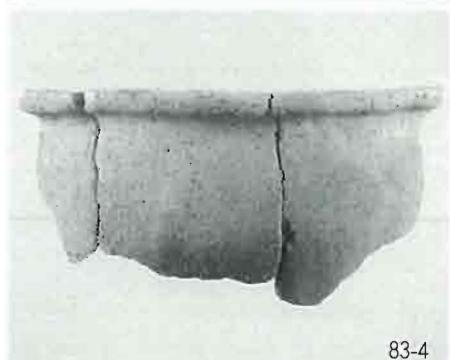
83-1



83-2



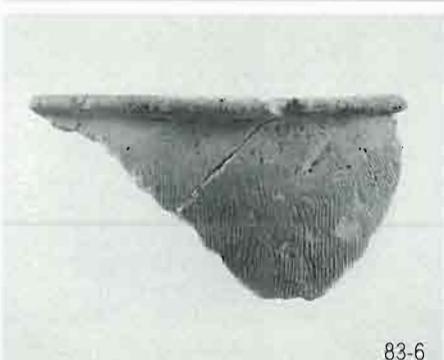
83-3



83-4

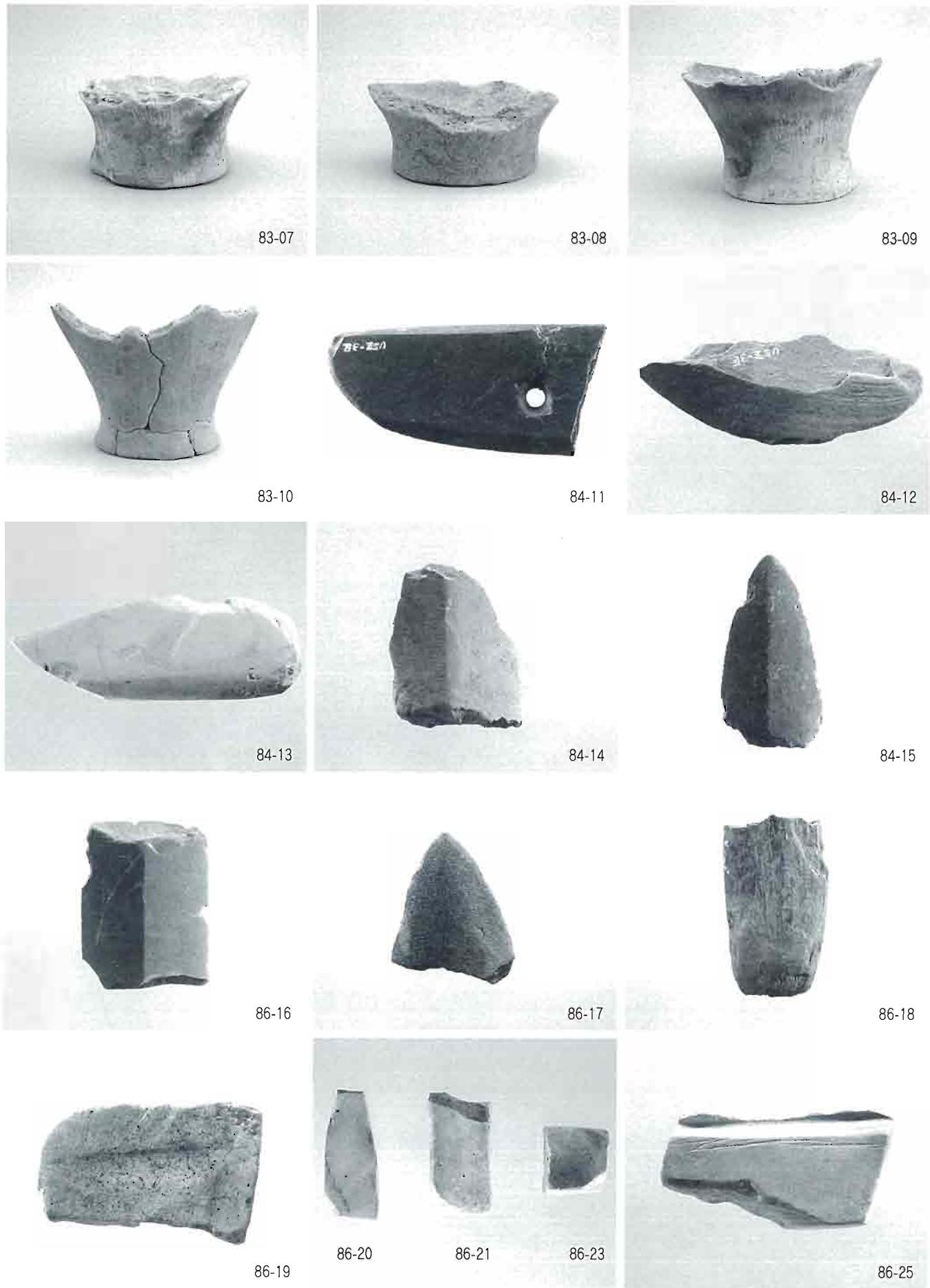


83-5

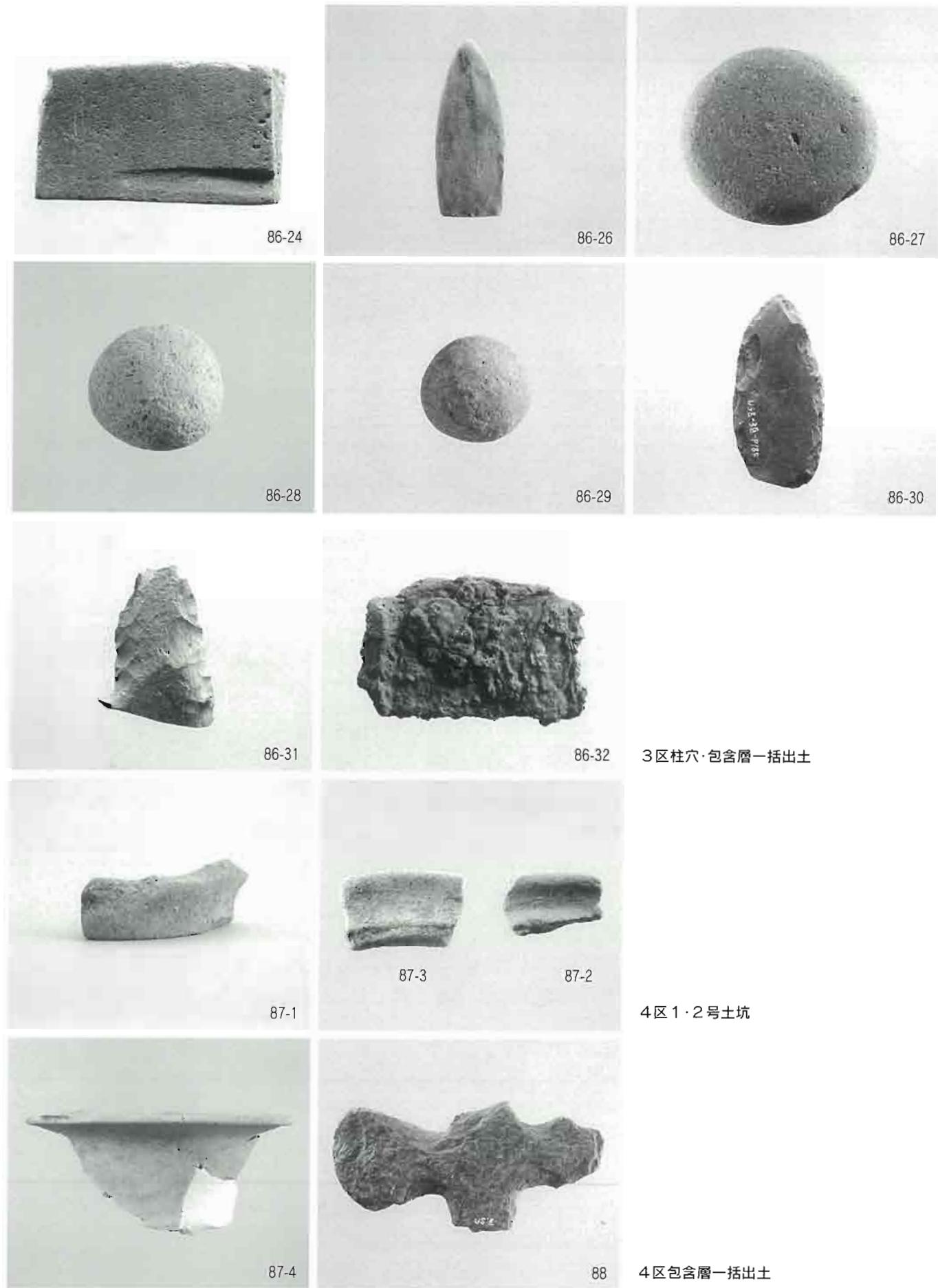


83-6

図版46



図版47



報 告 書 抄 錄

ふりがな	うしろざこいせき
書名	後迫遺跡
副書名	
卷次	
シリーズ名	日田市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	35
編著者名	若杉竜太
編集機関	日田市教育委員会
所在地	〒877-8601 日田市田島2-6-1
発行年月日	2002年3月29日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
うしろざこいせき 後迫遺跡	おおいたけんひたし 大分県日田市 おおあざみわ 大字三和	44204-6				19990118~19990323 19991206~20000330 20010110~20010323	930m ²	農道整備

所要遺跡名	種別	主な時代	主な遺構			主な遺物	特記事項
うしろざこいせき 後迫遺跡	集落墓地	弥生 古墳 古代 中世	竪穴住居跡 竪穴遺構 土坑 甕棺墓 石棺墓 掘立柱建物 溝	25基 19基 48基 2基 4基 3棟 1条	弥生土器 弥生土器 弥生土器 人骨 人骨、管玉 瓦器碗、青銅製笄		

後迫遺跡

日田市埋蔵文化財調査報告書

第35集

平成14年3月29日

発行 日田市教育委員会

大分県日田市田島2-6-1

印刷 尾花印刷有限会社

大分県日田市田島本町8-8

後
迫
遺
跡

日田市埋蔵文化財調査報告書第35集

2002年 日田市教育委員会